

第三章

八王子車人形の現況、記録



第一節

八王子車人形の操法

はじめに

八王子車人形の操法について、八王子車人形の構造を説明し、次に人形遣いが人形操作を開始するまで順を追って示す。さらに、現在の手足、人形首の特殊な操法、そして初期の操法を解説する。また、特殊な操法として、三番叟人形の操法、新車人形の操法、その他の操法を解説する。なお本節の記載内容は本書付録DVD所収の「八王子車人形の型操法」内の「①ろくろ車に乗る、人形装着」「⑰人形装着」に対応する。本節は平成二十九（二〇一七）年度および平成三十（二〇一八）年度「伝統文化ふれあい事業 八王子車人形体験・発表講座」で五代目西川古柳によって指導された内容の他、令和元（二〇一九）年の五代目西川古柳への聞き取り調査により作成した。

一 八王子車人形の構造について

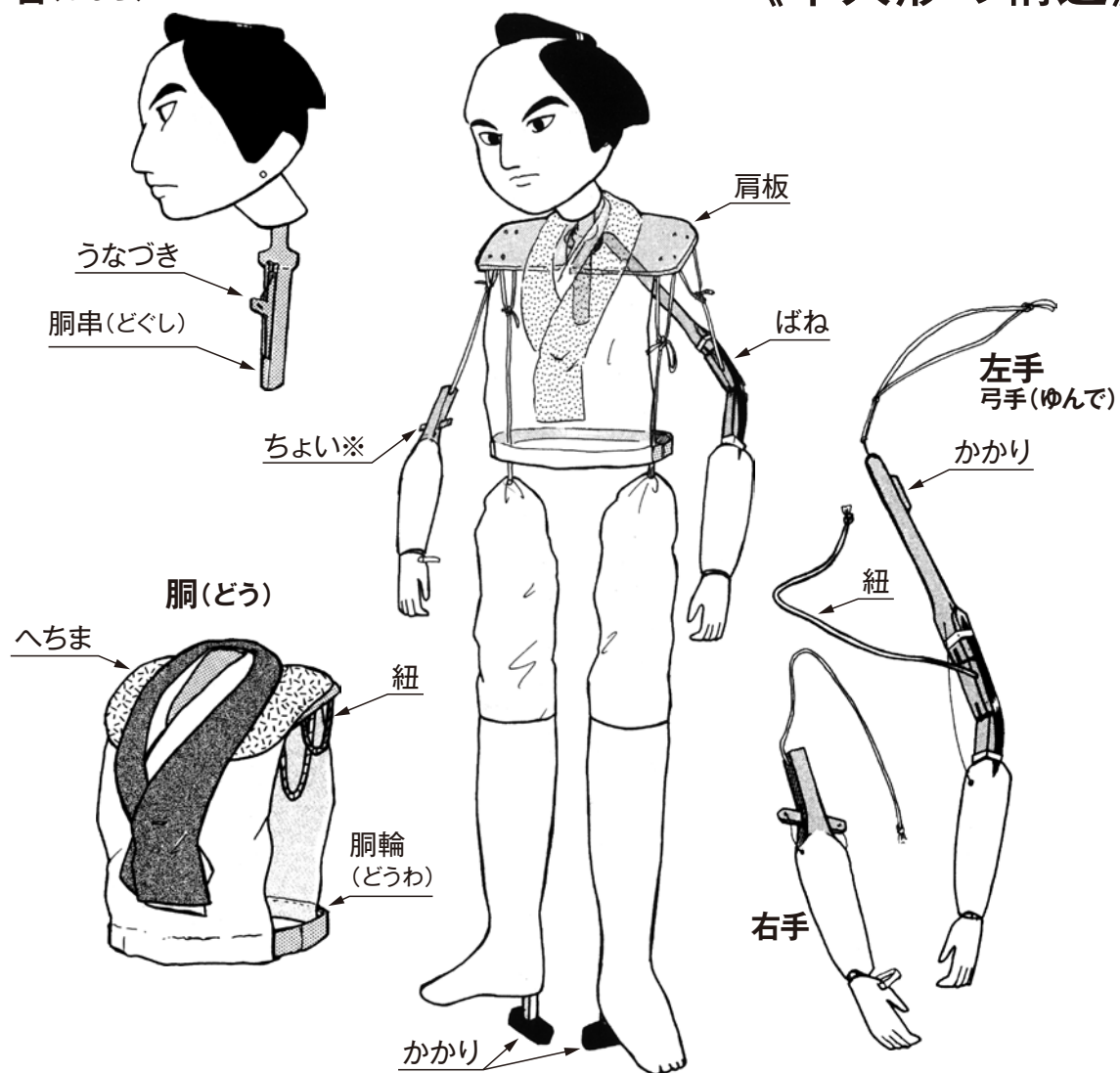
八王子車人形の人形は「肩板」^{かたいた}「胴輪」^{どうわ}「右手」「左手」「右足」「左足」から構成される骨組みに衣裳が着付けられ、最後に人形首が装着される。（口絵写真参照）

人形の頭部とその下の持ち手にあたる胴串^{どぐし}を合わせて「首」^{かしら}と呼び、胴串には頭部をうなずかせる「うなづき」が備わっている。

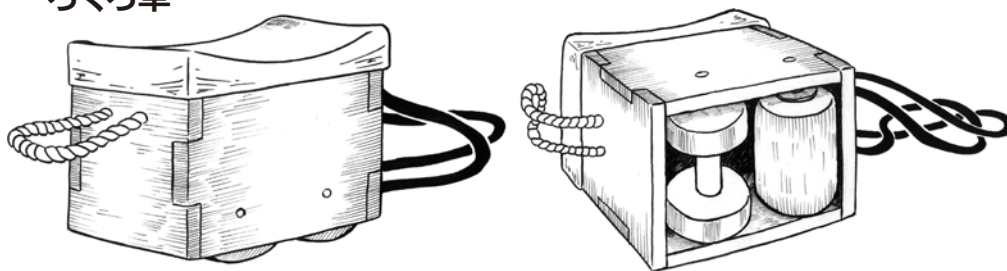
右手に付けられた栓は手首を動かすためのもので「ちよい」と呼ばれている。ばねが付けられ弓型をした左手は「弓手」^{ゆんで}とも呼ばれ、端に取り付けられた約一センチ×四センチの部分も「かかり」と呼ばれている。左手端の紐は輪になっており、引くことで左手のばねが動く。両手の手首の内側に付けられた輪を「指皮」^{ゆびかわ}という。両足の踵に付けられたT字形を逆さにした部分も「かかり」と呼ばれている。これら各部分の働きにより、一人で遣うことのできる構造になっている。

首(かしら)

《車人形の構造》



ろくろ車



備考 本図は河津美穂子・石垣知倫作成の「車人形のしくみ」『写し絵・車人形・説経節』33頁を転用し、本節で使用する解説に合わせて一部省略、追記したものである。

※右手の「ちよい」部分を呼称する用語は現在西川古柳座にはないが、解説する便宜上、『東京に残る江戸・人形芝居の世界』(のんぶる舎)74頁を参考に設定した。

二 人形遣いが人形操作を開始するまで

(一) 人形遣いの衣裳を装着する⁽²⁾

八王子車人形の座員は、黒子^(くろこ)と呼ばれる上下黒色の衣裳⁽³⁾（上、下の個別の名称はない）を着用し、「ジンクロ（黒頭巾）」で顔を覆い、黒い足袋、右手は黒い人形遣い用の手袋を着用し、⁽⁴⁾ 胴串を持つ左手には手袋を着用しない。出遣い（ジンクロを用いず顔を出すこと）で人形を操ることもある。⁽⁵⁾ 演目や、公演の種類に応じて、お祝いの舞台などで紋付袴に白手袋、白足袋を着用することもある。

(二) ろくろ車に乗る

人形遣いは、両足を広げてろくろ車にまたがり、⁽⁶⁾ ろくろ車の後部に付けられた左の紐をろくろ車の前面に付けられた紐の輪に通し、ろくろ車背面の右の紐と合わせて人形遣いの右足の付け根近くで蝶結びにする【写真1】（DVD「八王子車人形の型操作」①「ろくろ車に乗る」参照）。



写真1 ろくろ車を装着する五代目西川古柳

(三) 人形を装着する

1 人形立てから人形を取り、人形の背中の穴に人形遣いの左手を入れ、うなづきを中指と薬指の間に挟んで胴串を持つ【写真2】



写真2 胴串を持つ

2 人形の足のかかりを人形遣いの足の親指と人差し指で挟む【写真3】。



写真3 足のかかりを挟む

3

人形遣いの右手首に、人形の左手に付けられた紐の輪を通し、人形遣い右手を人形衣裳の右の袂たもとの開き口から入れて、人形右手の「ちよい」を人形遣いの右手の人差し指と中指で挟み、親指で支える【写真4】。



写真4 人形遣い右手の操作

4

人形遣いは背すじを伸ばし、左の二の腕を脇下に密着させ、首かしらを人形遣いの目線の高さにして、人形遣いの左の上腕を前に差し出す。⁽⁸⁾中指でうなづきを押さえて人形首を起こす。

5

人形足のかかりを挟んだ人形遣いの両足のかかとをろくろ車前面につけ、人形遣いの両膝を開く。人形の足がまっすぐ立つように人形遣いの足の親指と人差し指を下に向けるよう意識する。人形が背すじを伸ばして直立するように、胴串を掲げる。このとき、人形遣いの体格と人形の大きさに応じて、ろくろ車の高さを調節するとともに、胴輪に結び付けてある人形の足の長さも調節する。⁽⁹⁾女形は足を取り付けず、着物の内側に付けられているかかち【写真5】を立役の「かかち」同様に人形遣いの左右の足の親指と人差し指で挟んで操る【写真6】。

三 手足操作の詳細

(一) 人形右手の動かし方

・人形遣い右手の人差し指と中指を交互に引くことで、人形右手の指や手首を曲げたり反らせたりする。

・人形遣い右手親指で、人形衣裳内側に人形の右肘を作る。

・人形右手で小道具を持つ場合などは、人形右手の「指皮」に人



写真7 人形が小道具を持つ例(2016年12月4日「八王子車人形と民俗芸能の公演」保戸塚時久 撮影)

形遣いの人差し指を通して、人形遣いの人差し指と親指で小道具を挟む【写真7】。



写真5 女形衣裳内側のかかち



写真6 女形の足のかかちの装着

・人形が両手を合わせるときは、人形右手の指皮に人形遣い右手人差し指を通して後、人形遣い右手親指を、人形左手の指皮に通すことで、人形の両手を合わせることができる。

(二) 人形左手の動かし方

・人形遣いは胴串を左手の平に乗せるように持つ。左手親指で人形左手のかかりをとり、胴串に押しつけつつ、かかりを上下に回転することで人形左手が下を向いた状態【写真8】から上を向いた状態にする【写真9】。この時、人差し指の第二関節と第三関節の間に弓手の木の部分を乗せて支えると、人形左手を上げやすい。

・人形左手が上がった状態から、人形遣い右手首に通した紐の輪を右前方に引くと、人形は左肘を曲げることができる。左肘を伸ばす場合は、右手首に通した紐を緩める。⁽¹⁰⁾



写真8 左手の構え方



写真9 左手操作 (人形左手を起こす)

(三) 人形足の動かし方

人形が歩く動作をする際、人形足を踏み出した後で、ろくろ車が引っ張られるようにしていくのではなく、足を踏み出すのと同時にろくろ車が足に寄り添うようにしていくよう臀部で操作する。五代目西川古柳は、このように「ろくろ車を乗りこなす」ことが車人形を操る上で重要であるとしている。なお、基本的に人形が歩く速さで操作するが、場面によっては、ろくろ車の走行速度を速め人形が速足になるように操作することもある。

(四) 人形首の動き

人形首を動かして表現する。手首による胴串の動きに加え、中指による「うなづき」の操作、また人形によっては目の操作をするための小猿こざると呼ばれる栓があり、これを人形遣いの左手親指で操作する(第三章第六節 人形首かしらの項参照)。

(五) 特殊な操作方法

① 子供を背負う例 『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』阿部保名が童子を背負う場面(第三章第三節 写真4参照)。

人形遣い右手小指を人形の右手「指皮」に、人形遣い右手親指を人形左手の「指皮」に入れ、人形遣い右手人差し指と中指の間に童子の胴串を挟む【写真10】。

② 子供を抱く例 『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』狐葛の葉が童子を抱く場面



写真12 馬の人形の操作
2017年12月8日公演 保戸塚時久撮影

③ 馬の足を操作する例 『敦盛の最期』 馬が登場する場面
馬の前脚を人形の足と同様にろくろ車に乗った人形遣いの足に挟み、人形遣いは馬の体の中に入る。馬の首を^{かしら}手にもち、馬の後脚は、前脚の動きに伴って動く【写真12】。



写真10 五代目西川古柳が童子の胴串を棒で代用し背負い方を示したものである。



写真11 五代目西川古柳が童子の胴串を棒で代用し抱き方を示したものである。

人形遣い右手人差し指を人形右手の「指皮」に入れ、人形遣い右手小指を人形左手の「指皮」に入れて、人形遣い右手で子どもの胴串を持つ【写真11】。

(六) いきづえ

衣裳の重い立役の場合、「いきづえ」と呼ばれる木製の棒が肩板に紐で付けられており、人形遣いの胸でいきづえを支えながら人形を操る【写真13】。



写真13 いきづえ

四 八王子車人形の初期の操法との比較

昭和九（一九三四）年から昭和十（一九三五）年に来日した英国の陶芸家バーナード・リーチが撮影した八王子車人形の映像に、人形遣いによる操法が紹介されている。これを見ると、左手の輪を人形遣い右手首に通さず、親指に巻いているが【写真16】、ろくろ車の装着方法や操法は、現在とほぼ同様である【写真14～18】。昭和三十三年（一九五八）年に撮影された映像にも三代目西川古柳による操法の紹介が見られる（本書付録DVD参照）。



写真18 昭和初期の足の装着



写真16 昭和初期の右手の操作



写真14 昭和初期の首(かしら)の操作

写真14～18はバーナード・リーチ撮影。
民藝フィルムアーカイブ提供
© Marty Gross Film Productions
<http://mingeifilm.martygrossfilms.com>



写真17 昭和初期の人形操作



写真15 昭和初期の胴串の持ち方

五 八王子車人形の三番叟の人形の操法

三番叟の人形の操法は、通常の人形と異なり、人形の右手を使用しない。人形遣いは右袖内側の紐に右手を掛けて遣う⁽¹²⁾【写真19】。「揉みの段」は手を見せずに舞い、「鈴の段」は人形遣いの右手で鈴を持って舞う。人形左手も通常の車人形と異なり、弓手ではなく、先端に布の玉のついた棒が左の袖に留められている【写真20】。人形遣いは、胴串と弓手を左手で持つ通常の車人形の持ち方と同様に操作する。



写真19 三番叟の右手の操法



写真20 三番叟の左手の棒

三番叟の舞には、「袖を巻く」もしくは「袖をかつぐ」と呼ばれている仕草がある【写真21】。操作の方法は人形右手の袖を人形遣いの右腕で巻き、人形左手の袖は胴串を持ったまま、人形左手の棒を、遠心力を使って回し巻く。

五代目西川古柳によれば、昭和四十年代から行われている義太夫節^{じかた}の地方で舞う現在の三番叟以前の初期の三番叟においても、左手は棒で、右手は人形遣いの手で操作していたという⁽¹³⁾。



写真22 新車人形の操法

新車人形は昭和五十六（一九八二）年ころから取り入れられた両手遣いの操法である。胴串を左手で支えず、人形遣いに装着する肩金に取り付けた器具に固定させ、人形首左右に取り付けた紐を人形遣いの頭に懸ける。これにより人形遣いの左手は、人形左手の操作のみを行う。人形遣いの左右の手が、人形の左右の手を同じように操作するため、舞踊などで用いられる。右手が人形の右手を操る点と足の使い方は従来の車人形操法と同じである【写真22】。

両手遣い用に作られた手として狐の手、琴手、踊り手（団子売の立役が用いる）、洋舞を踊る外国の人形の手などある。

写真21 三番叟の「袖かつぎ」の様子
2011年11月23日撮影

六 八王子車人形の新車人形の操法^①

七 その他の操法

以下は、五代目西川古柳が二十年ほど前から取り入れた操法である。

（一）ろくろ車を使用しない操法

『応挙の幽霊』の幽霊は足がない設定のため、ろくろ車を使用せず、人形を浮かせるようにして両手で操る。

（二）左手遣い、足遣いを取り入れた操法

『壺坂観音霊験記』の三味線を弾く場面では、差し金入りの左手を使用し、左手遣いが人形左手を操る場合もある。

『本朝廿四孝 狐火の段』の八重垣姫が飛翔する場面では、足遣いが足を操り、ろくろ車を使用せずに演じられている【写真23】。

写真23 足遣いを取り入れた操法
2018年3月12日公演 保戸塚時久撮影

註

- (1) 人形衣裳の着付け方の詳細は本書第五章第六節参照。
- (2) 『日本民俗芸能事典』に八王子車人形の人形遣いの衣裳について「昔は野良着姿に紺の股引きで腹掛けを掛けて出演した。現在は、黒衣に裁着けをした服装である」と述べられている。「日本ナショナル・トラスト一九七六 二七四頁」
- (3) 黒子については本書第五章第六節参照。
- (4) 足袋は足の裏も黒色の通称「カラス足袋」を履く。右手の手袋の人差し指の先端には指皮を取りやすくするため、小さな穴があけられている。
- (5) 五代目西川古柳は、「観客が人形のみを見ても、人形にファンはつかない。顔を出して、人形遣いを知ってもらうことも今後には必要である」と述べている。
- (6) 装着時に足を広げることにより人形遣いの体と、ろくろ車を密着させることが可能となる。
- (7) 本書第三章第六節二に示される「手入れ穴」のこと。西川古柳座では特に名称はなく、「背中に手を入れる」という表現が用いられている。
- (8) 女性の人形遣いで、胴串を前に掲げることが困難な場合は、ろくろ車をやや右斜め前に配置し調整する。
- (9) 本書第三章第六節三参照。
- (10) 「左右を指す」型の左を指す際の操法と同様である。本書第三章第二節参照。
- (11) 【写真2】の人形にも生き杖が付けられている。写真下半分中央付近に見られる茶色の棒である。
- (12) 昭和五（一九三〇）年に早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に寄蔵された三番叟人形にも、現在の八王子車人形同様、人形左袖内側に車人形の弓手とは異なる棒が付けられ、手の平のみ付けられている（本書第四章参照）。右手には扇を持った可動機能のない「ちょい」のついた手が付けられている。八王子市郷土資料館所蔵の初期の三番叟人形（本書第四章参照）にも、人形左袖内側に車人形の弓手とは異なる棒が付けられ、手の平のみ付けられている。また右手も付けられている。
- (13) 西川古柳座所蔵三代目西川古柳使用の三番叟衣裳（本書第三章

第六節二参照）には、人形遣い右手を掛ける紐がつけられている。初期の三番叟の概要は「服部真理二〇一七四三～五一頁」参照。

(14) 新車人形の操法については、「細田明宏二〇一三」及び「佐藤広二〇一七四六五～四六六頁」参照。

（執筆者 大谷津 早苗／服部 真理）

参考文献

- 佐藤 広二〇一七「説経節と車人形・写し絵」『新八王子市史 民俗編』八王子市市史編纂委員会 四五五～四六一頁
- 日本ナショナル・トラスト編 一九七六『日本の民俗芸能事典』文化庁監修 第一法規出版
- 服部真理二〇一七「八王子車人形の初期の三番叟について」『文化財年報』第十号 八王子市教育委員会
- 細田明宏二〇一三「車人形と新車人形——八王子車人形・五代目西川古柳氏に聞く——」『八王子市史研究』第三号 八王子市史編さん室
- 宮尾しげを一九八四『文楽人形図譜』かのう書房

第二節

八王子車人形の型

はじめに

八王子車人形には、現在「型」が存在する。五代目西川古柳（瀬沼亨）によれば、かつては、各々の動きを指示しながら演技が伝承されてきたが、⁽¹⁾五代目西川古柳が文楽で研修した後、型が平成の初め頃に考案された。役柄を演じる基礎として型の練習は不可欠であると五代目西川古柳は述べている。型は「伝統文化ふれあい事業車人形体験・発表講座（主催 伝統文化ふれあい事業実行委員会、以下「講座」と略す）」全十九回の受講日の約七回分を費やして五代目西川古柳が重点的に指導する。型の指導は日頃の座員の稽古では行われなため、若手の座員も講座の受講生として五代目西川古柳の指導を受けている。講座では受講生全員が同時に練習用のろくろ車⁽²⁾に乗り、練習用の人形を使って、五代目西川古柳の手本を見ながら、模倣し、指導を受ける（口絵写真参照）。

現在講座で伝承されている主な型は、立役（男の人形）の型と女形（女の人形）^{おやま}合わせて二十八種である。紙面の都合で立役と女形に共通する型は立役の型のみ解説する。同じ型でも、女形はしとやかな動きをする。各々の動きの中に、五代目西川古柳の工夫が凝らされ、動作の後のなおり方にも気を配っているが、本稿では各々の型の説明に留める。

以下の型の説明は、平成二十九（二〇一七）年度から平成三十一（二〇一九）年度の講座での五代目西川古柳の指導ならびに五代目西

川古柳および西川柳起への聞き取りをもとに作成した。

各々の型の名称の下に付した丸印の番号は、付録DVDの「八王子車人形の型操法」⁽²⁾、⁽¹⁶⁾、⁽¹⁸⁾、⁽³⁰⁾に対応させている。

一 八王子車人形の型

(一) 立役の型

(1) 出る²

「出る」は舞台の上手^{かみて}または下手^{しもて}から舞台に出てくる動作である。右足（または左足）でその場を軽く一歩踏み、もう一方の足を力強く踏み出し歩いてくる。五代目西川古柳はこの軽く一歩踏みことを、「捨て足を踏む」と呼んでいる。歩く際、右手は腰（帯の位置）に添える。

(2) 左右のねじ³

「ねじ」は緩やかな角度で曲がる動作である。一度斜め後ろに下がってから右折または左折する【写真1】。



写真1 ねじ（方向を変える）
写真はなおっているところ

(3) 座る ④

人形が立っている状態から、人形遣いの臀部の動きによりろくろ車を一步後ろに下げ、人形を座った体勢にした後、ろくろ車を前に出す。このとき人形の腰が下がり過ぎないようにする【写真2】。



写真2 座る

(4) お辞儀 ⑤

「座る」姿勢から、上半身を前方に倒す。武士役の人形は、頭から下げるのではなく、胸から傾けお辞儀をするように心がける【写真3】。立ったままお辞儀をする場合もある。



写真3 お辞儀

(5) 左右を指す ⑥

右方向、あるいは左方向を手で指す。この時、目線に手線を合わせる 것이重要である。指先を人形首の目元に近づけてから、人形首の目線の方向を指す。基本的に、人形にとって右方向を指すときには右手【写真4】で、左方向を指すときには左手で指す【写真5】が、右手で左方向を、左手で右方向を指すこともある。



写真4 右を指す



写真5 左を指す

(6) 左右の膝送り ⑦

膝送りとは、座った状態で相手に近づいたり、詰め寄ったりする動作である。座った状態から立ち上がった、右肩と右足を上げながら右斜め前方に踏み出し、【写真6】。次に左肩と左足を上げながら踏み出す【写真7】。左斜め前方にも同様に踏み出す。膝送りは室内の場面で用いられることが多く、「生写朝顔話宿屋の段」や「傾城恋飛脚 新ノ口村の段」で用いられている。



写真6 膝送り(右肩と右足を上げる)



写真7 膝送り(左足を出す)

(7) 両手打ち ⑧

両手を広げ【写真8】、次に頭を下げるとともに両手を合わせる仕草をする【写真9】。再び、頭を起し、両手を膝に置く。「壺坂観音霊験記 山の段」で沢市とお里が喜び合う場面に出てくる。



写真8 両手打ち(両手を広げる)



写真9 両手打ち(両手を打つ仕草)

(8) 座つての棒足、立つての棒足 ⑨

棒足は斜め前に足を伸ばす動作である。座った状態もしくは立った状態から左足で捨て足を踏み、すばやく右足を右前方に伸ばす。両腕を曲げて人形首の高さに差し出してから、左腕は肩の高さ、右腕は胸の高さに、両腕を引いて静止する【写真10】。人形首は右斜め前方を向く。左足を左前方に伸ばす場合は一連の動作の左右の手足を逆にする。見得を切る場面などで用いられる



写真10 棒足

(9) 帯締め ⑩

右手を腰の後ろにまわし、帯を締める仕草をする【写真11】。その際、人形遣い右踵で「トントン」と軽く踏み鳴らし、人形首もこれに伴って軽くうなづく。このとき、左手は上腕部を軽く曲げた状態で前に出している。「日高川入相花王」の渡し場で清姫が安珍の後を追う決意をした場面で帯締めをする。



写真11 帯締め

(10) 一足立ち膝打ち ⑪

座った状態から、すばやく両足揃えて立ち上がる。次に右足膝を曲げて上げ、目線と手線を合わせて右手で宙に円を描き、右膝を打つ仕草をする【写真12】。右足のみ行う。「東海道中膝栗毛」で弥次郎兵衛が狐に化けて喜多八をからかうことを思いつく場面などで用いられる。



写真12 膝打ち

(11) 姿見 ⑫

袂から水面に写された自分の姿を見る仕草である。立った状態で左足から左後ろに下がり、右足も添える。左足を一歩前に出し、右腕を前方に、左腕も右腕よりも低い位置で前方に出す。人形首は左の袂の外側の下を見る【写真13】。左右の手足を逆にした姿見も同様に行う。「信田妻」の狐葛の葉が我が身を振り返る場面で使われている。



写真13 姿見

(12) 行きつ戻りつ ⑬

人を探す場面などで用いられる動作で右方向に三步【写真14】、左方向に三步進み戻る。



写真14 行きつ戻りつ

(13) 座りからの入り込み ⑭

立ち上がって両手を広げて前に出す【写真15】。後振りの前段階の動作である。三番叟の舞の中でも用いられている。



写真15 入り込み

(14) 後振り ⑮

観客に後ろ姿を見せる動作である。入り込みをしてから、左足を右足前方に出し、右折する恰好になる。人形首は月を見るように上を見、掲げた右手の手線を目線に合わせる。左手は肩の高さほど前に出した状態で静止し、観客に人形の後ろ姿を見せる【写真16】。「釣女」で太郎冠者が釣りをする場面で用いられている。



写真16 後振り

(15) 入る ⑯

ねじの型で入る方向（下手または上手）の斜め反対に一步下がり、両足を揃えてから、立役は右足から踏み出し、入っていく。女形は着物の裾を開かないよう、左足から踏み出す。

(二) 女形の型（抜粋）

(16) 膝送り ㉓

立役と同様、座った状態で相手に近づく動作であるが、その際、女形は左右の着物の膝を整える仕草をする。右の膝を整える際に、ろくろ車を左後ろに下げる【写真17】。立役同様「生写朝顔話 宿屋の段」などで用いられている。



写真17 膝送り

(17) 髪撫ぜ ㉔

右手を人形首の前に出して見つめ、指を反らして、左右の鬢（びん）の順に右手で撫で整える仕草をする。左右の鬢に手を持つていくのではなく、顔の前に右手を固定し、首を向ける。鬢を撫ぜるときは、そつとかきあげるようにする【写真18】。



写真18 髪撫ぜ

(18) 後振り ㉕

観客に後ろ姿を見せる動作である。立役と同様に座りからの入り込みに続いて観客に後ろ姿を見せる動作であるが、女形の場合、右折する仕草をする際、人形首が客席の方を振り返り、一瞬静止する【写真19】。



写真19 後振り（振り返る）

そして、ろくろ車後輪を軸に右折する。このときに、人形は両手を前で合わせ、背はのけぞるようにして、体は人形遣いの右方向を見る【写真20】。続いてろくろ車後輪を軸に右に回転して、もとの位置に戻る。女性の悲しみの極致の表現で、義太夫節の「日高川入相花王」の清姫が川に飛び込む決意をする場面で用いられている。



写真20 後振り

註(1) 三代目西川古柳(瀬沼周助)の時代には、型ではないが「立つ」

「座る」の他、現在も三番叟で用いられる「鳥飛び(からすとび)」等の座員で共有されている符牒はあったという。なお、三代目西川古柳が活動した時期には、江戸最後の人形遣いとされる吉田冠十郎(生年?—一九四四)と興行を共にしているが、五代目西川古柳は三代目西川古柳からは冠十郎の遣い方等の話を聞いた記憶はないとのことである。四代目西川古柳は、文楽の人形遣い吉田文昇より学び、それまでの「符牒」のみの伝承から、文楽の振りを取り入れたが、「型」を系統立てて指導したのは五代目西川古柳が最初である。

(2) 本稿第三章第六節三の「ろくろ車⑧」が該当する。

(執筆者 大谷津 早苗／服部 真理)

第三節

実際の公演に見る芸態

はじめに

以下は、平成三十（二〇一八）年二月十一日に開催された「伝統文化ふれあい事業 第十二回伝統芸能体験・発表講座（講座）」と略す「発表会」に向けて平成三十年二月七日に行われた『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』の稽古での講座受講生への五代目西川古柳の指導内容を記録した内容に、五代目西川古柳（瀬沼亨）への聞き取り調査の内容を加筆したものである。指導内容は、説経節の会の語りを録音した音源による稽古と説経節講座受講生との共演による稽古である。発表会に出演する講座受講生九名のうち、初心者三名が『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』の人形遣いとして出演、経験者四名が後見として補助した。^①

初心者への指導では人形首は顔を起こした状態にして胴串の「うなづき」を輪ゴムで縛って固定し、「うなづき」を用いず、胴串を左右、前後に動かし、「手首で語る」ことが教えられる。座員による公演と異なり、「小猿」操作により目玉や眉毛を動かすこともしない。座員が操る際には、「狐葛の葉」が泣くときは人形首は「ねむり目」になるが、講習生への指導では目の操作は行わない。また以下に見るように、各役とも動きが詳細に指導されるが、五代目西川古柳によれば、座員の稽古においては、「出る」箇所、「入る」箇所など基本的なことのみの指示し、心理描写をいかに人形で表現するかは各座員が考えるという。このように講座の記録は、座員が演じ

る場合との相違点はあるが、現在の若手座員は全員講座経験者であり、八王子車人形の伝承の基礎的段階を把握する手がかりとして有効であるため、初心者への指導を記録する。

「信田妻 葛の葉 二度の子別れの段」の芸態

凡例を以下に示す。

・台本として掲載したものは、講座で配布された『信田妻 二度の子別れの段』^②である（写真1）。



写真1 『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』台本（書き込みは五代目西川古柳による）西川古柳座所蔵

- ・台本及び人形の動きの説明において、「阿部の保名」(「保名」と略す)「葛の葉姫」(「狐葛の葉」の名称は講座発表会のプログラムの表記に従った。また、芝居中登場する動物の狐は「狐」、最後に登場する振り返しの人形首の狐葛の葉を「狐葛の葉(振り返し)」、狐の顔を「狐(振り返し)」と表記した。(「狐」は写真2、その他の人形は第三章第四節写真参照)
- ・講座では、人形の手足は「手」「足」、人形首は「首」と呼ばれている。これに準じて以下の人形の動きの説明において、人形の部分を表す際には、「人形の」を付記せず「手」「足」「首」とする。人形遣いの手等に関しては「人形遣い」の語を付記する。
- ・人形の動きに伴う人形遣いの操作が煩雑な場合、操作方法を括弧に示し補った。
- ・人形の動きに用いられる型は、本書第三章第二節の「八王子車人形の型」で紹介した番号を括弧に示した。(例②出る)ただし、「③ねじ」(立役)と「⑨ねじ」(女形)に準ずる動きは、ろくろ車が左右に方向を変える際に必ず伴い膨大なため、割愛する。
- ・台詞のあるところでは、状況に応じて前後、左右に常に首を動かすが、一つ一つの記述は割愛する。
- ・人形の動きの説明に出てくる「上手」は客席から見て舞台右手、「下手」は客席から見て舞台左手を表している。
- ・本書付録DVDに八王子車人形西川古柳座座員によって上演された『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』が収められているので参照されたい。
- ・挿入した写真は、平成二十六(二〇一四)年十一月二十三日の「八王子車人形と民俗芸能の公演」および平成三十(二〇一八)年九月二十三日の「伝承のたまてばこ」において、保戸塚時久氏により、撮影されたものである。【写真6】のみ、平成二十六(二〇一四)年十一月二十三日の「伝承のたまてばこ」において筆者が撮影した。



写真2 講座練習風景 (五代目西川古柳による狐操作の指導)
2018年2月7日撮影

注 (1) 発表会で演じられた八王子車人形のその他の演目は、「二人三番叟」「日高川入相花王渡し場の段」である。

(2) ほほ同内容の詞章が、「橋本光子一九九八」に収められている。

(3) 五代目西川古柳によれば、移動に伴うものは「ねじ風の動き」で、厳密には型としてのねじとは異なる。

参考文献

橋本光子「十一代目 薩摩若太夫 信太妻―葛の葉二度目の子別れの段」『日本文化の伏流 民衆芸能 説経節集「解説書 下巻」』法政大学多摩の歴史・文化・自然環境研究会(編集代表) 小沢勝美・宮川孝之 法政大学多摩地域社会研究センター 一九九八年二六(二七頁)

『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』の芸能

登場人物

『信田妻 葛の葉 二度の子別れの段』 台本

ナレータ

※以下本欄の登場人物は人形の動きに即した記載で

説経節太夫の語りの分担とは一致していない。

- 阿部の保名、葛の葉は童子を抱きいたわりて
① 大野の飯屋を忍びいで
(写真3)

- ② 信太の森へと尋ね行く
③ 保名夫婦の方々は

- ④ 曇りし声を張り上げて
童子が母はいずれにぞどこが狐の住まいぞや

- ⑤ この子を不憫と思うなら
(写真4)



写真3 葛の葉姫と保名の登場
2014年11月23日 保戸塚時久撮影



写真4 童子を背負った保名と葛の葉が顔を見合わせる
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

五代目西川古柳指導による人形の動き

- ① 「大野の」の語りで、葛の葉姫、右手で杖を突きながら、舞台下手の奥から、ゆっくり舞台中央に向かって出てくる(⑬出る)。葛の葉姫に続いて、童子を背負った保名が歩いてくる(②出る)。背負い方については、本書第三章第一節「特殊な操法」参照。

- ② 葛の葉姫、保名は上下の位置に立つ。
かみしも

- ③ 葛の葉姫、保名、顔を見合わせる。人形遣いは「保名さん、葛の葉さん、これから狐葛の葉を呼びましょう」という気持ちで演ずる。

- ④ 保名は前方下手に進みながら狐葛の葉を探す。葛の葉姫は前方上手の方に進み、立ち止まって左右を見、杖を手にしたまま、右手を口元近くに寄せて、狐葛の葉を呼ぶ仕草をする。両者とも舞台正面を見、今度は葛の葉姫は下手の方を、保名は上手の方を見て狐葛の葉を探す(⑬行きつ戻りつ)。両者とも舞台正面に戻り、探す仕草をし、「なかなか見つからないけど呼んでみましょう」と、保名と葛の葉姫は顔を見合わせる。両者とも「おい」と呼ぶ切実さが必要である。

- ⑤ 「この子を」で葛の葉姫は、保名の背の童子の方向に右手をかざす(②②右を指す)。

⑥ 今一度姿を

⑦ 現して

⑧ 童子が母よ葛の葉と

⑨ 声を限りに呼ばわれば

(写真5)

⑩ コンコン快慶喜びの

鳴く音は野路の夜嵐と

こだまばかりが聞こえける

⑪ かかる向こうの方よりも

ともしび見ゆる一灯り

⑫ 確かに童子が母親か 尋ねこいの

知らせぞや

⑬ 東西知れぬ真の闇

⑭ 人里離れし信太の森

⑮ 灯りを目当てに尋ね行く

(写真6)

⑯ 保名はそれと見るよりも

⑰ コレコレ、葛の葉。もう

尋ねずとよしにせい。



写真6 保名と葛の葉姫、上手から下手に回る
2018年9月23日撮影



写真5 葛の葉姫、呼ぶ仕草
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

⑥ (4)と同様に、保名、葛の葉姫ともに狐葛の葉を呼ぶ仕草をする(⑬行きつ戻りつ)。

⑦ 葛の葉姫と保名の場所が入れ替わる。葛の葉姫は舞台手前を下手方向に進み、保名は舞台奥の方を下手から中央に進み、両者とも舞台正面を向く(⑬行きつ戻りつ)。

⑧ 保名、葛の葉姫とも左右を見まわし狐葛の葉を呼ぶ。

⑨ 保名と葛の葉姫は、向かい合い、顔を見合わせる。

⑩ 保名、葛の葉姫とともに上手の方に向かって狐葛の葉を呼ぶ仕草をする。

⑪ 保名、葛の葉姫ともに灯りを見つけた様子で上手を見る。

⑫ 保名と葛の葉姫は顔を見合わせ、「灯りの方に行ってみよう」とうなづく。

⑬ 保名、葛の葉姫の順に上手に向かってゆっくり進む。

⑭ ともにゆっくり左折し、舞台の奥の方に進む。

⑮ 大きく円を描くように左折し、下手に向かって進む、保名は下手寄りの位置、葛の葉姫は舞台中央付近でゆったりと右折し、ともに客席の方を向いて「これだけ探しても狐葛の葉がない」と探す仕草をする。

⑯ 保名は狐葛の葉を探す仕草をし、葛の葉姫を見る。

⑰ 葛の葉姫と保名は上下の位置になり、保名は葛の葉に話す。葛の葉姫は立ったまま、保名を見つめている。

葛の葉姫 保名	⑱ そりやまた何故に ⑲ さればさ、例え変化の身なるとも、 血筋の縁に引かされて、 尋ね来いと書いて残したのであるうが、 ⑳ 今は、人間の情去って、 ㉑ 己が本性現わしてこの森に立ち帰り、 数万の狐と交わる時は、 もう人間の情、はったりと忘れたのであろう。 浅ましい事には、そこが畜生。 もう尋ねずと帰りましょう。 ㉒ と立ち上がれば〔写真6〕
ナレータ	㉓ このう申し保名殿 〔写真7〕
葛の葉姫	㉔ せっかくこれまで尋ね 来てどうまあ会わずに 帰らりよう ㉕ しばし引き留め葛の葉が
葛の葉姫	㉖ このう申し童子が母 ㉗ 親子三人、この様に



写真7 葛の葉姫、保名を引き留める
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

葛の葉姫、首をかしげる。	⑱ 保名は葛の葉に話しかける。
⑲ 保名は葛の葉に話しかける。	
⑳ 保名、座る(④座る)。葛の葉姫座る(㉑座るから立ち、の座るのみ)。 葛の葉姫の杖を後見が引き取る。	㉑ 保名は葛の葉に話しかける。「はったりと」で首を垂れて大きくうなづく。
㉒ 保名、立ち上がり(㉑座るから立ち)、前に一歩進み入り込む(⑭座りからの入り込み)。	㉓ 葛の葉姫、立ち上がり、右手で保名の左袖を取る(葛の葉人形遣いの右手で保名の袖を取る)。保名は引き止められ、立ち止まる。
㉔ 葛の葉姫、保名を見る。	
㉕ 「しばし」の後で保名は二歩正面よりやや下手方向に進み、保名の袖を持ったまま葛の葉も同時に二歩進む。「引き」で両者そろって三歩後ずさりする。再び「留め」までの間に保名と保名の左袖を持った葛の葉が揃って三歩前進し、三歩後ずさりする。「葛の葉が」で葛の葉は保名を引き留め、座らせ、自分も座る。(④座る、㉑座るから立ち、の座るのみ)	
㉖ 葛の葉姫、「私が呼びますから」と保名に言う仕草をして立ち、狐葛の葉に呼ぶ仕草をする。	㉗ 葛の葉姫、保名と童子の方を見、右手で指す。

ナレータ

⑳ 焦がれて慕う心根を
㉑ 不憫と思い

㉒ この子に乳を飲ませてと
㉓ 恨みつ泣きつ夫婦の者

㉔ いかがはせんと顔見合わせ
途方に暮れていたりける
㉕ 次第にその夜も更け渡り
㉖ 早丑三つの頃なるが
(写真8)

㉗ あら不思議な次第なり
此方の萱の繁みより
㉘ 現れいでたる童子が母
(写真9)

狐葛の葉

㉙ これ申し保名殿。
㉚ 葛の葉さんもようおいで。
㉛ お二人ながらどうぞ聞いて
くださんせ。



写真9 狐葛の葉が現れる
2018年9月23日 保戸塚時久撮影



写真8 藪に狐(動物)が現れる
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

㉔ 葛の葉姫、「心根を」で右手を帯に当てる。

㉕ 葛の葉姫、両手を合わせる(人形遣いの右手人差し指を指皮に入れ、親指で人形左手の指皮を取る)。五代目西川古柳は「この演技は(人形遣いに)任せる」と述べている。

㉖ 葛の葉姫は「この子に」で童子に右手をかざす。

㉗ 葛の葉姫、泣く(右袖を正面に出し、首を左右に動かし、左目、右目の涙を袖でぬぐう仕草をし、最後に首を正面で下向きにして涙を拭く仕草をする)。保名、泣く(保名は童子を背負っているので、泣くときは首を動かすのみで表現)。

㉘ 保名と葛の葉姫は座ったまま顔を見合わせ、うなづく。

㉙ 保名と葛の葉姫は、どうするか話し合っている。

㉚ 藪の上に狐が現れる。藪の内側で狐の人形操作。狐が飛び出し消えていくように、藪の内側で操作。狐の首、尻尾を動かす(狐の人形にも胴串がついており、他の人形首同様に操作する)。

㉛ 保名と葛の葉姫は引き続き話し合っている。

㉜ 狐葛の葉、二つの藪の中から死にそうな様子で出てくる(㉔出る)。(後見、二つの藪を動かす。)保名と葛の葉姫は驚いて立ち上がり下手に下がる。(㉔座るから立ち)

㉝ 狐葛の葉、立ち止まって保名と葛の葉姫に話す。保名と葛の葉姫は立っている。

㉞ 保名と葛の葉、座り(㉔座る、㉔座るから立ち、の座るのみ)、狐葛の葉の話をじっと聞いている。

㉟ 狐葛の葉も座り二人に話す(㉔右を指す)。

捨つる命を保名殿に助けられ（写真10）
せめて命のご恩報じ、
少しなりとも御身のためになったなら、

④0 すぐに信太へ戻らんと

④1 忘るる日とは
無けれども

今日か明日かと思ううち

④2 因果の種を身に宿し
早別るるに別れかね

④3 産み落としたる顔見れば

④4 可愛さ余る血筋の縁

④5 現在産みなす子を捨てて、
帰るこの身の切なさを推量あつて、
葛の葉様。

④6 童子がお世話をくれぐれも

④7 ひとえに頼み上げますと

④8 畜生ながらも世の義理に
絡められたる詫び涙

④9 聞くと葛の葉も憂さ辛さ

⑤0 これ申し童子が母、何のまあ、
その言い訳に及びましよう。



写真10 狐葛の葉、保名と葛の葉姫に語る
2018年9月23日 保戸塚時久撮影

④0 狐葛の葉、立ち上がり、左を指す（②0座るから立ち、②2左を指す）。

④1 説経節の節に合わせて前後にゆっくり踏み出し、右手を上げて下手、
上手の順に見る。

④2 狐葛の葉、「身に宿し」でお腹を触る。

④3 狐葛の葉、両手を見る。

④4 狐葛の葉、子を抱くように両手を出す。「縁」で座ると哀れみが出る。

④5 「葛の葉様」で葛の葉姫はうなずく。

④6 葛の葉姫は、「だいじょうぶです」とお辞儀をする。

④7 狐葛の葉、両手を合わせ（人形遣い右手人差し指で人形右手の指皮、
人形遣い右手親指で人形左手の指皮を取る）

④8 狐葛の葉、泣く。

④9 三人で泣く。狐葛の葉は袖を顔に押し付けたまま泣き、ゆっくり
拭く。葛の葉姫は、高貴な身分の女性であることを演出するため
袖を押し付けたまは泣かず、右袖で、左目、右目、正面の順に
品よくぬぐう。その際、右手の位置は顔の前に固定し、首を動かす。

⑤0 葛の葉姫、狐葛の葉に話す。

ナレータ

⑤① お前が見えぬとすぐに私が抱き上げ、

ながめすかせどこの幼子、

乳を尋ねて泣きいだす。

このかかさんはそではないと、

慕う可愛さ不憫さに、

これまで連れて参りしが、

これより屋敷に帰るともよう 訳いうてこの後は、

⑤② 私になじんで親しむように

⑤③ 得心させて下されと

⑤④ 保名は背の幼子を

童子が母に渡しける

(写真11)

⑤⑤ 母は我が子をいだき上げ

⑤⑥ 乳房を含ませ撫でさすり言わんとすれども

せぐりくる涙は声より先立ちて

しばし言葉もなかりける

⑤⑦ ようよう涙の顔を上げ

これ童子や。

母の言うことようぞ聞きや。

恋しくば尋ね来てみよと書いて残せし歌もある。

保名殿には申し訳、葛の葉さんへは、

お礼申さんとのために、今度現れいでたれど、

二度と会われぬ親子の縁。

母の乳房の飲み納め。

たとと飲んで、別れてたも。



写真11 狐葛の葉、葛の葉より童子を受け取る
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

⑤① 「私が」で右胸、「この幼子」で童子を見、右手で指す(②② 右を指す)。

「そではないと」で首を振る。

⑤② 葛の葉姫、右手で自分を指す。

⑤③ 葛の葉姫、狐葛の葉にお辞儀をする(②① お辞儀)。狐葛の葉、うなづく。

⑤④ 狐葛の葉、舞台中央に行き、葛の葉姫は保名の後ろに行く。狐葛の葉、保名の背の童子を葛の葉姫から受け取る。葛の葉は保名の背の方に移動し(葛の葉姫が童子を保名の背から下ろし、狐葛の葉に渡す。(葛の葉姫は右手を保名の背にかざし、後見が実際に童子の人形を狐葛の葉に渡す。) 葛の葉姫は、舞台上手に移動し、座る(②③ 座るから立ち、の座るのみ)。

⑤⑤ 狐葛の葉、童子を抱き上げて、顔を見る。(抱き方については本書第三章第一節の「特殊な操法」参照)

⑤⑥ 狐葛の葉、童子を抱き、前かがみになる。「しばし」で二歩下がる。

⑤⑦ 狐葛の葉、顔を上げ、正面で童子の顔を見つめて、話す。「保名殿」

「葛の葉さん」では保名、葛の葉姫がそれぞれうなづく。

ナレータ

狐葛の葉

58 父は名に負う阿倍野にて、

保則公の御門弟とも言える人。

陰陽道の名を上げし、

阿部の保名と言える人。

59 母はさもしき畜生の腹をかりたる身の因果。

まめで成長なせばとて、

狐の子じやと(写真12)

60 疎まれて

人交わりがならぬなら

母を恨みん不憫やと

言うに言われず悔やみ泣き

61 童子をひつしと抱きしめ

前後正体なかりける



写真12 狐葛の葉、童子を抱く
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

62 ようよう心取り直し

63 これ見やしゃんせ保名殿。

親の心も知らずしてただすやすやと、

寝入る童子はいじらしや。

今にも目を覚まして、

後を慕うて泣くである。

もそつとここに居たけれど是非に及ばぬ。

もうお別れでござりまする

64 このまま早う連れて戻ってくだされと

58 保名、立ち上がり、座る(3座る)。

59 狐葛の葉、童子を抱き、泣く。葛の葉姫、もらい泣きをする。「ま

めで成長なせばとて」で童子を上にあげ、「狐の子じやと」で胸

の高さに降ろす。

60 狐葛の葉、節に合わせて、ゆっくり前後に踏み出す。

61 童子をしっかりと抱く。前かがみになる。「前後正体」のところは、

悲しみの絶頂である。人形首を左右に動かす。葛の葉姫も一緒に

泣く

62 狐葛の葉、立つ(20座るから立ち)。

63 狐葛の葉、保名に話す。保名、狐葛の葉に寄る。保名、童子の顔

をのぞきこむ。

64 葛の葉姫、狐葛の葉と保名の後ろに来る(20座るから立ち)。

ナレータ
狐葛の葉

⑥5 童子を保名に渡されて
これ申し葛の葉さん

⑥6 童子がお世話をくれぐれも
ひとえに頼み上げますと (写真13)

ナレータ

⑥7 名残惜しげに立ち上げれば

葛の葉姫

⑥8 これのう申し童子が母

⑥9 乳が無うてはこの幼子

⑦0 私になじむ様はなし。

お前にあってもいらぬ乳。
童子が不憫とおぼしめさば

ナレータ

⑦1 今一度戻って下さりませ、と
⑦2 頼む頼むと葛の葉は
保名諸共取り付いて

別れを惜しむぞ道理なり
引き留められて母親は
もう一刻もおられぬと
⑦3 留めるを振り切り

⑦4 行くをやらじと引き留める
(写真14)



写真14 狐葛の葉と葛の葉姫の押し引き
2014年11月23日 保戸塚時久撮影



写真13 狐葛の葉、保名と葛の葉姫にお辞儀する
2018年9月23日 保戸塚時久撮影

⑥5 葛の葉姫、狐葛の葉より童子を受け取り、保名の背に背負わせる。
(葛の葉姫は右手をかざし、後見が、童子を保名の背に渡す) 舞
台下手より、保名、葛の葉姫の順に座る。狐葛の葉は、舞台上手
に移動し座る (②0座る)。

⑥6 狐葛の葉、葛の葉姫に向かつてお辞儀をする。葛の葉姫、うなづく。

⑥7 狐葛の葉、立ち上がり、下手を向く (②0座るから立ち)。葛の葉姫、
狐葛の葉の袖を掴もうとする (②0座るから立ち)。

⑥8 葛の葉姫、狐葛の葉に話す。

⑥9 「この幼子」で、童子を右手で指す (②2右を指す)。

⑦0 「私に」で右手で自分を指し、「なし」で首を振る。

⑦1 葛の葉姫、両手を合わせる (②1お辞儀)。

⑦2 葛の葉姫下手を向き「頼む頼むと」より、葛の葉姫は右手で狐葛
の葉の右袖を掴み「おられぬと」まで掴んだままで、狐葛の葉も
葛の葉姫もその場で立っている。保名も下手に移動し、狐葛の葉
を見る。

⑦3 狐葛の葉の右袖を葛の葉姫が掴んだまま、両者は一緒に四歩上手
に進む (「留めるを」から「やんちゃ声」までは「押し引き」の
演技をする)。

⑦4 狐葛の葉の右袖を葛の葉姫が掴み、両者は一緒に四歩下手に下がる。

ナレータ	狐葛の葉	ナレータ	童子
------	------	------	----

㉝ 競り合う内に
㉞ 幼子は
㉟ 早目を覚まし
㊱ やんちゃ声

㊲ かかさまどつこへいかしゅんす
わしもいっしょに行きたいと
㊳ 呼び止められて振り返り

㊴ ああ、情けなや、情けなや。
畜生の母とは知らずして、
後を慕う心根が思い
やられていじらしい。
はあ、いじらしい、
いじらしいわいなあ

㊵ 真の姿
㊶ 現すなら、(写真15)
㊷ さぞや愛想も尽きるであ
ろう。親子夫婦の愛着の、
㊸ 早、疾く縁を
㊹ 切らさんと
㊺ 萱野の中にちよこちよこ
入るかと思えるが
㊻ ドロドロ (太鼓の音)
(写真16、17)



写真16 狐葛の葉、藪から顔を出す
2014年11月23日 保戸塚時久撮影



写真15 狐葛の葉、姿見 (すがたみ)
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

㉝ 狐葛の葉の右袖を葛の葉姫が掴み、両者は一緒に四歩上手に進む。
㉞ 狐葛の葉の右袖を葛の葉姫が掴み、両者は一緒に四歩下手に下がる。
㉟ 狐葛の葉の右袖を葛の葉姫が掴み、両者は一緒に四歩上手に進む。
㊱ 狐葛の葉の右袖を葛の葉姫が掴み、両者は一緒に四歩下手に後ろ
に下がり止まる。「やんちゃ声」で、保名の背の童子が顔を見せ
る(人形遣い童子を右肩から出す)。
㊲ 保名は右肩から童子を「よしよし」とあやす。

㊳ 狐葛の葉、童子を見る。葛の葉、童子をあやしに行く。童子は上
手の方を見る(右手で童子の背をさする。葛の葉姫は保名より上
手で、保名より舞台奥に立つ保名の背の童子が観客から見えるよ
うにする)。
㊴ 狐葛の葉、肩を震わせて泣く(右手を正面から顔に押し当て続ける)。

㊵ 狐葛の葉、上手に向かって姿見をする(㉞姿見)。
㊶ 狐葛の葉、下手に向かって姿見をする(㉞姿見)。
㊷ 狐葛の葉、正面を見、前かがみで胸に手を当てる。
㊸ 狐葛の葉、顔を上げる。
㊹ 狐葛の葉、両手を上げる。舞台袖で、附け板を鳴らす。
㊺ 後見、狐葛の葉の後ろからろくろ車を引っ張り、狐葛の葉は藪の
中に入る。
㊻ 太鼓を鳴らす。藪から狐葛の葉が一度顔を出す。狐葛の葉が藪の
中に姿を消し、狐が姿を現す(口を開け、尻尾を振る)。狐葛の
葉の人形遣いは、振り返りの人形首のついた人形に持ちかえ、狐
葛の葉(振り返り)の全身を藪から出す。

狐

ナレータ

89 たちまち白狐と現れて

(写真18)

90 やあやあ、童子。

母の姿はこの通り。

重ねてあとを慕うまい。

親子の縁は切れたぞよ。

91 はったとにらんだ顔色は

あら恐ろしき次第なり

(写真19)

連れて吹き入る夜嵐も

92 草ごうごうと信太の森

面影ばかり残すらん



写真19 童子を袖で隠す葛の葉姫。狐（振り返し）、も泣きながら童子を見つめる
2018年9月23日 保戸塚時久撮影



写真18 狐（振り返し）、藪から顔を出す
2018年9月23日 保戸塚時久撮影



写真17 狐葛の葉（振り返し）藪から顔を出す
2014年11月23日 保戸塚時久撮影

89 「白狐」と同時に狐葛の葉（振り返し）の人形首^{かしら}を振り返し、狐（振り返し）の首に変える。後見、狐（振り返し）の尻尾を震わせる。

90 狐（振り返し）、童子の方を見る。葛の葉姫、狐（振り返し）を見てから童子に狐（振り返し）を見せないように自分の右袖を童子の前にあてて隠す。保名も狐を見、正面でうつむく。

91 狐（振り返し）、「はったと」で上手を見、「にらんだ」で童子のいる下手の方を見る。（※92左右を指す。）葛の葉姫、右袖で童子をかばいつつ、狐（振り返し）を見、正面でうつむく。

92 狐（振り返し）、両手を上げ、震えながら童子の方を見る。保名うつむいて泣く。葛の葉姫も右袖で童子をかばったまま、泣く。舞台袖で拍子木を鳴らす。

（執筆者 大谷津 早苗／服部 真理）

第四節

八王子車人形の上演演目

八王子車人形において上演されてきた演目を、主に説経節を地方として演じていた昭和四十年代までの初期に関しては、「一説経本一覽」として西川古柳座所蔵の説経本及び八王子市郷土資料館所蔵の説経本の一覧を示す。昭和四十年代以降現在に至る、義太夫節その他の地方による上演演目は、二八王子車人形の演目一覧に示す。

一 説経本一覽



写真2 No.39 冒頭

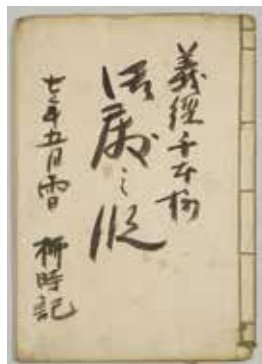


写真1 No.39「義経千本桜」
三代目西川古柳使用（「柳時記」の記載が見られる）

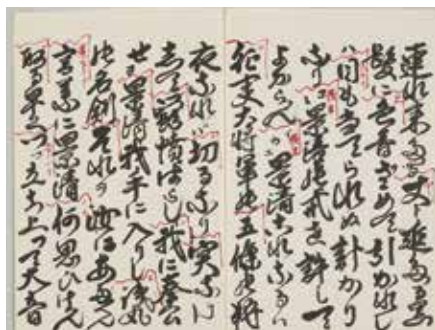


写真5-2 No.27



写真5-1 No.27「出世景清一代記」八代目薩摩津賀太夫使用

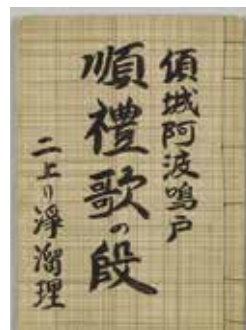


写真3 No.16「傾城阿波鳴門」表紙

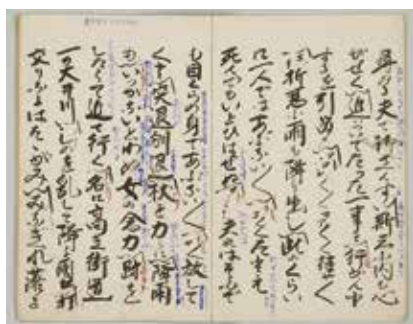


写真6 No.3「朝顔日記」 車人形の振付が青字で書きこまれている。

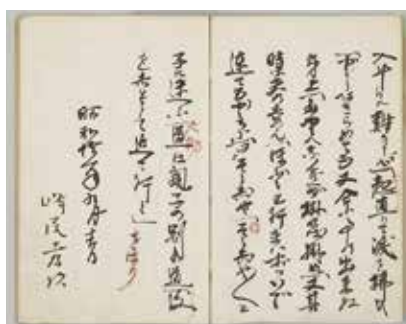


写真4 No.16 峰尾孝次（後の三代目都太夫）の記名が見られる

説経本目録（西川古柳座所蔵）

番号	外 題 名	段（場）名	形態	数量	備考
明鳥夢泡雪					
1	明鳥夢泡雪	浦里雪責之段	冊	1	
朝顔日記					
2	朝顔日記	宿屋	冊	1	
3	朝顔日記	大井川の段	冊	1	
4	増補 朝顔日記	宿屋の段切大井川	冊	1	
絵本大功記					
5	絵本大功記	セツ目 孫市切腹段 蘭丸討死段	冊	1	
小栗判官一代記					
6	小栗判官一代記	本腹の段	冊	1	
7	小栗武勇姫鏡	二度対面之段	冊	1	
8	小栗判官一代記	熊野山小栗本腹之段	冊	1	
9	（小栗判官一代記）	照手名附之段 清水のどん	冊	1	
10	小栗判官一代記	熊野山小栗本腹之段	冊	1	
仮名手本忠臣蔵					
11	忠臣蔵	ニッ玉の反	冊	1	
12	忠臣蔵	三反目の切	冊	1	
伽羅先代萩					
13	伽羅先代萩	御殿 政岡忠義段	冊	1	
芦屋道満大内鑑（信田妻）					
14	芦屋道満大内鑑	葛ノ葉子別の段	冊	1	
傾城浅間ヶ嶽					
15	傾城浅間ヶ嶽	時鳥殺の段	冊	1	
傾城阿波鳴門					
16	傾城阿波鳴門	順礼歌の段	冊	1	
恋娘昔八丈					
17	恋娘昔八丈	鈴ヶ森の段	冊	1	
佐倉義民伝（佐倉惣（宗）吾伝）					
18	浅倉草紙楓丹冊	宗吾住家の段	冊	1	
19	浅倉草紙楓丹冊	宗吾子別の段 宗吾仕置の段	冊	1	
20	佐倉義民伝の内	佐倉宗吾子別之段	冊	1	
三庄太夫一代記					
21	（三庄太夫一代記）		冊	1	
22	三庄太夫一代記 由郎湊千斬（ママ）長者	三柴段	冊	1	
23	三庄太夫一代記	四ッ目 萬代山 国分寺 追込の段 寺扒の段	冊	1	
24	由良湊千斬（ママ）■■■（長者） 三庄太夫一代記	出世 対王丸 拾揚段	冊	1	
25	三庄太夫	山岡住居乃段	冊	1	
26	山庄太夫一代記	対王丸母対面之段	冊	1	

番号	外 題 名	段（場）名	形態	数量	備考
出世景清一代記					
27	大仏伝記	景清目玉献上の段	冊	1	
28	景清一代記武士道の礎	眼玉献上の段	冊	1	
神霊矢口渡					
29	神霊矢口の渡	お舟殺の段	冊	1	
竹生嶋弁財天御本地					
30	竹生嶋 弁才天の由来		冊	1	
31	竹生嶋弁才天由来		冊	1	
壺坂観音霊験記					
32	壺坂霊験記	澤市内	冊	1	
東海道中膝栗毛					
33	東海道膝栗毛	赤坂並木の段	冊	1	
唐人おきち					
34	新曲・かたりもの 唐人おきち		冊	1	
日蓮上人一代記					
35	身延山日蓮記	高座巻の段	冊	1	
播州皿屋敷					
36	播州皿屋敷	青山鉄山館	冊	1	
日高川入相花王					
37	日高川入相桜	清姫嫉妬之段	冊	1	
義経千本桜					
38	川越太郎上使 義経千本桜	九郎義経 川越太郎 静御前 郷の君 序の功	冊	1	
39	義経千本桜	御殿之段	冊	1	付属品として状3あり
原題不明					
40	西の川原説法		冊	1	
41	（出世景清一代記）カ		冊	1	
42	（日蓮上人一代記）カ		冊	1	
43	（一谷嫩軍記）カ		冊	1	
44	（小栗判官一代記）カ		冊	1	
45	（小栗判官一代記）カ	てるて姫なつけ	冊	1	
46	（薫樹累物語）カ		冊	1	
47	（恩愛贖関守）カ		冊	1	
48	恋娘昔八丈	鈴ヶ森の段	冊	1	
49	恋娘昔八丈	鈴ヶ森の段	冊	1	
50	恋娘昔八丈	鈴ヶ森の段	冊	1	
51	一谷嫩軍記	盛後注進の段（敦盛出陣）	冊	1	

説経本目録（郷土資料館所蔵）

番号	外 題 名	段（場）名	形態	数量	備 考
41	小栗判官	照手姫 万屋のだん 二十	冊	1	
42	小栗判官	照手の姫 押智入段	冊	1	
43	小栗判官	照手の姫 器量並段	冊	1	
44	小栗判官	母對面の段 矢取の前	冊	1	
45	小栗本腹の段	小栗本腹の段 人丸身賣 段	冊	1	
46	小栗判官	本腹の段	冊	1	
47	小栗判官一代記	鬼影獄舎入 六段目 施 苗の段	冊	1	
48	小栗判官一代記	照手姫判官對面之段	冊	1	
49	小栗判官一代記の内	お鍋ぶし	冊	1	
50	（小栗判官一代記）→11-B 参照				11-B と同 一
加賀見山旧錦絵					
51	加賀見山旧錦絵	お初忠儀（ママ）の段	冊	1	
52	加々見山	お初忠儀（ママ）乃段	冊	1	
53	鏡山旧錦絵	六ッ目 草履打の段	冊	1	
出世景清一代記					
54	出世景清	阿古屋道行 獄■の段	冊	1	
55	武勇誉出世景清	重勝獄舎順見ヨリ景清獄 舎破の段	冊	1	
56	出世景清一代記	阿古屋自害の段	冊	1	
57	影清一代記	あこや自害之段	冊	1	
58	出世景清一代記	牢破の段	冊	1	
59	（出世景清一代記）	牢破の段 忍びの段	冊	1	
60	日向国景清	人丸姫父對面の段	冊	1	
61	出世景清	人丸姫道行の段	冊	1	
62	日向景清	人丸姫 道行段	冊	1	
63	日向景清八島日記	人丸姫道行 父對面之段	冊	1	
64	出世景清一代記	目玉献上の段	冊	1	
65	（出世景清一代記）	右大将頼朝公に 景清目 玉献上之段	冊	1	
66	（出世景清一代記）	右大将頼朝公 景清目玉 献上の段	冊	1	
67	（出世景清一代記）		状	22	
鎌倉三代記					
68	鎌倉三代記	三浦別の段	冊	1	
芦屋道満大内鑑（葛の葉）					
69	（芦屋道満大内鑑）	信田森保名童子丸 二度 目子別	冊	1	
70	（芦屋道満大内鑑）	信田森 葛乃葉 二度目 子別之段	冊	1	
71	（芦屋道満大内鑑）	信田森 二度葛子別之段	冊	1	
72	（芦屋道満大内鑑）	信田森 葛之葉 二度目 子別れの段	冊	1	
73	芦屋同萬（ママ）大内鏡	子別れの段	冊	1	
74	芦屋道満大内鏡	信田乃森葛乃葉子別れの 段	冊	1	
75	芦屋同萬（ママ）大内鏡	信田乃森 葛乃葉 子別 れ	冊	1	
76	葦（ママ）屋道満大内鏡	葛葉子別の段	冊	1	
77	（芦屋道満大内鑑）	保名内より信田森へ親 （ハハ）子共保名道行	冊	1	
78	（芦屋道満大内鑑）	信田森 葛の葉 一号 子別れの段	冊	1	
79	安部の安名 重（童）子丸	信田之森 葛の葉 子別 れの段	冊	1	
源平盛衰記					
80	熊谷館騒動	桂姫門前払之段	冊	1	
81	源平盛衰記熊谷黒（ママ） 染衣	一之谷熊谷館之段 桂姫 門前払	冊	1	

番号	外 題 名	段（場）名	形態	数量	備 考
朝顔日記					
1	朝顔日記	大井川ノ段	状	2	断片
2	（生写朝顔日記）	（宿屋の段）	冊	1	
3	朝顔日記	濃松之段	冊	1	
一谷嫩軍記					
4	一の谷嫩軍記	敦盛熊谷 首討の段	冊	1	
5	一の谷嫩軍記	熊谷敦盛首討	冊	1	
6	一の谷嫩軍記	熊谷敦盛首討の段	冊	1	
7	一の谷■（金偏に日欠）軍 記	熊谷敦盛首討	冊	1	
8	一谷嫩軍記	三の切 熊谷陣屋段	冊	1	
9	一の谷嫩軍記	陳（ママ）屋の段	冊	1	
10	一ノ谷嫩軍記	盛俊注臣之段	冊	1	
11	"(A) 一の谷嫩軍記 (B) 小栗判官一代記 "	"(A) 盛俊忠義の段 (B) 照手姫 清水の段 "	綴	1	"11-A,B は 合本 11-B は 50 と同一 "
12	一の谷嫩軍記	佐藤三郎次信 矢取の段 討死の段	冊	1	
13	一谷嫩軍記	三段目 石工の段	冊	1	
14	一の谷嫩軍記	無官太夫敦盛 装束立の 段	冊	1	
15	"(A) 一ノ谷嫩軍記 (B) 一の谷軍記 "	"(A) 六段目 熊谷次郎直 実 無官太夫敦盛 組討 段 (B) 七段目 御太将方 旗揃段 "	綴	1	15-A,B は 合本
16	"(A) 一ノ谷 (B) 一の谷 "	"(A) 四 上・下太刀打段 (B) 五 上・下 組討段 "	綴	1	
奥州安達原					
17	奥州安達原	袖萩祭文の段	綴	1	
大江山酒吞童子					
18	大江山酒吞童子	岩家酒盛ノ場	冊	1	
19	大江山酒吞童子	岩家酒盛之場	冊	1	
釜淵双級巴					
20	（釜淵双級巴）	七場河原 石川五右エ門 釜入の段	冊	1	
21	釜ヶ淵ニッ巴	石川五右エ門 釜入の段	冊	1	
22	（釜淵双級巴）	石川五右エ門 釜責之段 七場河原	冊	1	
23	ニッ巴五右エ門傳記	於瀧殺ノ段	冊	1	
小栗判官一代記					
24	小栗武勇傳高倉	判官矢取之段 片瀬人形	冊	1	
25	小栗武勇傳	判官矢取之段 片瀬人形	冊	1	
26	小栗判官一代記	判官矢取の段	冊	1	
27	小栗判官	高倉入 二拾九段目 矢 取段	冊	1	
28	小栗判官正漬	（矢取の段）	冊	1	
29	（小栗判官一代記）	（矢取の段）	冊	1	
30	小栗判官一代記	矢取のだん	冊	1	
31	（小栗判官一代記）	（矢取の段）	冊	1	
32	小栗判官一代記 職	判官矢取の段	冊	1	
33	（小栗判官一代記）	（矢取の段の前まで）	冊	1	
34	小栗判官一代記	照手姫 車引乃段	冊	1	
35	小栗判官一代記	照手 車引段	冊	1	
36	小栗判官一代記（省略あり）	照手姫 車引乃段	冊	1	
37	小栗判官一代記	照手姫 清水の段	冊	1	
38	（小栗判官一代記）	六ッ浦ヶ濱 浦君 住家 の段	冊	1	
39	小栗判官一代記	萬屋館 照手清水汲之段	冊	1	
40	小栗判官一代記	萬や 本陣乃段	冊	1	

番号	外 題 名	段 (場) 名	形態	数量	備 考
131	浅倉藤吾	任 (ママ) 家段	冊	1	
132	東山佐倉草紙	住家の段 子別の段	冊	1	
さんせう太夫 (山椒太夫) 一代記					
133	三庄太夫一代記	安寿姫 対王丸 山別の段	冊	1	
134	三庄太夫一代記	安寿姫 対王丸 山別の段	冊	1	
135	(三庄太夫一代記)	安寿姫 対王丸 山別通段	冊	1	
136	三庄太夫一代記	安寿姫 対王丸 山別の段	冊	1	
137	三庄太夫一代記	安寿姫 対王丸 山別の段	冊	1	
138	"(A) 八百屋お七 (B) 三庄太夫一代記"	"(A) 忍の段 (B) 山別の段"	綴	1	
139	三庄太夫一代記	山岡住家の段 三の柴の段 母対面の段	冊	1	
140	三庄太夫一代記	対王丸, 母対面の段	冊	1	
141	三庄太夫一代記	対王丸, 母対面の段	冊	1	
142	三庄太夫一代記	対王丸, 母対面の段	冊	1	
143	三庄太夫一代記	対王丸母対面	冊	1	
144	(三庄太夫一代記)	(対王丸母対面の段)	冊	1	
145	三庄太夫一代記	対王丸母対面之段	冊	1	
146	三庄太夫一代記	朱雀詣之時 梅津広忠公 対王丸 松並木ニテ捨ヒ上之段	冊	1	
147	三庄太夫一代記	安寿姫火責	冊	1	
148	由良美名登千軒長者 三庄太夫一代記	安寿 対王 身投之段	冊	1	
149	三庄太夫一代記	対王丸 寺入之段	冊	1	
150	三庄太夫一代記	"逃込の段 寺探の段"	冊	1	
151	三庄太夫物語	対王丸 国分寺段	冊	1	
152	三庄太夫物語	安寿姫 対王丸 水盃段	冊	1	
153	三柄太夫物語	対王丸 国順検の段	綴	1	154 と合本
154	三庄太夫物語	対王丸 母対面之段	綴		153 と合本
しんとく丸					
155	志ん徳丸一代記	善兵衛住家 しん徳祈りの段	冊	1	
156	志ん徳一代記	志ん徳祈の段	冊	1	
157	志ん徳丸一代記	善兵衛住家乃段 志ん徳祈りの段	冊	1	
158	志ん徳丸一代記	善兵衛住家 をすわ釘註文之段	冊	1	
159	志ん徳丸一代記	善兵衛住家の場 おすわ釘註文の段 祈りの場	冊	1	
神霊矢口渡					
160	神霊矢口之渡場	頓兵衛住家之段	冊	1	
161	神霊矢口之渡	お舟殺之段	冊	1	
関取千両幟					
162	関取千両のぼり	猪名川 鉄ヶ嶽	冊	1	
163	関取千両幟 (ママ)	稲川角力之段	冊	1	
164	関取千両幟	稲川 鉄ヶ嶽 角力之■ (段)	冊	1	
165	(関取千両幟)	(稲川鉄ヶ岳 相撲場の段)	冊	1	
166	(関取千両幟)	稲名川 鉄ヶ嶽 角力之段	冊	1	
宝入舟当賑					
167	御祝儀宝の入船	弁財天の由来	冊	1	
168	御祝儀宝の入船	弁財天の由来	冊	1	
169	御祝儀宝の入船	弁財天の由来	状	1	

番号	外 題 名	段 (場) 名	形態	数量	備 考
82	熊谷館騒動	一之谷熊谷館之段 桂姫門前弘の場	冊	1	
83	熊谷館騒動	上之部 桂姫下職の段	冊	1	
84	熊谷館騒動	桂姫下職之段	冊	1	
85	熊谷館騒動	桂姫下職之段	冊	1	
86	(源平盛衰記)	(桂姫下職の段)	冊	1	
87	熊谷館騒動	桂姫下職の段	冊	1	
88	熊谷館騒動 二人尼	桂古里物語	冊	1	
89	発身熊谷墨染衣	桂姫阿方弘ノ段	冊	1	
90	二人比丘	熊谷館 阿房弘の段	冊	1	
91	(源平盛衰記)	玉鶴病死之段	冊	1	
92	(源平盛衰記)	玉鶴病死ノ段	冊	1	
93	一の谷二人比丘	熊谷館	冊	1	
傾城阿波鳴門					
94	傾城阿波鳴戸	連戻の段	冊	1	
95	八ッ目ノ切 傾城阿波乃鳴門	順礼の段	冊	1	
96	阿波の鳴戸	順礼の段	冊	1	
97	傾城阿波鳴門の段	順礼之段	冊	1	
98	阿波の鳴戸	お鶴殺の段	冊	1	
99	阿波の鳴戸	順礼歌之段	冊	1	
傾城浅間ヶ嶽					
100	傾城浅間ヶ嶽	時鳥殺の段	冊	1	
101	傾城浅間ヶ嶽	不如帰殺の段	冊	1	
恋娘昔八丈					
102	恋娘昔八丈	鈴ヶ森のだん	冊	1	
103	恋娘昔八丈	鈴ヶ森之段	冊	1	
104	恋娘昔八丈	鈴ヶ森乃段	冊	1	
苺萱 (石童丸)					
105	筑紫湯苺萱双紙	大内義弘館之段 重氏館朋珠取之段	冊	1	
106	高野山	苺萱石童丸 すりちがいの段 第一号	冊	1	
107	苺萱	高野山札書段 石童丸	冊	1	
108	高野山すみ染衣	苺萱札書之段 石童丸一號	冊	1	
109	高野山	苺萱札書 石童丸 二號	冊	1	
110	高野山黒染桜	石童丸 衣掛之段	冊	1	
基太平記白石晰					
111	基太平記白石晰	七ッ目 新吉原の段	冊	1	
112	基太平記白石晰	新吉原の段	冊	1	
子敦盛					
113	一ノ谷 子敦盛	子捨の段	綴	1	173 と合本
114	法道丸 児鏡篋の片割	子敦盛 子捨之段	冊	1	
115	一ノ谷 子敦盛	子捨の段	冊	1	
116	法道丸 子敦盛雅硯	説法段	冊	1	
117	小敦盛初鏡 正人	物語の段	冊	1	
118	一ノ谷軍記子敦盛雅鏡	法道丸 拾上之段	冊	1	
119	児鏡篋の片割 子敦盛	道行の段 子捨の段	冊	1	
120	(子敦盛)	法童丸夢の段	冊	1	
121	子敦盛	法童丸夢の段	冊	1	
122	(子敦盛)		冊	1	
佐倉義民伝 (佐倉惣 (宗) 吾伝)					
123	佐倉儀勇伝	甚兵衛渡し場	冊	1	
124	佐倉儀勇伝	甚兵衛渡場段	冊	1	
125	佐倉宗吾	浅倉川渡場の段 子別れの段 栗田口の段	冊	1	
126	欠番				
127	(佐倉義民伝)	(甚兵衛渡し場の段)	冊	1	
128	宗吾	住家の段 子別れの段	冊	1	
129	浅倉当吾	子別の段	冊	1	
130	桜草語譚文	子別の段	冊	1	

番号	外題名	段(場)名	形態	数量	備考
216	無剣山梵鐘由来 小夜中山	離平内住家之段	冊	1	
217	(小夜中山無間山梵鐘由来)	二段 離平内八太郎殺之段	冊	1	
218	無剣山梵鐘由来	離平内八太郎殺之段	冊	1	
伽羅先代萩					
219	伽羅先代萩	千松殺の段	冊	1	
220	伽羅先代萩	御殿の段	冊	1	
八百屋お七					
221	八百屋お七	仕置の段	冊	1	
222	(八百屋お七)	江戸桜恋の柵 八百屋お七吟味の段	冊	1	
原題不明					
223	西行法師東下り	品川内段	v	1	
義経主従奥州落					
224	義経弁慶	弁慶安宅乃関入の段	冊	1	
225	義経主従奥州落	安宅関の段 勧進帳の段	冊	1	
226	義経奥州落	勧進帳之段	冊	1	
227	(義経主従奥州落)	勧進帳	冊	1	
228	(義経主従奥州落)	勧進帳	冊	1	
229	義経奥州落	勧進帳	冊	1	
230	義経主従奥■■■(州落)	庄司館の段	冊	1	
231	(義経主従奥州落)	(勧進帳)	冊	1	
232	一の谷軍記庄司館	義経主従対面の段	冊	1	
233	次信館物語り	義経対面之段	冊	1	
234	次信館物語り	義経対面之段	冊	1	
新作					
235	新館禅尼松姫物語	上 第三部 八王子城落城の段	冊	1	
236	新館禅尼松姫物語	上 第三部 八王子落城の段	冊	1	
237	松姫	案下川道行の場	冊	1	
238	日露開戦見聞実記	東京牛込 内田健次出兵の段	冊	1	
239	二宮尊徳先生		冊	1	
240	松五郎しぐれ	五幕	冊	1	
241	松五郎しぐれ	五幕全通し	冊	1	
242	新板(ママ)お笑い草 親爺と旦那物語	愚痴くらべの段	冊	1	
243	御祝儀三番叟		状	1	
244	御祝儀三番叟		冊	1	
245	御祝儀三番叟		冊	1	
246	御祝儀三番叟		冊	1	
247	五もく 出鱈目説経		冊	1	
248	身がわり仁儀(ママ)		冊	1	
249	女國定	二幕	冊	1	
250	子別三度笠	四幕	冊	1	
251	八王子三太郎婆三	江戸見物之段	冊	1	
252	奥多摩情話	つね泣峠	冊	1	
253	國定忠治信州落		冊	1	
254	北支事変	勇敢なる航空兵 中越戦死之段	冊	1	
255	棄児行		冊	1	
256	棄児行		冊	1	
257	棄児行		冊	1	
258	(おさく久作愛馬カゲとの別れ)		冊	1	
259	浄瑠璃十二段草子	二場 吹上の浜	冊	1	
260	浄瑠璃十二段草子	姫の道中	冊	1	
261	浄瑠璃十二段草子	四場 吹上の浜	冊	1	
262	浄瑠璃十二段草子	(一場～四場)	冊	1	
263	浄瑠璃十二段草子	第一場矢矧の里	冊	1	

番号	外題名	段(場)名	形態	数量	備考
170	御祝儀宝入船	弁財天の由来	冊	1	
171	御祝儀宝の入舟	弁財天の由来	冊	1	
竹生嶋弁財天御本地					
172	竹生嶋弁才御由来		冊	1	
173	竹生島弁才天	音曲祝島台	綴		113と合本
東海道中膝栗毛					
174	道中膝栗毛	赤坂並木の段	冊	1	
175	道中膝栗毛	喜太八 弥次郎兵衛 野寺之段	冊	1	
176	道中膝栗毛	赤坂並ノ段	冊	1	
177	道中膝栗毛	赤坂並木の段	冊	1	
日蓮上人一代記					
178	日蓮上人一代記	伊東流罪 日蓮日郎船別	冊	1	
179	日蓮聖人一代記	鎌倉辰之口之段 片瀬龍の口御難之場	冊	1	
180	日蓮上人一代記	七面山の段	冊	1	
181	日蓮上人一代記	七面山の段	冊	1	
182	日蓮一代記	勤作住家之段 経市身買(ママ)の場	冊	1	
183	日蓮記児現	勤作成佛乃段	冊	1	
184	(日蓮上人一代記)		冊	1	
185	日蓮聖人一代記	勤作成佛之段	冊	1	
186	日蓮記	勤作住家の段 経市身売の場	冊	1	
187	日蓮聖人御一代記	勤作成佛之段	冊	1	
188	日蓮記御一代	勤作住家の段 老母自害の場	冊	1	
箱根靈驗壁の仇討					
189	箱根靈驗壁仇討	銭別の段	冊	1	
190	(箱根靈驗壁仇討)	(小菊道切の段)	冊	1	
191	箱根山明石騒動	小菊道切之段	冊	1	
192	(箱根靈驗壁仇討)	第三場 小菊道切の段	冊	1	
193	(箱根靈驗壁仇討)	第二場 子菊道切乃段	冊	1	
播州皿屋敷					
194	幡(ママ)州皿屋敷	お菊殺の段	冊	1	
195	幡(ママ)州皿屋敷	お菊殺之段	冊	1	
196	播州皿屋敷之	欽山お菊殺之段	冊	1	
日高川入相花王(道成寺)					
197	日高川入合興	清姫道行之段	冊	1	
198	日高川入相花王	清姫道行之段	冊	1	
199	日高川入相桜	清姫道行場	冊	1	
200	日高川入相桜	清姫道行之場	冊	1	
201	日高川入相桜	清姫道行之段	冊	1	
202	日高川入相桜	清姫道行の場	冊	1	
203	日高川入相花王	清姫道行乃場	冊	1	
204	日高川入相花桜	清姫妖(ママ)妬之段	冊	1	
205	(日高川入相花王)	道成寺日高川の段	冊	1	
206	(日高川入相花王)	道成寺日高川	冊	1	
207	日高川		冊	1	
208	日高川	清姫道行	冊	1	
209	日高川入合桜	清姫道行之段	冊	1	
210	日高川入合桜	清姫道行之段	冊	1	
211	日高川入合桜	清姫道行段	冊	1	
212	日高川	(道行の段)	冊	1	
213	(日高川入相花王)	清姫渡し場の段	冊	1	
小夜中山無間山梵鐘由来					
214	小夜中山無間山梵鐘由来	熊鷹平内住家之段 八太郎殺シ山の段 女房狂乱の段	冊	1	
215	佐夜之中山譚 無間山梵鐘由来	離平内住家之段	冊	1	

二 八王子車人形演目一覧

以下西川古柳座で上演された主な演目を(一)古典的な演目、(二)新車人形のさきがけ、(三)記念的な作品に分けて解説する。古典とは江戸時代初演、およびその改作を示している。古典演目には八王子車人形が戦前から上演していたものと昭和四十年代以降に公演するようになったものとが含まれている。五代目西川古柳は西川古柳座説経本として残る演目を列挙し、「私の子どものころの記憶をたどると、山椒太夫(三莊太夫)親子対面の段・小栗判官の親子対面矢取りの段・信田妻の子別れの段・一番多かった日高川入相花王雨田堤より渡し場の段、このくらいだったと思われます」と述べた上で、近年上演するようになった演目も含めて「古典の演目」として扱っている「西川二〇二一 四頁」。以下、太字は五代目西川古柳への聞き取り(服部真理による)内容である。各演目ごとに聞き取りした内容であるが、他の演目にも共通する事柄も含まれている。本書口絵等で写真を掲載した演目については文章のみ掲載している。

(一) 古典的な演目

「三番叟」 さんばそう

能の「翁」を下敷きにした、五穀豊穡、天下泰平を祈る舞で、田植えを模した「揉みの段」と鈴を持って舞う「鈴の段」で構成される。舞台の幕開けに舞うことが多い。八王子車人形の場合は義太夫節の「寿式三番」をもとにして、「三人三番叟」や「五人三番叟」などにアレンジしたのもも演じられる。車人形の基本的な技術・型を網羅しているという演目で、入門はじめに修練する演目でもある。

全体の表現は文楽の三番叟をもとにしている。車人形の左手では扇を持つことができないので「鈴の段」は鈴のみで踊る。力強く直接足が地を踏むことができるのが、車人形ならではの表現である。その他「千載・翁・三番叟」の「千載」の代わりに「中の太夫」が演じるのも八王子車人形特有である。



写真7 三番叟 2012年12月8日 撮影 義太夫の地方とともに
に演じている。西川古柳座提供



写真9 三番叟人形



写真8 中の太夫 2017年11月5日撮影

「壺坂観音霊験記」 つばさかんのんれいげんき

「お里沢市」の通称で知られる義太夫節。大和国土佐町(現・奈良県高市郡高取町)に住む盲目の沢市と妻のお里は貧しいながらも夫婦睦まじく暮らしていたが、毎夜お里が家をあげることに気がついた沢市は他に男がいるのではないかと疑う。しかし、お里が壺坂の観音に自身の目の治癒を願掛けに通っていることを知り感動する。改

めて二人揃って壺坂寺に参詣すると、観音がその靈驗を顕し沢市の目が見えるようになる。

文楽の表現をもとにして、三人遣いでないと出来ない表現も右手と弓手で形を作っている。山の上での表現は、初期にはろくろ車を使っていたが、今はろくろ車を使わず、足遣いが入り、二人で遣っている。三味線の左手も（車人形では）自由に遣えないので、二人遣いになっている。



写真10 壺坂観音靈驗記 2015年3月29日 保戸塚時久撮影

「東海道中膝栗毛」 とうかいどうちゅうひざくりげ

弥次さん喜多さんの珍道中で有名な、十返舎一九の滑稽本を元にした演目。車人形では義太夫節、説経節で演じられる。近年は、弥次さんが狐のお面をつけて喜多さんを脅してからかう「赤坂並木の段」、墓場を通りがかった子どもを化物と間違えて殴ってしまい、その親父に気絶させられ身ぐるみ剥がれてしまう。目覚めた弥次さんは自分は死んだと思い込み供養してもらうために寺へ向かう「卵塔場の段」の上演が多い。説経節には義太夫にはない多摩地域の戯れ歌が取り入れられているのが特徴。

新内浄瑠璃で遣ったのが最初で、その後説経節、義太夫とも遣った。「古寺の段」からの台本は義太夫のみである。演出的には他の芝居と変わらない。（説経節の「東海道中膝栗毛」は子供の頃の記憶にない）振りは三人遣いから取り入れた。（口絵参照）

「日高川入相花王」 ひだかがわいりあいざくら

和歌山道成寺に伝わる安珍清姫の伝説を下敷きにした浄瑠璃。八王子車人形では義太夫節、説経節で演じられる。五段のうち、四段目の「渡し場の段」の上演が多い。恋い慕う安珍を追って日高川についた清姫が、船頭に舟を出すことを拒まれて、川を泳いで渡ろうと日高川に飛び込む。恨みの念が固まって、ついに清姫は大蛇と化し、川を越えて道成寺へと向かう。車人形では、清姫が鬼になるところで、ガブを使うときと、振り返りのカシラを使うときがある。

初期は「雨田堤」と「渡し場」のみで、昔から八王子車人形の十八番だった。エピソードとしては三人の人形遣いで全部演じたことがある。（清姫が大蛇に変身する際の首に）「ガブ」ではなく「振り返し」を使う点は八王子車人形独特である。（ろくろ車の）動きゆえに川に飛び込めない。後ろの川に飛び込むのが車人形ならではの演技である。（他の人形芝居では）棒杭の向こうに飛び降りる。



写真12 清姫



写真13 清姫（蛇）



写真11 日高川入相花王 2019年11月10日

「傾城阿波の鳴門」
けいせいあわのなると



写真14 旅人



写真15 船頭



写真16 傾城阿波鳴門 西川古柳座提供

義太夫節。阿波の家老櫻井主膳は盗まれた主君の刀を、家来の十郎兵衛に探せと命じる。十郎兵衛は幼い娘を母に預け、妻のお弓と探索の旅に出て盗賊に身をやつす。車人形では八段目の「巡礼の段」のみが演じられる。ある日大坂の隠れ家に子どもの巡礼が訪れる。それは国元に残してきた娘のお鶴だった。お弓はお鶴を家に入れて休ませるが、盗賊の罪が娘に及ぶことを恐れて、父母に会いたいと切なる身の上を語るお鶴に母と名乗れず国へ帰れと家から送り出す。

昔は説経節とやっていたみたいだが、自分は記憶がない。今は新内と義太夫と演じている。普通の全国の義太夫の芝居と同じである。古典は決まっている形がある。説経節とやらなくなって復活したときには義太夫で演じた。自分は説経節の振りは分らない。義太夫の振りは、吉田文昇さんより先代が習ったものである。「日高川入相花王」「壺坂観音霊験記」も文昇さんから習ったと思う。文昇さんから習ったのはこの三演目だと思う。

「生写朝顔話」
しょううつしあさがおばなし

通称「朝顔日記」。車人形では四段目の「宿屋」から「大井川」の部分が演じられる。宇治の蛭狩りで出会った阿曾次郎と深雪は互いに恋い慕う仲となるが、阿曾次郎は仕官し、駒沢次郎左衛門と名を改めて下向する。その後、親のすすめる縁談を嫌い故郷を捨てた深雪は様々な苦労と悲しみで盲目になってしまふ。次郎左衛門は島田宿で「朝顔」と名を改めた深雪に再会するが、事情があつて名乗ることができない。深雪が琴を弾く場面は車人形では難しい所作で遣い手の技量が問われる。

三人遣いの振りを取り入れた。動きは三人遣いと同じだが、琴を弾くところで車人形では左手で琴を押さえるところは自由に遣えない。

「新抄 小栗判官物語」
しんしょう おぐりはんぐんものがたり

古説経の時代から「をぐり」の名で知られる、小栗判官の物語。「小栗判官一代記」の外題で演じられることもある。流刑の身となった小栗は横山殿の娘照手姫の押入婿となるが、それをよく思わない横山殿に毒をもられ命を



写真17 朝顔日記 2019年11月撮影



写真18 小栗判官一代記 2017年11月5日 保戸塚時久撮影

落とす。しかし餓鬼阿弥となって生き返り、やがて熊野権現の功德で元の姿に戻る。京都へ戻り両親と再会、照手とも再び結ばれて子孫はめでたく富み栄える。車人形では平成七（一九九五）年に国立劇場の西角井正大氏によって「小栗判官物語抄 恋の因縁曲馬の巻（鬼鹿毛の段）」が書き下ろされ、翌年の五代目古柳襲名披露公演では更に書き改められて「押入婿の段」から「曲馬の段」までが義太夫節と説経節で交互に演ずる形式で上演された。小栗の物語はほかに、復活した小栗が両親と再会する「矢取りの段」が演じられる。

説経節を義太夫に変えたものもある。説経節でも上演する。子ども頃と同じ振りを取り入れている。義太夫で上演するときも同じ振りを取り入れている。矢を取るところは独特だが、昔から同じで新しくしたところはない。

「山椒太夫」 さんしょうだゆう

説経節の古くからの代表演目で「五説経」の一つ。「安寿と厨子王」のタイトルでも知られる物語。岩城判官正（政）氏の妻と二人の子ども、安寿姫と厨子王（対王）丸は、人買いに騙されて離れ離れになってしまう。安寿と厨子王は山椒（三庄、三莊とも）太夫に売られ、奴隸として酷使される。安寿は厨子王を山椒太夫のもとから脱走させたため殺されてしまうが、厨子王は神仏の加護を得て生き延び、やがて出世して佐渡で盲目になって鳥追いをする母と再会する。最近はやっていないが、昔からのものはそのままの形で残っていないという意味がない。ずっと受け継いできている。

「葛の葉」 くすのは

安倍晴明の母が狐であるという伝説を元にした物語で、説経節で

は「信田妻」、義太夫節では「蘆屋道満大内鑑」、地歌や常磐津では「葛の葉」のタイトルで知られる。八王子車人形では説経、義太夫、新内で演じられる。正体が露見した狐葛の葉が別れの歌を障子に書き残して古巣に帰っていく「子別れの段（乱菊、初葛とも）」、母を恋しがって泣く童子（後の安倍晴明）を連れ、保名葛の葉夫婦が狐葛の葉を訪ね、狐葛の葉は乳など与えるが、最後に白狐の正体を見せ、二度と会わないと姿を消す「二度子別れの段（二度葛）」が上演される。

ずっと説経節でやってきて説経節が絶えたときに義太夫に切り替えた。障子に字を書くところは車人形としては新しい形だが、他はほとんど昔からの振りを生かしてやっている。写真が残っている昭和五（一九三〇）年の横浜会館での上演写真も今と同じような舞台で、変わっていない。幕は昔はなかったが、義太夫を取り入れた時に「乱菊」の幕は作った。説経節と公演する時は今でも使っていない。説経節のときの（信田の森の）場面に、竹を差したりすることはあるが、およそ変わっていない。昔は藪をかいだ絵（大道具）はなかったので変わりに笹を差していた。（第三章第三節写真参照）



写真21 狐葛の葉



写真20 葛の葉姫



写真23 狐葛の葉振り返し(狐)



写真22 狐葛の葉振り返し(葛の葉)



写真19 阿部保名

いちのたにふたばぐんき
「一谷嫩軍記」

「平家物語」「源平盛衰記」を題材にとり、一ノ谷の合戦で熊谷次郎直実が平敦盛を討ち取る場面を中心に描かれる。八王子車人形では説経節を下敷きに、西角井正大氏が義太夫の節付けで書き改めた「盛俊注進の段」（盛俊が清盛の弟経盛に安德帝と三種の神器を守護して落ち延びるように注進に来る場面から、敦盛が妻其尾と今生の別れを惜しむ場面まで）が昭和六十一年（一九八六）年に国立小劇場で初演されたほか、琵琶の弾き語りによる「敦盛の最期」（西角井正大氏の制作・演出）といった派生作品がある。

最初にやったときは、平家琵琶との上演である。その後、義太夫ともやったが、振りは三人遣いの振りを取り入れた。左手を遣うところや空中に浮くところは車人形の振りに切り替えた。三人遣いでは左手で物を持つところは車人形では持てないので右手で持つことにしたり、左手で作る振りができないので右手にしたり、間が合わない（前後の）間に合わせたりした。全体の半分くらいは車人形の振りである。（説経本の中に『一谷嫩軍記』も残されていることについて）説経節でもあったのかもしれないが、記憶にはない。馬が出てくるが、馬は残されていなかった。違う場面だったのかもしれない。組打ちだったのかは分からない。



写真24
一谷嫩軍記 西川古柳座提供



写真25 一谷嫩軍記 西川古柳座提供

そうご じんべえ
「宗吾と甚兵衛」

木内惣五郎の將軍直訴伝説を元にした「佐倉義民伝」を下敷きに、四代目西川古柳が脚色した。江戸から帰郷した宗吾は、印旛沼吉高の渡しで渡守の甚兵衛に村の窮乏を聞き、村人を救うためには將軍に直訴するしかないという決意を固める。死を覚悟した宗吾は妻や子に別れを告げるため我が家に戻ろうとするが、舟は役人によって鎖をかけられ渡すことができない。しかし宗吾の決意を聞いた甚兵衛は鎖を断ち切り、舟を出す。この作品で古柳座は平成五年度芸術祭賞（演芸部門）を受賞した。

昔は説経節とやっていた。もともとは説経節があつて、その後、先代が浪曲で取り入れて、その後義太夫でも新内浄瑠璃でも同じ場面をやるようになった。昔の振りを使っているところもある。音楽が違ふと間も異なるので振りの全てが以前のものと同じではない。説経節も義太夫も新内も全部間も異なり、言葉も異なる。全体の流れは同じだが、振りは違ってくる。昨年の襲名披露公演の時の上演も流れは伝承されてきたものを引き継いでいる。



写真26 宗吾と甚兵衛 2018年12月15日
保戸塚時久撮影

だてむすめこいのひがのこ
「伊達娘恋緋鹿子」

天和三（一六八三）年に放火の罪で処刑された「八百屋お七」の物語を下敷きにした義太夫節。主家のために行方知れずの剣を探

している吉三郎。彼と恋仲のお七は万屋武兵衛がこの剣を持っていることを知り、死刑を覚悟で夜中禁制の火の見櫓の半鐘を打って木戸を開かせ、女中に盗ませた剣を持って吉三郎の元へ向かう。文楽では半鐘を打つが、車人形では太鼓を打つ。「八百屋お七」のタイトルでも上演される。

説経節で上演していた時にはなかった演目で、義太夫と初めて上演した。櫓の登り方も三人遣いと同じである。

「景事団子売」 けいじだんごうり

団子売の杵造とお臼夫婦が屋台を担いで登場し、町角に臼を据えて歌い囃しながら餅をつく。景事は義太夫節で劇的なストーリー性より節回しを中心にして短く場面を見せる舞踊劇で、八王子車人形では新車人形の操法で行われる小品。正月などのおめでたい場面で演じられる。近年は若手が舞うことも多い。

説経節で上演していた時にはなかった。三人遣いの振りを取り入れている。車人形では「後振り」がうまくできないので、変えた。日本舞踊の人が振付をしたので、文楽の



写真28 景事団子売 2018年8月25日撮影



写真27 伊達娘恋絆鹿子 2017年5月14日 保戸塚時久撮影

振りとは違うところもある。三人遣いでも同様に舞台の奥行を生かすことが出来る。三人遣いでは蹴込みをどこに持ってくるかが問題となる。土の部分と家の部分を分けている。人形遣いが半分隠れるので見易い。三人遣いでは主遣いがいくらか広く三步で歩いて、(人形の)足は一步で行けるという振りもある。車人形はダイナミックと言われるが、三人遣いもダイナミックである。

「出世景清一代記」 しゅっせけいけいいちだいぎ

平家の武将悪七兵衛景清は早くから伝説化し、謡曲「景清」「大仏供養」、幸若舞「景清」などの題材となっており「景清物」として一系統をなしている。近松門左衛門作の「出世景清」は新しい演劇的な浄瑠璃のはじまりと言われる作品。車人形では説経節、義太夫節で演じられる。「出世景清」「景清大仏殿記」などのタイトルがある。平家の落武者景清は東大寺の大仏供養に向いた源頼朝を殺そうとして捕らえられる。頼朝は景清に源氏に仕えるように勧める。景清は拒絶するが、己の目が開いているゆえに頼朝を付け狙うのだと、自ら両目を抉って恨みの念を振り払い、日向国へ下っていく。平成十(一九九八)年に四代目古柳より八王子市に寄贈された「自由」の人形を使って上演されたこともある。

昔から演じられてきた。説経節しか上演しないので昔のままの振りである。新しい演技はない。自由の衣裳を用いる点も同じ。衣裳は新しくしている部分もある。今でも上演することもある。



写真29 出世景清一代記 2012年12月9日 保戸塚時久撮影

(二) 新車人形のさきがけ

洋舞

新車人形の操法で演じる舞踊。昭和五十六（一九八二）年の中南米公演の際に初めて披露された。乙女文楽の手法を取り入れ、人形の左手を遣い手の左手で扱えるようにし、首・足・手がリズムカルに動けるように工夫している。

メキシコでカーテンコールの代わりにやったのが上演のきっかけである。ここで両手遣いが始まった。足も踏めるし、車人形でなければできない特徴がある。



写真30 洋舞 2018年4月7日撮影



写真31 洋舞人形

(三) 記念的な作品

「野ざらし」

落語とのコラボレーションに挑んだ作品。浅草の貧乏長屋に住む清十郎は向島に釣りにでかけ、野ざらしのどくろを見つけたので酒を注いで一句を手向け供養してやる。するとその夜美人の幽霊が成仏できたと礼にやってくる。話を聞いた大工の八五郎は自分も真似をして向島に出向き、見つけたどくろに片っ端から酒を掛けて帰る。彼の独り言を蔑みで聞いていた幫間が夜中八五郎の元へ押しかけて……。

正式に五代目西川古柳が作った落語芝居の最初の作品。太夫さんの代わりに落語でやるというアイデアとうことで始まった。一人遣いなので、落語の早いテンポの動きについていけるということで始まった。

「新内さだめ」

踊り物として初めてオリジナルの新内節で車人形を遣った記念的作品。女形を得意とした四代目西川古柳が五代目に古柳の名跡を譲り、柳峰と名乗るにあたって自ら作詞、鶴賀伊勢太夫（当時。現・十一代目鶴賀若狭掾）の節付けで作られ、襲名披露公演で初演された。



写真32 野ざらし 2008年11月16日 保戸塚時久撮影
八王子芸術文化会館

「昔風の女性の姿。女心の哀しみを表現できたら」と四代目のことば。

襲名のときに、新内鶴賀若狭掾が作曲し、四代目西川古柳が作詞、振付をした。独特で、四代目西川古柳でなければできなかった。そのまま引き継ぐことはせず、五代目西川古柳の振り付けをした。心情をいかに演技するかということだが、雰囲気はどうしても遣えないので封印した。人生を知らない踊れない踊りである。その時が来ないと、今は（上演）する気になれないので、封印中である。

「シャンクス・メイアー」

八王子車人形とアメリカの人形遣いトム・リー氏のコラボレーションによる作品。「生と死」「人生の旅」「物事の伝承」とは何かをテーマに、誇り高い剣豪と、年老いた天文学者、二人の主人公がそれぞれ終焉へと向かっていく物語が並行して展開する。現代の映像技術と伝統的な人形芝居の融合が高い評価を得て、二〇一六年ザ・アーリン・アワードの人形劇部門優秀デザイン賞を受賞した。

新しい車人形の未来の形ということと外国の人と始めた。それまでにも色々やって



写真34 シャンクス・メイアー 2016年
8月3日 保戸塚時久撮影



写真33 新内さだめ 2012年12月9日 保戸塚時久撮影

いたが、形として実ったのはこの作品である。チェロ、ヴァイオリン、洋楽器とやったり、『蝶々夫人』（オペラ）をやったり、車人形はいろいろやってきたが、本当にがつぶり四つに組んで作った最初の作品である。次の世代のための第一歩の作品。

「やさしい柿の木」

シルヴァースタイン作の童話「おおきな木」を日本の昔話とし脚色した作品を芝居化した。子ども向けの作品として初めて作られた演目であり、車人形では珍しい一人芝居でもある。子ども好きの一本の柿の木の元へ、一人の少年がやってくる。柿の木は実や枝



写真35 やさしい柿の木 西川古柳座提供

を少年が望むまま、惜しげなく与えてとうとう切り株だけになってしまふ。見返りを求めない無償の愛を伝える作品。

子どもたちに見せる芝居をと考えて童話から選んで作ったが、結局大人の芝居になってしまった。（作詞は五代目西川古柳ではない。）瞽女唄（ごぜうた）から原千恵子氏が作曲した。八王子高校の生徒が上演したり、稽古場公演、国立劇場公演、札幌でも公演したが、最近はやっていない。

源氏物語「夕顔」

メトロポリタン美術館での「源氏物語展」（二〇一九年）開催にあたって、現地で初演された。

もともと、新内と上演したことはあり、義太夫とメトロポリタン美術館、アメリカ各地で上演した。源氏物語はあまり芝居にならないが、さらっとした一番芝居になるところを演じた。何と言っているのか分からない。

「傾城恋飛脚」 けいせいこひぎやく

五代目西川柳玉襲名公演の際に初演。近松門左衛門の「冥途の飛脚」の改作。義太夫節浄瑠璃でも有名な「新口村の段」を車人形に取り入れた。大坂淡路町の飛脚問屋「亀屋」の養子忠兵衛は遊女梅川に夢中になり、見請けのために預かった公金三〇〇両の封印切りの大罪を犯してしまう。二人は駆け落ちし忠兵衛の実父が住む新口村に逃れるが、そこにも追手がかる。

もともと、札幌で教えていた。新しく衣裳をつけて、車人形では初めて上演した。三人遣いの形を取り入れている。歌舞伎の雰囲気も文楽の雰囲気もそれほど変わらないが、足がついているので、歌舞伎の雰囲気は少し取り入れた。車人形は足が（地に）付いているので、歌舞伎の雰囲気を参考にすることもある。



写真36 傾城恋飛脚 新口の段 2018年12月15日
保戸塚時久撮影

(四) 近年上演されている新作

「釣女」 つりおんな

狂言の「釣針」を常磐津節に移し、その後義太夫節にも移されて文楽でも上演されるようになったものを、車人形が取り入れた。良い嫁を得ようと西宮戎神社に願をかけ釣竿を振り、主人は見事美人を釣る。太郎冠者もあやかろうとするが、醜女しこめを釣ってしまう。

三人遣いの動きを取り入れた。醜女が強く太郎冠者が弱いところを強調して作っているのが車人形の特徴である。文楽とは違う振りをする。今遣っていない古い文楽の振りや歌舞伎も参考にしている。日本舞踊も取り入れたりする。



写真37 釣女 2015年7月5日 保戸塚時久撮影

「紺屋高尾」 こうやたかお

落語作品。染物屋の久蔵と当代一の花魁高尾太夫の純愛物語。車人形の特性を活かし、落語家が久蔵、高尾を人形が演じる、または久蔵を人形、高尾を八王子芸者衆が演じるなど、人と人形の共演が特徴。

落語芝居の第二段で、当初は人形でやっていたが、日本舞踊の人

が一緒にやりたいということ
で日本舞踊の人と一緒に作っ
た。初めて、人形だけでなく
舞踊の人と一緒に芝居を作っ
た。現在は八王子の芸者さん
と上演したりしている。落語
芝居の中では一番分かりやす
い。落語は話芸なのでいかに
表現していくかが落語芝居の
課題である。

「応挙幽霊」 おうきよのゆうれい

落語作品。美人画の幽霊が
酒につられて絵から出てき
て、唄を歌ったり酒盛りをし
た挙句……。人と人形のコ
ラボで演じられることもある。
もともとは落語芝居だった
が、現在では落語の芝居と新
内の師匠の作った芝居の両方
でやっている。幽霊なので、
完全に車を取ってしまい芝居
をしている。振りは独特であ
る。落語なのでもととの演
技がないので、幽霊らしさを
出している。



写真39 応挙幽霊 2017年8月25日 保戸塚時久撮影



写真38 紺屋高尾 2017年12月8日 保戸塚時久撮影

地唄舞「ゆき」

地唄の名曲で、邦楽の舞踊物として初めて車人形に取り入れられた演目。新車人形の操法で、細やかな動きを表現した。両手遣いで舞踊をきちつと作った。日本舞踊や地唄舞の振りを取り入れ、車人形ならではの部分も作った。地唄は動きが少ないので、車人形なりに動きを増やした。

「芝浜」 しばはま

大酒飲みの勝五郎。芝浜で
大金を拾って大喜び。これでは夫がだめになってしまうと
女房が一計を案じ……。三
遊亭圓朝作と言われる古典落
語の名作。車人形では新内節
で演じることもある。

落語でもやるし、新内浄瑠
璃ともやる。新作歌舞伎にも
あるので、参考にした。

「スーホの白い馬」

モンゴルの伝統楽器「馬頭琴」の成り立ちにまつわるモンゴルの
民話。日本には絵本で紹介された。馬頭琴と共演する車人形の演目。
馬頭琴の人からお話をいただき、作った。人形はスーホのみで、
馬はプロジェクターで漫画の絵にして、少しずつ紙芝居的に動くよ



写真40 芝浜 2017年8月25日 保戸塚時久撮影

うにして人形とのコラボが楽しめるようにした。競争のところだけは、実際の馬も作り、一人芝居的にできるようにした。

「身代座禪」 みがわりざぜん

狂言「花子」を元にした常磐津節。ある男が奥方に「一晚籠って座禪をする」と言って太郎冠者に身代わりをさせ、自分は傾城花子に会いに行く。しかし奥方にバレてしまい……。

釣女と同様に、常盤津と長唄との掛け合いでやるものだが、この間（平成三十（二〇一八）年）は常盤津とやった。新しい釣女に代るものとしてチャレンジした。かつぎを被って御堂を表すのは、歌舞伎の演出。文楽とか人形芝居であれば、御堂のセットを作るのだろうが、狂言は大きなセットを出さないの、そのやり方を取っている。



写真42 身替座禪 2018年3月16日 保戸塚時久撮影



写真41 スーホの白い馬 保戸塚時久撮影

「耳なし芳一」 ほういち

小泉八雲作の有名な「耳なし芳一」を車人形のために常磐津八重太夫が常磐津節に作詞作曲し、平成三十（二〇一八）年に披露された。

義太夫と琵琶の掛け合いの作品があつた。その後、琵琶でも常盤津の新作でもやった。芳一自身が影絵で、さむらいとお坊さんだけが出てくる。ここが特徴かもしれない。

「本朝廿四孝」 ほんちょうにじゅうしこう

義太夫節時代物五段のうち、四段目の部分を「狐火」として常磐津節に取り入れた作品。八重垣姫が許嫁の武田勝頼に危険を知らせようと、諏訪明神に祈り、神狐に助けられて氷の諏訪湖を渡っている。

他の所で教えていたので車人形でもやってみた。三人遣いの振りを取り入れた。二人遣い（主遣いと足遣い）の振りも取り入れている。



写真43 耳なし芳一 保戸塚時久撮影



写真44 本朝廿四孝 奥庭狐火の段 2018年3月16日 保戸塚時久撮影

【鷺娘】
さぎむすめ

乙女文楽の演目を車人形に取り入れた舞踊物。白鷺の化身の娘が舞い踊り最後は空の彼方へ飛び去っていく。

新車人形で、長唄の曲を遣っている。「ゆき」は地唄であるが、これは長唄。日本舞踊の振りを取り入れている。

【鰻沢】
かじかざわ

三遊亭圓朝作の三題噺を車人形のため新内節に仕立てた作品。雪道に迷って一夜の宿を求めた新助。その家の女房お熊は新助に痺れ薬を飲ませ、財布を奪おうとするが……。

落語のものだったが、新内の若狭掾が作ったので、人形と女優さんとの掛け合いのように作った。



写真45 鷺娘 2017年5月14日 保戸塚時久撮影



写真49 現在使用されている台本が保管されている。



写真47-1 「伊達娘恋緋鹿子」
台本 五代目西川古柳使用



写真46 義太夫「日高川入相花王」
台本 四代目西川古柳使用 文楽の吉田文昇の指導内容が書き込まれている。

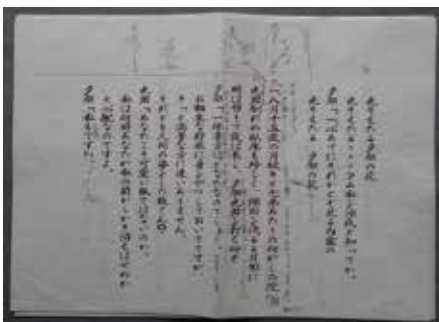


写真48 「源氏物語 夕顔」台本 五代目西川古柳使用

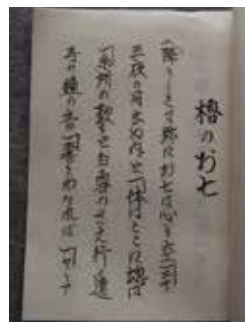


写真47-2 「伊達娘恋緋鹿子」
台本冒頭

補足資料（西川古柳座所蔵昭和四十年代以降の台本）

（執筆者 河津 美穂子）

第五節

八王子車人形の舞台・公演場所

はじめに

八王子車人形西川古柳座の歴史を把握する際、主として説経節の地語り^{じがた}とともに上演していた初期（昭和四十年代まで）と義太夫節他を地語りとするようになった現在（昭和四十年代以降）に分けられる。初期とは、初代西川古柳から三代目まで、現在とは四代目西川古柳と現在の家元である五代目西川古柳が活躍している時期である。八王子車人形は、初期から現在に至るまで、地元八王子と都心双方の様々な場所で演じられてきたが、それらは、公の会場や学校など、民家、屋外の舞台、に大別される。初期と現在で変化した点は、現在では海外で上演するようになったこと^①、民家や寺社等の祭礼での公演が見られなくなったことが挙げられる。本節では、一で文献等に残された記録から初期（昭和四十年代まで）の舞台の様子を辿り、二で現在公演されている舞台の現状を記録したい。

一 初期（昭和四十年代まで）の

八王子車人形の舞台・公演場所の記録

（一）公の会場

1 貸席

車人形に関する明治時代の新聞記事に、明治四十五（一九一二）年の吉田冠十郎に関するものがある。吉田冠十郎は江戸の名残りの最後の人形遣いといわれ「三田村鳶魚 一九九九 一七一頁」、八王子の車人形には、明治時代後半と、大正末から昭和初期との二回関わっている^②。これを仮に前期と後期とすると、新聞記事は、前期の吉田冠十郎に関するものであり、現在の八王子車人形に直接繋がる二代目西川古柳が吉田冠十郎と興行を共にするのは後期である。

嫌な芸人根性 車人形の吉田冠十郎も此頃は貸席で素人義太夫などの相手になっているが「床の太夫からふんだんに頂戴するから客の頭を算^{かぞ}へる心配もなく暢気^{いさぎ}です」となんぼ綽名^{いざなり}が甞でも餘りひつ腰がなさ過ぎる。「明治四十五年一月二十九日朝日新聞演芸風聞録より」

この記事からは、人形遣いは吉田冠十郎、語り手は、素人義太夫⁽³⁾で「貸席」で車人形が演じられていたことがわかる。貸席とは、明治時代に盛業していた商売であって、歓送迎会や舞踊邦楽の会などに大広間や小座敷を貸し出していた「仲田 一九六九 一五九頁」。

2 関川座(八王子市)

昭和十二(一九三七)年六月二十九日の東京日日新聞府下版に、明治二十五(一八九二)年関川座での車人形の公演のチラシについて書かれた記事がみられる。

「車人形」の名の起り 郷土史家に面白い研究題目

八王子の郷土芸術「車人形」は最近郷土研究の波にのってラジオその他でひろく紹介され、またわが国純粹の芸術として研究の対象となっているが、このほど車人形がその全盛時代には「面仕立両足人形」と呼ばれていたことが判明し郷土芸術研究家の注目をひいている すなわち最近八市追分町小川森太郎氏が古文書を整理中明治二十五年十月関川座(現在の関谷座)で公演された際の「チラシ」を発見したが、それによると現在の車人形は面仕立両足人形と呼ばれていたというのである この興味ある発見に関して残された問題は車人形の名称は果して何時の時代から起ったかであるが、市史編纂会佐藤孝太郎氏の手によってこの新しい研究を進めることになっている「東京日日新聞 府下版 昭和十二年六月二十九日」。

「関川座」についての詳細は不明であるが、明治二十五年の『八王子明覧』に、「劇場」として「関谷座 清水座」、「寄席」として「関川亭 鳶金亭 長谷川亭」と書かれている「梅沢 一九六三 一〇頁」。

関川亭は、明治三十(一八八七)年四月二十二日の八王子大火によって焼失した「八王子事典の会 二〇〇一 四一三頁」。引用した新聞記事でふれられているチラシは八王子市郷土資料館では保管されていない。

3 関谷座(八王子市本町)

本頁に示した関川座に関する新聞記事中に「現在の関谷座」と記された「関谷座」【写真1】は、明治二十(一八七七)年頃に本町に開場された、多摩地域でも先駆的な劇場で、八王子大火で焼失したのち、大正五(一九一六)年に再建した「八王子市郷土資料館だより 一〇一 号二〇一七七」。昭和十三(一九三八)年閉館後、東宝映画劇場となった⁽¹⁾。

関谷座での車人形の舞台の様子は、昭和十二(一九三七)年『八王子郷土読本 前編』(八王子市教育会編集 八王子郷土読本刊行会発行)に次のように記されている【写真2】。



写真1 関谷座開場式 1916年 八王子市郷土資料館所蔵



写真2 「八王子郷土読本(1937年)」より 新藤恵久所蔵

第十六 車人形

「今日関谷座に車人形があるそうだから見に行こうか。」とお父さんがおっしゃったので私は「おさらいをすませてから一しよに連れて行ってください。」とお頼みしました。

夕飯をすませてからお父さんと関谷座へ行きました。入口にはもう下足が沢山掛けてありました。見物席に坐って少し待っていますと、拍子木の音がして「御祝儀三番叟」が始まるのでした。

幕があくと舞台には袴を着けた人が二人いて、一人は少し高いところに三味線を持ち、一人は舞台の真中に高さ一米ぐらいの三番叟の人形を持っていました。三味線の音がしはじめると、人形つかいは舞台の上をすべるように動いて、それと一しよに人形も自由自在に踊りました。三番叟が終り次の幕があいて三味線ひきの隣に同じ袴を着け前に見台を置いた人がいて語りはじめると、黒い着物を着て黒頭巾を顔までかぶった人が人形を踊らせはじめました。人形は眉も眼玉も首も手足も自由に動かしますので、役者の芝居を見ているような心持になって「人形がよくもあんなに動くものだ。」と感心しました。お父さんは「あの語っているのは説教浄瑠璃といい、人形は車人形というので、天保の頃埼玉県入間郡の西川古柳という人が昔からあった説教人形芝居に工夫を加え、人形つかいの腰掛を車仕掛にして自由に動けるようにしたのだ。車人形というのは其の車仕掛のことから来た名前です。八王子を中心にした多摩川沿岸の地方に残っているばかりで大そう珍しいものだ。」とお話しになりました。

私の見たのは「道中膝栗毛赤坂並木之段」「一谷嫩軍記盛俊注進之段」というのでありましたが、人形が幾つも出て踊り大

そう面白く思いました。

「まだあるようだが余りおそくならないうちに帰ろう。」とおっしゃったのでお父さんと一しよに帰りました『八王子郷土読本』前編 六五～六九頁。

郷土史家の新藤恵久（一九二七～）は、子供のころ関谷座で車人形を見た思い出を語っている。説経節の声が子供には退屈だったこと、「おせんにキャラメル、アンパンにラムネ」という物売りの声や地下で梨を売っていたことなどが記憶にあるという。⁽⁵⁾

4 その他の公演会場

昭和初期に後の二代目西川古柳と興行した吉田冠次郎⁽⁶⁾（丹沢秀）は、吉田冠十郎との千葉の歌舞伎座の興行で、「朝顔日記」の朝顔を演じ、花道から舞台に出て行ったことや、三番叟のあるところでは「一足多くもすけなくも踏むことを許されない」が、他のところは「舞台の広さで適当にやればいい」といわれていたことを語っている「落合一九五九六～七頁」。

また、学校を会場とした公演も記録されている。美術史学者金原省吾は、『美の表現について』の中で昭和十八（一九四三）年に八王子中学（現八王子学園八王子中学校・高等学校）で見た車人形の芸が細かく、目、眉、口も動いたことを記している「金原 一九四三 一四四～一四五頁」。昭和十八（一九四三）年四月二十六日に第三国民学校講堂（寺町、現八王子市立第三小学校）においても、講演会の余興として八王子車人形が演じられている。⁽⁷⁾

その他、戦前、八王子車人形は八王子の織物の宣伝に関連した興行であった例も多かった。⁽⁸⁾

(二) 民家での公演

1 二間を使って公演する例

車人形は個人宅でも上演されていた。

河竹繁俊は、大正十三（一九二四）年大横町の機業家平音次郎宅での六畳と八畳の座敷の二間続きの舞台の様子を記録している「河竹一九四六二三一頁」。この時の上演者と二代目西川古柳は、後に興行を共にするようになる「はちおうじ車人形研究会一九九六六一頁」。

河竹繁俊はこの日の上演について「車人形を三番ばかり見せてくれ、寫し繪も番外に見せてくれたと思ふ」と記している⁹⁾。「河竹一九四九二三二頁」。

平音次郎は八王子車人形の支援者であり、後に自宅に舞台も設けている¹⁰⁾。昭和三（一九二八）年に日高只一は、平音次郎宅での舞台の様子として「階下八畳二間を打つ通して、その一壇にわか作りの、入口一間許りの舞台が設へてある（後略）」と記している「日高一九二八」。このときの興行の様子は「演技者の中には、それより、三里の田舎道を車を曳いて帰ろうという人もあった」と記録されている「民俗藝術の會一九二八五八頁」。当時の人形遣いの興行時の道具の運搬に関しては、後に四代目西川古柳も次のように語っている。「十歳ごろに藤沢のほうへつれていってもらったことが一番の思い出です。昭和八年だったと思います。三泊四日で藤沢でやったときです。戦争中はよくリヤカーに荷物を積んで運んで行った」¹¹⁾「多摩文化研究会一九六八三頁」。

小田内通久は、「八王子車人形について」『民俗藝術』一一五の中

で、民家で上演された車人形について記している。

図は今年一月、自分がこの人形芝居を調べに行ったとき、南多摩郡横山村の農家丹沢彦太郎氏（浜尾太夫）の宅で演じられたもので、民家を利用した場合の一例である。南向きの表八畳を、黒幕で舞台と楽屋とに仕切り、舞台の上は、厚板張物板などをを用いるのを張り、舞台と楽屋との境の幕へ背景を、両袖へは見切を下げた。

この背景と両袖の見切は布や紙へ泥絵具で在来の芝居の張物と同様にいろいろな絵を描いて用いたが、有り合せの襖や障子をそのまま用いることもあるという。太夫は舞台の上手より、ビールの空箱を重ねて作ったユカの上、毛布を敷いて座を構へるなど、この人形芝居の簡易に行われる事がよく分ると思う。

出演の太夫さんや人形遣いなども、見物と同じ様に、全然素人で、演る方も、みる方も一つになって楽しんでる所に、郷土芸術ならではの、味わへぬ妙味がある。お納戸は出演者の控室件仕度室で、手前の八畳と土間、それから、庭に面した縁側の一部が見物席に当てられてた。農家の土間は非常に広いので、三、四十人位は楽に入れる。これに座敷や縁側などを合わせる、楽に五、六十人の見物を収容する事が出来るから、車人形は各地の寄席や芝居小屋で興行される外に、こうした家庭内の小演芸場―小劇場に拠って至る所に演じられ、農村の人々を充分に娯ませることが出来た「小田内一九二八五八―六〇頁」。



写真3 小田内通久が調査した民家を利用した舞台(『民俗藝術』1-5 453頁 転載)

この日の舞台は小田内通久によって作図され【図1】、二間の座敷に土間と縁側を加えて公演スペースとして利用したことが示されている。また公演の写真も併せて前掲の「八王子車人形について」に掲載されている【写真3】。

なお、この公演開催日は昭和三(一九二八)年一月六日で、撮影は「写真師市川」で、小田内通久の他、平音次郎、日高只一が観覧したことが記録されている(「多摩文化研究会一九六八―一八八頁」)

横山新地の民家の例は二間に土間と縁側を加えたスペースを利用している。

郷土史家渡辺嘉平(一九一七―二〇〇二)によって、昔の車

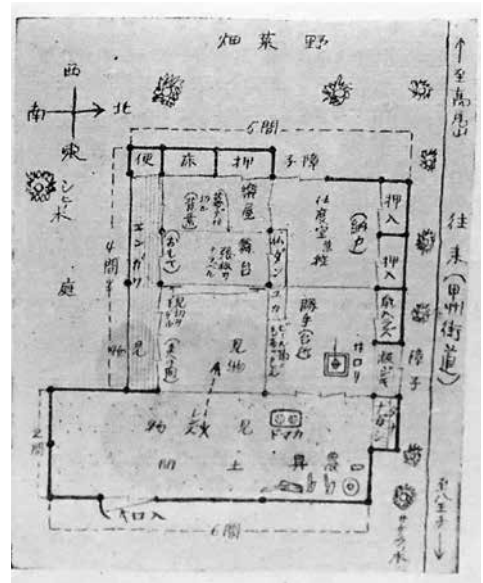


図1 小田内通久による民家を利用した舞台の図(『民俗藝術』1-5 453頁 転載)

人形公演の様子として、小田内通久の記録で示唆されていたような五、六十人の観客を収容した公演の様子が描かれている⁽¹⁾。小田内通久の調査した民家の例と同様の間取りで、二間が舞台と客席に使われている。縁側や庭先にも人があふれ、大盛況な様子が伺える【図2】。



図2 「八王子車人形」 渡辺嘉平 画 1980年頃
新藤恵久所蔵

昭和初期の民家での農村娯楽としての車人形興行の様子は、塩田真八も「大きな民家を借りて、車人形が興行され毎夜大入り満員の盛況だった。」と記録している(「塩田一九六八九〇頁」)。

画家鈴木信太郎(二八九五―一九八九)も、八王子南新町の自宅での車人形上演の様子を『アルト』十号に書いている。(この日の公演は「車人形出演日記」に(昭和)三年十二月九日 金拾五円也 八王子南新鈴木新太郎様方 座敷」と記録されている(「多摩文化研究会一九六八―二一五頁」)。

街の裏通りで埃ばい白い障子が並んだボロな二階屋である、ガランとした古家はそのまゝ、地で人形芝居の舞臺になる程だ。その二階の晝室にしてゐた八畳二間と小さい板の間と楽屋には、つゞいた六畳を使った。(中略)その前後舞臺にする踊り板を皆



写真4 車人形「赤坂並木の段」1937年『八王子郷土読本』のために撮影した写真

で借りて来て貰ふのに大變だったがその座敷の約三分の一に低い板を列べ畳四つ程の大きさの舞臺が出来た時は皆急に陽氣になつて了つた。(中略)人形師らもいつか来て幕を張り道具をつくり急ごしらえの立派な舞臺が三十分程で出来上つて仕舞つた。下つた幕の影に五十燭光がたゞ一つかくれ美しい照明となつて舞臺は俄かに奇しく華やかだつた。小さく一寸變つた世界になつて了つた。(中略)別な八畳は舞臺となり、別な八畳は見物席となり他の雨戸は閉し、こちらの電燈もぼつちりと明るく緊張して拍子木口上と共に漸く幕が上つたわけだ。(後略)〔鈴木一九二九三七～三八頁〕

2 縁側を中心とする例

昭和初期の車人形を撮影した写真(昭和十二(一九三七)年の八王子郷土読本のために撮影)「八王子市郷土資料館二〇〇七三四頁」で

は、二間を利用するのではなく、縁側を舞臺とし、太夫は縁側に設けられた台に座っている【写真4】。

昭和三十五(一九六〇)年、アマチュア映像作家の大島俊正が、西川古柳座を取材した際、三代目西川古柳の協力を得て「昔やってゐたのと同様な演出効果を狙つて、老人の庭前に縁台を並べてやっていただいた」と記している「大島

一九六八一七五頁」。当時にとつての昔の車人形の公演の様子の再現を依頼して松姫に関する演目が上演された。舞臺は縁側に台を配置して設けられ、出番を終えた人形が入っていくのは、舞臺の左手ではなく左の奥である。また庭に観客席が設けられている。この撮影では、大八車を引いての興行に出かける様子も再現されている。以上のことから、民家で上演された車人形の舞臺には、二間を用いてその一部に舞臺のスペースを設けた例と、縁側を舞臺とし、庭を観客席とした例があり、前者には、特定の文化人等の集りでの上演の例と、農村の娯楽としての上演の例があったことが確認された。

(三) 屋外での公演

1 祭礼時の舞臺

『多摩文化』第二十号の昭和初期の興行記録を参照すると、神社等の祭礼時の車人形公演が多く見られ「多摩文化研究会一九六八一八八～二二九頁」、上演の記録は、以下に示すように、明治時代まで遡ることができる。

(1) 明治時代後期の八王子の車人形

鈴木信太郎は子供の頃に見た縁日での人形芝居について「車人形のこと」(『三田文学』一六―四)および『お祭りの太鼓』で記し、明治時代後期の車人形を記録している。

私共子供の頃には、それぞれこの町でも縁日が立って、大いのお寺や社では、茶番や神楽か時々人形芝居などがよくか、って、私共は子供の頃から子守の背中などでそれを見乍ら

育って来た様なものであった。それは浄瑠璃につれて踊るごく小規模な人形芝居であったが、後年「八王子車人形」などと云って世に知られたものであったが、まだその時分、私共の子供の頃は、もう皆馬鹿々々しがつてろくに見るものもなく、カンテラの明りの下で、夜風に鼻汁をすすり乍ら人形遣ひは、ほんのまばらの見物を相手に、同じ仕事をくり返しくり返しくつてゐる程度のものであった〔鈴木一九四一―一三〇頁〕。

どこの町でもさうのやうに、私どもの町でもいろいろの小さい物日の縁日があつて、十八日は鬼子母様二十八日は不動さん、何日は薬師さん、何日は何々さんという風に、小さい町は小さいなりに、人の集まる夜の露店が出て、食物屋やおもちや屋などお堂のまはりにならび、きまつて神楽堂で何かはじまるのである。大ていはお神楽であるが、ときどきは人形芝居が、提灯の火やカンテラの強い匂ひと灯影の下で演ぜられるのであった〔鈴木一九四一―一〇頁〕。

(2) 水天宮〔写真5〕縁日および大善寺（八王子市大横町）



写真5 現在の水天宮（八王子市大横町）
2019年9月20日撮影

平音次郎の姪である廣瀬艶子（二九〇六―没年不明）は、大横町にあった大善寺手前の水天宮の縁日で子供の頃に見た車人形上演について、「茶番、神楽、車人形」に言及し記録している。大正時代初期の縁日での車人形の上演も、鈴木信太郎の見た明治時代の縁日と同様のものであったことが分かる。

水天宮によりそうように建てられた舞台があった。御縁日ともなればお神楽はもとより、車人形、説経節、茶番（こっけいな寸劇）、手踊りなどが演ぜられたものである。黒い着物を着て黒い頭巾をかぶった人が、車のついた台をお尻に敷いて人形を操る〔廣瀬一九八三二六頁〕。

山門の近くにあった水天宮様の縁日は五日。この境内に小さな舞台があつて、奉納の車人形や茶番がよく演じられた〔廣瀬一九八〇八八頁〕。

廣瀬艶子の随筆に記された「毎月五日の水天宮の縁日」での車人形上演は、昭和六（一九三二）年一月五日、昭和十二（一九三七）年四月五日、昭和十三（一九三八）年一月五日の二代目西川古柳の興行記録にも記されており、明治から昭和にかけて、車人形が上演されたことがわかる¹⁴。なお、昭和三十六（一九六一）年まで水天宮に隣接していた大善寺は毎年十月に行われていた「お十夜」が有名である。昭和九（一九三四）年の東京日日新聞のお十夜の記事に、出し物の一つとして「人形芝居」と書かれ、車人形が上演された可能性もある¹⁵。

(3) 永泉寺本堂（八王子市鎌水）〔写真6〕

小泉栄一（一九一七―一九九九）は、大正終わりから昭和初期に永泉寺で見た車人形について記し、「村の菩提寺永泉寺の本堂であつたが、黒い布を被つて、人形を後で操る人が、いやに邪魔に見えたこと、人形の顔が胴体に比べて、バランスがとれない程小さく見えた（中略）、その当時は村でも時折、車人形説経節の催しがあったらしい」と記している〔小泉一九九五四八頁〕。

(4) 上宿 御嶽神社（八王子市下恩方町）【写真7】

西川古柳座稽古場のある地域は上宿とよばれ、御嶽神社がある。十代目都賀太夫（安藤忠 一九二六―二〇一九）は、「昭和二十四年頃、西川古柳座近くの上宿の地蔵祭り（例年九月二十四日）の夜車人形があり、十代目薩摩若大夫の語りと二代都太夫（大野高蔵）の三味線であった」ことを記している。¹⁶ 五代目西川古柳は子供の頃（昭和三十年代）、上宿御嶽神社神楽殿での車人形上演の手伝いをした記憶があるという。御嶽神社のお祭りは八月だが、車人形上演は九月だったとのことである。上宿町御嶽神社氏子総代であった田中英男（一九三八―二〇一九）は、「車人形が近所の大野高蔵さんの義太夫とやっていた」こと、「西川古柳座も含む上宿町会は二十八件、そのうち十八件は機屋で、（田中氏の）父と四代目西川古柳は機屋仲間であった」ことを記憶しているという。御嶽神社の祭礼での車人形公演は、地元の方の記憶には、今も残されているといえよう。



写真6 現在の永泉寺本堂（八王子市鎌水）2019年12月12日撮影

(5) 上川口の祭礼での車人形上演（八王子市上川町）

久保喜一（一九三〇―）、写し絵師玉川馬蝶孫）は、昭和二十年代に見た車人形について次のように語っている。

「上川口小学校の東の階段の坂を下った途中の薬師様のお祭りがあった。裏の家の物置を改造した舞台を作り、毎年上演された。車人形の演目などは覚えていない。説経節の語りだった。老若男女集まってきた。無料だった。お祭りなので、普通のお祭りとおなじように花をかけたのではないか。一年に一回、お祭りのときに一晩きりだった。どこから公演に来たのかも分からない。恩方の方から来たのか、奥多摩の方からきたのか。

この公演は昭和三十年頃まで毎年やっていた。道路拡張のため、薬師堂は大仙寺に移り、今は住職もいない。その他、地元の田守神社のお祭りでも説経節、車人形の上演がかつてあった。」（平成二十九年（二〇一七）年筆者聞き取り）



写真7 現在の御嶽神社神楽殿（八王子市下恩方町）2018年3月6日撮影

2 祭礼以外の屋外の舞台

(1) 荻窪白山神社（東京都杉並区）



図3 「車人形の図」 鈴木信太郎画 1931年頃 学校法人北里研究所蔵

鈴木信太郎は、昭和六

（一九三二）年五月三十一日「多摩文化研究会 一九六八二〇八頁」に転居先の荻窪の白山神社の森の中の未完成のアトリエで車人形公演を催し、絵画を残している【図3】。

絵には、出幕が舞台左奥に設けられている様子が描かれ、観客が屋外で観覧する様子が描かれている。

またその時の様子が以下のように記されている。

手を出せばさわることのできるほんものの竹藪がそのまま舞台の背景となり、秋の虫が床下に鳴いていた。裸電灯とロウソクの灯が野外劇のような照明となつて美しかったことが強く印象に残っている【鈴木 一九七九三二頁】。

舞台の照明にはローソク二本立てただけであったが、かえって、そのほの暗い灯の中で動きまわる不可思議な人形の抑揚ある表情が、見物人二、三十人の心を打ったようであった【鈴木 一九四九一一八頁】。

(2) 宗関寺（八王子市元八王子町三丁目）

西川古柳座所蔵の日誌と五代目西川古柳への聞き取りから撮影日は昭和三十二（一九五七）年六月二十三日宗関寺での公演と推定される写真が残されている【写真8】。昭和三十一（一九五六）年、八王子車人形の八王子市技芸（現在の無形民俗文化財）指定の際に八王子市教育委員会より贈られた幕も掛けられている。昭和三十年代から四十年代にかけての宗関寺において、八王子城落城と関係のある演目が演じられた例【写真9】や、特設舞台で演じられた例【写真10】がみられる。宗関寺は、八王子城跡に隣接し、西川古柳座にも近い。



写真8 宗関寺で行われた車人形 1957年6月23日（推定）八王子市郷土資料館所蔵



写真9 宗関寺での公演（新館尼（松姫）物語のうち八王子城落城の場『八王子市勢要覧』1963年より）

(3) その他の屋外の舞台
 その他、屋外の舞台としては、三越屋上での昭和三十(一九五五)年の「さくら祭り」での公演の写真が『多摩のあゆみ』百三十二号に掲載されている。

昭和四十年代にトラックの上で「二谷嫩軍記」盛俊注進の段」が演じられた例もある【写真12】。



写真10 1960年代の宗関寺での車人形公演 細田榮久撮影



写真12 昭和40年代 トラックの上での公演の様子 西川古柳座提供



写真11 現在の宗関寺 2011年4月13日撮影

二 現在の八王子車人形の舞台・公演場所の記録

現在の八王子車人形の公演は、(一)ホール、(二)稽古場、(三)屋外などで行われている。

(一) ホール

平成二十九(二〇一七)年十一月五日のオリンパスホール八王子(八王子市子安町)【写真13】で行われた第十五回「八王子車人形と民俗芸能の公演」主催(八王子市教育委員会)の際の舞台作成の様子を紹介したい。この公演では例年、説経節の会の地方とともに八王子車人形が上演されるが、この年は「小栗判官一代記 矢取の段」の他、

八王子市制百周年を記念して
 三番叟の演舞も行われた。

舞台はホールの舞台全体(間口約40メートル×奥行約20メートル)【写真14】を利用して、芝居の内容に応じて下手、上手の袖から人形が出入りする。演目によっては、揚幕が設けられることもある。公演準備の過程(付記「二〇一七年十一月五日当日舞台準備の様子」参照)は、基本的に公演場所が変わっても同じである【写真15】。ホールで



写真13 オリンパスホール八王子外観 2019年11月10日撮影



写真15 『小栗判官一代記』高倉館の舞台準備 2017年11月5日撮影



写真14 オリンパスホール八王子の舞台 2018年11月11日撮影



写真16 オリンパスホール八王子での公演の様子 2017年11月5日保戸塚時久撮影

は照明による演出の工夫が見られる。西川古柳によれば、三人の人形遣いが出る舞台において、後見を含めスタッフ二十人が必要であるという。移動は、西川古柳座のワゴン車に舞台で使うもの一式を積んで行く。

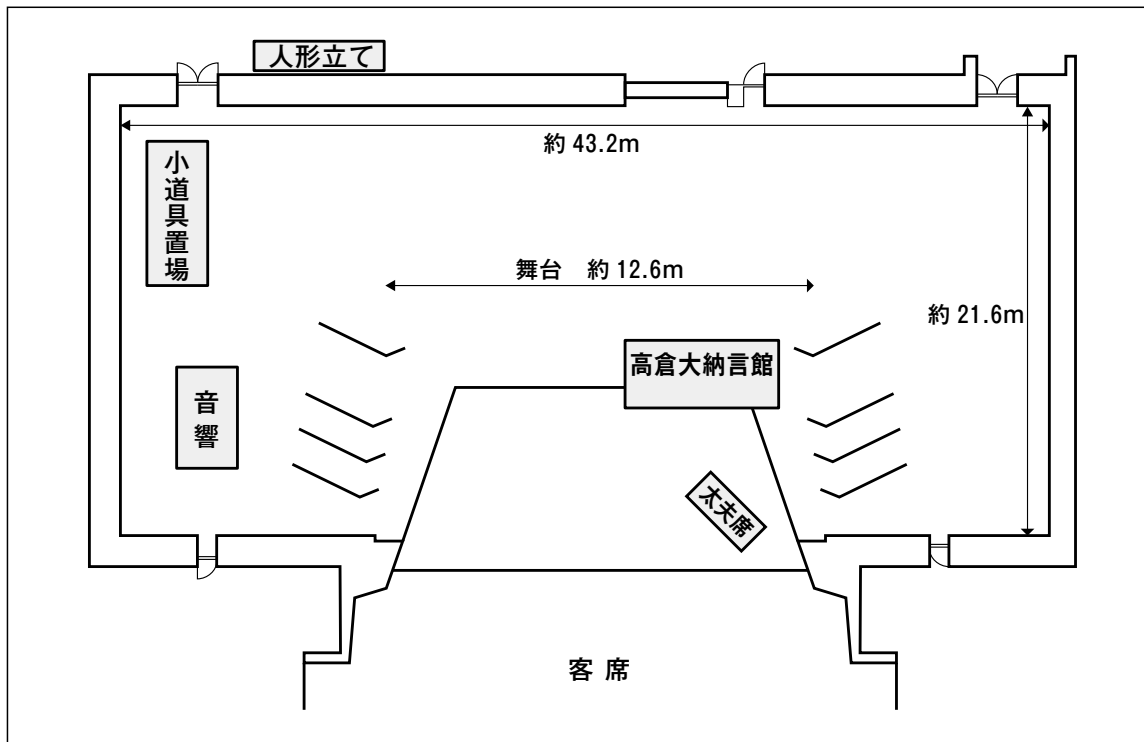


図4 オリンパスホール八王子 八王子車人形舞台平面図

(二) 西川古柳座稽古場【写真17】



写真17 西川古柳座稽古場外観 2016年12月2日撮影

西川古柳座稽古場の舞台（間口約9メートル×奥行き約4.5メートル）は、バトン四本、照明装置、音響装置を備えている。毎週二回の練習の他、八王子車人形の公演も行われる【写真18～21】。昭和六十（一九八五）年の柿落し以来、平成十（一九九八）年から平成二十三（二〇一〇）年に行われた「受け継がれていく人形芝居」をはじめとする多くの公演も開催されている。客

席は百人ほど収容できる。平成十六（二〇〇四）年三月十四日の読売新聞に「一見、普通の木造建築だが、中は芝居小屋特有の情緒に包まれている。照明に照らされた板敷きの舞台に、百人ほどが鑑賞できる赤じゅうたんの座敷。（中略）「しっかり稽古するためには、きちんとした舞台が必要。さらにそこで、ちいさな芝居も上演できればと考えていました」と五代目家元の西川古柳さんは話す。舞台の羽目板や座布団は上野の講談定席・本牧亭から譲り受けたもの。小ぶりながら多摩地区では珍しい本格的な芝居小屋だ」と紹介されている。

平成三十（二〇一八）年三月には、東京都の補助金の助成を受け、老朽化した舞台床を座員の西川柳時が修繕し、艶消しのヒノキ作りの床になった。平成三十年八月二十五、二十六日、および令和元

（二〇一九）年八月二十四日、二十五日には「西川古柳座、次世代の飛躍（主催 西川古柳座）」が開催された。

公演前には、定式幕が掛けられ、開演時に下手から上手に引かれる。現在の稽古場が作られる以前にも、同じ場所に稽古場があった。佐藤広『八王子の民俗』に、「昭和三十八年 瀬沼家の自宅に三十五坪の稽古場をつくる」と書かれている「佐藤 一九九五 一四六頁」。昭和四十二（一九六七）年『民芸手帖』に稽古場での公演の様子が「庭には舞台と見物席のある離れが建てられてあり、西川古柳一座の幟りが立てられている。着せ付けの終えた人形が楽屋に入り、待つうちに木が入り幕が開く。」「東京民芸協会 一九六七 七五～七七頁」と写真とともに掲載され、現在の稽古場での公演の様子と類似している。



写真18 西川古柳座稽古場の舞台 2018年3月30日撮影



写真19 西川古柳座稽古場舞台の準備 2019年8月24日撮影

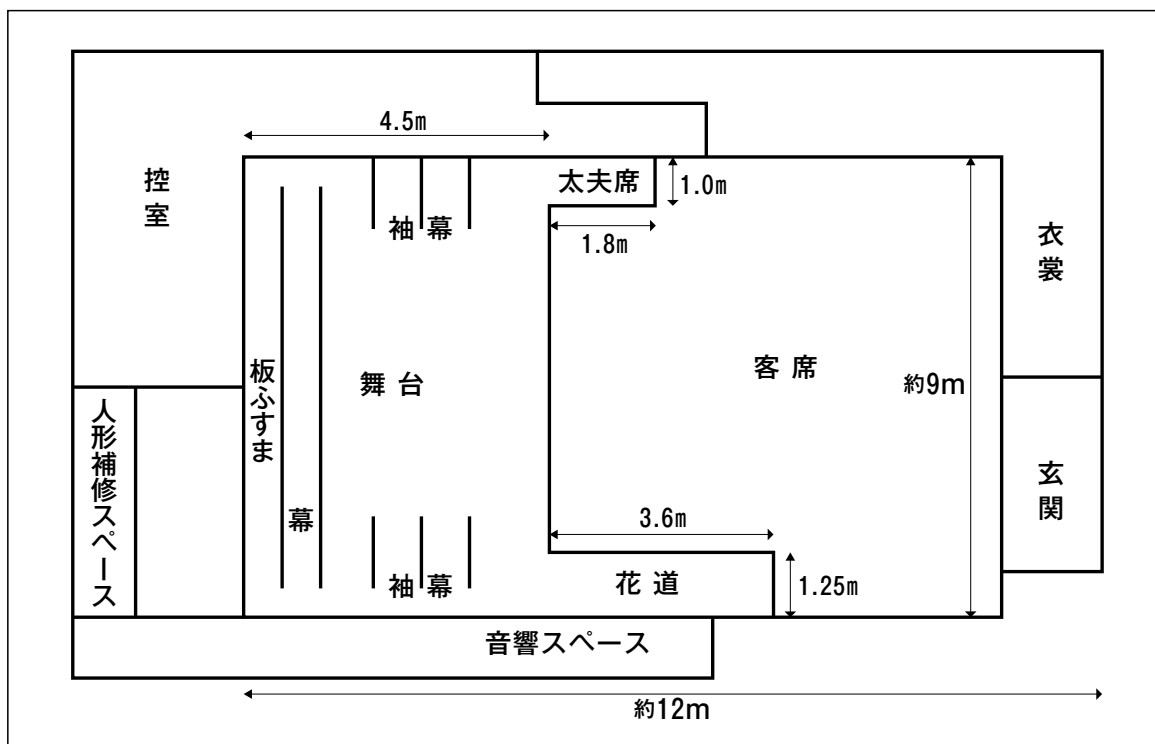


図5 西川古柳座稽古場 八王子車人形舞台平面図

八王子車人形は、平成二十八（二〇一六）年度より毎年八王子市で開催されている『伝承のたまてばこ』（主催 アーツカウンシル東京・八王子市・公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団）で公演している。平成二十八（二〇一六）年度は、八幡八雲神社の神楽殿と横山町公園【写真22】において、平成二十九（二〇一七）年度以降は、西放射線横山町公園において公演している。横山町公園の場合、設置されている舞台（間口約十五メートル×奥行約四メートル）を利用し、舞台左手側に楽屋を設ける。太夫席は、舞台上手の手前に、舞台と同じ高さの台を設置する【写真23】。公演のはじめに演じられる「三番叟」には音源が用いられ、演目は、「説経節の会」の地方で演じられる【写真24】。なお、公演に先立って、『伝承のたまてばこ』公演では、「八王子車人形」と「説経節の会」の出演者が人力車に乗り、西放射線ロードを東急スクエア前から横山町公園前までお練りを行う。

1 (三) 屋根のある屋外の舞台



写真21 西川古柳座稽古場での稽古の様子 若手座員を五代目西川古柳が指導し、座員が見守っている。2018年8月16日撮影

2 屋根のない屋外の舞台



写真22 横山町公園外観 2019年5月11日撮影



写真23 横山町公園舞台の準備 2017年9月10日撮影

八王子車人形の屋外での公演として、毎年、高尾山若葉まつり及び高尾山もみじまつり（八王子観光コンベンション協会主催）に参加し、特設舞台で公演している【写真25】。ここでは一つの演目を通しての上演ではなく、一部を抜粋して演じられる。高尾山若葉まつりは平成三十一（二〇一九）年度で二十回目を数え、初日に行われる登山者安全祈願にも毎年参加している。

四 まとめ

オリンパスホール八王子、稽古場、横山町公園（屋根のある屋外の舞台）、高尾山の若葉まつりともみじまつりの特設舞台（屋根のない屋外の舞台）を取り上げ、八王子車人形が様々な舞台で公演されていることを示した。舞台準備の流れは同じであるが、公演場所の設

備等により演出は異なる。オリンパスホール八王子公演の例として取り上げた「小栗判官一代記 高倉館 矢取の段」は屋外では演じられていないが、ホールでも屋外（横山町公園）でも演じられる「東海道中膝栗毛 赤坂並木の段」を例に取ると、ホールでは照明設備を生かし、赤坂並木の幕の照明を演技の中で、昼間の色から赤色系に変化させ夕暮れ時になったことを表す演出も取り入れる。屋外の舞台では照明は用いず、自然の光の中演じられる。五代目西川古柳の依頼で八王子車人形の首の修理を行った門田末弘によれば、人形首は、文楽の人形のような艶消しではなく、自然の光の中でも演じられる阿波の人形と同じ塗り方を施しているという。太夫席は、オリンパスホール八王子の舞台では舞台の中に、稽古場と横山町公園舞台では舞台の上手脇に設けられている。「日高川入相花王」や「東海道中膝栗毛 赤坂並木の段」には滑稽な場面があるが、ホールの大きさを問わず、いずれの舞台でも観客の笑いがあり舞台と観客の一体感が見られる。



写真24 横山町公園での公演の様子 2018年9月22日撮影



写真25 高尾山もみじまつりでの上演の様子
2017年11月12日撮影

付 記

2017年11月5日 公演当日舞台準備の様子（第15回『八王子車人形と民俗芸能の公演』） 筆者作成

年月日	時間	西川古柳氏、人形衣裳着付け作業
2017年10月23日		西川古柳座稽古場において、説経節の会と稽古。
2017年10月31日		『小栗判官一代記』公演のために着付けた人形を筆者確認。
2017年11月 2日		稽古後、荷造り。
2017年11月 5日	7:30	ワゴン車に荷積み、ジュラケースに人形カシラを入れる。
〃	8:00	稽古場出発。
〃	8:30	西川柳時（舞台監督）、座員会場入り。
〃	9:00	五代目西川古柳会場入り。全員で荷卸し。
〃	9:00	照明担当者、団体準備と併行して照明の仕込み。
〃	9:12	三番叟人形 6 体の準備完了（カシラを装着の上ウコン風呂敷を上に乗せ楽屋前に置く）。
〃	9:21	座員が三番叟上演用の松羽目の幕をバトンに装着。
〃	9:24	座員が『小栗判官一代記』の幕を別のバトンに装着。
〃	9:33	太鼓を椅子の上に紐で縛り、舞台袖に置く。（効果音用）
〃	9:36	座員がホール備品の台を並べ『小栗判官一代記』の「高倉館」の舞台装置準備。
〃	11:30	リハーサル開始（各団体 20 分程度）。
〃	11:58	西川柳花 楽屋前で中の太夫の人形の確認。
〃	12:14	小栗判官の人形が舞台袖に運ばれる。
〃	12:26	『小栗判官一代記』の舞台準備（リハーサル用）準備完了。
〃	12:28	西川古柳、ろくろ車に乗り、小栗判官人形を装着。
〃		音響準備 （西川古柳座では、大きいホールでの公演時には音響と照明は専門家に依頼する）。
〃		上手の舞台袖では、西川柳時が高倉大納言兼家の人形を装着。
〃	12:36	小道具（小栗判官政清の一周忌追善供養の戒名）の設置場所の確認（バミテープを貼る）。
〃	12:37	太夫席（説経節太夫、三味線の座る席）を舞台上手に設置。
〃		西川柳起、門番の人形の確認。
〃	12:40	説経節の会とともにリハーサルを行う。
〃		西川柳時、矢を射る高倉大納言兼家人形の確認。
〃	12:51	矢取りの場面の確認。西川柳時に後見の西川柳澄之が矢を渡す。
〃	12:51	『小栗判官一代記』のリハーサル終了。
〃	12:56	三番叟リハーサル（五人三番叟及び中の太夫）。 （市制 100 周年を祝して、開演前に三番叟を舞う）。
〃	12:58	緞帳の確認。
〃		三番叟リハーサル。
〃	14:00	『小栗判官一代記』の舞台装置の片づけ。
〃		三番叟（五人三番叟及び中の太夫）。
〃	15:17	休憩時間にロビーで実演（『団子売』）が行われる。
〃	15:21	休憩時間中に『小栗判官一代記』の舞台装置の準備。
〃	15:36	『小栗判官一代記』の公演開始。
〃	16:11	終演後、撤収作業開始。
〃	16:45	ホール出発（西川古柳座のワゴン車に荷物を積み込み搬送）。

註

- (1) 八王子車人形が初めて海外で公演したのは、一九七六年のソビエト公演である。現在、海外公演は数名の座員で渡航し、八王子車人形の代表的演目を上演する場合と五代目西川古柳のみで渡航し、現地の人形座と共演やワークショップも行う場合等がある。
- (2) 久米井亮江は、吉田冠十郎が「明治二十四年頃、浅草奥山の人形座で小泉信久と初対面」の後、小泉信久の信久座に迎えられ、初代西川古柳の指南を受け、「車人形使となり、東京と八王子を以て人形生活の場とし」前期を明治三十六（一九〇三）年八王子を去るまでとし、後期を大正十二（一九二三）年から昭和九（一九三四）年までとしている。「久米井亮江 一九八三―一八〇―一八一頁」。吉田冠次郎も吉田冠十郎と八王子の関わりについて、吉田冠十郎が「八王子の神楽師の稲葉さん」（小泉信久）と車人形の興行をしていた時期と、「平音次郎さんが車人形の復活に力を入れて」大正十三（一九二四）年から、吉田冠次郎らを指導した時期とがあることを記している。「落合達郎 一九五九 一二八頁」
- (3) 吉田冠十郎の車人形の地語りが義太夫であったことについては、佐藤広は小沢愛園による吉田冠十郎への聞き取り（一九一八年九月）にふれ、「（吉田冠十郎は明治二十一年ころ以降）東京で数年間興行し、元は説経節を地語りとしたが東京に出て男女の義太夫語りを依頼したという」と述べている。「佐藤 二〇一七 四六五頁」
- (4) 「八王子市郷土資料館 一九八五―一三二頁」。関谷座と東宝映画劇場について相原悦夫氏より御教示いただいた。
- (5) 関谷座の車人形上演のエピソードは「新藤 一九八三 一九頁」、「新藤 二〇〇二 六四頁」にも記されている。
- (6) 『多摩文化』第二十号に、昭和五（一九三〇）年から昭和七（一九三二）年に二代目西川古柳、三代目西川古柳が、吉田冠次郎、吉田冠十郎とともに興行をしたことが記載されている。
- (7) 八王子市郷土資料館所蔵の坂本太七家文書所収の八日町一、二丁目で回覧された文書（昭和十八年四月二十日 大政翼賛会八

王子市支部長 深澤友彦より世話役、世話人に宛てた講演会（海軍少将 高橋節雄閣下）の案内）による。

- (8) 内田総淑（十代目薩摩若太夫）は、「平音次郎さんが恩方の人形使いになりあつちこつちの人形使いをつれて、八王子の織物宣伝に東京へずいぶんでがけました。」と述べている。「多摩文化研究会 一九六八 一〇頁」
- (9) 大正十三（一九二四）年五月二十二日の出演者の一人雀屋妻三郎（小泉信久）は、車人形と写し絵の一座を興行していた。「神二〇〇九 一六頁」
- (10) 廣瀬艶子は「三田村さんが、平音次郎宅に坪内逍遙博士夫妻、河竹繁俊先生をはじめ有名人を迎え、車人形つかいの古柳、伊平らの演ずる郷土芸能車人形、および大善寺前の宿屋玉川屋の主人のチョボクレ（祭文語り）などをお目にかけたが、これらの芸能を非常に賞讃され、是非ともこの郷土芸能の保存に努力するようにとこれらの文化人達に激励された伯父が、自宅内に舞台を造り、車人形のおさらいにと時と費用を惜しまなかったのは、大正十年ごろのことと記憶する」と記している。「廣瀬 一九八〇 九一頁」。
- (11) 新藤恵久所蔵。水彩画。この絵は新藤恵久が渡辺嘉平に依頼して描かれた。
- (12) 本稿で取り上げた縁側を舞台とする例は、撮影のために詠えられた舞台としての例であり、実際の上演の実態を裏付ける資料は未確認であるが、縁側を舞台として上演する際に張る「縁の下」が川野の車人形保存会で保存されており、この形式の上演が、川野の車人形（小河内の車人形）では存在していたことを物語っている。「東京都江戸博物館 一九九六 一六二頁」。
- (13) 大島俊正の「車人形」は、朝日コンの特選になっている。「西沢幹夫 一九六七 一二二頁」
- (14) 「多摩文化研究会 一九六八 二〇四と二二二頁」ただし昭和十二（一九三七）年四月五日に関しては「水天宮」とのみ書かれ、大横町の水天宮であるかは断定できない。
- (15) 「境内は化学應用水中の人魚、レヴュー館、しばた洋行曲馬館、人形芝居にジャズと客を呼ぶ聲でわれ返る騒ぎだ、その中で象君が悠暢に鼻をふり／＼群がる子供に愛嬌をふりまいて」（昭和九年十月十四日 東京日日新聞府下版）この記事の「人形芝

居」が車人形とは断定できないが、明治時代の八王子では「人形芝居」が車人形を指すことと、かつてお十夜で車人形が上演された可能性を示唆する記載が『八王子だるまの作者井上竹次郎伝』中の明治三十八（一九〇五）年のお十夜の説明に見られる。「声をかけた顔を見ると、一度会いたいと思っていた安戸の源さんこと小町源三郎であった。」「戦争に行ってしまったけがしたって聞いたが、どんなあんべー（塩梅）かね」「露助に胸を貫通銃創されて、何とか命びれー（拾い）したのよ。肺をやられたから当分は笛がだめで、人形の笛が吹けなくて申し訳ない」というようなやりとりから、このお十夜には人形芝居（しばや 車人形の明治時代の呼称）は出演していないようで、こんどまた、人形芝居の公演を竹次郎が見に行きたいこと、またこれからだるま作りをやってみようかと思っているが、源さんに何か教えてもらいに行くかも知れないのでよろしく、といった」〔本木二〇一三二九七頁〕。車人形についての著述もある

廣川清は、昭和十六（一九四一）年に八王子の大善寺のお十夜のことを知り、「人形芝居に関連ある見世物が必ずあるだろう」と思い出掛け、電気人形を見たことを記しているが、車人形には言及していない。〔相原二〇一一一頁〕に戦前戦後の大善寺お十夜での主な見せ物興行が掲載されているが、車人形については触れられていない。大善寺お十夜の車人形興行は継続的にはなされていなかったといえる。

(16)

〔説経節の会二〇〇五〕。〔多摩文化〕二十号 九二〜九八頁〕に掲載された十代薩摩若太夫の上演記録には記載されていない。

〔八王子市史編集専門部会民俗部会二〇一二二六一頁〕昭和二十年代から三十年代の上宿の御嶽神社では八月二十四日の地藏盆で農村劇を開催していたことや、昭和二十一（一九四六）年生まれの男性への聞き取りの内容「父が説経節語りをし、隣の家の人は三味線をしていたため、戦前戦後のころはシバヤ（神楽、芝居）が行われる前に演奏していた」が述べられている。

(17)

北里研究所所蔵。この絵は「さとう美術館二〇〇六五五頁」に掲載されている。この絵の他、鈴木信太郎は「車人形開演の図」（八王子）〔説経浄るりの会 一九八三〕の口絵にも屋外での車人形上演の様子を描いている。

(18)

八王子市郷土資料館二〇〇九三三頁〕に同日、八王子城址祭

りが八王子市と教育委員会の主催で行われ、宗関寺で車人形が上演されたことが記されている。

（執筆者 服部 真理）

参考文献

- 相原悦夫二〇一二『瀧山大善寺研究第2号大善寺十夜法会・縁日―その史流と民・風俗文化 付・大善寺十夜法会関係（日記）史料』梅沢浅次郎編 一九六三『八王子明覧（明治十五年十月）』『多摩文化』第十三号所収 八王子地方史文獻名著集八王子文化研究会
大島俊正一九六八『車人形』着想から完成まで ―題材の発見 百科事典のパンフレットから―『多摩文化』第二十号
小田内通久一九二八『八王子車人形について』『民俗藝術』第一巻第五号 地平社
落合達郎一九五九『冠次郎夜話―車人形ききぎき―』『横山文化』第五号
河竹繁俊一九四六『歌舞伎襟記』光文社
河竹繁俊一九四九『あとがき』『諸国の人形芝居』講談社
金原省吾一九四三『車人形』『美の表現について』青磁社一九四三
久米井亮江一九八三『晩春武蔵車人形』
佐藤広一九九五『八王子の民俗』揺籃社
塩田真八一九六八『八王子車人形こぼれ話』『多摩文化』第二十号
小泉栄一八九五『鑓水村の説経浄瑠璃』『多摩のあゆみ』80
清水正之二〇〇八『佐藤孝太郎先生と京王多摩文化会史蹟探訪の草分け』『多摩のあゆみ』第百三十二号
神かほり二〇〇九『多摩写し絵の歴史』『写し絵日記』（久保喜一著）
新藤恵久一九八三『八王子車人形と私』『車人形』説経浄るりの会 新門出版社
新藤恵久二〇〇二『車人形の救世主』『うなづき』八王子車人形後援会 ふこく出版
鈴木信太郎一九二九『八王子車人形の記』『アルト』一〇号
鈴木信太郎一九四一『八王子車人形のこと』『三田文学』
鈴木信太郎一九四九『お祭りの太鼓』朝日新聞社
鈴木信太郎一九七九『八王子車人形』『日本の人形古典人形の美／郷土人形図鑑／人形に会う旅』読売新聞社
鈴木信太郎一九八七『美術の足音今は昔』博文館新社

説経節の会二〇〇五「説経節の会通信」No.50
 そごう美術館二〇〇六『鈴木信太郎展 親密な空間、色彩の旅人』

(財) そごう美術館

多摩文化研究会一九六八「座談会 車人形の今と昔」『多摩文化』第二十号
 多摩文化研究会一九六八「車人形出演日記」『多摩文化』第二十号

東京都江戸東京博物館一九九九『川野の車人形映像と記録』東京都江戸
 東京博物館調査報告書第八集 映像音響資料制作に伴う調査報告書 東京都

歴史文化財団

東京民芸協会一九六七『民芸手帖』四二・五月号

仲田定之助一九六九『明治商売往来』青蛙房

西沢幹夫一九六七『武蔵野の面影を残す多摩丘陵』『小型映画』第十九卷
 第四号

はちおうじ車人形研究会編一九九六『東京に残る江戸・人形芝居の世界』

八王子車人形『のんぶる舎』

八王子市教育委員会一九六三『八王子市勢要覧』

八王子市郷土資料館一九八五『八王子の空襲と戦災の記録（総説編）』

八王子市教育委員会

八王子市郷土資料館二〇〇九『平成二十年度特別展 開発と観光の時代へ』

八王子市市史編集専門部会民俗部会二〇一二『八王子市西部地域 恩方
 の民俗』新八王子市史民俗調査報告書 第一集 八王子市総合政策部市史

編さん室

八王子事典の会二〇〇一『八王子事典』改訂版かたくら書店

日高只一九二八『車人形を観る』（一九二八年七月六日読売新聞）

廣川清一九六三『見世物からからくり人形へ』『三つの人形芝居』吾妻書房

廣瀬艶子一九八〇『糸繰り草 八王子・町角の昔』

廣瀬艶子一九八三『車人形と平次郎』『車人形』新門出版社

三田村鳶魚一九九九『人形芝居と能』中央公論社

民俗藝術の會一九二八『民俗藝術』第一卷第八号地平社



写真20 西川古柳座稽古場での公演の様子 2019年8月24日撮影

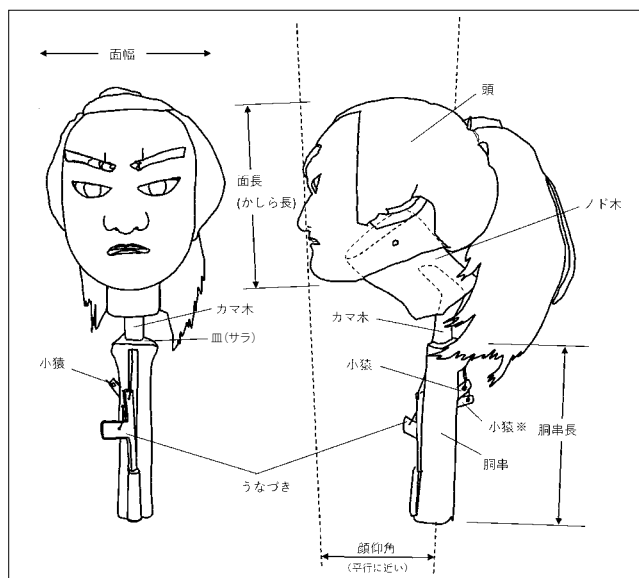
第六節

用具類

一 八王子車人形の首^{かしら}

西川古柳座が現在、所蔵する首について概要を述べる。まず、解説の前提として首の構造図を示し、次に個々の首の写真、そしてデータ表、所見を述べる。

(一) 首の構造図^{かしら}



(かしらの図の説明)

- ・本図は、西川古柳座所蔵首 No.48 を元に服部真理が作成した。
- ・作成にあたり、『伊那谷の人形芝居 [かしら台帳目録]』(飯田市美術博物館 1991 年) 126 頁の第 3 図を参考にした。
- ・「小猿※」の箇所は、栓の先端に布の玉が取り付けられ、引玉に類似しているが、五代目西川古柳によれば「遣いやすいので小猿に布をつけたもので、引玉ではない」とのことである。

解説

車人形は一人遣いであるが、大多数の首は、一般的に人形浄瑠璃文楽等の三人遣いに用いられる首であり、図に示したような構造になっている。主な部位としては、頭、ノド木、ノド木と持ち手である胴串、ノド木と胴串を繋ぐカマ木からなる。

頭の部分は内側をくりぬき、^{うなづき} 領きや目・眉・口等が動く仕掛けが施されている。ノド木は角度をもって頭に差し込まれており、頭が胴串より前に位置している。また、カマ木も角度をもってノド木と繋がっている。

首内側にある目・眉・口の操作の糸がノド木中央部分の空洞を通り、胴串の小猿、領き操作の部分に結ばれ、小猿、領きを動かすことで、頭が領き、目・眉・口が動く。

胴串上部を皿といい、ここに衣裳付き肩板が乗り、人形は着装した姿となる。

頭髮はカツラを作り装着させている。他、彫り付け、描いているものもある。毛は人毛、ヤクの毛等を用いる。

構造図に示すのは、領きのト型の木片を引いた場合、顔面と胴串はほぼ平行となった図である。他方、顔面と胴串が平行でなく、顔がやや上を向く、即ち顔に仰角がある首もある。この首は鉄砲ざしといって、持ち手をやや前に突き出して遣う遣い方で遣う。よって、顔仰角の有無によって、遣い方が鉄砲ざしか、そうではない現文楽式か区別ができる。



No.3



No.2



No.1



No.6



No.5



No.4



No.11



No.10



No.9



No.8



No.7



No.16



No.15



No.14



No.13



No.12

(二) 西川古柳座所蔵首写真かしら

他に、一人遣い用の首もあるが、基本的な構造は同じである。違う点は頭とノド木が同一の木で彫られていて首内がくりぬかれていない、ノド木に角度がなく直立で頭と繋がる、カマ木も同様に直立でノド木と繋がる。目・眉・口等の動き、頷きの動きはない。



No.21



No.20



No.19



No.18



No.17



No.26



No.25



No.24



No.23



No.22



No.31



No.30



No.29



No.28



No.27



No.36



No.35



No.34



No.33



No.32



No.41



No.40



No.39



No.38



No.37



No.46



No.45



No.44



No.43



No.42



No.51



No.50



No.49



No.48



No.47



No.56



No.55



No.54



No.53



No.52



No.61



No.60



No.59



No.58



No.57



No.66



No.65



No.64



No.63



No.62



No.71



No.70



No.69



No.68



No.67



No.76



No.75



No.74



No.73



No.72



No.81



No.80



No.79



No.78



No.77



No.86



No.85



No.84



No.83



No.82



No.91



No.90



No.89



No.88



No.87



No.96



No.95



No.94



No.93



No.92



No.101



No.100



No.99



No.98



No.97



No.106



No.105



No.104



No.103



No.102



No.111



No.110



No.109



No.108



No.107



No.114



No.113



No.112



No.117-1



No.116-2



No.116-1



No.115-2



No.115-1



No.119-2



No.119-1



No.118-2



No.118-1



No.117-2



No.123



No.122



No.121



No.120-2



No.120-1



No.126



No.125



No.124

人形の手は主に、「かせ手【手 No.1】 かきつばた【手 No.2】、もみじ手【手 No.3、4】」を使用する。人形の足は、普通の足のみで特に名前はない。「足袋を履いた足【足 No.1】、はだしの足、太い足（船頭などに使用）【足 No.3】 女子供の足【足 No.2】」が用いられている。女形は通常、衣裳の内側に女形の足【足 No.4～8】を縫い付けて遣う。



手 No. 2 かきつばた(左)、手 No.3 もみじ手(右)



手 No.1 かせ手



足 No.1 足袋を履いた足(左)、No.2 子供の足(右)



足 No.1 (左) のカカリ(部分)



足 No.3 太い足



足 No.4～8 女形の足 右の二点 (No.7,8) は子どもの足



手 No.4 もみじ手

(三) 首データ表

凡例

① 本表に掲載した首は西川古柳座所蔵の一二六点である。計測等の調査は大谷津早苗、五代目西川古柳の聞き書きは服部真理が行った。今回の調査は主に外側から目視によるものである。首内の情報、作者に関する情報、修理の情報等は五代目西川古柳の聞き書きによる。過去の修理時に首内にある墨銘が確認されている場合は備考に記す。

② 首は1、2…と撮影順に番号を付す。

③ 主なデータは、名称・面長・面幅・胴串長・塗色・頷き・機巧等である。

聞き書きで得た情報として、作者・役名・五代目西川古柳のコメントを載せる。

④ 首の名称は、西川古柳座に伝承されている名称を記す。無印は先代による名称、*は五代目西川古柳による名称、() は筆者が付した仮称である。

また役名がある場合は備考欄に記す。それ以外については現地での名称を記す。

⑤ 首の法量の単位はcmである。

⑥ 首の寸法は面長と面幅を挙げる。面長は頭頂部から顎下までを、面幅は左右の耳下で計測した長さである。

⑦ 胴串長は皿(サ)から最下部までの長さである。

⑧ 顔の塗色は、主に肌色・白・赤・黄土色等がある。肌色について江戸系と文楽では表示が違うと言われ、江戸系は一樣に肉色、文楽は卵の殻の色に例え濃い場合を卵、薄い場合を薄玉という。ここでは独自に肌色、濃い肌色(濃肌)と表示する。

⑨ 毛髪は植毛・ズラ(カツラ)・彫付の別と色を記す。

⑩ 首に、目や眉・口等が動く機巧がある場合はその名称を記す。

(眉)

立ち眉 眉間の穴を支点に眉尻が上がる

アオチ眉 眉間の溝に沿って眉が上下に動く

下がり眉 眉間の穴を支点に眉尻が下がる

天秤眉 眉間の穴を支点に一方の眉尻が上がり、一方の眉尻が下がる

(目)

ニラミ目 眼が左右に動く

寄り目 眼が中央に寄る

返り目 眼が見開いた表情の目になる

眠り目 眼が瞼を閉じた表情の目になる

(口)

口開 口が開く

舌出し 舌が出る

⑪ 頷きについて有無の別を示し、構造図の頷きと同型の場合は引栓(式)、胴串背面の小猿と同系の場合は小猿(式)と表示する。

⑫ 顔仰角の有無で鉄砲さしか否かを判断し、鉄砲さしの可能性がある場合は備考に示した。

⑬ 作者、役名については五代目西川古柳への聞き書きによる。他、由来、使用等に関する氏のコメントも併せて載せる。

⑭ 両耳後ろに環状の金具があるがしらは新車人形の首である。金具が有場合は備考に記す。

⑮ 他、焼印、作風に関する印象・所見等も備考に記す。

番号	首名称	面長× 面幅	胴串長	頷き	塗色	毛髪	機巧	備考	作者	演目・役名	コメント
1	坊主 *チャリ	10.8× 8.9	12.0	引栓	肌色	彫付	口開	耳後に金具 非 定型			落語で遣った。
2	検非違使	11.4× 8.2	12.0	引栓	白	ズラ	アオチ眉 眠り 目	耳後に金具			新しい。死神の番頭 で使った。
3	若男	9.7× 7.7	11.8	引栓	白	ズラ	眠り目			やさしい柿木 の青年	
4	坊主 * チャリ	11.6× 8.6	12.3	引栓	濃肌	彫付	下がり眉 口開			道成寺の坊さ んの下っ端	
5	(端役)	10.7× 8.2	12.5	引栓	肌色	ズラ	口開			一本刀土俵 入の関取	古い。三番叟にも使 用した。
6	チャリ端	11.2× 8.0	12.0	引栓	肌色	ズラ				野ざらしの太 鼓持ち	古い。落語でカップ ルで踊る。
7	老女形	10.7× 7.5	11.7	引栓	白	ズラ	眠り目	口に針			新しい。演目不特定。
8	*中国の 女	10.2× 7.2	11.4	無	白	ズラ			五代目古柳	牡丹灯記の中 国の踊り子	
9	*中国の 女	12.9× 8.2	12.0	引栓	白	ズラ			五代目古柳		20年ほど前に製作。
10	*西洋の 女	10.4× 6.9	11.4	欠	白	ズラ			五代目古柳	トゥ・ロピタ・ コンラミーア	シェリトリンドでも 使う。
11	(源太)	12.1× 8.7	13.5	引栓	白	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ目 眠り目	ノド木に木片 付		松山鏡の殿様	浪曲。貧乏侍の殿様。
12	端役	10.6× 7.9	11.5	引栓	濃肌	ズラ				日高川の船頭	子どもの練習用。
13	*男 (端役)	12.1× 8.5	12.5	引栓	濃肌	ズラ	下がり眉 口開		大江定子		丁稚、又平、死神の 町人。
14	検非違使 (源太)	11.7× 7.9	11.8	引栓	白	ズラ	アオチ眉 眠り 目			釣女の大名	古い。
15	源太 * 源太	11.4× 8.3	12.2	引栓	白	ズラ	アオチ眉 眠り 目			信田妻の保名	古い。
16	源太	10.7× 7.2	12.1	引栓	白	ズラ	アオチ眉 口開	目動き潰し		団子売の杵造	古い。
17	(検非違 使)	11.0× 7.7	12.6	引栓	白	ズラ	アオチ眉	目動き潰し 鉄 砲ざしか		朝顔話の関助	奴に使う。他でも使 用。
18	(娘)	9.3× 6.6	10.7	引栓	白	ズラ				信田妻の葛の 葉姫	古い。胴串短い。
19	(娘)	8.9× 6.9	12.3	引栓	白	ズラ		口に針		信田妻の葛の 葉姫、釣女の 姫	古い。由良亀修理。
20	傾城 * 花魁	9.5× 6.9	11.5	引栓	白	ズラ			由良亀	照手姫、紺屋 高尾の花魁	
21	娘	10.2× 7.7	11.7	引栓	白	ズラ		口に針	由良亀	団子売のお白	新しい。
22	老女形	11.1× 7.7	11.2	引栓	白	ズラ	眠り目	胴串に焼印	由良亀	さだめのため に製作	さだめ四代目古柳作 詞。
23	口開き婆 *チャリ	9.6× 7.7	11.5	引栓	濃肌	ズラ	口開	鉄砲ざし		明烏夢泡雪の やりて婆	
24	(娘)	10.4× 7.5	11.7	引栓	白	ズラ			大江定子	新ノ口村の梅 川	H30.12.15襲名披露 公演で使用。
25	*お福	10.1× 8.3	12.0	引栓	白	ズラ		口に針		身替座禅の奥 方	古い。女中さんおか みさん役。
26	娘	8.9× 6.5	12.4	引栓	白	ズラ		小ぶり		文七元結のお 姫様	町人の娘、庄屋の娘。

番号	首名称	面長× 面幅	胴串長	頷き	塗色	毛髪	機巧	備考	作者	演目・役名	コメント
27	娘	9.2× 6.4	11.2	引栓	白	ズラ		小ぶり			あまり使っていない。
28	(三番叟 チャリ)	10.5× 7.8	13.0	引栓	肌色	彫付	返り目 口開	烏帽子付 鉄砲 ざしか			由良亀修理。
29	(三番叟 源太)	10.5× 7.6	11.5	引栓	白	ズラ		烏帽子付			先代がいただてきた。
30	(三番叟 端役)	10.9× 7.5	12.0	引栓	濃肌	ズラ	返り目 口開	烏帽子付 鉄砲 ざしか		三番叟	一番古い。かつては これのみ。
31	婆	9.8× 7.0	11.3	引栓	肌色	ズラ白				小栗矢取りの 段の御代	それほど古くない。
32	婆	9.4× 6.9	11.0	引栓	肌色	ズラ白		焼印「□之善」 素朴な作風		三庄太夫の厨 子王母	
33	婆	9.9× 7.8	11.2	引栓	肌色	ズラ		髪白黒混			固定演目なし。
34	婆	9.8× 6.8	11.0	引栓	肌色	ズラ白	眠り目	素朴な作風			
35	老女形 *八汐	10.1× 7.0	11.2	引栓	濃肌	スラ	眠り目 口開	素朴な作風		先代萩の八汐	古い。
36	女鼻動き *醜女	10.7× 7.9	11.8	引栓	白	ズラ	鼻動き	ノド木に木片 付 素朴		釣女のしこめ	
37	(娘)	10.2× 7.3	11.8	引栓	白	ズラ	眠り目	烏帽子付		三番叟、中の 太夫	新しい。
38	(娘)	10.6× 7.4	11.8	引栓	白	ズラ	眠り目		由良亀	源氏物語で使用 予定。	先代の頃のものは由 良亀作。
39	(娘)	10.4× 7.6	11.0	引栓	白	ズラ		口に針		日高川清姫、 他お七。	
40	(老女形)	10.4× 7.4	11.5	引栓	白	ズラ	眠り目	鉄砲ざしか	由良亀	葛の葉、壺坂 のお里。	
41	(娘)	10.2× 7.3	12.4	引栓	白	ズラ	眠り目	口に針	由良亀	鶯娘	新しい。
42	(老女形)	9.8× 6.9	12.2	引栓	白	ズラ		口に針		地唄ゆき	古い。
43	(娘)	9.9× 6.9	12.2	引栓	白	ズラ	眠り目	口に針		雪女、鶯娘	古い。
44	(お福)	10.4× 7.9	12.2	引栓	白	ズラ	舌出し	素朴		朝顔話宿屋の 女中。	古い。
45	(老女形)	9.3× 6.8	12.0	引栓	白	ズラ	眠り目	口に針		阿波鳴のお弓	古い。
46	(娘)	11.0× 7.9	11.4	引栓	白	ズラ	眠り目	口に針	五代目古柳		由良亀に習い製作。
47	(娘)	10.4× 7.4	11.5	引栓	白	ズラ	眠り目	口に針	由良亀	艶容女舞衣の お園。	由良亀サイズ。
48	(源太)	10.5× 7.9	12.7	引栓	白	ズラ	アオチ眉 眠り 目	カマ木新		平家物語の敦 盛。	古い。
49	口開き文 七	11.0× 8.3	14.0	引栓	白	ズラ	立ち眉 ニラミ 目 切顎口開	ノド木に木片 付 焼印「ワ ダ天狗久」	伝馬の背駒 蔵 天狗久 修理		昔山賊で使用。今は 使用せず。
50	源太	11.4× 7.6	12.3	引栓	白	ズラ	眠り目		四代目古柳	落語の世話の 若旦那。	由良亀に習い製作。
51	源太	11.0× 6.9	12.9	引栓	白	ズラ		カマ木新			古い。由良亀塗り直 し。
52	文七	10.9× 8.7	12.8	引栓	白	ズラ	アオチ眉 寄り 目	景清			古い。

番号	首名称	面長× 面幅	胴串長	顔き	塗色	毛髪	機巧	備考	作者	演目・役名	コメント
53	若男	10.5× 7.5	12, 5	引栓	白	ズラ		保名		新内の芝居の 若旦那。	いろいろ使う。
54	検非違使	11.2× 7.5	13.0	引栓	白	ズラ	アオチ眉 眠り 目	焼き印「西川 古柳」鉄砲ざ しか		時代の殿様。	古い。先代が胴串修 理。
55	若男	10.7× 7.9	12.2	引栓	白	ズラ			由良亀	平家敦盛出 陣、断髪前。	新しい。由良亀作か。
56	鼻動き	11.7× 8.5	12.2	引栓	濃肌	ズラ	鼻動き			東海道中の喜 多八。	古い。落語にも使う。
57	団七	11.5× 8.2	13.8	引栓	濃肌	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ・寄り目			景清。小栗。	あまり使用せず。 H8照手の兄。
58	白太夫	11.0× 7.9	13.5	引栓	白	ズラ白		鉄砲ざし大江 万 胴串長い			不使用。修理厳禁。
59	匠(口開 き文七)	11.5× 8.7	13.4	引栓	肌色	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ目 口開	鉄砲ざしか		一本刀土俵 入やくざ役。	弓手ではない胴串。
60	陀羅助 (与勘平)	11.8× 9.3	11.8	引栓	濃肌	ズラ	眠り目			日高川の船頭	古い。
61	(鬼一)	11.2× 8.0	13.8	引栓	肌色	ズラ欠	アオチ眉 ニラ ミ目 口開	カシラ内墨書： (駿府 長右衛門)		お医者さん、 お坊さん。	以前は髪があった。
62	(鬼一)	11.8× 8.2	12.8	引栓	濃肌	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ目			東海道中の親 父。	古い。
63	(源太)	10.4× 7.9	12.3	引栓	白	ズラ	アオチ眉 寄り 目	鉄砲ざしか		小栗判官、日 高川の安珍。	古い。
64	(鬼一)	10.6× 7.6	12.8	引栓	濃肌	ズラ白	アオチ眉 ニラ ミ目	鉄砲ざしか		佐倉義民伝の 甚兵衛。	古い。
65	(文七)	11.8× 8.7	13.0	引栓	白	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ目	鉄砲ざしか 非 定型		平家物語の熊 谷直実。	古い。
66	(沢一 源太)	11.5× 7.4	11.4	引栓	濃肌	彫付	眠り目	あばた		壺坂の沢市。	
67	鼻動き	10.9× 8.2	12.4	引栓	肌色	ズラ	下がり眉 鼻動 き 口開			東海道中の飛 脚、弥次。	古い。
68	(団七)	11.2× 8.4	12.5	引栓	濃肌	ズラ	アオチ眉 眠り 目			佐倉義民伝の 役人。	古い。朝顔話宿屋の 岩代にも使う。
69	(陀羅助)	11.2× 8.5	13.0	引栓	濃肌	ズラ	口開			芝浜主人。 シャンクス・ メイアのカン ダタ。	古い。
70	上人	10.5× 7.5	12.8	引栓	白	彫付		頭巾付		道成寺の和尚。	耳なし芳一の和尚に も使用。
71	団七	11.5× 8.4	13.0	引栓	濃肌	ズラ					使った記憶ない。
72	(鬼一)	10.5× 8.4	12.2	引栓	白	ズラ白	アオチ眉 寄り 目			小栗の高倉大 納言兼家。	古い。
73	鬼若	11.0× 8.7	12.5	引栓	白	ズラ	天秤眉 寄り目	隈取			古い。
74	口開き坊 主(端敵)	11.5× 9.0	12.7	引栓	濃肌	彫付	下がり眉 口開			日高川の坊さ ん。	古い。東海道中古寺 坊さんも。
75	定之進	11.5× 7.8	11.2	引栓	濃肌	ズラ		非定型		死神大店のお 爺さん。	古い。落語のキャラ クター。
76	定之進	11.2× 7.3	12.8	引栓	肌色	ズラ		非定型 鉄砲ざ しか		野ざらしの先 生。	
77	(定之進)	10.8× 7.8	12.5	引栓	濃肌	ズラ		非定型		新ノ口村の孫 右衛門。	古い。
78	(文七)	11.0× 8.7	13.0	引栓	白	ズラ		鉄砲ざしか		耳なし芳一の 武者。	由良亀作、FRP使 い製作。

番号	首名称	面長× 面幅	胴串長	顔き	塗色	毛髪	機巧	備考	作者	演目・役名	コメント
79	又平 (端敵)	11.8× 8.2	12.2	引栓	濃肌	ズラ	下がり眉 口開	非定型		東海道中の弥次	古い。紺屋高尾の久蔵にも。
80	(又平)	10.4× 8.0	12.6	引栓	肌色	ズラ	立眉 口開			釣女のしこめ 太郎冠者	
81	(三番叟)	10.8× 8.5	13.0	引栓	肌色	ズラ	返り目 口開	烏帽子付	大江定子		
82	(三番叟)	10.5× 7.4	11.8	引栓	肌色	ズラ	返り目 口開	烏帽子付			門田塗り直し。やや小さめ。
83	(三番叟)	10.2× 8.0	12.0	引栓	肌色	ズラ	返り目 口開	鉄砲ざしか	由良亀		先代の時に製作。
84	検非違使	11.2× 8.2	12.0	引栓	白	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ目			佐倉義民伝の 宗吾	古い。やくざっぽい 者に使用。
85	端役	11.2× 8.4	11.8	引栓	濃肌	ズラ		鉄砲ざしか		佐倉義民伝の 八五郎	古い。殺される端役。
86	(文七)	11.6× 8.0	13.5	引栓	白	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ目		由良亀	阿波鳴の十郎 兵衛	新しい。
87	男子役	9.4× 7.8	11.4	引栓	白	ズラ	下がり眉	手ぬぐい付		東海道中の子 ども	古い。東海道中のみ で使用。
88	小娘 (女子役)	8.4× 5.7	11.1	引栓	白	ズラ			由良亀	阿波鳴のおつ る	古い。おつる黒子な し。
89	男子役	7.7× 7.6	11.0	引栓	白	ズラ				やさしい柿木 の子ども	古い。腕白。古典で は使用せず。
90	小娘 (女子役)	8.4× 6.3	11.5	引栓	白	ズラ					古い。高貴な子。古 典使わず。
91	(娘)	8.5× 6.3	11.1	引栓	白	ズラ					門田修理。使わない。
92	(女子役)	8.4× 5.9	11.0	引栓	白	ズラ		木粉製	五代目古柳		練習用。木粉製。
93	男子役	10.4× 7.5	11.6	引栓	白	ズラ		焼印「西川古 柳」			古い。修理。使わな い。
94	子役	8.0× 5.1	11.4	引栓	白	ズラ				信田妻の子供 (安倍清明)	古い。
95	小娘 (女子役)	9.0× 6.0	11.3	引栓	白	ズラ					古い。かぐや姫。新 作で使う。
96	*猿	8.1× 5.6	11.8	無	赤茶	彫付					古い。猿廻しか。説 経節でも使用か。
97	坊主	11.8× 8.7	12.2	引栓	肌色	彫付	口開			芝浜の丁稚	古い。門田塗り直し。
98	つめ	11.4× 8.1	13.0	無	肌色	彫付					古い。門田直し。固 定の役無。
99	つめ	11.8× 9.1	15.0	無	灰色	彫付		カラス			カラス。門田直し。 演目不明。
100	つめ	11.0× 8.9	14.2	無	白	彫付					門田修理。朝顔話に 使用か。
101	つめ	11.8× 7.0	13.5	無	濃肌	彫付					門田修理。使用せず。
102	(娘)	10.0× 7.0	11.8	引栓	白	ズラ	眠り目	鉄砲ざしか			門田直し。古柳座の 顔と違う。
103	(源太)	12.2× 7.4	12.8	引栓	白	ズラ	アオチ眉 ニラ ミ目	非定型			102に同じ。それほ ど古くない。
104	*死神	14.0× 7.5	12.2	引栓	白	植毛			五代目古柳	死神	ドン・キホーテの型 を使用して製作。
105	*青年	10.3× 7.0	13.0	引栓	白	ズラ		紙製 布付	五代目古柳	スーホの白い 馬	紙製。20年ほど前 に製作。

番号	首名称	面長× 面幅	胴串長	顔き	塗色	毛髪	機巧	備考	作者	演目・役名	コメント
106	* 日本武尊	12.0×8.8	12.0	引栓	白	ズラ		紙製	五代目古柳		紙製。琵琶と新作で上演。
107	* 西洋の女	10.5×7.2	12.5	引栓	白	ズラ		お歯黒	五代目古柳		外国人来日という話。お歯黒。
108	* 一つ目	13.7×10.4	12.5	小猿	白	彫付			五代目古柳	迷宮譚	岸田理生脚本。大掛かり。
109	* 狸	12.9×13.7	12.3	小猿	茶	布貼		布貼	五代目古柳	迷宮譚	
110	* 狸	14.4×15.8	12.0	小猿	茶	布貼		布貼	五代目古柳		子どもに見せる。狸の三番叟。
111	* すずめ	11.9×13.4	12.3	小猿	茶	布貼		布貼	五代目古柳	迷宮譚	
112	(死に首)	9.5×7.0	無	無	白	ズラ			五代目古柳		
113	(塗はがし 文七)	11.5×8.4	無	無	無	無	アオチ眉 ニラミ目				昔からあった。
114	* お面一式3点	10.9×8.4 10.5×8.5 11.0×7.5						左から火男、おかめ、女		団子売	おかめ、火男は4代目作。
115	* 梨割	11.6×8.4	14.2	小猿	濃肌	彫付	梨割	引栓→小猿			立ち回り、チャンバラ。
116	* ガブ	10.8×7.9	13.0	小猿	白	ズラ	ガブ角出			日高川	古い。
117	* ガブ	10.2×7.4	12.2	引栓	白	ズラ	ガブ角出	ガラス目		日高川	古い。ガラス目のガブ。
118	振り返し(双面娘・狐)	10.5×7.2 11.0×8.0	11.2	無	白	ズラ		狐眉植毛			古い。
119	振り返し(双面娘・鬼)	9.8×7.4 10.9×7.6	12.0	無	白	黒白	角出				古い。
120	お岩さん(面付)	10.2×8.0 10.6×6.8	13.8	引栓	白	ズラ	面外れる	ガラス目 顔汚し			
121	(文七)	12.7×8.9	12.5	引栓	赤	ズラ	アオチ眉	鉄砲ざしか			
122	(源太)	11.0×8.5	12.4	引栓	白?	ズラ	アオチ眉 寄り目	烏帽子付			
123	(西洋の女)	10.7×7.0	10.5	小猿		ズラ		プラスチック製 引栓→小猿			
124	(西洋の男)	11.0×7.9	12.2	引栓							
125	(狸)	15.0×15.4	12.2	小猿							
126	(狐)	13.0×14.2	11.5	引栓							

(四) 首^{かしら}データ表についての所見と解説

データ表凡例に記したように、先に掲載したのは、西川古柳座所蔵の首^{かしら}、一二六点についての調査成果である。この一二六点は首収蔵庫にて大切に保存・継承されている首である。稽古場にある五代目西川古柳製作の練習用首は除いている。

データ表に沿っていくつか所見を述べ、解説を加える。

1 名称

名称は、西川古柳座の伝承を示す観点から四代目西川古柳が使用していた呼称を優先し、そこに五代目の呼称と名称不明の場合は、大谷津が仮に（ ）をつけ名称を付した。四代目西川古柳の使用していた名称は、新藤恵久が四代目西川古柳の協力により平成十二（二〇〇〇）年三月から開始した撮影「新藤二〇〇〇 六四頁」の際に作成された「平成十二年六月二十五日」付けのメモに記されたものである。メモは新藤恵久撮影の首のポジフィルムとともに西川古柳座に保管されていた。

四代目が伝える首名称は、ほとんど三人遣いの人形浄瑠璃の首の名称である。首は顔の類型からして人形浄瑠璃文楽系統であるが、No. 34、35、75、76、77、79等は文楽首の類型ではあるが、やや素朴な印象である。

2 寸法

首の大きさについては、一見して小ぶりに見える首があった（No. 26、27）。いずれも娘の首だが、面長が九センチ前後である。首の寸法は、永田衡吉『改訂日本の人形芝居』によれば、「女カシラは三寸五―六分」、十八世紀中期三人遣い成立以後はこの大きさで、三

人遣い以前は「女カシラ三寸」（二寸Ⅲ三・〇三センチ、三寸Ⅱ九・〇九センチ 筆者注）を基準とするという。九センチ前後ならば三人遣い成立前の小ぶりの首と同等である。江戸系の首はやや小ぶりと言われ、江戸系首の様相と見ることもできよう「永田 一九六九 五七九（五八〇頁）」。

ちなみに、永田の前書によれば三人遣い首の主役（文七、検非違使）は四寸（二・一二センチ 筆者注）、三人遣い以前は「三寸四、五分」とする。文七も四寸以下の首がみられ、主役級の首でも同様のことが言えるかもしれない。

3 胴串・領き形式

胴串に施されている領きの仕掛けの形式は、ほとんどが引栓式であった（構造図参照）。引栓式は人形浄瑠璃文楽の首、即ち大阪系の首の領き形式である。古柳座の首の胴串は、新しく修理・付け替えがなされていて、その際に引栓式が選択されたということかと思う。それ以前は、やはり引栓式であったか、またはもう一つの領き形式である小猿式であったかは不明であるが、以前には小猿式という領き形式の胴串もあったと五代目西川古柳から伺ったことがある。小猿式は東日本の各地の人形芝居で見られる領き形式で、人形表現としては引栓式より大きく荒い動きにはなるが、操作は引栓式より容易である。

ちなみに戦前から継承された首の中で唯一No. 32婆の胴串の領き形式は小猿式であった。ここからも、五代目の記憶通り、付け替え以前の胴串には引栓式、小猿式が混在していたのではないかと推測する。小猿式、引栓式いずれにせよ遣い手が遣いやすい形を求めるのは当然のことであり、四代目、五代目が遣いやすい形式を求められた結果が今の形といえる。

4 塗りかえ・修理

多くの首はきれいに塗り替え修理がなされている。西川古柳座に伝承されている古い首はNo.58白太夫を除き、すべて昭和四十(一九六五)年以降塗り直しや胴串の新調を行ったという。

データ表では修理の依頼先として由良亀、門田末弘という名前があがっている。由良亀さんは四代目が文楽の方からの紹介、門田さんは五代目が淡路人形の方から紹介してもらったと五代目から伺った。

由良亀は三代目日本名藤本玉美(大正十一(一九二二)年―平成九(一九九七)年)、淡路島の人形師である「兵庫県三原郡三原町教育委員会二〇〇二(二〇一八)年」は徳島県徳島市の人形師、人形末弘である。ご存命の平成二十九(二〇一七)年五月四日服部真理の聞き書きによると、五代目襲名以降、十年以上携わり今までに十九点(首と手足)の修理や塗り直しを行った。その際、首の内側に銘があったのは鬼一、一点のみであったという。在銘の鬼一(No.61)については6、墨銘・



写真1 斎藤清二郎が文楽座に問い合わせ作成した車人形首修理の見積書

製作者の項で述べる。

四代目・五代目の時代には四代目・五代目が自ら修理を行っている。同時にプロの細工人にも依頼していたようである。

四代目は「車人形が発展して行くにはどのようにしたらよいのか」「まず保存と技術の習得に力を入れ」たという。「基礎から技術を学ぶために文楽座の方の指導を仰ぎ

修行し」、「また、かしらの修理・手・足・胴の製作・収蔵庫の完備等々」にも力を注いだ「八王子車人形・説経浄瑠璃の会 一九八三(一九八三)年」。

昭和四十年代に斎藤清二郎を通じて関西方面へ修理・新調を依頼していることを示す、斎藤清二郎の文楽座、淡路人形座への依頼の手紙、見積書などが残る【写真1】。神奈川県川崎市の人形劇団ひとみ座の人形細工人であった斎藤徹からの書面があった。狐の人形を作ってもらったという。

5 現代の首製作者

今回五代目の聞き書きにより、首製作者として由良亀、大江定子、四代目西川古柳、五代目西川古柳があがった。

由良亀作はNo.40、41、47、55、83、86、88等である。

大江定子は徳島県鳴門市の人形細工人四代目大江巳之助(明治四十(一九〇七)年―平成九(一九九七)年)の妻。四代目大江巳之助は昭和五(一九三〇)年文楽座に入り、戦後国立文楽劇場付人形細工人となった。文楽座の首は昭和二十(一九四五)年大阪大空襲でほとんどを焼失したと言われるが、その後、現在の文楽で遣われている首のほとんどを製作したことで知られている「吉田二〇〇六一(二〇〇六)年」。大江定子も鳴門市の自宅工房にて製作を行った。大江定子作はNo.13、24、81である。

西川古柳座には大江巳之助から四代目宛の年賀状が多数残ることから、交流があったことが伺える。大江巳之助にも首製作の依頼をしていたが、存命中に実現しなかった。五代目西川古柳によれば、大江定子に平成十六(二〇〇四)年ころ会い、首製作を依頼したという。

四代目五代目とも自ら首を製作する。四代目五代目とも自ら首を製作する。両者ともよく由良亀に習いに行ったという。四代目が平成四(一九九二)年由良亀に指導を受け製作した若男【写真2】、「人

形首寸方の取方」と題した四代目の和綴本も作っていた【写真3、4】。データ表ではNo.50源太が四代目作と伝わる。

五代目も新作上演に際して製作している。No.8、10、46、92、104、111、2等がそれである。



写真2 四代目西川古柳製作中の若男首「首製作写真集由良亀氏指導若男製作古柳 平成四年三月」と書かれたアルバムに残されている。

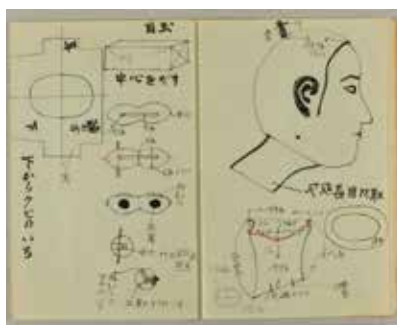


写真4 『人形首寸法の取方』の一部



写真3 四代目西川古柳作成の『人形首 寸法の取方』

6 墨銘・製作者

首には、首内に首製作者の氏名・制作年が記されていることがある。今回に調査では首内を確認することはできなかったが、門田が修理した際に修理記録として残した写真があり、その中に銘があった。それはNo.61鬼一で、首後部内に、墨で「天保三 辰ノ秋」「駿府上横田町 人形屋長右衛門 作也」とあった【写真5、9】。これは駿府長兵衛系統の首である。

駿府上横田町人形屋長兵衛という人形細工人の存在は、静岡及び

周辺に残る複数の在銘の首によって確認できる。No.61は「長右衛門」で「長兵衛」ではないが、同系の人形細工人ではないか。斎藤清二郎『日本の〈首〉かしら』に、「駿府（現、静岡市）には明和のころから安政にかけておよそ一世紀の間に、駿府上横田町に初代と二代の中嶋屋長兵衛とその一門の長蔵、長右衛門らの細工師がある」とあるので、やはり「長右衛門」は中嶋屋長兵衛一門の細工人とみることができ「斎藤一九六四 一二五頁」。

首の在銘・製作者については、今回は未確認であるがこの他に大江万造他数名の製作者の名が伝わる。それらについては第五章第五節で述べる。



写真9 No.61 修理後 門田末弘撮影



写真7 No.61内部 門田末弘撮影



写真5 No.61鬼一 修理前 門田末弘撮影



写真8 No.61内部 門田末弘撮影



写真6 No.61修理時の写真 門田末弘撮影

7 焼印

首の胴串やノド木、首内等に焼き印がある場合がある。焼印は製作者や修理者、所有者が押す場合が多い。

前出No.32婆は胴串には焼印があり、修理で消えかけているが、「□善」と見える。【写真10、11】「善」というと江戸の人形師福屋善伯を想起させる。福屋善伯はNo.30三番叟の製作者といわれる「山田一九八〇二〇五頁」。同書によれば文政年間の作とするが、山田庄一は福屋善伯についてはよく知らないという。『義太夫年表 近世篇 別巻〈索引篇〉』にも福屋善伯の名は見当たらない。



写真10 No.32 胴串 鎖きは小猿式になっている。



写真11 No.32 胴串に「善」の字が見られる。



写真12 No.49 胴串に「天狗久」の焼印が見られる。



写真13 No.54 胴串に「西川古柳」の焼印が見られる。

No.49口開き文七の胴串に「ワダ天狗久」【写真12】、No.54検非違使の胴串に「西川古柳」【写真13】、No.93男子役の胴串に「西川古柳」とあった。これ以外に胴串修理で判別不能であったが焼印らしきものがNo.4坊主等に見られた。

「ワダ天狗久」は徳島市国府町和田の人形細工人天狗屋久吉の用いた焼印である。天狗屋久吉は阿波の人形師を代表する存在で三代にわたった。初代（安政五（一八五九）年～昭和一八（一九四三）年）は、本名吉岡久吉、宇野千代の小説「人形師天狗屋久吉」等 dengan 有名である。硝子目を考案、写実性を高め、大型化したと言われる。

二代（明治十三（一八八〇）年～大正四（一九一五）年）吉岡要は初代の女婿で、三十六歳で没し、秀作はあまりないという。三代（明治四十四（一九一二年）～昭和五十三（一九七八）年）吉岡治は二代の二男。幾多の秀作を残し66歳で急逝したという「久米一九八八一九五～一九七頁」。

天狗久の一連の資料は、二〇〇二年「阿波人形師（天狗屋）の製作用具及び製品 附 販売資料」一一〇七点附五十一一点が国の重要有形民俗文化財に指定された。

一般に焼印から製作者か修理者か判断は難しいが、No.49の場合は初代天狗久の修理のようである。その理由はこの後述べる。

8 No.49口開き文七

No.49口開き文七は、口開きは切り顎で、顎が落ちて口が開く仕掛けになっている。文七のこの仕掛けは珍しい。No.49は西川古柳座に古い写真が残る【写真14】。また類似する写真の裏に「駒蔵作 吉岡久吉修繕」とあることから、先の焼印は初代の修繕の印とみることができよう。



写真14 No.49 塗り替え前の写真

この首は、昭和三十九（一九六四）年に新宿伊勢丹で開催された展覧会図録『浄瑠璃人形の歴史 日本 首のかしら展』の出品目録にも、「阿波・淡路系 角目 馬の伝駒三作

石井真之助氏蔵」として出品され、写真も掲載されている。また、西川古柳座には「阿波・淡路系 15角目 伝馬の背駒三作 石井真之助氏蔵 阿波の人形師の祖と伝承される伝、馬の背駒三の作で、のちに初代の天狗久が塗り替えた。」と書かれたキャプションも残る。ちなみに、この展覧会にはNo.61人形屋長右衛門の鬼一も出品されたようで、目録に「駿河系 舅 天保三、駿府、人形屋長右衛門作 石井真之助氏蔵」とあった。

この時点ではともに石井真之助所蔵であったことがわかる。

切り顎の文七の例は、たいへん珍しく、阿波の馬之背駒蔵作と伝わる首、駿府長兵衛の首など数例しか事例を知らない。また文七ではないが、西川古柳座との縁が深い吉田冠十郎旧蔵の首にも切り顎があった。次に各々、簡単に解説しておく。

(一) 阿波の馬之背駒蔵作

一例めは、阿波の人形師の祖といわれる馬之背駒蔵作と伝わる首である。

馬之背駒蔵とは、「七十年を彫る 初代・天狗屋久吉芸談 昭和十五年〜十八年」「久米一九八八六〇頁」によると、

阿波の人形師の最初の人馬之背駒蔵という人であります。明和頃に淡路に生まれて、元は仏師でありましたが、後に人形遣いとなり、大岡馬之瀬（徳島市助任本町大岡馬之瀬）に参って住みつきました。更に人形役者となり「馬之背」ものと申して居りました。名作を残しました。が、仲々見当たりませぬ。珍重されております。

という人物とされる。馬之背駒蔵は、人形細工人初代天狗久の、この口承によって知られるが、他に文献などは今のところ発見されて

おらず、在銘のある首も確認されていない。

いわゆる伝説的な細工人であるが、馬之背駒蔵作と伝わる首に切り顎の首がいくつかある。それらは写真で紹介されていて、「久米一九八八一九〇頁」、「斎藤一九六四八九頁」などがそれである。

斎藤清二郎の同書一五〇頁には天狗久の口承を踏襲した解説がある。斎藤清二郎は他に「駒三（同書表記 筆者注）は顎落ち形式を考案したと言われるが、これを裏づける資料はない」「駒三を享保年間の人と伝承されているが、私はせいぜい天明・寛政頃の人と推定している」と、顎落ち考案者説を否定し、推定活動年代を推定する。

西川古柳座には斎藤清二郎の、おそらくNo.49と思われる切り顎の文七の挿絵と直筆のメモ、石井真之助宛の手紙が残る。

(二) 駿府長兵衛首

永田衡吉は、駿府長兵衛は「切りアゴの技術を持つ」といい「永田一九六九五九一頁」、初代長兵衛の切り顎のかしら写真を掲載する「永田一九六九五九九頁」。静岡県賀茂郡西伊豆町仁科、佐波神社所蔵の切り顎の文七は、筆者も平成十四（二〇〇二）年に調査を行い実見している。

(三) 矢崎家所蔵

東京都港区の矢崎家が所有する浄瑠璃人形の首の中にも、切り顎の首がある。矢崎家の首・衣裳類は、かつて吉田冠十郎が所有していた道具類である。吉田冠十郎の首等が矢崎俊三所蔵となっていたことについて、「永田一九六九四二二頁」にも「彼（吉田冠十郎 筆者注）が愛用したカシラ約百個は、いま東京の矢崎蔵」とあり、古くから知られていた。現在は区立港郷土資料館寄託となっている。「大谷津二〇〇二三四〜六七頁」によると、旧吉田冠十郎所有の首七一点の中には、吉田冠十郎在銘の首が一点、西川伊三郎の墨銘のあ

る肩板、胴付下着等、他半三郎、新七、かん二、五郎兵衛の在銘の首がある。まさに江戸人形芝居最後の遣い手の系譜を物語る一連の首といえる。その中の景清首（前出「矢崎家所蔵人形浄瑠璃のかしらについて」五三頁のデータ表のNo.10）が切り顎である。

西川古柳座と吉田冠十郎の関係の深さは周知のとおりであるが、双方に切り顎の首が存在することからも何らかの関連を憶測したくなるが、本稿では指摘のみにとどめておく。

9 鉄砲ざしの首

鉄砲ざしについては本節の凡例で述べた。その鉄砲ざしと思われる首を指摘しておきたい。No.17、23、28、40、58、59、63、65、76、78、83、85、102、121はやや顔が上を向く【写真15、16】。No.11、36、49はノド木の後ろに木片が付いていて、鉄砲ざしを矯正した形跡が見られた【写真17】。江戸東京の人形芝居は鉄砲ざしといわれ「石割一九四三一二三頁」、江戸東京の人形芝居とのかかわりが推定される。



写真17 No.49 ノド木に木片が挿入されている。



写真15 No.58 顔仰角が少しきつい。



写真16 No.59 顔仰角が少しきつい。

10 新車人形の首

両耳後ろに金環がついている【写真18】。五代目西川古柳によれば、約二十個ほどあるという。No.1、2他がそれである。遣い手の顔を動かすことで人形の首を操作する新車人形の首に必要なもので、



写真16 No.1 耳の上に金環が付されている。

新車人形に用いられる首であることがわかる。洋舞の首は新車人形のみで使用するが、その他の金環がついている首は、新車人形として使う場合と、胴串を左手で支えて遣う場合とがある。

以上、思いつくままに所見を記したが、これらを踏まえ、また補足しつつ第五章第五節にて更に私見を述べたい。

（執筆者 大谷津 早苗）

参考文献

- 石割松太郎一九四三『人形芝居の研究』修文館
大谷津早苗・安蔵裕子二〇〇二「矢崎家所蔵人形浄瑠璃のかしら・衣裳について」（港区立港郷土資料館『研究紀要7』）
久米惣七一九八八『阿波の人形師と人形芝居総覧』創思社
斎藤清二郎一九六四『日本の〈首〉かしら』岩崎美術社
斎藤清二郎監修一九六四『浄瑠璃人形の歴史 日本の首（かしら）展』新宿伊勢丹
新藤恵久二〇〇〇「車人形の救世主」『うなづき』八王子車人形後援会
永田衡吉一九六九『改訂日本の人形芝居』錦正社
兵庫県三原郡三原町教育委員会二〇〇二『伝統芸能 淡路人形浄瑠璃』八王子車人形・説経浄瑠璃の会一九八三『車人形』新門出版社
吉田文雀監修・解説二〇〇六『国立文楽劇場所蔵 文楽のかしら』国立

文楽劇場

義太夫年表近世篇刊行会 編纂 一九九〇『義太夫年表 近世篇 別卷（補

訂篇 索引篇』八木書店

山田庄 一九八〇『かしら 日本の人形芝居』立風書房

二 人形衣裳

西川古柳座には、初期の八王子車人形としての興行（昭和四十年代まで）に使用された衣裳類が六十九点と肩板、胴輪二点が保存されている。現在公演で使用する衣裳は約百三十点に及ぶ。

以下、初期の衣裳六十九点の各衣裳の実測記録、および現代の人形衣裳の一部を示す。さらに、初期の衣裳の上演時の写真とともに、所見を述べ、西川古柳座所蔵の初期の車人形衣裳について解説する。実測に際し、筆者が港区博物館蔵の人形浄瑠璃の衣裳調査を行った際に作成・掲載した図「大谷津早苗・安蔵裕子 二〇〇二六一頁」を基盤とし、五代目西川古柳座における調査をもとに一部改訂した図（図1）を用いた。なお背面に開けられた人形遣いの左手を差し込む開口部の名称について、五代目西川古柳は、特定の呼称は用いていないとしているが、このたび衣裳制作に携わってきいた三河恵子に行った聞き取り調査において提示された「手入れ穴」という呼称を使用している。機能面からみて実態に即した用語と思うからである。

凡例

記録方法は、主に外觀、形状、構造上の観察、実測、写真撮影によるものである。一部の資料については、その由来や背景、使用された記録の調査との照合を行った。

表1に表記した実測データの凡例

1 表1に記した衣裳資料のNo.1～No.69までは、風呂敷包みに分け保管されていたもので、各包みを順次解きながら資料ナンバー

を付した。実測及び写真撮影もその順に行った。

2 表に記した各部位は、図1に表した。

3 名称は形態的に大きく捉え、小袖、羽織、肩衣、袴、帯、と表記した。小袖には、長襦袢などの下着類も含まれると考えられるが、着装方法が不明確なものは特定していない。袖の振りが長いものは振袖とし、後ろ身頃に手入れ穴の無いもの、大振りて丈の長いものは打掛と推定した。但し、過去の写真資料などによって推測できたものは具体的に記した。

4 色彩は織文様との関わりで、単色では表されないが、視感で支配的な色彩を記した。

5 文様、染織は、観察によって抽出できる範囲で略記した。

6 材質は、調査方法が限定されるため、観察による織組織、光沢・風合いなどの面から暫定的に記した。

7 前身頃裾の内側に、球状のものが縫い付けられている場合は、人形の足の動作を表現するための仕掛けと考えられることから、特記事項欄に「球体のかかり有り」と記した。

8 前身頃裾の内側に、布片が縫い付けられている場合は、それを垂れ布（蹴出し）とし、特記事項欄に「垂れ布（蹴出し）有り」と記した。

9 袖下の角に作られた明きについては、袖幅と袖丈との関係を表すため、「袖幅／袖下明き」と「袖丈／振り明き」と記した。

10 「手入れ穴」は、位置と長さを拾付け下からの数値と開口部の長さで表した。また、縦に開けられたものはタテと記した。その他、背中心に開きがある場合は、同じ欄に記した。

(図1 女形小袖実測例を基本とした構成部分名称図解)

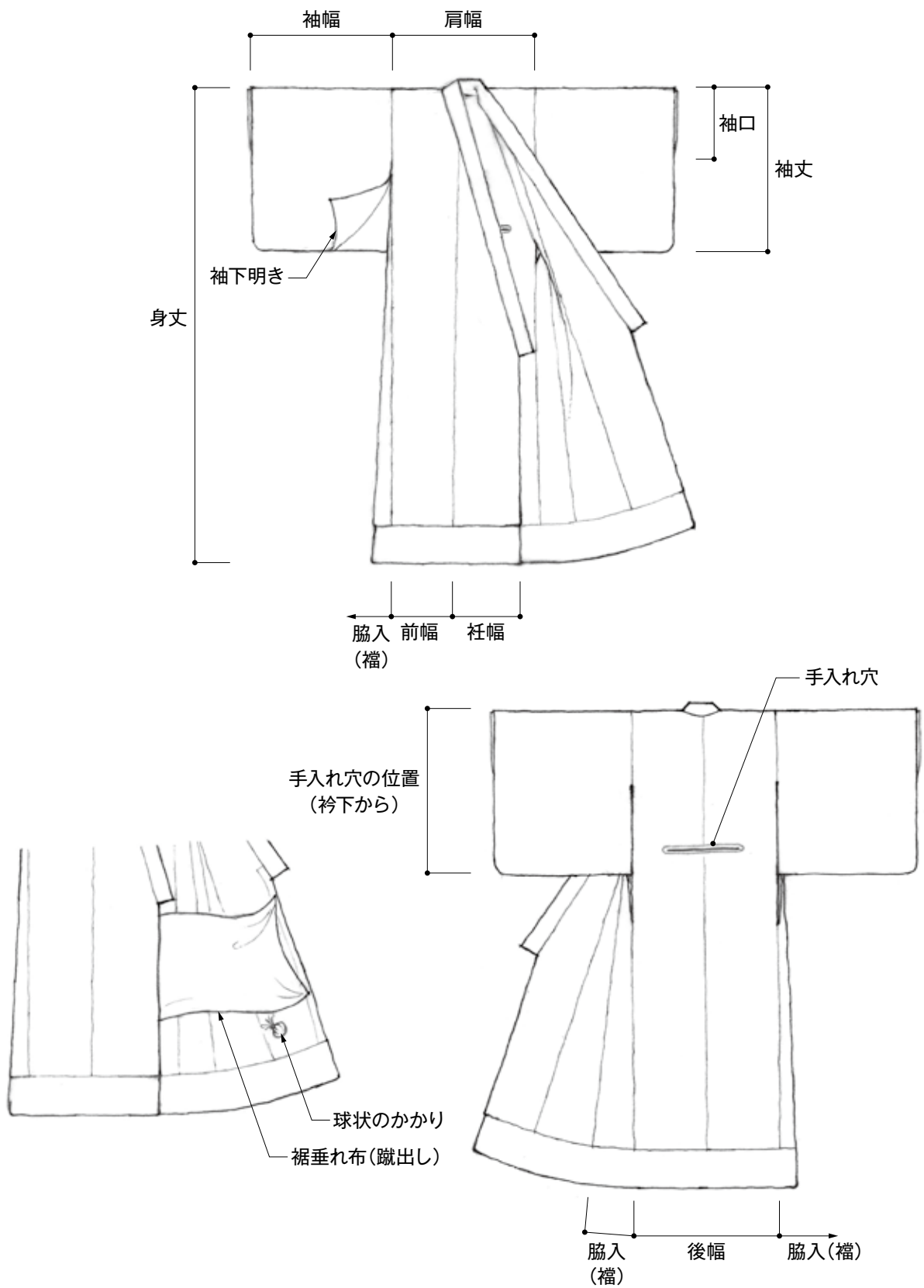


表1 初期の八王子車人形衣裳実測概要 (単位: cm)

No.	資料名(形状等)	色彩/文様/材質	丈・身丈	幅・裾幅	肩幅	袖幅/袖下明き	袖丈/振り明き	前幅	衽幅	脇入(襷)	裾襷	手入れ穴	特記事項等
01	三番叟 長襦袢	赤・白/袖に三引/木綿	87.5	32.0	32	28.5/12	35.5/21	14.5	10.5	9	-	30/15三角	3代目使用
02	三番叟 袴	若草/松	63	裾49								タテ(後紐下から)24	4代目使用
03	三番叟 上衣(素襖)	白/鶴・松(顔料描絵)/シャンタン	前70 後50		36	44	63	10.8				背割り24	4代目使用 広袖 黒の緒
04	袴	緑茶/印伝型染風/絹	72	腰幅26 裾幅38									文字文様に正平六年六月一日
05	肩衣	同上	48		衽65								
06	道中合羽	藍/縞/木綿・ピロード	54	裾幅74								背割り22	
07	肩衣	金・白/石畳・菊花	51	衽幅43	衽62								
08	袴	濃桃/金襴風/化繊	腰板下 66	腰18.5 裾39									
09	肩衣	同上	46		衽57								
10	指貫	黄土/鳳凰/絹	57	裾30									
11	指貫	群青/金糸駒詰め丸紋/絹	68	裾32									
12	羽織	群青/金糸駒詰め九枚笹にふくら雀/モスリン	65		30	2.09	38.5						
13	袖無し羽織	茶/平織/木綿	69		35							背割り29	
14	三番叟 袴(指貫)	黄緑/松(顔料)/絹	58	腰前23 裾38									3代目使用
15	三番叟 上衣(素襖)	白/鶴・松(顔料)/絹	前71 後41		34	65	広袖72						3代目使用
16	打掛(自由の衣裳)	黒/金糸駒詰め文字/別珍	90		32	31.5/19	40/23	14	10	8	10	ヨコ 25/14.5	オリジナル(No.23は復元)文字は「新」「自由」裾に馬簾
17	打掛(花と円)	黒/金糸駒詰め/絹(朱子)	105.5		33	30/13.5	36/19.5	15	13.5	10	7	29/14	手入れ穴は後に作られたもの
18	打掛(桃栗三年柿八年)	黒/金糸駒詰め文字/別珍	112.5		32	33/12	36/19.5	14	13	8.5	12		裾襷は鳳凰(有職文様風)
19	花魁の帯	黒/金糸駒詰め寿・亀/別珍	28	32							8		秋山国三郎関係資料
20	打掛	黒紫/金糸駒詰め文字・升/別珍	102		31/17	28	35/17	13.5	13.5	13	8		秋山国三郎伝来(5代目の談)
21	打掛(胴拔)	紫/花・文字(善亦美)金糸駒詰め矢羽根紋/絹	105		32	31	37.5	13.5	13.5	11	二重 15	14	胴部は紅色地 型染花紋モスリン地 帝京大にて展示された
22	振袖	朱/文字・金糸駒詰め九曜紋/縮緬	104			27	64			9.5	8	15	裾裏側に球体のかかり有り
23	打掛(自由の衣裳)	黒/金糸ミシン刺繍/別珍・サテン	88		34	33/17	広袖39/24				10	14	裾に馬簾 No.16の復元衣裳
24	襦袢(短衣)	金・白/金襴風三枚笹紋/化繊											
25	陣羽織	黒/金糸駒詰め九枚笹ふくら雀/モスリン	96		32	34	38/16.5	12		11		背割り64	衿の高さ11.5
26	小袖	紫み群青/梅花紋・金糸駒詰め/モスリン	97		33	31	35	14	12	12	二重 8	30.5/15	裾裏側に垂れ布(蹴出し)有り、球体のかかり有り、瀬沼の文字
27	振袖	若草/梅花・文字・紋・金糸駒詰め/モスリン	99		31	31	61	11.5	12.5	10	二重 9	31/15	裾裏側に球体のかかり有り 接ぎによる修復痕有り
28	広袖上衣(直垂)	浅葱/火炎に金糸駒詰め文字/毛織	57		26	51	55/42						生地が重く車人形では用いない
29	小袖	薄茶/ぼたん唐草(金襴)/絹	94		35.5	32.5/13	28/14				6	31/15	袖丸み
30	振袖	赤/金糸刺繍・楓/絹・毛			33	26/12	右79 左34/20	14	9.5	10		19	
31	羽織	赤など/織模様段替わり金襴風/木綿	59			25	30	12	なし	脇スリット			衿高い 前紐
32	小袖	薄緑/アップリケ刺繍のあと/絹	100		28	27	36	10.8	11.9	7	二重 8	17	衿は重ね
33	振袖	青色/紋付/モスリン	97			27.5	63	10.5	12.8		10	14	裾裏側に垂れ布(蹴出し)有り、球体のかかり有り

No.	資料名（形状等）	色彩/文様/材質	丈・身丈	幅・裾幅	肩幅	袖幅/袖下明き	袖丈/振り明き	前幅	衽幅	脇入(襷)	裾襷	手入れ穴	特記事項等
34	小袖	紫み群青/無地/モスリン	91		31.5	31/12	37.5/22	13.5	12.5	10.5	1	31.5/17	袖口フキピロード
35	小袖	多色/接ぎ合せ/木綿など	103		34	28/14	35.5/18	14.5	11	12	7	33/20	裾裏側に垂れ布（蹴出し）有り、球体のかかり有り 接ぎ合せ小裂は8センチ角程
36	小袖	藍/花柄小紋型染/絹	89		28	27/14	37/24.5	10	15	14	8	タテ23/17	
37	振袖	赤紫/ぼたん梅菊扇友禪染/羽二重	112		31	31.5	70	11.5	13.2	7.8	9.7	28/15	清姫の衣裳
38	振袖(短衣)	赤/花柄/傘小紋型染/絹	60		34	34	71					26/15	刺繍の半襟付き
39	小袖	黄茶/黄八丈風/木綿	98		33.5	30.5/12	38.5/23	15	13.5	10	8	32.5/16	裾裏に球体のかかりの縫い留め痕
40	小袖	黒/緋模様/木綿	101		34.5	28/12	36/19					15	裾裏側に垂れ布（蹴出し）有り、球体のかかり有り
41	小袖（五つ紋）	黒/紋/絹	100		33	30	32		11		二重6	17	裾裏側に垂れ布（蹴出し）有り、球体のかかり有り
42	小袖（三つ紋）	赤茶/紋/木綿	102		31	29.5/12.5	35.5/20/5.5	12.5	13.5	9	二重7.5	30/16	裾裏側に垂れ布（蹴出し）有り、球体のかかり有り
43	襦袢（袖なし）	白/無地/木綿	98		33		29.3	12	12	10	8	18	開口7
44	襦袢	白/地紋/化繊朱子織	77		33	34/16.5	33/22	15.5	10	12.5		28.5/22	裾から23cmの背割り
45	襦袢	白/木綿	91.5		31.5	32/13	32/31	14.5	10	11.5	8.5	29/16	袖口綿厚い
46	指貫	黄・白/洋花/化繊	51	36/32									紐付き
47	帯（T字形構成）	黒/織模様	127.5	17									たれ15×22
48	帯（T字形構成）	赤/金糸刺繍菊花・扇/サテン	196	11									
49	帯（T字形構成）	黒/金糸刺繍/ピロード	52	16									
50	帯（T字形構成）	黒・浅朱・白/麻の葉/サテン	127	13.5×36									
51	帯	赤・青・緑	75.5										
52	帯	赤/椿・菊/綾織	55	11.5									
53	帯	橙(柿色)/菊・ぼたん・八重桜/絹	73	20.5									
54	帯（T字形構成）	紫・白/鱗	164	18.5									清姫が蛇になったときの帯（五代目の談）
55	帯	赤・黒・白/橘・菊	120	55									
56	帯	黒など/金襴・桐・菊	実測値なし										
57	帯	赤/金糸駒縫・丸	50	34									
58	袋	白	43	18.5									
59	人の着物（長着）	藍/縞/木綿	92.5		31×2	31.5	42	21.8	13.6				
60	人の着物（はっぴ）	藍/つた紋型染/木綿	93		30×2	32.5	20	25					吉原つなざ紋
61	甲冑(鎧)	黒	以下実測値なし										
62	甲冑(鎧)	茶	以下実測値なし										
63	帯	鼠/方形紋織/化繊	103.5	12									
64	振袖(短衣)	白に紫/ウロコ文様/縮緬風	43.5		102	102	56.7	16.4				背割り19	中衿白の重ね
65	小袖	茶/平織/木綿	94.4		32	32/14	33/15	11.8	9.5	7	6.4	32.5/15.4	
66	小袖(內衣)	白/格子地紋/化繊サテン	81.3		32	29.2	41.5	14.3	14.3			19.3/16.8	
67	小袖(打掛)	紫/金襴風	103		30	28.7/14	37.3/21.5	10.7	10.7	6.4	6.6	30/15	
68	小袖(打掛)	緑・白・紫/金糸織	103		30	30/13.7	36/19.3	12.8	12.8	7	7.2	29/15	袖口襷はピロード 文字紋
69	小袖(內衣)	赤/菊花葉紋織文/朱子	91.3		30.5	30.5	44	12	9.3	6	6.6	30/15.5	



No.3 後



No.3 前



No.2 前



No.1 前



No.7 前



No.6 前



No.5 前



No.4 前



No.11 前



No.10 前



No.9 前



No.8 前



No.15 前



No.14 前



No.13 前



No.12 前



No.17 前



No.16 後



No.16 前



No.15 後



No.19 前



No.18 後



No.18 前



No.17 後



No.21 後



No.21 前



No.20 後



No.20 前



No.25 前



No.24 前



No.23 前



No.22 前



No.29 前



No.28 前



No.27 前



No.26 前



No.33 前



No.32 前



No.31 前



No.30 前



No.37 前



No.36 前



No.35 前



No.34 前



No.41 前



No.40 前



No.39 前



No.38 前



No.45 前



No.44 前



No.43 前



No.42 前



No.49 前



No.48 表



No.47 表



No.46 前



No.53 表



No.52 表



No.51 表



No.50 表



No.57 表



No.56 表



No.55 表



No.54 表



No.61 前



No.60 前



No.59 前



No.58 前



No.65 前



No.64 前



No.63 表



No.62 前



No.69 前



No.68 前



No.67 前



No.66 前



現在の衣裳4 肩衣



現在の衣裳3 女形小袖



現在の衣裳2 立役小袖



現在の衣裳1 帯(立役、女形)



1現在の胴1 立役



初期の胴2



初期の胴1



現在の衣裳5 長袴



4現在の胴2 内部



3現在の胴2 女形



2現在の胴1 内部



記録写真3



記録写真2



記録写真1



記録写真6



記録写真5



記録写真4



記録写真9



記録写真8



記録写真7

- 記録写真1 「信田妻」(No.22 葛の葉姫) 横浜会館公演(1929年)
- 記録写真2 「三番叟」(No.1, No.14, No.15)1965年ころ 細田榮久撮影。
- 記録写真3 市政施行五十周年パレード (No.1, No.14, No.15, No.7, No.18) (1967年)
- 記録写真4 「三床太夫」(No.11, No.12 厨子王、No.35 厨子王母) 四代目西川古柳が上演準備をする写真が『民芸手帖』42-5(1967年)に見られる。これらの衣裳を使用し、八王子車人形が説経節を地方として三床太夫を演じている映像(第28回八王子市民文化祭(1978年)(西川古柳座所蔵非公開)も残されている。
- 記録写真5 「傾城阿波鳴門」(No. 40 お弓) この写真は『東京都の文化財』(1967)にも掲載されている。
- 記録写真6 「大仏殿記 景清目玉献上の段」(No.16 景清) 国立劇場公演(1972年) 他
- 記録写真7 「日高川入相花王」(No.37 清姫) 1970年ころ
- 記録写真8 人形衣裳を着付ける三代目西川古柳 1965年ころ細田榮久撮影。
- 記録写真9 人形衣裳を繕う三代目西川古柳妻瀬沼マス 1965年ころ細田榮久撮影。

(二) 西川古柳座所蔵の初期車人形衣裳の所見と解説

(1) 秋山国三郎旧蔵の衣裳

五代目西川古柳によれば、西川古柳座所蔵の初期の衣裳のうち、No.16、No.18、No.21等は、秋山国三郎旧蔵と伝えられているという。

秋山国三郎(一八二八—一九〇三)は、明治十年代はじめに義太夫語りの豊竹琴太夫として鑑札願を出し、営業も定着したものと思われる。川口村(現在の八王子市上川町)で義太夫を地語りとする三人遣いの「川口村人形芝居」の一座をなし、明治三十二(一八九九)年、「加賀見山旧錦絵」、「一谷嫩軍記」、「阿古屋琴責の段」を宝泉寺で上演したことが日野町(現在の日野市)の「河野清助日記」に記録されている[沼二〇一五 一三二頁]。しかし明治三十三(一九〇〇)年には日野から芝居を買いに来た元請け人が秋山国三郎一座が消滅していたことを知る。経済的に行き詰まり、首、衣裳、舞台装置一式を売却し「荷車で引かれていく荷物を見送る国三郎の寂しげな姿が目撃されている」という[五味二〇一七 三頁](注1)

秋山国三郎が衣裳を制作したことについて、四代目西川古柳は「家に秋山国三郎がいて、こう衣裳縫っていてね、『お爺さん、孫が死んだんだよ』って言ってもね。『アア、そうか』って下りてこなかった」という話を聞いたと述べている[説経節の会二〇〇六 四八頁]。桜沢一昭もこの衣裳について「人形浄瑠璃の衣裳。時代ものの男の衣裳に、国三郎が長い期間をかけて自ら「自由」の文字の刺繍をほどこしたものだ。同じ衣裳の背には「新」の字が刺繍されている。旅館の二階にこもって一心不乱に刺繍する国三郎は、孫の死が報じられても、軽く応答するのみで刺繍の手を離さなかった、と伝えられ



写真1 No.16部分

う古老に聞いた話が紹介されている[川口市市区社教郷土史研究会十周年記念誌編集委員会一九八二 二四四頁]。

色川大吉は、八王子市上川町の郷土史家秋山申一氏が、秋山国三郎に義太夫を教わった瀬沼半十郎に聞き取りをした内容を次のように記している。

翁(秋山国三郎)は人形の衣裳を自ら刺繍した。これが資材は時には土地の有力者から寄付を受けた(五日市の内山安兵衛、戸倉の米山五郎右衛門、小谷田兵五郎、森久保作蔵、村野常右衛門等)。然し翁はこうした寄付者の好意に対しては、必ず人形の着物には紋章で残した。現に私の家では父の長十郎が翁に僅少の寄附をしたので、翁が人形の衣裳につけた紋章をそのまま雨傘の印に、山長(山に長)をそのまま使用している。[色川 一九八七 二三二—二三三頁]

と。西川古柳座所蔵の衣裳には、苗字や紋章の刺繍が施されたものが見られるが【写真2 6】、引用した瀬沼半十郎の説明との関連は不明である。

ている」と説明している[桜沢一九七七]【写真1参照】。その他、『川口の郷土史』にも「国太夫(秋山国三郎)は近くの若い衆を集めて、よくお祭には人形をあやつった。自分で着物を作ったり刺繍などしたりした」とい



写真4 No.27袖(背面)「土や」「土や」はNo.18にも見られる。



写真2 No.21袖刺繍「関谷」



写真6 No12 同じ紋がNo.25、No.68にも見られる。



写真5 No.68背面刺繍「谷合」



写真3 No.26背面刺繍「上」

No.16は、秋山国三郎が制作したものと伝えられている。それは、「新」「自由」という刺繍が施されており、秋山国三郎が民権家でもあったことから自由民権運動と関連付けて紹介されている衣裳である。³⁾西川古柳座所蔵になってからは、「景清目玉献上の段」の景清の衣裳として使用された写真が残されている。昭和四十七（一九七二）年、西川古柳座初の国立劇場公演（「古浄瑠璃系人形と特殊な一人遣い」）した際の演目にも「大仏殿記 景清目玉献上の段」が含まれている。No.16の衣裳には、縫い合わされ塞がれた手入れ穴から約十五センチ上に改めて手入れ穴を設けた跡が見られる【写真7】。



写真7 No.16手入れ穴部分

No.18の衣裳について、八王子市教育委員会は、自由民権運動の説明の中で、明治十四（一八八二）年に政府が十年後に国会を開設することを国民に約束したこと等の説明とともに次のように述べている。

「このうちは、川口村（八王子市上川町）の北村透谷とも親交のあった民権家秋山国三郎が、三人遣いの人形芝居のためにつくったものという。『苦界十年・面壁九年・桃栗三年柿八年』の文字があしらわれている」「八王子市教育委員会 一九八八 七三頁」

No.21は「善亦美」と刺繍され、昭和五十八（一九八三）年六月四日の『説経浄瑠璃と写し絵の会』において「小栗判官一代記」の照

手姫の衣裳として使用されている。

(2) 金糸の刺繍について

秋山国三郎旧蔵とされる三点およびその他の衣裳にも金糸の刺繍(駒縫い)が多くみられる。

画家鈴木信太郎(一八九五―一九八九)は昭和初期の八王子車人形の衣裳に関し、

人形の衣裳もそれら人形師仲間の手製だといふのであるが、黒、白、赤、紺、浅黄、紫、などの生地、松、梅、櫻などを金糸で縫ひ取りしたものが多かった。袖や帯などは嫁さん時代の女房の長じゅばんをきりぬいて縫い合わせたりしたものだそうであるが、黒縹子に金糸模様を縫いこむのに、仕事の合間合間をかけて幾年もかかって仕上げたとのことであった「鈴木一九四九」。

と詳述し、金糸の刺繍が印象的であったことを書き残している。西川古柳座所蔵の衣裳中、No.22、No.26などの衣裳が、鈴木信太郎



写真8 No.22 金糸刺繍部分

の説明に対応した特徴を備えている【写真8、9、10】。



写真9 No.26 金糸刺繍部分



写真10 No.27 金糸刺繍部分

(3) 衣裳制作者について

昭和五十五(一九八〇)年度から昭和五十九(一九八四)年度に八王子市立恩方中学校に在学した生徒の地域の調査の文集(『郷土 夕焼けの里』)に、四代目西川古柳に人形衣裳について聞き取りをした中学生による、「井上さんのおばあさん」が五十年以上前から人形衣裳を多く縫い、八年間で百枚くらい縫ったという記載が見られる

「植松 一九八七 五一頁」。五代目西川古柳には「井上さんのおばあさん」については伝えられていないようであるが、先述の鈴木信太郎の記述内容と符合し、地元の人の手によって八王子車人形の衣裳製作が支えられてきたことを物語っているといえよう。

記録写真9は、昭和四十（一九六五）年頃細田榮久によって撮影された、人形衣裳を縫う三代目西川古柳の妻、瀬沼マスである。細田榮久は撮影した写真に聞き書きを添えてアルバムを作成しているが、この写真に関しては「古柳の妻も公演の前には、衣裳をつくらなくては影ながら助けている。『公演の度にこれをやらされるんですからね』と意味ありげに笑ってみせた」と記している。三代目西川古柳逝去に関する新聞記事（昭和四十四（一九六九）年十月九日朝日新聞東京版）にも「妻マスさん（七四）は、ずっと人形の髪ゆいや衣装直しを手伝ってきた。『きまってせっぱつまったところにやらされるんです。それで注文がむずかしくって。でも、もうあの苦労はしたくてもできないうです』とうつむいた」と述べている。

（4）芸能の変遷の過程が分かるもの

①三番叟衣裳

三代目西川古柳（瀬沼周助）の使用した三番叟衣裳（No.1、14、15）、四代目西川古柳（瀬沼時雄）の使用した三番叟衣裳（No.2、3）ともに上衣が白地、袴が緑色をしており、袴の生地は染めていることが分かる。これらの衣裳を使用して三代目西川古柳は附け板の地方による三番叟（「服部二〇一七」参照）、四代目西川古柳は長唄と義太夫の地方による三番叟を演じており「創価大学八王子研究会 一九七五頁」、義太夫の地方とともに演じる現在の三番叟以前の変遷の過程を伺うことができる。No.14、15に比べ、No.2、3は傷みが少ない。四代目西川古柳は昭和五十（一九七五）年頃には現在使用されている



写真11 No.3 脇の部分に力布があてられている

ことや、傷みやすい場所に力布【写真11】があてられていることなどが考えられ、使用しながら工夫して制作したことが伺える。力布は西川古柳座所蔵の車人形衣裳の多くに施されている。

②清姫の衣裳

No.26、27、37、64は「日高川入相花王」の清姫の衣裳として使用されている。五代目西川古柳は「日高川入相花王」を西川古柳座十八番であったと語っており、傷んでは新たに次の衣裳を制作したことが伺えよう。

（5）車人形衣裳の構成上の特徴

初期に用いられた衣裳の制作方法の特徴としては女形の足の「かかり」が、布で作った球状をしていたことが挙げられる【写真12】。



写真12 No.35 球状の足のかかり

る衣裳と同型の黒地の衣裳の三番叟を演じており、No.2、3の使用期間は限られていることもあると考えられるが、五代目西川古柳は「四代目はこの衣裳（No.2、3）でもよく公演した」と述べている。劣化がほとんど見られないのは、シャンタンという織布で出来ているため丈夫であった



写真14 No.37 脇の下にマチ部分が見られる。



写真15 No.67 裾襖(フキ)部分



写真13 女形脚の動きを表現する仕掛け

文楽の三人遣いでは、足遣いがこれを手で持って足の動きを表現する。女形の足は昭和五十二(一九七七)年には、これらの球状の足ではなく、現在のものと同様の棒状のもの【写真13】が使用されるようになっていた【佐藤一九七七 三頁】。

初期の衣裳に限らず、現在用いられている衣裳についても当てはまる構造として取り上げるとすれば、基本的に綿入れであり、小袖や打掛には脇縫いに三角形のマチ(襠、脇入れとも呼ばれる)を入れ、裾の拡がりが保たれていること【写真14】、裾に幅広の襖(ふき)【写真15】が設けられていること、などが挙げられる。



写真17 五代目西川古柳による胴輪の製作



写真18 五代目西川古柳による肩板の製作

2 肩板・胴輪および着付けについて
西川古柳座では、演目の増加や公演回数増加に対応できるよう、衣裳を着付ける土台となる肩板、胴輪を製作している。【写真17、18】詳細は本書第五章第六節に詳述するが、衣裳の着付けは五代目西川古柳が行っている。

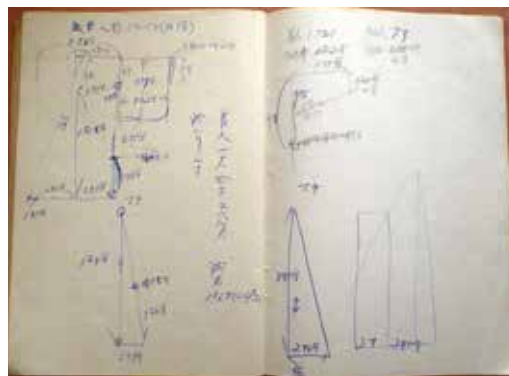


写真16 四代目西川古柳旧蔵の衣裳制作ノート。衣裳の裁ち方が描かれ「マチ」が記載されている

なお、昭和四十五（一九七〇）年頃まで、瀬沼家は織物業を営む傍ら八王子車人形の興行を行ってきたが、初期の車人形衣裳に用いられている生地と家業の織物あるいは八王子織物との関係は分かっていない。五代目西川古柳は、「昭和四十年頃はウールの織物を生産していた。売り物である反物を人形の衣裳にすることはなかったと思う」と述べている。菱山愛子は、人形衣裳と織物について「八王子は織物都市と云われるだけあって、古くから織物が盛んであった。車人形の遣い手も機業家が多く、従って人形に着せる衣裳の面で不自由するような事はなかった。しかし、人形の衣裳のために特に粋を凝らした生地を織ったり染めたりする余裕もなかったから、大抵黒・白・紺・浅黄・紫等の無地に、松・梅・桜等の花模様を金糸で縫取りしたものが多く、しかも、それらは全部人形師仲間の手製によるものとの由。」と述べている。

注1 五味元による、秋山国三郎と同時期に川口村の義太夫語りであった鶴澤亀雀の子孫への聞き取りによる。

2 色川大吉『明治精神史』に秋山国三郎の衣裳に関する記載があることについて、細田明宏氏より御教示いただいた。

3 「小西一九七九 六九頁」は「当時の民権運動に使用したものであろう」と説明している。「小笠原一九八七 二頁」はこの衣裳について、「民権運動から派生した政治演劇の萌芽として注目される」と説明している。中学校の歴史の教科書においても自由民権運動の紹介の中で、この衣裳を着た人形の写真とともに「自由」の文字のついた芝居用の人形 当時、さまざまなものに「自由」の文字をつけることが流行しました」と書かれている。「帝国書院二〇一六 一七三頁」

4 「菱山 一九六八 三八頁」

（執筆者 安蔵 裕子）

参考文献

- 色川大吉 一九八七『明治精神史（上）』講談社学術文庫、講談社
- 植松森一編集 一九八七『郷土夕焼けの里』文成社
- 大谷津早苗、安蔵裕子 二〇〇二「矢崎家浄瑠璃人形のかしら・衣裳について」『研究紀要7』（矢崎家資料調査）東京都港区教育委員会
- 小笠原幹夫 一九八六「芝居にみる自由民権」『日本近代文学』第37集、日本近代文学会
- 川口地区社教郷土史研究会十周年記念誌編集委員会 一九八八『川口の郷土史』川口地区社教郷土史研究会十周年記念誌編集委員会、清水工房
- 小西四郎 一九七九『図説 昭和の歴史1 昭和史の原像』昭和の歴史刊行会、集英社
- 五味元 二〇一七『説経節考察―庶民芸能の視点から』『説経節の会通信No. 一五八』説経節の会
- 桜沢一昭 一九七七『幻境 風流なる田人』秋山国三郎『第三文明』
- 佐藤広 一九七七「八王子車人形の現状」〔八王子市郷土資料館だより〕No. 1
- 鈴木信太郎 一九四九「八王子車人形覚書」『諸国の人形芝居』（河竹繁俊編）大日本雄弁会講談社
- 説経節の会 二〇〇七「恩方の説経、芸を残すということは・・・語り手四代目西川古柳」『説経節の会二〇周年記念誌 説経太夫列伝 ―聞き書き集―』説経節の会
- 創価大学八王子研究会 一九七五『八王子を語る』八王子帝国書院 二〇一六『社会科 中学生の歴史』帝国書院
- 沼謙吉 二〇一五「八王子車人形と秋山国三郎」『説経節研究 ―歴史資料編―』説経節の会編集 方丈出版
- 八王子市教育委員会 一九八七『八王子の歴史と文化』八王子市教育委員会
- 服部真理 二〇一七「八王子車人形の初期の三番叟について」『文化財年報』10
- 菱山愛子 一九六八「八王子車人形について」『多摩文化』二十号 多摩文化研究会

三 西川古柳座所蔵のろくろ車の記録

ろくろ車は、前に二輪、後ろに一輪の車輪がついた人形遣いの乗る箱型の車である。ろくろ車の構造は以下に見るように、八王子車人形の初期から大きく変わることなく、現在に継承されている。本項では八王子車人形西川古柳座所蔵の初期（昭和四十年代まで）のろくろ車二点（ろくろ車1、ろくろ車2）と現在使用されているろくろ車（ろくろ車3、ろくろ車8）の写真、実測データ、所見データの記録を示す。現在西川古柳座以外で所蔵されている八王子車人形初期のろくろ車

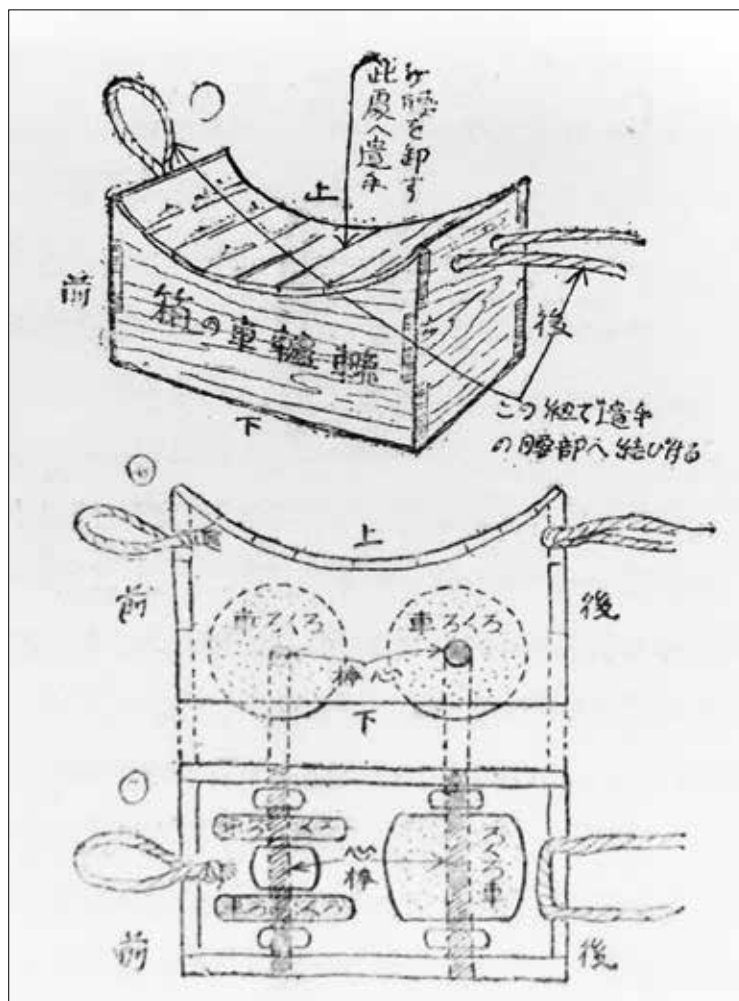


図1 小田内通久によるろくろ車の図(『民俗藝術』1-5より)

については、各地の車人形のろくろ車とともに第五章第七節で扱うこととする。

先行研究において、小田内通久他により、ろくろ車は概観図と側面、底面の二面で作図されて実測されている⁽¹⁾。

筆者は各々の資料の調査を通して、ろくろ車の変遷の特徴等を捉えるため、前面と後面双方も実測し記録することとした。現在西川古柳座で使用されているろくろ車（本項で示すろくろ車5）に基づき四面図（本項末）を作成し、図中に番号を付した各部分（名称は記録のために筆者が設定）を可能な限り計測することとした。

なお、以下に取り上げる現在使用されているろくろ車3、ろくろ車8は、同じ型のものが各々複数個存在するが、各型のろくろ車を一点ずつ実測し、調査した。調査、撮影に期間を要したため、同じろくろ車番号の資料でありながら、異なる資料を撮影している場合もあるが、同型のろくろ車として一括して扱っている。

(一) 西川古柳座所蔵のろくろ車



写真5 左からろくろ車3、ろくろ車4、ろくろ車5



写真3 ろくろ車2 昭和初期(推定)



写真1 ろくろ車1 明治時代(推定)



写真6 左からろくろ車3、ろくろ車4、ろくろ車5
いずれも底面



写真4 ろくろ車2底面



写真2 ろくろ車1底面



写真11 ろくろ車6



写真9 ろくろ車5



写真7 ろくろ車3



写真12 ろくろ車6底面



写真10 ろくろ車5の紐をはずしたところ



写真8 ろくろ車3底面



写真15 ろくろ車8



写真13 ろくろ車7



写真16 ろくろ車8底面



写真14 ろくろ車7底面

表1 西川古柳座所蔵 ろくろ車データの実測データ 服部真理 作成 (2017年度～2019年度 八王子市教育委員会調査)

ろくろ車番号	所蔵場所	年代	備考	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
ろくろ車1	西川古柳座	最古	明治期か	16	24.5	15	3	3.5	8	4.5	4	1.8	0.7	8.5	2.5	0.7	4	1	8.5	8
ろくろ車2	西川古柳座	昭和30年代頃	三代目西川古柳使用	17	24.2	16	2.3	3	3*	6	8	2.5	1.2	9	2.4	1.2	1.5	1.3	8	8
ろくろ車3	西川古柳座	現代	座面低め	19	24	16.5	2.5	8.5	5	7	8	2.5	1	8.5	2.7	1	5	1.3	8.5	9
ろくろ車4	西川古柳座	現代	座面中くらい	20	24	16.5	2.5	8.5	5	7	8	2.5	1	8.5	2.7	1	5	1.3	8.5	9
ろくろ車5	西川古柳座	現代	座面高め	21	24	16.5	2.5	8.5	5	7	8	2.5	1	8.5	2.7	1	5	1.3	8.5	9
ろくろ車6	西川古柳座	現代	ゴム製車輪 (檜舞台用)	20	24	16.5	2.5	8.5	5	7	8	2.5	1	8	2.3	—	—	1	8	10
ろくろ車7	西川古柳座	現代	車輪カバー付き	21	24	16.5	2.5	8.5	5	7	8	2.5	1	8.5	2.7	1	5	1.1	8.5	9
ろくろ車8	西川古柳座	現代	教室受講生用	21	24	16.5	2.5	8	6.5	5	7.5	2.5	1	6.5	3	—	—	3	6.5	7

表2 西川古柳座所蔵以外のろくろ車の所見データ 服部真理 作成 (2017年度～2019年度 八王子市教育委員会調査)

ろくろ車番号	所蔵場所	年代	備考	座面の板	座面カバー	側面組み方	側面底部	前紐穴	前輪形	スベークー 素材	前輪 ベリリッパ	後輪形	後輪 ベリリッパ	車軸	箱側面車軸 挿入部分左前	箱側面車軸 挿入部左後	箱側面車軸 挿入部右前	箱側面車軸 挿入部右後
ろくろ車1	西川古柳座	最古	明治期か		黒つや消し皮	三枚組み接ぎ	舟形(1cm)	2個	丸み	竹	なし	円筒形に近い		木製	正方形	正方形	丸形	丸形
ろくろ車2	西川古柳座	昭和30 年代頃	三代目西川 古柳使用	10枚	黒つやあり皮	三枚組み接ぎ	舟形(2cm)	2個 (縦)	平面に近い	竹	なし	円筒形に近い	あり	金属か	正方形	なし	丸形	なし
ろくろ車3	西川古柳座	現代	座面低め	1枚を 反らす	黒色綿生地	三枚組み接ぎ	直線形	2個	平面に近い丸み	塩ビパイプ	なし	円筒形に近い	あり	金属製	丸形	なし	正方形	なし
ろくろ車4	西川古柳座	現代	座面中くらい	1枚	黒色綿生地	三枚組み接ぎ	直線形	2個	平面に近い丸み	塩ビパイプ	なし	円筒形に近い	あり	金属製	丸形	丸形	丸形	丸形
ろくろ車5	西川古柳座	現代	座面高め	1枚	黒色綿生地	三枚組み接ぎ	直線形	2個	平面に近い丸み	塩ビパイプ	なし	円筒形に近い	あり	金属製	丸形	丸形	丸形	丸形
ろくろ車6	西川古柳座	現代	ゴム製車輪 (檜舞台用)	1枚	黒色綿生地	三枚組み接ぎ	直線形	2個	平面	—	あり (キヤスター)	円筒形	あり	金属製	丸形	丸形	丸形	丸形
ろくろ車7	西川古柳座	現代	車輪カバー 付き	1枚	黒色綿生地	三枚組み接ぎ	直線形	2個	平面に近い丸み	塩ビパイプ	なし	円筒形に近い	あり	金属製	丸形	丸形	丸形	丸形
ろくろ車8	西川古柳座	現代	教室受講生用	1枚	黒色綿生地	二枚組み接ぎ、 三枚組み接ぎ	直線形	2個	平面	—	あり (キヤスター)	円筒形に近い	あり	金属製	なし	なし	なし	なし

(二) 西川古柳座所蔵のろくろ車の解説

1 初期(明治時代から昭和四十年代まで)に使用されたろくろ車(ろくろ車1・2)

ろくろ車1【写真1】は、五代目西川古柳によれば、西川古柳座所蔵のろくろ車の中では最も古く、明治時代に二代目西川古柳が使用したとされている。車軸は木製、スベーサーには竹が用いられる。前輪の地面との接触部分には丸みがある。後輪は両端が削られた円柱型をしている【写真17】。箱の前面と後面には、紐が通されている穴以外に中央にも穴があり、中央の一つの穴に紐を輪にして通して使用していた痕跡が伺える【写真18、19】。また、側面は三枚組み接ぎで接合され、側面底部は舟形で、

車軸の箱挿入部分は、人形遣いにとって左側が四角形、右側が丸形である【写真20、21】。片側の車軸挿入部分が角型であることにより、ろくろ車走行時の車軸は回転せず、固定されていることが分かる。



写真17 ろくろ車1底面



写真18 ろくろ車1前面



写真19 ろくろ車1後面



写真20 ろくろ車1左側面



写真21 ろくろ車1右側面

ろくろ車2【写真3】は、昭和四十年代まで使われていた。車輪の配置、大きさ等(表中⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰)はろくろ車1と類似している。前輪表面はろくろ車1のような丸みはなく、平面に近い【写真22】。紐穴を変更した痕跡も見られる。側面は三枚組みつぎ、側面底部は舟形で箱外側の車軸挿入部分は左右とも前輪のみ表れ、左が四角形、右が丸形である【写真23、24】。後輪内部に三代目西川古柳によつて自転車のベアリングが取り付けられており、西川古柳座のろくろ車の中では、最初にベアリングを取り入れられたものであるとい^③う。【写真22】に、後輪車軸を支える金具も見られる。

前側面と後側面の下に厚さ一・八センチほどの木が添えられている【写真25、26】が、五代目西川古柳によれば、これは転倒防止のために後から付けたものであるという。なお、三代目西川古柳が、このろくろ車を使用している写真(金子桂三撮影)と同じ頃に写された【写真27】が、西



写真22 ろくろ車2底面

前側面と後側面の下に厚さ一・八センチほどの木が添えられている【写真25、26】が、五代目西川古柳によれば、これは転倒防止のために後から付けたものであるという。なお、三代目西川古柳が、このろくろ車を使用している写真(金子桂三撮影)と同じ頃に写された【写真27】が、西



写真27 ろくろ車2に乗る三代目西川古柳 西川古柳座提供



写真25 ろくろ車2前面



写真23 ろくろ車2左側面



写真26 ろくろ車2後面



写真24 ろくろ車2右側面

川古柳座に残されている。

昭和三十九（一九六四）年に制作された映像に、三代目西川古柳が、ろくろ車1およびろくろ車2とは異なるろくろ車前輪の車軸を横の穴から取り出し、手入れする様子が見られる。⁽¹⁾ 五代目西川古柳によれば、「当時、雑音を緩和するために車軸を外し、油を差したりしていた」とのことである。

五代目西川古柳によれば、昭和四十年代までの初期の八王子車人形において、現在と同様、ろくろ車は使用者が固定されることなく、座員で共有して使用されていたという。初期のろくろ車の木材の材質の詳細に関しては未調査であるが、ろくろ車の多くは側面がスギ、車輪はカシであるという。⁽⁵⁾

2 現在使用されているろくろ車(ろくろ車3〜8)

現在、西川古柳座では約二十点の三輪のろくろ車を所蔵し座員の練習及び公演時に使用している。詳細は後述するが、これらは座員の西川柳時によって製作された【写真29】。その他、キャスター付き四輪のろくろ車（後述するろくろ車8）約十点を所蔵している。



写真28 参考 ろくろ車に乗る四代目西川古柳 (昭和40年頃) 西川古柳座所蔵



写真30 座布団の敷かれたろくろ車5

い判断でろくろ車を選ばれる。例えば、『出世景清目玉献上の段』の景清役等では人形が大きくなるため、ろくろ車5にさらに座面サイズの座布団を敷いて操る【写真30、31】。

五代目西川古柳によれば、約十点は昭和六十（一九八五）年頃に作られ、残りは、座員の西川柳時によって二十年ほど前に製作された。これら現在舞台上で用いられるろくろ車は、座面の高さにより三種に大別される【写真5】。

本稿では高さの低い方から順に、ろくろ車3【写真5左】、ろくろ車4【写真5中央】、ろくろ車5【写真5右】とし、複数ある各々の高さのろくろ車を一点づつ計測した。内側に取り付けられている車輪の配置や大きさはろくろ車3〜5で同一である。演じる役の人形の背丈、衣裳の大きさと人形遣いの背丈の両面を考慮し、人形遣

① 三輪のろくろ車（ろくろ車3、4、5）



写真29 現在西川古柳座で使用されているろくろ車

『東海道中膝栗毛 赤坂並木の段』の子供役では一番低いろくろ車3が用いられる。⁽⁶⁾



写真31 座布団を敷いたろくろ車に乗り人形を操る座員（現 西川柳玉）2018年9月23日撮影



写真32 ろくろ車5底面

ろくろ車の詳細を現在最も多く用いられる、「ろくろ車5」【写真9、10】から探してみると、西川柳時によれば、ろくろ車の箱部分は、現在のものはスプルス（カナダヒノキ）、ツガで作られ、車輪はカシで作られる。車軸は前輪がケヤキ、後輪は金属製である。スパーサーは塩ビパイプ、紐は綿ロープである。車輪の表面に丸みはなく地面との接触部分は平面に近い。車輪の配置、大きさ等（表中⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯）はろくろ車1と類似する【写真32】。後輪の両端内側には【写真33】に記入したようにボールベアリングがつけられている。西川柳時によれば、近年は、西川古柳座近くの製作所にボールベアリングの製作と車輪のろくろ加工を特注し、西川柳時が箱部分を製作、組み立てをしているとい



写真34 ろくろ車5前面

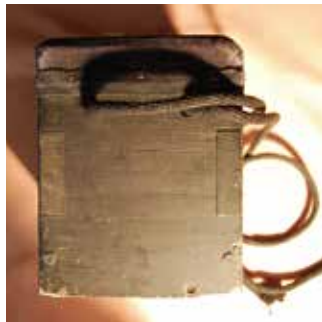


写真35 ろくろ車5後面

の隙間がより大きかった昔のろくろ車は転倒しやすかったため、四代目西川古柳より、床との隙間を狭めたものを作るよう勧められ、床上9ミリの線にしたという。箱挿入部分の車軸は前輪後輪とも箱外側に丸形で表れている【写真36、37】。箱挿入部分の車軸の形は、約二十点のろくろ車中、丸形のもの以外に、ろくろ車4のように箱左側が丸型、右側が角形のものもある【写真38、39】。座面には綿の布のクッションが貼られている。



写真33 後輪内部に挿入されたベアリングの図

う。座面の板は、製作工程において濡らして反らす。側面の四面は三枚組みつぎで接合される。後面の紐穴の位置、二つの穴の間隔等はろくろ車2に類似する。

前面は横に二つの穴が並び、前面の穴の間隔よりも後面の穴の間隔が広い【写真34、35】。箱側面底部は直線形で車輪はほとんど隠れている【写真36】。西川柳時によれば、床と



写真36 ろくろ車5左側面



写真38 昭和60年代に製作されたるろくろ車5左側面



写真37 ろくろ車5右側面



写真39 昭和60年代に製作されたるろくろ車5右側面

ろくろ車6は、外観はろくろ車5同様であるが、金属性の車軸と車輪で、車輪にゴムが付けられている【写真12】。

ろくろ車7はろくろ車5と同様のものの車輪にビニール製のカバーが付けられている【写真14】。

公演先の舞台が能の舞台などのようにヒノキで出来ている場合、堅いカシの車輪が舞台を傷つけるため、ろくろ車6および7が考案された。

ろくろ車8は五年ほど前に五代目西川古柳と西川柳時によって普及用に考案され、現在西川古柳座で「四輪のろくろ車」と呼ばれている。西川古柳座で毎年行われる「夏休みこども車人形教室」、一般向けに開催される「伝統文化ふれあい事業 八王子車人形体験・発表講座」、また小学校でのワークシヨップなどで用いられ、十点左右所蔵されている。上げ底の箱の中に、前二輪、後ろ一輪のろくろ車と同じ機能をもつて動かすことができるよう、キャスターの前輪二輪が後輪二輪よりも間隔をあけて配置されている【写真16】。

② ろくろ車8の製作について

ろくろ車8は、平成三十一（二〇一九）年度「夏休みこども車人形教室」（文化庁後援 伝統文化親子教室事業）の中で、五代目西川古柳と座員の西川柳車の指導により子どもたちが製作した。夏休みこども車人形教室は、最終日の発表会を含めて十一日間開催され、車人形の基本操作、鳴り物の体験と併行して、四日間がろくろ車製作に費やされた。

初日に座員の西川柳時によって作成されたろくろ車のキット【写真40～42】が配布される。キャスターを利用して簡便さをはかりながらも、木製のろくろ加工が施された木製の車輪と同じ動きが可能となるよう設計されている。容易に組み立てられるよう、板は精密に切断されている。

底板に車輪を取り付け、側面三面を電動ドリルで接合、底面を側面の溝に挿入した後、前面の板を接合する【写真43】。紐を通し、上板を釘付け、ウレタンマットを貼り付け、黒色アクリル絵具で四面を塗る。座面の布を綿テープで包み、鋏留めし、完成する。



写真43 ろくろ車後面の板を装着



写真40



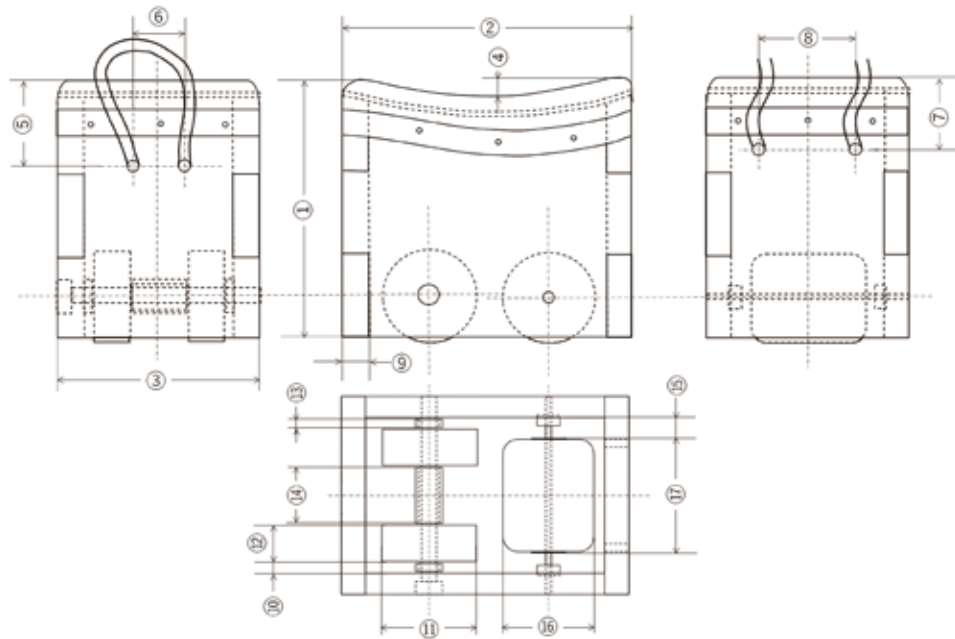
写真42



写真41

写真40～42 夏休みこども車人形教室のために用意されたろくろ車8製作キット

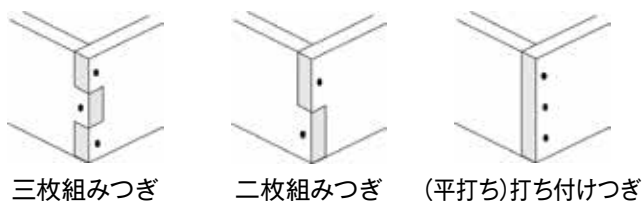
図2 ろくろ車四面図



- | | | | |
|-----------|--------------|--------------|--------|
| ① 箱高さ | ⑥ 前紐穴間 | ⑪ 前輪直径 | ⑯ 後輪直径 |
| ② 座面長さ | ⑦ 座面後紐穴距離 | ⑫ 前輪幅 | ⑰ 後輪幅 |
| ③ 面幅 | ⑧ 後紐穴間 | ⑬ 前輪内壁間 | |
| ④ 座面高低差 | ⑨ 箱厚さ | ⑭ 前輪スペーサー | |
| ⑤ 座面前紐穴距離 | ⑩ 前輪 - 箱内壁距離 | ⑮ 後輪 - 箱内壁距離 | |

※図1は、2017年度の調査時にろくろ車5を元に、服部真理が作成した。各名称は計測用に設定した。

図3 ろくろ車に見られる側面板の組み方の図



※図3は秋岡芳夫とグループモノ・モノ編集『木工と道具』、三麗社、1981年、57頁及び、神谷幸彦編『木工の基本と用語事典』パッチワーク通信社、1996年、141頁を参照に服部真理が作成した。なお、「古い民具は、現代の機械のようなボルトや鉄釘を使用せず、木を彫り込んで継ぎ合わせるにより成型されたものが多い」（『古農具類作図テキスト＜第1集＞』梅室英夫、宮本八恵子著、東京農業大学出版会、1986年、56頁）が、ろくろ車の三枚組み接ぎでは釘も用いられている。

註

- (1) 図1は「小田内一九二八五九頁」より。ろくろ車の実測図は、図1とほぼ同じ図だが寸法が描き入れられている。「小田内一九三二一九六頁」のほか、「西河一九三四四七頁」、「菱山一九六八三四〇三五頁」があげられる。「佐藤一九九五一一五二頁」には、上面、側面、底面の三面図が掲載されている。
- (2) 回転時の摩擦が軽減されているものと考えられる。
- (3) 五代目西川古柳によれば、昭和三十年代に自転車普及したころだったとう。下島彬は四代目西川古柳氏が昭和五十年頃にベアリングと板の縁の調節をし「お陰で舞台の上スケートで滑るようにスムーズになり、しかもぐるぐる回転できるようにもなりましたし、潤滑油も不要になりました」と述べていたことを紹介している。「下島一九九〇一三〇一四頁」『帝京大学総合博物館二〇一六五頁』にも昭和初期に車軸にボールベアリングを入れ、騒音が緩和されたことが述べられている。
- (4) 大島俊正撮影映画『車人形』（非公開）。「大島一九六八」に映画についての説明が掲載されている。
- (5) 「小田内一九三二一九六頁」による。五代目西川古柳も側面はスギ、車輪はカシであろうと述べている。
- (6) 西川古柳氏によれば、このような事情は文楽の主遣いの履く高下駄と同様であるとのことである。中本千晶は文楽の人形遣いの下駄について「(下駄の高さは)人形遣いの背の高さと人形の大きさによる。高ものは立役の大きな人形用だ。ベテランの人形遣いは何足も持っていて役によって使い分ける」と説明している。「中本千晶二〇〇八七〇頁」
- (7) 西川古柳氏によれば、箱部分はサクラ、ヒノキ、スギ、車輪はクリ、ケヤキ等でも作られてきたという。
- (8) 図3参照。
- (9) ろくろ車1では前後の紐穴の間隔は、後面の方が狭く、かつて用いられていたものからの変化を読み取ることができる。
- (10) 箱挿入部分の車軸の形は、約二十点のろくろ車中、丸形のみものの以外に、ろくろ車4のように箱右側が角形、左側が丸形のものもある。

(執筆 大谷津 早苗／服部 真理)

参考文献

- 大島俊正一九六八「車人形」着想から完成まで―題材の発見―百科事典のパンフレットから『多摩文化』第二十号 多摩文化研究会
- 小田内通久一九二八「八王子車人形の話」『民俗藝術』第一巻五号 地平社書房
- 小田内通久一九三二「車人形」『国劇要覧』坪内博士記念演劇博物館編纂 梓書房
- 佐藤広一九九五『八王子の民俗』揺籃社
- 下島彬一九九〇『多摩の伝統芸芸・1』中央大学出版部
- 帝京大学総合博物館二〇一六『伝統人形芝居 八王子車人形の世界』中本千晶二〇〇八『熱烈文楽』三一書房
- 西河説児一九三四「車人形の発生とそのテクニクに就て」『多摩史談』第二巻四号 多摩史談会事務所
- 菱山愛子一九六八「八王子車人形について」『多摩文化』第二十号 多摩文化研究会

四 大道具・小道具

西川古柳座では、幕を含む大型のセットする道具を大道具、小型の持ち運び可能な道具を小道具と大まかに区別している。以下、幕、大道具（幕以外）、小道具について、(一)で現存資料を、(二)で記録にのみ残された資料を、各々初期（昭和四十年代まで）と現在（昭和四十年代以降）に分けて記録する。記録に残された初期を二代目西川古柳の活動していた戦前と、三代目西川古柳を中心に西川古柳座が活動した戦後に分けて扱うこととする。なお、本項記載の資料調査及び五代目西川古柳への聞き取りは、筆者が平成二十九（二〇一七）年度から平成三十一（二〇一九）年度に行ったものである。

(一) 現存資料

1 初期（昭和四十年代まで）の資料



写真1 初期の幕1（左）幕2（右）表（襖）



写真2 初期の幕1（左）初期の幕2（右）裏（障子）

表1 西川古柳座所蔵 初期の八王子車人形の幕 2017年度、2018年度調査 服部真理作成

	特徴	縦 (cm)	横 (cm)	素材	使用演目等	使用年代	備考	写真
1	板戸（裏は障子）	165	64.5	紙	未確認	戦前（推定）		1, 2
2	板戸（裏は障子）	165	64.5	紙	未確認	戦前（推定）		1, 2
3	城（裏は黒い森）	133.5	295	紙	未確認	戦前（推定）		3, 4
4	箆筒、座敷（裏は植物図柄）	128	295	紙	未確認	戦前（推定）	人形展示の背景として昭和40年頃使用	5, 6
5	ささりんどう、山	215	176	布	「小栗判官一代記矢取の段」	昭和30～50年代	「八王子車人形後援会と花押」	7
6	障子（手前）と襖	219	351	布	「小栗判官一代記矢取の段」	昭和30～50年代	襖右下に「八王子車人形後援会」と花押（愁岩か）	8
7	鶴	83	88.6	布 （裏は紙）	「小栗判官一代記矢取の段」	昭和30～50年代	「郷土芸術 八王子車人形後援会」（右下）花押（愁岩か）と印（左下）	9
8	松羽目	221	346	布	「三番叟」	昭和30～50年代	「郷土芸術 八王子車人形後援会」（右下）花押（愁岩か）と印（左下）	10
9	山、雪、すすき	217	340	布			「郷土芸術 八王子車人形後援会」（右下）花押（愁岩か）と印（左下）	11
10	山と川	183	216	布	未確認（日高川入相花王（五代目西川古柳聞き取り）	昭和30年代から	「郷土芸術 八王子車人形」（右下）	12
11	山と松	200	300	布	「日高川入相花王」			13
12	波	140	976	布	日高川入相花王、甚兵衛渡し場の段	昭和30～50年代		14
13	「忝竹娘連與理 西川連戈江」	200	300	布			（忝竹娘連より 西川連さんへ）	15
14	定式幕	142	580	布				16
15	贈 八王子市教育委員会	225	86.5	布 （別珍）		昭和32年以降	昭和31年八王子市無形文化財指定	17



写真3 初期の幕3表面(城)



写真5 初期の幕4表面(座敷)



写真4 初期の幕3裏面(夜の山)



写真6 初期の幕4裏面(花)



写真9 初期の幕7(鶴「小栗判官一代記」)



写真8 初期の幕6(障子と襖「小栗判官一代記」)



写真7 初期の幕5(ささりんどう、山「小栗判官一代記」)



写真12 初期の幕10 (山と川「日高川入相花王」)



写真11 初期の幕9 (山、雪、すすぎ)



写真10 初期の幕8 松羽目「三番叟」



写真13 初期の幕11 (山と松「日高川入相花王」)



写真14 初期の幕12 波幕「日高川入相花王」他



写真17 初期の幕15 (贈 八王子市教育委員会)



写真16 初期の幕14 定式幕



写真15 初期の幕13 (松竹娘連より西川連さんへ)

番号	内容	使用される演目	写真番号
1	藪	「東海道中膝栗毛」	33
2	卵塔場	「東海道中膝栗毛」	34
3	棒杭	「日高川入相花王」	35
4	舟	「日高川入相花王」	36
5	柳の木	「日高川入相花王」	37
6	菊藪（大小）	「信田妻」二度の子別れの段	38
7	木戸	「東海道中膝栗毛」（古寺）	39
8	櫓	「伊達娘恋緋鹿子」	40
9	崖	「壺坂観音霊験記」	41
10	岩	「壺坂観音霊験記」	42
11	橋	「本朝廿四孝」	28
12	灯籠	「本朝廿四孝」	28
13	花の植え込み	「本朝廿四孝」	28

表3 西川古柳座所蔵 現在使用されている主な大道具

番号	内容	使用される演目	写真番号
1	赤坂並木	「東海道中膝栗毛」	18
2	卵塔場	「東海道中膝栗毛」	19
3	道行	「日高川入相花王」 「東海道中膝栗毛」	20
4	波	「日高川入相花王」	21
5	高倉館	「小栗判官一代記」	22
6	松羽目	「三番叟」	23
7	雪	「伊達娘恋緋鹿子」	24
8	壺坂1（崖、寺）	「壺坂観音霊験記」	25
9	壺坂2（山、川）	「壺坂観音霊験記」	26
10	諏訪明神、 のかかった部屋	「本朝廿四孝」	27
11	町	「団子売」	28
12	川	「文七元結」	29
13	定式幕	稽古場での上演時	30
14	揚幕、袖幕	写真は「釣女」	31
15	出幕		32

表2 西川古柳座所蔵 現在使用されている主な幕

番号	内容	使用される演目	写真番号
1	きつねのてぬぐい	「東海道中膝栗毛」	43
2	弥次の荷物	「東海道中膝栗毛」	43
3	弥次の笠	「東海道中膝栗毛」	43
4	三角頭巾	「東海道中膝栗毛」	43
5	喜多の荷物	「東海道中膝栗毛」	44
6	喜多の笠	「東海道中膝栗毛」	44
7	酒	「東海道中膝栗毛」	45
8	子どもの笠	「東海道中膝栗毛」	45
9	天秤棒	「東海道中膝栗毛」	46
10	馬糞	「東海道中膝栗毛」	46
11	旅人の提灯	「日高川入相花王」	47
12	飛脚荷物	「日高川入相花王」	48
13	坊さんの鉦	「日高川入相花王」 「東海道中膝栗毛」	49
14	木魚	「東海道中膝栗毛」	50
15	鈴	「三番叟」	51
16	太鼓	適宜使用される	52
17	銅鑼	適宜使用される	53
18	付け板	適宜使用される	54
19	拍子木	開演時、終演時に使用	55

表4 西川古柳座所蔵 現在使用されている主な小道具



写真18 幕1 「東海道中膝栗毛」赤坂並木



写真19 幕2 「東海道中膝栗毛」卵塔場



写真20 幕3 「日高川入相花王」道行



写真21 幕4 「日高川入相花王」波幕



写真22 幕5 「小栗判官一代記」高倉館 保戸塚時久撮影



写真24 幕7 「伊達娘恋緋鹿子」



写真23 幕6 松羽目の幕「三番叟」



写真26 幕9 「壺坂観音霊験記 谷底の段」



写真25 幕8 「壺坂観音霊験記 山の段」



写真28 幕11 「団子売」



写真27 幕10 「本朝廿四孝 狐火の段」 保戸塚時久撮影



写真30 幕13 定式幕



写真29 幕12 「文七元結」



写真33 大道具1 藪



写真32 幕15 出幕 西川古柳座
提供



写真31 幕14 揚幕 保戸塚時久
撮影



写真36 大道具4 舟



写真35 大道具3 棒杭



写真34 大道具2 卵塔場



写真39 大道具7 木戸



写真38 大道具6 菊藪(大小)



写真37 大道具5 柳



写真42 大道具10 岩



写真41 大道具9 崖



写真40 大道具8 櫓



写真46 小道具 9, 10 天秤棒、馬糞



写真45 小道具7, 8 酒、笠



写真44 小道具5, 6 荷物、笠



写真43 小道具1, 2, 3, 4 荷物、笠、狐面、三角頭巾



写真49 小道具13 鉦



写真48 小道具12 飛脚荷物



写真47 小道具11 提灯



写真52 小道具16 太鼓



写真51 小道具15 鈴



写真50 小道具14 木魚



写真55 小道具19 拍子木

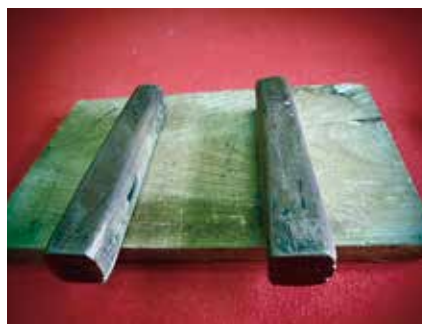


写真54 小道具18 付け板



写真53 小道具17 銅鑼

(二) 幕・大道具・小道具についての解説

1 初期(昭和四十年代まで)の資料について

西川古柳座には、昭和四十年代頃まで使用された幕が十五点残されている。



写真56 初期の幕1に付けられた紐

幕1から幕4は紙製である。幕1、幕2は縦が約一六五センチ、幕3、4は約一三〇センチで、室内に吊るすことも可能な大きさである。

紙製の幕の使用年代、使用者等の情報は、五代目西川古柳は三代目西川古柳からも、四代目西川古柳からも聞いていないという。幕1から幕4は上演時に吊るしたと思われる紐が付けられている【写真56】。

鈴木信太郎は、昭和三(一九二八)年十二月九日の八王子車人形の自宅での公演(二代目西川古柳の興行記録にも残されている)の後、『日高川清姫道行ノ段』について、「両袖に襖をかけたせまい幕が二つさがるだけ」と記し、当時、幕1、2と同様の幕が使用されていたことが伺える。【鈴木一九二九四九頁】



写真57 初期の幕3の破損部分

幕3は、城の絵の窓の部分が切り取られている。五代目西川古柳は、幕の後ろから明かりを灯したのではないかと述べている。

幕3、4は、経年劣化により表面の紙がめくれた箇所があり、墨で文字を書いた紙を貼り合わせて作成さ



写真60 初期の幕5, 6, 7(昭和30年代の「小栗判官一代記」) 細田榮久撮影 西川古柳座提供



写真59 初期の幕4(日立まつり(昭和40年代か)の人形展示) 西川古柳座提供



写真58 初期の幕4の破損部分



写真61 初期の幕8(昭和30年代の三番叟) 細田榮久撮影 西川古柳座提供

れていることがわかる【写真57、58】。また、幕3の城の絵の下に、群青色の絵具が見え、城の絵の前に別の絵が描かれていたことが伺われる【写真57】。紙を貼り合わせて幕を制作している点は、「大きく貼った紙」という表現で鈴木信太郎によって記録された幕と類似する可能性もある【鈴木一九二九五一頁】。

上演時の写真ではないが、昭和四十年頃、「日立まつり」での車人形展示において幕4が背景として貼られた写真が残されている【写真59】。

幕5から幕15は布製で、このうち七点は昭和三十年代から四十年代(五代目西川古柳による)に公演で使用された写真が西川古柳座に残されている【写真60、61、62、63】。

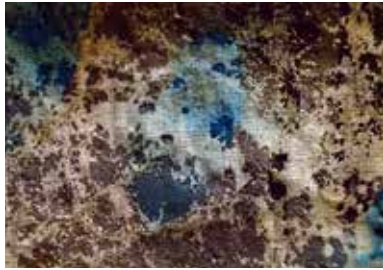


写真64 初期の幕8部分

五代目西川古柳の記憶では、昭和三十年代の舞台では背景幕は通常使用せず、黒幕のみであったという。また五代目西川古柳は布製の幕の制作者についてはわからないが、当時八王子車人形に関わっていた田中稔氏（四代目西川古柳の義兄）が絵を描くこともあったという。布製の幕は白い布をミシンで縫い合わせたものに描かれ、リング状の金具と紐がつけられている【写真64】。経年劣化により、絵具が布表面から浮き出て剥落している【写真65】。この特徴は、三番叟衣裳（昭和三十年代に使用 第三章第六節第二項No15）の絵具が剥落していない状態とは異なる。三番叟衣裳は正絹、幕は綿、という違いもあるが、三番叟衣裳表面の染料で描かれたと思われる特徴と異なり、布製の幕に用いられた絵具が顔料であることを呈しているといえよう【写真65】。

また、幕5から8には、「郷土芸術」「八王子車人形後援会」および「愁岩畫」と思われる文字が書かれている【写真66】。



写真62 初期の幕11（昭和40年代の「日高川入相花王」）西川古柳座提供



写真63 初期の幕14（昭和40年代「宗吾と甚兵衛」）西川古柳座提供



写真65 初期の幕8上端部分



写真66 初期の幕6部分

昭和四十年代までに使用された大道具は確認されていない。小道具は、『傾城阿波鳴門』の巡礼のお鶴が下げる袋（使用年代不明）が確認されている（第三章第六節第二項No58）。

2 現在使用している幕・大道具・小道具について

西川古柳座で現在用いている幕は布製の約三・六メートル×十二・六メートルのもので、約二十枚ある。この大きさは大規模なホールでの上演にも適している。舞台の大きさに応じて、折り込んで使うこともある。演目に合わせて、五代目西川古柳が、幕制作の専門の業者に委託する。八王子車人形の演出に応じた工夫も見られ、『文七元結』の川の場面の幕は、川越えの場面で、車人形が舞台上手から下手に移動する様子を効果的に見せるため、川が舞台の上手と下手を分けるような位置に配されている【写真29】。

初期の八王子車人形に幕を使う演目と使わない演目が見られたように、現在上演されている演目でも『信田妻』では幕を使わないが、その他の演目で幕が用いられている。二代目西川古柳の時代から伝承されている演目の幕の絵柄は古い要素を踏襲しつつ新調される。五代目西川古柳によれば、「演じる気持ちが違うのかつて使用された幕と同一のものは作成しない」とのことである。『小栗判官一

代記』矢取の段の高倉館の幕は、【写真76】、【写真8】、【写真22（右）】の変遷を辿っている。

大道具は五代目西川古柳、西川柳時を中心に座員が制作するものと特注するものがある。²⁾ 彩色は舞台で反射せぬようアクリル絵具を



写真67 槽（大道具8）の組み立て

使用する。大道具はワゴン車で運ぶため、解体できるようにになっており、公演が近づくと、稽古場で電動ドライバで接合するなどして、組み立てて稽古する。

公演に行くときに、一旦解体して運び、公演会場での仕込みの際に、電動ドライバを用いて組み立てる。公演終了後、再び解体して稽古場に持ち帰り収納する【写真67、68】。

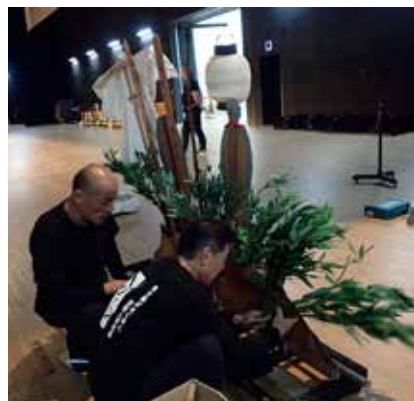


写真68 卵塔場（大道具2）の組み立て

小道具は、五代目西川古柳と座員で制作するもの、既製品、既製品に手を加え

て使用するものがある。『東海道中膝栗毛』の小道具のうち、菅笠と荷物は四代目西川古柳の作ったものである【写真43、44参照】。

小道具は、演出効果のため人形の大きさと比較すると大きめに作られる。小道具の消耗手入れも座員の手で行っている【写真69】。小道具類は、演目ごとに収納する【写真70】。

(三) 記録された初期の資料

1 初期（戦前）の幕

初期の幕として写真に残っているものは五頁写真の幕、三田村鳶魚著『娯楽の江戸』（一九二五年）掲載写真の幕、³⁾ 昭和七（一九三二）年四月二十九日東京朝日新聞の記事、バーナード・リーチ撮影の三番叟の松羽目【写真71】、朝顔日記の幕（本書付録資料参照）【写真72、73】があげられる。昭和五（一九三〇）年の横浜会館公演の幕【口絵参照】は、後述の鈴木信太郎の『鏡山お初 仇討』の説明中の幕に類似している。



写真71 1934年の松羽目（バーナード・リーチ撮影映像）

河竹繁俊は、大正十三（一九二四）年五月二十二日に平音次郎宅にて行われた車人形上演の記録の中で、幕について「坪庭を越えた向こうの土蔵の壁が背景の無地幕の役をつとめた」と記している【河竹一九四六・一三二頁】。



写真69 笠（小道具2）の補修



写真70 小道具類（下はかしのケース）



写真72 1934年の「朝顔日記」の幕（バーナード・リーチ撮影映像）



写真73 1934年の「朝顔日記」の幕（バーナード・リーチ撮影映像）

写真71～73は 民藝運動フィルムアーカイブ
提供 © Marty Gross Film Productions
<http://mingeifilm.martygrossfilms.com>

鈴木信太郎は昭和三（一九二八）年十二月九日に八王子市南新町の自宅で催した八王子車人形上演時の幕について「車人形の記」（『アルト』十一号）「背景はもつと立派なものを使いたいのだそうだが手に入れられなくて大きく張った紙に人形師自身が描いたのを用いている」と述べ、演目ごとに以下のように記録している。

「鈍く重々しい説教節の節まわしと共に幕が開き人形師の手によって描かれた御殿の広間が背景にかかり三人の人形師が登場する。（中略）この御殿の遠景は、日本式のデファイ張り^①で一寸なまめかしかった。」（『熊谷館騒動』）

「（この背景はいつもは赤い御殿の間になるのだがただの黒幕に略してやった。」（『景清目玉献上の段』）

「この人形芝居では大てい一面に黒幕の場面を使うが複雑な背景を沢山持ち合わせていないばかりでなく黒が一番人形の背景によく合いこの場合のような狭い舞台に沢山の人形が割り込む時には尚有効に働くことを知った。」（『景清目玉献上の段』）

「これも黒い舞台を使って夜の気持を出した両袖に襖をかけたせまい幕が二つさがるだけ。」（『日高川清姫道行ノ段』）

「又素人作の面白い遠見。屋敷の広間と廊下などある図である。金紙を丸くきって遠い唐紙のふすまの模様になり近くもその丸い紙で大きい模様が理屈離れのした大味のものでどれもみないとおもった。」

「（前略）使いに出ようと立つとうしろの幕が落ちて舞台は急にひろくないどこかの門構えと石塀の夜の景色なる。これも子供の自由画のような空想的な茶とねずみ色の土塀と石垣と門と松の図である。」

「背景の景色パタリと落ちて以前の屋敷図になる。」

「また背景が落ちて別な立派な御殿になる。」（『鏡山お初め仇討』）

鈴木信太郎は車人形の背景について昭和十六（一九四一）年に『三田文学』十六―四において次のような説明もしている。

「その背景も又人形師の手で成ったものであるが、これは恐ろしく稚拙なもので、御殿や、畦道や、海辺や、桜咲く寺院の境内などが、次々に早替りする時は見物の顔も自ら一勢にほほ笑むのであった。」（鈴木一九四一）

2 初期（戦前）の大道具

鈴木信太郎は大道具に関しては「車人形には舞台にほとんど大道具、小道具というものがなかった。立木一本ぐらい、または低い笹の垣根ぐらいで、人形遣いがそこら附近から切り取って、急造りではんのおしるしに立てた。」（鈴木一九四九一八七頁）、「窓から手をのばせばそのまま竹藪もすすきの穂も芝居の大道具となった。」

するものと思われる。⁽⁶⁾
信田の森である。



写真74 1930年横浜会館での公演「信田妻」
西川古柳座提供

と記録している「鈴木 一九七五
三一一頁」。

鈴木信太郎は昭和三（一九二八）
年から昭和七（一九三二）年に八王
子車人形を観覧しているため、引用
した「立木一本」「低い笹の垣根」
等の大道具については、同時期の昭
和五年横浜会館公演時に撮影された
【写真73】に見られる立木等が該当
の立木、笹の垣根は『信田妻』の



写真75 杖(1934年の「朝顔日記」(バーナード・リー
チ撮影映像)) 民藝運動フィルムアーカイ
ブ提供 © Marty Gross Film Productions
<http://mingefilm.martygrossfilms.com>

3 初期(戦前)の小道具

視覚的に確認できる資料として、
戦前の車人形上演に用いられた小道
具は、鈴木信太郎の絵画『八王子車
人形』（一九二九）に描かれた人形の
持つ刀、『朝顔日記』の深雪の杖（昭
和九（一九三四）年のバーナード・リー
チ撮影映像より、【写真75】が挙げら
れる。

鈴木信太郎の昭和三（一九二八）
年十二月九日公演を元にした前述の
「車人形の記」（『アルト』十一号）にみられる『鏡山お初の仇討』の
上演時に使用された小道具は、「刀」、「炭取り」、「煙管」、「たばこ盆」
の他、任意にあったものを使って代用した「石鹼箱へ万年筆差しを
入れて（代用した）硯箱」、「紙屑籠で（代用した）手洗鉢」で、次の
ように記されている。

「舞台右手の隅に尾上独り机の上に草履をおき涙ぐんでは手
紙をかいている。（略）机の上の硯箱はあり合わせの石鹼箱へ
万年筆差しを入れただけなのに実物の硯箱よりとても抒情的で
親しい味が出ていた。（中略）左手には紙屑籠で急造りの手洗鉢
と簡単な竹のひしゃくのまね。」（鈴木 一九二九五〇頁）

また、鈴木信太郎は「車人形の印象」として前述の掲載文中に小
道具に次のように言及している。

「小道具は刀、炭取り、煙管、たばこ盆ぐらいのもので殆ど
ない。其時々で任意にあった物をつかって仕舞ふ。それではい
けないのだらうが然し又それが不思議に暗指的で適切なのだっ
た。芝居の後でも木を一寸けづつて墨をぬった短刀など残って
捨て、あった。」

4 初期(戦後)の幕

写真でのみ確認できるその他の昭和四十年代までに使用された幕
は、アルバムに「昭和三十一年三月十一日 春光幼稚園ニテ 於
足立区公会堂 贈 田中春雄氏ヨリ」と書かれた『小栗判官一代記』
矢取りの段の舞台に見られる幕⁽⁷⁾【写真76】の他、「松姫」とアルバ
ムに書かれた【写真77】がある。この幕の背景の立て札が書き換え
られた【写真78】も残され、幕右上に「松姫公 昭和三十一年七月
二十四日」と書かれた部分が確認できる。同じ時に写されたと見ら
れる【写真79】には「松姫物語 案下川道行段」と書かれた演目台
も写っている。また説経節の薩摩若津太夫（本名峰尾孝次）は、「昭
和三十五（一九六〇）年五月薩摩若津太夫から三代目薩摩津太夫襲名」
であるため「宮川 一九九八二八頁」、【写真78、79】は一九五〇年

代後半頃に撮影されたものと思われる。【写真77、78、79】から別の幕も横に吊るされ、場面ごとに幕をスライドして移動させて使用されていたことが伺える。



写真76 1956年「小栗判官一代記」で使用された幕 西川古柳座提供



写真78 昭和30年代頃用いられた幕（「松姫」） 西川古柳座提供



写真77 昭和30年代頃用いられた幕（「松姫」） 西川古柳座提供



写真79 写真78の遠景

5 初期（戦後）の大道具

八王子車人形初期（戦後）に使用された大道具として、『小栗判官一代記』矢取りの段で用いられた灯籠が【写真80】から確認される。その他、「傾城阿波の鳴門」の板戸が写真から確認される【写真81】。



写真80 昭和30年代の大道具（灯籠） 細田榮久撮影 西川古柳座提供



写真81 昭和50年代の大道具（板戸） 西川古柳座提供

6 初期（戦後）の小道具

昭和三十年代、四十年代に用いられた小道具として、『日高川入相花王』の坊さんの鉦【写真49】、飛脚の荷【写真48】が挙げられるが、これらは現在も使用されている。【写真60】に写っている弓も現在も用いられている。

(四) まとめ

幕の大きさ、材質は、昭和初期、戦後、現在で異なる。昭和初期のものは、紙製で室内に吊るすことのできる大きさ、昭和四十年代までのものは布製でホールに吊るす大きさ、現在使用されているものは、より厚手の布製でさらに大きくなり、上演場所の変遷を表している。



写真82 昭和30年代の幕の準備の様子 細田榮久撮影 西川古柳座提供

場面ごとに幕を変える工夫も時代によって変遷が見られる。昭和初期は「パタリと落ちて」別の背景に早変りさせ、昭和三十年代以降は複数の幕を横に並べて吊るしてスライドさせたり、

紐で吊るして固定したりした【写真82】。現在はホールのバトンにあらかじめ吊るした複数の幕を転換させている【写真83】。

説経節と共演している演目の幕や大道具小道具には同一演目における時代による変遷が見られるが、昭和三十年代と同じものを使用している小道具もあることがわかった。



写真83 バトンに吊るされた2枚の幕（オリンパスホール八王子）

註

- (1) 顔料等の詳細については未調査である。初期の車人形とも興行したとされる写し絵に関しては、絵師が種板に描く絵の具にニカワを混ぜる等の工夫をしていたという。「八王子市郷土資料館二〇〇七九～一五頁」。
- (2) 四代目西川古柳も大道具を自ら製作しており、馬を作ったことが記録されている。「瀬沼二〇一五 一四一頁」。
- (3) 「三田村 一九二五 二〇四頁」。
- (4) フランス人画家 ラウル デュフィ（一八七七一～一九五三）か。「熊谷美和二〇一二」に鈴木信太郎の活動した時期の『白樺』に掲載された西洋人画家が列挙されているが、デュフィは記載されていない。「デフィ張り」の具体的内容は不明である。
- (5) 五代目西川古柳への聞き取りによる。三代目西川古柳による「八

王子車人形売込帖」に昭和七年五月一日新宿倶楽部における鈴木信太郎主催の公演においても「葛の葉信田森」が演じられている。

- (6) 鈴木信太郎は昭和四（一九二九）年、二点の油彩画「八王子車人形」を第十六回二科展に出展している。二点とも衣裳付きの人形が描かれ、腰に刀を差した武士も含まれている。ともに「そごう美術館所蔵である」「そごう美術館二〇一五 六八～六九頁、一五一～一五二頁」。鈴木信太郎の八王子車人形に関する絵画について浅沼墨は記録画としての要素とともに画家として「ある種のリアリズム絵画に近いような作業」を行った点を指摘している【浅沼二〇〇六 一八～一九頁】。

- (7) ただし、同じ写真がアルバムの別の頁にも貼られ、「昭和三十九年九月十五日神奈川県津久井郡中野町」と書かれている。

- (8) 『多摩文化二十号』一一〇頁に京屋小浜（水島しん）による「昭和四十一年十一月十二日市民会館」での「二十八回八王子中央大学祭」として津賀太夫と小浜（三味線）の出演した「判官矢取り」の上演が記載されている。写真には、「第十二回」とあるが、太夫、三味線とも『多摩文化二十号』の記録に一致すること、写真撮影をした細田栄久氏のメモに昭和三十年代から四十年代とあるため、写真は昭和四十一年の記録もしくは、同時代のものと思われる。

- (9) 西川古柳氏によると、「傾城阿波鳴門」の写真は昭和四十年頃のものと思われる。

（執筆者 服部 真理）

参考文献

- 浅沼墨二〇〇六「八王子時代の信太郎」『親密な空間 色彩の旅人 鈴木信太郎展』そごう美術館
- 河竹繁俊一九四六『歌舞伎襟記』光文社
- 熊谷美和二〇一五「試論 鈴木信太郎における西洋絵画の受容—雑誌『白樺』を中心に—」『図録 生誕百二十年 鈴木信太郎展 親密家のまなざし』そごう美術館
- 鈴木信太郎一九二九「車人形の記」(二)『アルト』十一号
- 鈴木信太郎一九四一年「八王子車人形のこと」『三田文学』十六—四

- 鈴木信太郎 一九四九「八王子車人形覚書」『諸国の人形芝居』（河竹繁俊編）大日本雄弁会講談社
- 鈴木信太郎 一九六八「八王子車人形覚書」『多摩文化 第二十号』多摩文化研究会
- 鈴木信太郎 一九七九「八王子車人形」『日本の人形 古典人形の美／郷土人形図鑑／人形に会う旅』、読売新聞社
- 鈴木信太郎 一九八七『美術の足音 今は昔』博文館新社
- 瀬沼恭子 二〇一五「車人形の家元に連れ添って」『聞き書きで綴る 八王子の女性史』八王子女性史サークル
- そごう美術館『図録 生誕百二十年 鈴木信太郎展 親密家のまなざし』二〇一五年
- 三田村鳶魚 一九二五『娯楽の江戸』恵風館
- 宮川孝之 一九八九「五代目薩摩湊太夫 浅倉宗吾―仕置の段」『日本文化の伏流 民衆芸能 説経節集「解説書 上巻、下巻」』（法政大学多摩の歴史・文化・自然環境研究会（編集代表）小沢勝美・宮川孝之）法政大学多摩地域社会研究センター

第七節

公演記録

本節では、八王子車人形を中心とする車人形の公演記録を西川古柳座に収蔵されている記録をはじめ、本報告書調査において確認できた資料を基に年代順にまとめ、一覧表にまとめた。また、根拠とした典拠については下段の表に整理した。

なお、一覧表に掲載している公演記録については、典拠資料を基に、次のとおり選別をして主な記録のみを掲載した。

- ・情報量が少ないものは除外した。
- ・典拠が不明確なものは除外した。
- ・戦前（昭和二十（一九四五）年八月以前）の記録については貴重な記録として極力掲載した。
- ・戦後（昭和二十（一九四五）年九月以後）の記録については、学校、企業、老人会、町内会等が主催の特定の団体を対象とした小規模な公演については除外した。

また、一覧表の公演記録については、大部分が西川古柳座に関する記録であるが、一部異なる座に関する記録については、「人形遣い」の欄に＊を付すか、座名を掲載して判別できるようにした。人形遣い、語りについては、配役・分担が明確にわかるものを載せ、詳細がわからないものについては、人形遣いの欄に代表的な遣い手の名を入れあとは他、と表記した。

公演記録 典拠一覧

表記	典拠タイトル
	新聞
し1	『朝日新聞』朝刊
し2	『朝日新聞』夕刊
し3	『東京朝日新聞』
し4	『東京朝日新聞』夕刊
し5	『東京日日新聞』
し6	『読売新聞』
し7	『読売新聞』夕刊
	鈴木龍二編 1968『多摩文化』第20号 多摩文化研究会に所収
た1	『車人形売込覚』
た2	『車人形興行扣』西川柳時記
た3	『車人形出演日記』
た4	『薩摩若太夫一代記』
た5	『人形興行之覚』
た6	『八王子車人形売込帖』座元西川柳時
	西川古柳座の記録・所蔵資料
に1	視聴覚資料
に2	日誌
に3	その他記録・所蔵資料（パンフレット・チラシ等）
	その他
そ1	『早稲田大学百年史』早稲田大学出版部
そ2	『三田村鳶魚日記』
そ3	八王子市の記録・所蔵資料（パンフレット・チラシ等）

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
明治25(1892)年 10月			関川座				追分町小川森太郎が明治 25年10月公演のチラシを 発見、車人形が「面仕立両 足人形」と呼ばれていた と報ずる。関川座は「現在 の関谷座」とされている。	し5 (S12.6.29)
明治45(1912)年 1月29日以前							「車人形の吉田冠十郎も 此頃は貸席で素人義太夫 などの相手になつてゐる」 との記載があり。	し3 (S45.1.29)
大正13(1924)年 5月22日			平音次郎宅	吉田梅三郎、西川柳 寿	若松福寿太 夫、雀屋妻三 郎、若松紋左 衛門、若松浜 尾太夫、吾妻 太夫		三田村鳶魚が河竹繁俊と 調整して坪内逍遙夫妻を 招く	そ2
5月22日			八王子市大横町 平乙次郎(音次 郎)方				坪内逍遙夫妻・河竹黙阿 弥が三田村鳶魚に案内さ れ車人形を見物	し6 (T13.5.24)
7月5日			神楽坂演芸場					そ2
7月6日	車人形特別公演		神楽坂演芸場			郷土芸術保存会	山口剛・小沢愛園が車人 形、河竹繁俊が説経節に ついて講演	し6 (T13.7.6)
大正15(1926)年 4月10日～12日			上野松坂屋劇場		薩摩駒次太夫			た4
9月5日～10日	八王子織物宣伝		日本橋白木屋劇 場		薩摩駒次太夫			た4
昭和元(1926)年 10月3日			帝国ホテル		薩摩駒次太夫			た4
昭和3(1928)年 1月6日		三番叟、一の谷首打え場、山椒 太夫山別之場	丹沢彦次郎宅			小田内通久		た3 た5
1月24日		日高川、蝶子対面、六剣山中 山、熊谷館	加住村石川座敷					た3 た5
1月25日		蝶子対面、安達一ツ家	松竹橋橋本政次 郎宅	瀬沼時太郎 他				た5
3月28日		蝶子対面、一の谷首打、鏡山 奥、安達一ツ家	高座郡原町田不 動尊	瀬沼他				た3 た5
5月5日～6日		朝顔日記、三庄太夫追込、加々 見山、蝶子対面、忠臣二度目清 書、目玉献上、安達が原一ツ家	高座郡田名	瀬沼時太郎 他				た3 た5
5?月			平林寺		薩摩駒次太夫			た4
7月2日	八王子笨(笠の誤記 か)守稲荷社	朝顔日記、小栗、三庄太夫一代 記、神霊矢口之渡	本町宗徳寺内	瀬沼時太郎他				た3 た5
7月14日～15日		弁慶上使、白木屋、三勝卒七、 大功記、伽羅先代萩、朝顔日 記、壺坂豊駿、奥州安達原	津久井郡三ヶ木 村		義太夫			た3 た5
7月15日		三番叟、一の谷軍記首打、日高 川清姫道行、栗畑対面	大横町平	瀬沼 他				た3 た5
7月15日			大横町平音次郎 邸				民俗芸術の会に加わり観 賞した日高一が「車人 形を観る」上下を『東京朝 日』昭和3年7月27日・28 日に寄稿	し5 (S3.7.17)
7月		千両幟、小栗到着、切夫婦対面	八王子久嶋稲荷 大明神	瀬時 他				た5
8月25日	地藏尊興行	白木屋鈴ヶ森、葛の葉子別、熊 谷館、神霊矢口渡	八王子三年坂雲 龍寺	瀬沼 他				た5
9月2日		朝顔浜松、矢口舟の場、通中月 栗毛、安達一ツ家、朝顔記大井 川	千人町興岳寺	瀬沼 他				た5
9月5日～6日	相州伊勢原興行	葛の葉子別れ、蝶子対面、安達 が原、加々見山	相州伊勢原活動 キネマ館	時太郎 他				た3 た5
9月7日	奉納		元本郷川村稻荷					た3
9月19日～20日		阿古屋害、赤口並木、熊谷首 打、熊谷館、日蓮記身売、日蓮 谷打、勤弥成仏、日高庄、高庄 〇、加々見山	八王子館	時太郎 他		坂本嘉一		た3 た5
9月22日	小門直入院大六天 祭礼	千両幟、〇王対面、葛の葉、鏡 山、日高川	直入院	瀬沼 他				た3 た5

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
9月23日	久島井三夜祭	朝顔浜松、順礼場、〇〇段殺し、三庄太夫追込、大仏殿記景清目玉	八王子日吉町					た3 た5
10月22日		神霊矢口渡、道中膝栗毛、阿波の鳴門、安達一ツ家	八王子本町太子堂	瀬沼時太郎 他				た3 た5
11月5日	大法寺鳥の祭	阿波鳴門順礼、小栗二度対面、三庄太夫入対〇、日高川入相桜、加々見山尾ノ上部屋	上野町大法寺	瀬沼 他				た3 た5
11月25日	東京早稲田校長高田早苗先生招列席興行	御祝儀三番叟、大仏伝記目玉献上場	八王子常磐亭	瀬沼 他	太夫丹沢、三味線長畑			た3 た5
12月9日		熊谷館、日高川、目玉献上、鏡山尾く部や	南新鈴木信太郎殿方	瀬沼 他				た3 た5
昭和4(1929)年 1月21日～23日			東京三越デパート本店7階ホール			武蔵の会	三田村篤魚夫妻で見物	た3 た5 そ2
1月21日～28日	武蔵野今昔の会	(毎日余興として八王子の車人形、埼玉県飯能踊りを催す)	三越			武蔵野研究会	瀬沼時太郎が車人形を出品	し5 (\$41.20, 1.22)
4月15日			宗関寺					そ2
6月1日			東京早稲田大学講堂					た3 た5
6月15日			八王子市内	吉田冠十郎				そ2
6月17日			東京牛込水道町宝生館食堂			鈴木信太郎 ほか		た3 た5
10月28日	不動尊人形奉納	鏡山草り打之場、忠臣二度目清書、千両幟、景清目玉献上	高幡不動尊	丹沢 他				た3 た5
昭和5(1930)年 3月8日		三番叟(以下破損)	横浜市本町一丁目会館			青年幹事		た3 た5
3月15日～16日	人形興行		西玉郡手沼村	冠十郎 他	義太夫			た3 た5
4月13日		朝顔日記、御所様上使、阿波鳴門、壺坂雪駱記、玉藻三段目、太閤記十段目		冠十郎 他			前部破損につき時期・場所不明だが3月と4月の間に記載	た1
4月6日			五日市町劇場					た3
4月23日		阿波の鳴門、連れ戻し、鏡山御殿、玉三	横須賀市稲岡町隣保会館	丹沢秀 他		山下重吉氏		た3 た5
4月26日		大功記十段目、御所様上使、佐倉宗五郎別(以下破損)	大久野村 劇場宮田屋	冠十郎 他				た3 た5
昭和5年		狐別れ、信田森、日高川、盛俊忠臣、阿波鳴門、新吉原揚屋		瀬沼 他			前部破損五木時期・場所不明だが4月と5月の間に記載	た1
昭和5年		小栗対面、日高川、明からず、高座巻		瀬沼 他			前部破損五木時期・場所不明だが4月と6月の間に記載	た1
5月4日	機神祭		大横町大善寺境内					た3
5月10日			千人町大法寺					た3
5月24日			三年坂雲龍寺	瀬沼 他				た1
6月15日	松門寺人形	三庄太夫一代記対王佐渡嶋、日向嶋景清対面之場、芦屋道満葛の葉子別れの場、信田森狐別之場	松門寺	瀬沼 他			前部欠損のため詳細不明	た3 た5
7月14日		大功大仏殿目玉献上	浅川町電車車庫	丹沢		武蔵中央電鉄		た3 た5
7月15日		日向〇道行、明烏正〇、奥州時鳥殺し場	浅川町電車車庫			武蔵中央電鉄		た3 た5
7月16日		小栗本陣入、義経奥州落庄司館、日高川入相桜	浅川町電車車庫	長畑、松村、丹沢		武蔵中央電鉄		た3 た5
8月24日	寺地藏尊人形	宗五子別(以下欠損)	三年坂雲龍寺	瀬沼 他				た3 た5
9月7日		敦盛子拾、日高川、三庄太夫対王対面、千代萩政岡忠義、播州血屋敷	千人町弘覚寺	丹沢 他				た3 た5
9月19日	川口村壺ヶ原人形	阿波鳴門、二度目清書、玉三段目	上川口壺ヶ原	瀬沼 他				た3 た5
9月20日	元本郷稲荷祭人形	二度目清書、追込、身延山、玉三、朝顔日記、順礼場		瀬沼 他				た3 た5

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
9月24日	上野町地藏尊人形	千両幟、国分寺追込、葛の葉、政岡忠義、皿屋敷	上野町地藏尊	瀬沼 他				た3 た5
9月28日	八王子本町不動尊	二度目清書、阿波鳴門、三庄太夫追込、加々見山錦鈴、神霊矢口渡	本町不動尊	瀬沼 他				た3 た5
10月2日		日高川、明烏浦里、大仏殿記、千代萩	田中の相即寺	瀬沼 他				た3 た5
10月5日	慰安会	日高川、明烏浦里雪、目玉献上	浅川町小学校	助沢、長畑、丹沢彦他				た3 た5
昭和5年か 17日、19日		二度清書、鳴門上、小栗二度対、玉三、朝顔、阿波鳴門下、盛利忠臣、小栗矢取、安達三切、矢口渡	上野町大法寺	丹沢、瀬時 他			前部破損のため時期不明	た1
昭和6(1931)年 1月5日	水天宮祭	楠公桜井駅、国分寺、鎌倉三代記、千代萩行の間、蝶子対面	八王子大横町	柳時、柳車、柳秀、周助、丹沢				た2 た3
1月28日	不動尊祭典	小栗対面、小夜中山八太郎殺、楠公桜井駅、玉藻前旭袂道春館	八王子本町三丁目不動尊	柳時、柳車、柳秀、周助				た2 た3
2月4日	本覚院稲荷祭	葛の葉 狐別、信田森狐別、景清目玉献上、日高川清姫	東京上野鶯谷本覚院	吉田冠十郎 他			三田村鳶魚見物	た2 た3 そ2
3月1日	稲荷神社奉納人形	楠公桜井駅、道中膝栗毛、箱根靈験記九十九屋敷	八王子市小門	河井 他				た2 た3
4月6日	御寺人形	景清目玉献上、先代萩政岡忠義、揺姫下賤門前弘、小栗判官本陣到着、矢口渡村舟殺の場	横山村山田	丹彦 他				た2 た3
4月13日	三芳村多福寺車人形	日向景清人丸対面、日高川入相清姫、小栗判官万屋本陣、小栗判官妹背対面	三芳村多福寺	瀬沼 他				た2 た3
4月16日	野火止村平林寺車人形(半僧坊祭典)	盛利忠臣、熊谷館下賊、門前、日高川					三田村鳶魚見物	た2 た3 そ2
4月17日	野火止村平林寺車人形(半僧坊祭典)	大仏殿目玉献上、小栗矢取、日向景清人丸道行、小栗本陣入、妹背対面、楠公別、日向人丸対面		瀬沼 他				た2 た3
4月29日	車人形興行	小栗一代記対面、日高川入相桜	英和女学校	丹沢彦太郎 他				た2 た3
5月3日	上恩方村狐宿人形座敷	石童丸刈かや札書、阿波鳴門、加々見山奥館		瀬沼 他				た2
5月5日	大久野村人形	日吉丸三、寺子屋源蔵戻り、朝顔日記、弁慶上使	大久野村劇場	瀬沼 他	義太夫	越沼為市殿人形料拾五円也		た2 た3
5月24日	三年坂地藏尊人形	道中膝栗毛赤坂並木、基太平記白石揚屋場、傾城阿波鳴門順礼場下		瀬沼 他				た2 た3
5月28日	不動尊車人形奉納	小栗夫婦対面、無鎮山小夜中山雪之場、楠公桜井駅別れ場、玉藻前三段目道春館	八王子町本町	丹沢 他				た2
5月31日	侯爵前田様御別座車人形開演ノ光栄二候	式三番叟、日高川入相桜、小栗妹背対面	東京市外大久保町前田侯爵別庭	吉田冠十郎 他				た2 た3
5月31日	鈴木新太郎殿宅人形	小栗妹背対面、景清目玉献上、葛の葉信田森、日高川入相桜	市街荻窪井萩町					た2 た3
6月1日		小栗万屋本陣入、小栗妹背対面、日高川入相桜	上野松坂屋本店7階ホール	瀬沼時太郎 他				た2 た3
6月8日	松坂屋店員慰安会車人形	信田森別れ	上野松坂屋本店	吉田冠十郎 他			説経葛の葉子別れ、義太夫また助切腹も上演。合わせて車人形陳列を行う	た2 た3
7月25日		阿波鳴門、三庄田遊追込欠舞、玉藻前三	大久野劇場	連中九人				た2 た3
8月10日	八王子市子安不動尊人形奉納	朝顔日記宿屋之場、三太夫かくまれ場、千代萩御殿場、神霊矢口渡場、楠公桜井別場	子安町不動尊	瀬沼時太郎 他				た2 た3
9月3日	八王子千代町了法寺車人形	葛の葉子別場、小夜中山平内帰場、日蓮上人物語り動作成仏、新吉原揚屋場	了法寺	瀬沼 他				た2 た3
9月11日	山入薬師車人形	阿波鳴門上下、日高川、千代萩、桜の由	大光寺	瀬沼 他				た2 た3
9月19日			飛行会館	吉田冠十郎				そ2

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
9月23日	八王子日吉町 二十三夜祭車人形	阿波鳴門上下、盛利忠臣、桜野田、千代萩御殿		瀬沼 他				た2 た3
9月24日	日吉町地藏尊祭車 人形	三番叟、朝顔日記大井川、三庄太夫国分寺、基太平記白石湯、心霊矢口渡、玉藻前三段目	日吉町地藏尊	丹沢 他				た2 た3
9月28日	八王子本町不動尊 車人形	朝顔日記、弥治北八、奥州安達原、番州皿屋敷、伽羅先代萩	本町不動尊	瀬沼 他				た2 た3
10月10日	織物組合宣伝	道中膝栗毛、葛の葉、日高川	東京日本橋白木屋デパート	瀬沼時太郎 他	内田総淑	八王子織物組合 宣伝部		た2 た3
10月11日	織物組合宣伝	道中膝栗毛赤坂、金毘羅利生記百度	東京日本橋白木屋デパート			八王子織物組合 宣伝部	義太夫あり	た2 た3
10月18日	元八王子中宿薬師 車人形	小夜中山山路八太郎の場、住家の場、白石上座之場、千代萩御殿の場、日高川入相桜		丹沢彦太郎 他				た2 た3
11月4日	藤間勘八事		東京浅草区瓦町 藤間藤子方					た2 た3
11月14日	母校創立五拾年記 念事業	高野山札書、千代萩忠義、日高川	横浜記念会館	西川柳時、吉田冠十郎、西川柳秀、瀬沼周助、吉田若之助	浜尾太夫、総太夫、福寿太夫 義太夫豊竹紋治、豊竹紋弥	横浜英和女学校	千代萩忠義は義太夫上演	た2 た3
12月4日	八王子市常盤亭祝 賀祭	御祝儀三番叟、小栗夫婦対面、日高川入相桜	八王子市八日町 常盤亭	瀬沼 他		辻		た2 た3
昭和7(1932)年 1月15日						南多摩郡由木村 青年		た3
1月16日～17日	南多摩郡由木村字 松木人形興行	弁慶上使、五エ門釜入、千代萩、大功記十段目、阿波鳴門、玉藻前三段目、寺子屋、吉原揚元		丹沢秀、瀬沼時、周助、河井	義太夫	由木村石川健三、 松木小田万治		た6
1月25日	金光様新年会余興 車人形	御祝儀三番叟、日高川渡場、阿波鳴門	松竹橋本庄次郎 方	田中喜一郎、瀬沼時太郎	橋本庄次郎、高橋文吉、助手三味線瀬沼周助			た6
2月18日	鬼子母神祭	御祝儀三番叟、阿波の鳴門下、日高川、千代萩、高座巻	八王子市明神町	喜一、丹沢、河井、台町喜		八王子小門小林 亀太郎		た3 た6
3月12日			西多摩郡今井村 甲子	瀬沼時太郎、田中喜一郎 他				た6
4月10日	相州津久井城山下 花見人形	小栗夫婦対面、三庄太夫国巡検、法童丸対面	津久井郡城山川 原	瀬沼、丹沢 他		八王子辻株式会社		た3 た6
4月16日～17日	半僧坊祭	阿波鳴門上下、三庄太夫追込の段・佐渡親子対面、法童丸対面、蓮生上人物語、安達一つ家、六ツ浦浜浦君、葛の葉信田森、剣山八太郎山の場	平林寺	瀬沼、丹沢 他				た3 た6
5月1日		目玉献上、小栗妹対面、信田森、弥次赤坂並木・野寺之場	東京市街新宿倶 楽部	吉田冠十郎 他		鈴木信太郎		た3 た6
5月1日	第一回車人形を観 る会		新宿クラブ				会費50銭	し3 (\$7.4.29)
5月28日	本町不動尊人形奉 納	三番叟、千両幟、信田葛の葉、累土橋、札書	本町不動尊	瀬沼 他		先達		た3 た6
6月4日	國學院大學車人形	三庄太夫国分寺・佐渡嶋対王國順検、小栗判官妹背対面、高野山札書之段	東京市街渋谷町 國學院大學	瀬沼 他		折口文学博士		た3 た6
6月4日			國學院大學講堂			國學院大學郷土 研究会		し5 (\$7.5.19)
7月8日		一の谷軍記盛利忠臣、三庄太夫国分寺追込、筑紫写苺萱双紙、玉藻前三段目	浅川町麓峯尾仁 重殿方車庫	瀬沼、丹沢 他				た3 た6
7月15日	小比企多摩少年院 車人形	三番叟、双葉軍記盛利忠臣、大仏供養景清、目玉献上	多摩少年院	瀬沼、丹沢 他				た3 た6
7月15日	慰安会	楠公桜井の駅、景清目玉献上	由井村国立多摩 少年院	恩方村西川連	元本郷町薩摩 都太夫			し5 (\$7.7.2)
7月17日		三番叟、熊谷館下職の場・阿房弘の場、日高川入相桜、伽羅先代萩御殿、伊達原一つ家の場	浅川町麓橋本喜 太郎方	人形連中(瀬沼、丹彦 他)				た3 た6
9月18日	高尾山下稻荷祭祭 典	後太平記、三庄太夫佐渡ヶ嶋、朝顔記大井川、小栗判官到着本陣入、道中膝栗毛赤坂、妹背山女貞訓	高尾山下旭稲荷	人形連中(丹沢秀、 瀬沼 他)				た3 た6

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
10月8日～9日		阿波鳴門、松王丸実見、盛利忠臣、妹背山女庭訓	本町不動尊	丹沢、瀬沼 他				た6
9月21日		朝顔日記大井川、三庄太夫一代記対王対面、道中膝栗毛赤坂並木、妹背山女庭訓、播州皿屋敷	八王子館	人形連(冠十郎他)		坂本喜一郎		た3 た6
10月12日		朝顔日記、国分寺、武田松姫武勇伝、高野山札書	上恩方小学校	丹沢、瀬沼 他		山下重太郎		た3
10月28日			本町不動尊					た3
11月6日	川原宿倶楽部	日高川入相桜、絵本太閤記、播州皿屋敷、妹背山女庭訓、松姫	川原宿	丹沢、瀬沼 他		川原宿青年倶楽部、山下重太郎		た3 た6
11月11日～12日			西多摩郡箱根町昭和館	連中(田中喜一郎、瀬沼時太郎、丹沢秀三 他)、箱根ヶ崎連中(原島弥五郎他)		坂本喜一郎		た3 た6
11月15日		阿波の鳴門、日高川、千代萩、国分寺、妹背山	飯能町飯能座			坂本喜一郎		た3 た6
11月27日	八王子館車人形	阿波ノ鳴門、追込寺、小栗対面、武田松姫・案下峠の場	八王子館	田中喜一郎、瀬沼時太郎、丹沢秀三他		山下重太郎		た3 た6
12月3日	関谷座慈善興行	三庄太夫寺追込	本町関谷座	柳時、柳秀、周助	語り下田喜一郎、三味線川井	八王子市長		た3 た6
12月4日	関谷座慈善興行	日高川入相桜	本町関谷座	周助、柳秀、柳時、吉田冠十郎	太夫河井、三味線下田	八王子市長		た3 た6
12月20日			八王子若松亭			株式会社辻卓		た3
12月21日		三番叟、日高川、夫婦対面	若松亭	田中、丹沢、瀬沼他		八王子辻株式会社		た6
昭和8(1933)年 1月15日～16日			南多摩郡日野町			坂本喜一郎		た3
1月20日	青年座敷		川口町山入					た3
1月25日	金光教新年会					丸正		た3
2月23日	慰安会		八王子府立第四女学校					た3
2月23日			府立第四高女	八市有志			第四高女に慶応大学文学部教授折口信夫を招聘し民俗・芸術の講演に合わせ車人形を実演	し5 (S&2.10)
3月3日			箱根ヶ崎村昭和館			坂本喜一		た3
3月9日	車人形上演		早稲田大学大隈会館				「昭和八年三月九日、この日快晴。早稲田に着くと、先ず大隈会館に案内した。かねて呼んであった秩父に古来からある車人形の実演をショーは興味をもって二曲も三曲も飽かずに観て、最後に特に「ハラキリ」の型を所望して、これにも非常に満足の意を表した。」	そ1 第3巻 (1987 年刊) 436頁
3月	車人形上演			西川古柳			バーナード・ショーが来日した際に上演したと西川古柳(瀬沼周助)の訃報記事にある	し1 (S44.10.9)
3月21日			上恩方学校					た3
4月13日			北多摩郡田無町伏見稲荷			辻卓治		た3
4月	全国青年団郷土芸術大会		日本青年館	恩方村西川連			昭和8年2月時点の予告	し5 (S&2.10)
6月1日～7日	八王子織物組合宣伝		東京日本橋通高島屋店					た3
6月13日			横須賀隣保館			山下重太郎		た3
7月25日			山梨県巖村俵水荘			安東		た3
8月31日			津久井郡久保沢久保沢館			辻株式会社		た3
10月15日			川原宿			心源院		た3

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
10月10日～13日			新宿伊勢丹					た3 そ2
昭和9(1934)年 1月13日			八王子商業会議 所			八王子中学		た3
2月4日			小門町小林亀太 郎方			小林亀太郎		た3
3月17日	説経節・車人形の再 興を目的とする観 賞会		元本郷町鈴木平 四郎方	西川連		説経節保存会	「南郡多摩村関戸西川連」 とあり	し5 (S9.3.11)
4月21日			東京日本橋三越 ホール			法政大学		た3
4月21日		御祝儀式三番叟、出世景清大 仏伝記目玉献上の段、三庄太 夫綴綿栗畑親子対面の段、日 高川清姫嫉妬の段			都太夫ほか13 名	法政大学文学研 究会	小田内通久の講演あり (東京日日)	し5 (S9.4.21)
4月22日			西多摩郡霞村七 日市場甲子館			薩摩会		た3
5月2日			横山村舟田地蔵 尊			八王子市元本郷 有志者		た3
5月5日			西多摩郡日野町 小学校			小山校長		た3
5月20日	神奈川県鎌倉郡義 経会七百五拾年祭		腰越町万福寺					た3
5月25日			東京丸の内東京 會館			八王子市久保田 本店		た3
5月26日			八王子外西中野 小学校			教員会		た3
6月8日			横山村龍泉寺			小松重盛		た3
6月18日			八王子鬼子母神			小林タツ		た3
6月22日			八王子万町長心 寺大黒天					た3
8月5日～7日	納涼会		藤沢町清浄光寺					た3
9月24日			上野町地藏尊					た3
9月24日			日吉町地藏尊			小松		た3
9月26日			小門金光教会			丸正		た3
10月5日			本町関谷座			小松		た3
10月20日	長心寺大黒天祭		万町長心寺					た3
10月21日			上川口福寿寺	(人形五)		峯尾		た3
10月24日			本町関谷座			警察署		た3
10月28日			下谷区入谷			小田内氏		た3
11月4日			浅川町浜野座敷			丹沢氏		た3
11月10日			上野町大法寺			内田		た3
11月9日			恩方学校			役場員		た3
11月20日			檜原村鹿島神社			小松		た3
12月1日			本町関谷座			社会事業		た3
昭和10(1935)年 1月7日			小宮町			学校女窓会		た3
1月10日～15日			新宿伊勢丹劇場		三代目薩摩今 津太夫			た4
1月25日	金光教新年会					丸正		た3
2月10日			元本郷稲荷			瀬沼兼吉		た3
2月11日	稲荷祭初午		元八王子村のり き					た3
4月5日～6日			大久野村		義太夫連東京 二人			た3
4月7日			元本郷鈴木平四 郎方					た3
4月14日			大横町平音次郎 方					た3
4月18日	甲子大黒祭		万町長心寺					た3
4月28日	公演会		関谷座			八王子車人形保 存会	出演者を目下詮衡中	し5 (S10.4.26)
6月15日			八王子館			坂本喜市		た3
7月7日			高尾山頂上寺院			浅川好史会		た3

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
8月11日			諏訪宿観世音					た3
8月18日	稲荷祭		八木町宗徳寺					た3
8月29日			東京青山南町花柳寿美子					た3
9月7日			恩方村上恩方家下			熊野神社役場		た3
9月10日			三年坂地藏尊					た3
9月10日			日吉町地藏尊					た3
9月26日			日吉町地藏尊			小松		た3
9月28日			原町田不動尊	人形連				た3
10月10日	明神町金毘羅祭		明神町					た3
10月20日				人形連				た3
10月28日			本郷町善能寺					た3
11月17日	同窓会		八王子市外小宮学校	人形連		同窓会		た3
11月20日			青梅町初音座			川上多摩樹		た3
11月24日			元八王子学校					た3
11月24日			西川製糸場					た3
12月1日			元八王子小峯方					た3
12月3日			関谷座			八王子市社会教会		た3
12月11日	大鳥祭		八王子市八幡宮					た3
昭和11(1936)年 1月15日			川口村上川口			学校同窓会		た3
1月22日	新年会		恩方村松竹橋本正八郎宅					た3
1月23日			丹木村小学校					た3
2月18日	稲荷祭		小門町稲荷			小林亀太郎		た3
4月1日	多賀神社祭		本郷町多賀神社					た3
4月3日			北多摩郡神代村金龍寺					た3
4月10日	金毘羅祭		八王子市明神町					た3
4月21日			加住村少林寺					た3
5月3日	日吉神社祭		八王子市日吉町			小松		た3
5月5日			川口村下川口			青年敬老会		た3
5月10日	琴平祭		明神町			神官松宮		た3
6月10日	琴平祭		明神町			神官松宮		た3
6月11日			府中大國魂神社神祭殿			府中史談会		た3 に3
6月21日	稲荷祭		八木町宗徳寺			信者		た3
8月10日	観音祭		元八王子村諏訪宿			信者		た3
8月24日	地藏祭		浅川町新地			信徒		た3
9月1日	三年坂地藏祭		雲龍寺			雲龍寺		た3
9月5日	元本郷町稲荷祭		八王子市元本郷町			川村稲荷信者		た3
9月11日	日吉町観音祭							た3
11月3日	五日市劇場義太夫人形		五日市劇場	人形使東京来		吉田友之助川上多摩樹		た3
12月5日	八日町八幡祭		八王子市八日町			小松		た3
12月5日			関谷座			社会協会		た3
昭和12(1937)年 1月23日			立川町			幼稚園		た3
3月5日	川野車人形(小河内村)	小栗判官一代記、出世景清一代記	小河内村川野古屋五郎方				弓箭神社祭礼にて。13年ぶりの上演。	し4 (S123.7)
4月3日			八王子市元本郷鈴木殿					た3
4月4日			八王子館			榎本勘次郎		た3
4月5日			水天宮			神官		た3
4月24日			日比谷公会堂			観光会		た3

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
4月24日	観光祭車人形公演	日高川入相桜	日比谷公会堂		薩摩小浜太夫	府観光協会		し5 (\$124.15)
5月10日			横山村新地			浜野		た3
5月11日	五日市劇場義太夫 人形		五日市劇場	人形使東京来		吉田友之助川上 多摩樹		た3
5月28日	不動尊祭		北多摩郡田無町 総持寺			吉田伊三郎座持		た3
8月18日	観音祭		北多摩郡吉祥寺 町			吉田伊三郎座持		た3
9月28日			八王子南新町					た3
昭和13(1938)年 1月5日			八王子市大横町 水天宮					た3
5月28日			小宮村中野小学 校			教員会小川校長		た3
6月15日			高幡順徳小学校			教員会小松		た3
6月28日			浅川町小学校			教員会小松		た3
7月20日			稲城小学校			教員会小松		た3
昭和14(1939)年 11月20日	「秘芸研究座談会」 で美演	景清日玉献上、葛の葉子別れ、 赤坂並木之段	(会場未定)			保存会	三田村鷹魚の車人形につ いて話をし、日活多摩川 の監督、俳優小杉勇らが 参加予定	し5 (\$1411.11)
昭和14年			横浜本町記念館		三代目薩摩小 若太夫			た4
昭和15(1940)年 11月20日	郷土芸術説教浄瑠 璃車人形保存会 第1回発表会	御祝儀三番叟、明烏里浦時次 郎、佐倉宗吾甚兵衛渡し場	三崎町八王子館			八王子史談会	保存会創立第1回発表	し5 (\$1511.20)
12月16日	八王子車人形保存 振興会 第2回発表 会		三崎町八王子館			八王子車人形保 存振興会	11月20日第1回に続く第 2回か。保存振興会は府観 光協会内につくられる。 関谷市長を顧問とする機 構に薩摩小若太夫、薩摩 小若太夫、西川柳時あり	し5 (\$1512.17)
昭和16(1941)年 1月18日	八王子車人形保存 振興会 第3回発表 会		三崎町八王子館			八王子車人形保 存振興会	新春興業	し5 (\$161.18)
9月5日	八王子車人形初の 東京公演	御祝儀三番叟、熊谷館騒動(桂 姫下賤の段、桂姫門前弘之 段)、出世景清一代記(眼玉献 上之段)	京橋明治製菓ビ ル6階講堂	西川柳車、楽屋一 同、吉田冠次郎、西 川柳時	薩摩高太夫、 京屋総淑、薩 摩小若太夫、 京屋米吉、薩 摩小供太夫、 京屋高次			し5 (\$168.17)
昭和17(1942)年 5月30日	鑑賞会	三番叟、三庄太夫一代記千王 丸別れの段、熊谷館騒動桂姫 下賤の段、小栗判官一代記判 官照手姫二度対面の段	早稲田大学演劇 博物館				早稲田大学教授河竹繁俊 の依頼による	し5 (\$175.29)
9月23日	観賞会	三番叟、日高川 等	第二国民校講堂			八王子車人形振 興会、知新会(共 催)	市長、町会長等参集。	し5 (\$179.18, 9.24)
昭和18(1943)年 4月26日	講演会余興 八王 子車人形		第三国民学校講 堂			大政翼賛会八王 子支部長 深澤 友彦	講師 海軍少将 高橋節 雄 閣下	そ3
昭和24(1949)年 11月3日	文化の日車人形公 演	日高川	元赤坂離宮	西川古柳座 西川車人形*	薩摩小若太夫			に2 た4
昭和25(1950)年 10月2日	芸術祭(郷土芸能 大会)			西川古柳座 西川車人形*	薩摩小若太夫		文部大臣賞受る	に2 た4
11月3日	明治神宮三十年祭	日高川	明治神宮	西川車人形*	薩摩小若太夫			た4
昭和26(1951)年 10月24日	古典芸能研究	三番叟	富士森公園	秋間一昇一座	薩摩小若太夫		石川の獅子舞と出演	た4
11月22日	立川市文化会余興			西川車人形*	薩摩小若太夫			た4
昭和27(1950)年 11月25日	南都農産物共進会 余興		日野中学講堂	西川車人形*	薩摩小若太夫			た4
昭和31(1956)年 10月1日～5日	全国無形文化財選 抜大会			西川家元車人形*	薩摩小若太夫	松本市教育局	関東代表。毎日新聞社よ り優秀旗受ける	た4
11月			上野博物館(国立 博物館か)	西川車人形*	薩摩小若太夫		文化財として出演	た4
昭和32(1957)年 3月26日	全国東織物に■す る各地区余興	日高川入相花王 清姫道行の 段	白木屋(日本橋)				二日間契約金	に2

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
3月27日	全国東織物に■する各地区余興	日高川入相花王 清姫道行の段	白木屋(日本橋)					に2
4月21日	八王子第一小久米井亮江先生新作松姫物語二部作完成による披露公演		八王子市立第一小学校	西川古柳他		松姫舎		に2
6月23日	横地監物祭による講演と車人形を見る会		元八王子町宗関寺			八王子市教育委員会		に2
7月7日	史蹟と車人形を見る会		元八王子城下大悲閣			京王文化会		に2
9月21日・28日	バスによる東京歴史を語る会(第1回)武蔵野の古城と車人形を訪ねて					朝日新聞社	21日のAコース、28日のBコースともに「八王子(車人形)」あり。講師は駒沢大学講師桜井信正	し1 (\$32.9.16)
昭和33(1958)年3月22日	車人形観賞会		信濃町 文学座					に2
4月3日	薩摩浜吉襲名披露		寺町 鬼子母神			薩摩浜吉襲名披露の会		に2
4月5日	春の桜まつり		三越			京王電車		に2
4月6日			吉祥寺 井ノ頭公演			■帝都 小西六		に2
6月15日	南西北芸能人慰霊祭余興		八王子学園講堂	西川車人形*	薩摩小若太夫	説経浄瑠璃保存会		た4
8月			日本橋ソゴール	西川車人形*	薩摩小若太夫			た4
昭和34(1959)年2月			白木屋ホール	西川車人形*	薩摩小若太夫			た4
昭和35(1960)年6月25日	故西川古福慰霊祭		寺町鬼子母神堂		薩摩小若太夫			た4
10月28日	都立工業学校体育館落成記念こけら落とし		都立工業学校	西川車人形*	薩摩小若太夫			た4
昭和36(1961)年5月17日	一都十県芸能大会		長野市民会館					に2
昭和37(1962)年10月8日	三多摩振興のつどい	小栗判官	八王子市民会館	1	小栗判官			に3
昭和38(1963)年11月3日	八王子車人形説経浄瑠璃 一座物故者追悼慰霊祭 パンフレット							に2 に3
昭和39(1964)年10月23日	オリンピック外人選手慰安公演	日高川			薩摩若太夫			に2 た4
昭和40(1965)年3月17日		日高川			薩摩若太夫	アジア・アート・アソシエーション		た4
6月1日	八王子車人形、ふきの会、平井澄子の記載あり							に2 に3
昭和42(1967)年5月28日	保存会第1回公演会	道成寺日高川、小栗判官矢取りの段	市立一小講堂				久米井亮江の呼びかけで昭和41年に保存会発足、とある	し1 (\$42.5.25)
昭和45(1970)年7月29日	演劇人祭		東宝劇場	八王子車人形			「二十周年記念演劇人祭」に同じか(日時異なる)	し7 (\$45.7.11)
9月	二十周年記念演劇人祭	日高川	宝塚劇場	古柳外八名				に2
昭和46(1971)年9月2日	第2回観光資源を守る集い 講演と郷土芸能の夕べ	御祝儀三番叟、「日高川入相桜」より渡し場の段	千代田区朝日講堂	西川車人形座*、西川古義*	十代目薩摩若太夫	(主催)観光資源保護財団、(後援)朝日新聞社	(解説)秋間一昇	し2 (\$46.9.4)
昭和47(1972)年3月4日～5日	第3回東京都民俗芸能大会	小栗判官車引	千代田区朝日講堂		内田総淑	(主催)東京と民俗芸能実行委員会・東京都、(後援)朝日新聞社		し1 (\$47.3.6)
6月10日～11日	古浄瑠璃系人形と特殊な一人遣い 国立劇場第十四回民俗芸能公演 日本の民俗劇と人形芝居の系譜	大仏殿記(景清目玉献上の段)	国立劇場小劇場	四代西川古柳他	薩摩津賀太夫		10日午後2回、11日午後1回公演。三人遣いの説経人形・のろまん人形・文弥人形、一人遣いの八王子車人形・北原一人遣い・乙女文案が共演	に1、し7 (\$47.6.9)

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
昭和50(1975)年1月13日～14日	東京都八王子市観光祭	三番叟(長唄)日高川(説経節)	静岡市産業会館	三番叟(長唄)西川古柳、柳時、柳■	津賀太夫、浜尾			に2
1月25日	車人形見学	三番叟、八百屋お七		古柳		八王子第二小学校PTA		に2
2月22日	車人形観賞会	三番叟、東海道中膝栗毛	古柳舞台			八王子観光協会、京王電鉄		に2
3月22日	車人形観賞会	三番叟、日高川、膝栗毛、赤坂並木の段	古柳舞台			八王子観光協会、京王電鉄		に2
3月29日	車人形観賞会	甚兵衛渡し、三番叟、葛の葉子別	古柳舞台					に2
5月3日	車人形観賞会	三番叟 日高川	八王子西武デパート		津賀太夫			に2
7月5日～6日	創価大学滝山祭り	東海道中小田原の宿 三番叟 葛の葉子別れの場						に2
8月17日	高松宮に台覧を賜る	三番叟		西川古柳、西川柳時				に2
8月28日	演劇協会二十五周年記念演劇人祭	三番叟	国立劇場					に2
9月13日	車人形を観る会	三番叟、甚兵衛渡し	八王子郷土資料館	古柳外7名				に2
10月1日	東京祭	三番叟	立川市都教育会館	古柳				に2
11月2日	高尾山もみじ祭車人形公演							に2
11月16日	三多摩正教組合三多摩祭 車人形公演		小金井市					に2
昭和51(1976)年2月21日	国際交流基金よりアメリカ派遣の為車人形見学	三番叟、日高川						に2
3月14日	三多摩芸能祭	日高川 義太夫	稲城市公民館	古柳、冠士、柳時、柳玉				に2
4月18日	川野車人形		奥多摩町川野公会堂	川野車人形*		川野車人形保存会	高校生・大学生が継承しての初公演	し1 (S514.18)
5月3日	初代古柳生家墓まいり	三番叟、甚兵衛渡し、日高川	飯能市阿須会館					に2
5月30日～6月10日	ウニマ世界大会	三番叟、日高川	ソビエト モスクワ レニングラード					に2
6月26日	日本音楽のタベ	三番叟	渋谷パルコ劇場					に2
7月20日		日高川	新宿 朝日生命ホール	古柳	津賀、浜尾			に2
8月8日～9月2日	アメリカ建国二百年祭	三番叟、日高川					日本民俗芸能団 八王子車人形参加	に2
10月19日～20日	日本の音を鑑賞する会	長唄三番叟、長唄日高川	秋田県民会館	西川古柳、柳時、柳玉	杵屋栄三郎外十三名			に2
10月31日	開館十周年記念「関東の人形展」本田安次先生 関東人形の話、西川古柳座	三番叟、景清眼玉献上の段、人形の遣い方	八王子郷土資料館					に1
11月3日	高尾山もみじ祭り							に2
昭和51(1976)年11月7日	車人形を見る会		自宅にて			八王子教育委員会		に2
11月21日	東京義太夫協会	日高川	上野本牧亭	古柳、冠士、柳時、柳玉	三味線■綾太夫			に2
昭和52(1977)年3月14日	東京都観光祭	三番叟 万歳	渋谷西武デパート	古柳、柳時、柳玉				に2
3月20日	東京多摩芸能祭	甚兵衛渡し	日ノ出公民館					に2
5月3日～4日	日立市祭	三番叟 日高川		古柳、柳時、柳玉				に2
	日立市風流祭			柳車 柳昇 日本郷土芸能協会友情出演				に2
5月22日	日本ウニマ 世界の人形	三番叟 日高川	名古屋市					に2
6月21日	上野本牧亭	義太夫阿波鳴戸		古柳、柳時、柳玉	大夫 土佐菊三味線 仙広			に2

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
8月20日	本牧亭 八月公演	生写朝顔話大井川の段		古柳、柳時、柳玉	駒之助、三味 三生			に2
10月20日	府中市大國玉神社	三番叟 日高川	府中市大國玉神社	西川古柳座 五名	綾太夫 吉手 仙波社中			に2
10月23日	郷土資料館	小栗判官一代記 照手対面	郷土資料館					に2
11月3日	高尾もみじ祭 車人形出演							に2
11月18日		三番叟 小栗判官一代記 日高川入相花王 清姫道行の段 日高川の段	京都市京都会館	西川古柳 吉田冠士 西川柳時 西川柳玉 西川柳幸	都賀太夫 京屋浜尾	京都市観光局		に2
11月20日	車人形公演 若手社中		八王子公民館					に2
昭和53(1978)年3月4日	東京都民俗芸能大会	葛の葉の子別の段	勤労福祉会館	西川古柳座	津賀太夫、浜尾	東京都		に2
3月5日	東京都民俗芸能大会	葛の葉の子別の段	調布市公民館	西川古柳座	津賀太夫、浜尾	東京都		に2
3月7日	世田谷区民車人形観賞会	三番叟、葛の葉					バス2台85名	に2
5月31日	民俗芸能フェス 三庄太夫(1978)、佐倉義民伝(1979)						立川女子高校 古柳にインタビュー	に1
昭和54(1979)年3月13日		乱菊の段、信太の森の段	国立劇場(本番、稽古)			芸団協、テレビポート TBS		に1
8月21日～26日	アジア・太平洋国際人形劇祭典					日本ウニマ(国際人形劇連盟)	八王子車人形が参加予定	し7 (S54.1.12)
6月1日	民俗芸能フェス 三庄太夫(1978)、佐倉義民伝(1979)	佐倉義民伝(甚兵衛)					立川女子高校 古柳にインタビュー	に1
6月1日	ウニマ国際行事			西川古柳、西川柳時			秋田義倉人形・西畑人形とともにリエージュ(ベルギー)に派遣された	し7 (S54.10.19)
昭和56(1981)年10月17日	八王子資料館	二人三番叟 人形教室 日高川	市民会館和室舞台		義太夫協会 駒之助 綾一			に2
11月12日	車人形公演 飯能市加治東公民館	日高川入相花王、天田堤の段、日高川の段、鐘楼の段	飯能市加治東公民館			義太夫協会、仙波会		に1
昭和57(1982)年1月9日	国立劇場演芸場	二人三番叟 新車人形 リンド	国立劇場演芸場					に2
1月12日	三多摩メン協組	二人三番叟	中安ホテル	西川古柳 西川柳時				に2
1月22日	豊田立正佼成会新年会	二人三番叟 おかめ ひょっとこ リンド						に2
1月24日	八王子市民会館子供劇場	二人三番叟 人形教室 阿波鳴門 リンド						に2
2月5日	講演「車人形と私」		東京都管理職研修所榛名湖レークビラにて					に2
2月23日	子安神社 松宮宮司 西角井先生	二人三番叟、リンド						に2
2月27日～28日	第13回東京都民芸能大会	二人三番叟、小栗判官一代記	中央区立中央会館					に3
2月27日～28日	東京都民俗芸能大会	二人三番叟		西川古柳、西川柳時	義太夫四名、駒之助、■■■、幸純、綾一、鳴物三名			に2
3月16日	東京都観光祭	二人三番叟	渋谷東横デパート					に2
4月25日	左門の会 名古屋			柳時				に2
4月29日	八王子市横川町会	二人三番叟 おかめ ひょっとこ 阿波鳴門	横川会館(こけらおとし)		駒之助、綾一			に2
5月23日	車人形と津軽三味線の会			若手連				に2
5月29日	薩摩と若松の説経節をさく会	二人三番叟	労政会館					に2
6月3日	日野市工科短大十周年	二人三番叟						に2
6月21日	本牧亭	壺坂霊験記(沢市内)						に2

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
7月18日	早稲田ゼミナーハウス	二人三番叟 阿波の鳴門						に2
8月25日	左門会 国立劇場			柳時				に2
10月2日	ふるさと東京出演	二人三番叟	代々木公園					に2
10月17日	多摩芸能協会	二人三番叟	府中市市民会館					に2
10月17日	車人形しる会	矢取の段	八王子公民館(資料館)	お染 左門桜 久松 西川柳時 若手五名	義太夫協会			に2
11月3日	目と足で見る 恩方の歴史と民俗の会 250 名	車人形教室				恩方中学 PTA 主催		に2
11月14日	八王子産業祭	二人三番叟						に2
11月14日	市民文化祭参加民俗芸能フェスティバル 中南米帰朝記念公演	天田堤の段、日高川の段、鐘楼の段		清姫 西川古柳 船頭 行海上人 西川柳時 安珍 西川柳玉 修行者 坊主 吉田冠士 飛脚 西川柳幸 里人貢献 西川柳一	東京義太夫協会 竹本駒之助、竹本幸桂 豊沢幸治 竹本綿鈴 鼓会 八王子支部 仙波宏紫、宏蕉、佐京、元章、福原洋子		国立劇場大木靖部長、外十名参加 演出 西角井正大	に2
11月14日	車人形公演	天田堤の段、日高川の段、鐘楼の段	八王子市民会館					に1
11月26日	厚木市文化会館完成記念公演	日高川の段			駒之助太夫、綾一太夫			に2
昭和58(1983)年3月30日～31日	国立劇場民俗芸能公演「日本の民俗劇と人形芝居の系譜 車人形と説経節」	日高川真那古庄司館の段(新作) 清姫道行の段天田堤、日高川渡し場 道成寺鐘楼の段 新車人形新作「雪女」	国立劇場	西川古柳 西川柳時 吉田冠士 西川柳幸 西川柳玉 西川柳一 西川柳桜	義太夫竹本駒之助、竹本朝重、竹本幸桂、竹本綾一、囃子 仙波貴正 仙波宏紫 仙波宏薫 仙波元章 望月鏡子 三味線 鶴沢寛八 豊沢仙雛 豊沢幸治 野沢錦鈴 豊沢幸純		『読売』(夕刊)昭和58年3月25日に予告記事	に2
4月8日	立川ロータリークラブ	二人三番叟と教室	多摩信用金庫					に2
4月12日	第41回民俗芸能公演(車人形と説経節)	日高川入相花王(道成寺鐘楼の段)、雪女	国立劇場小劇場		説経節		3・30～31公演	に1
4月13日	東京日本国際親善センター車人形公演		東京日本国際親善センター					に2
5月21日	名古屋市婦人文化センター名古屋義太夫の会	二人三番叟		古柳、柳時、柳玉				に2
6月4日	車人形と説経浄瑠璃の会 第1回	判官照手対面の段 葛の葉子別の段	大丸デパート					に2
7月20日	本牧亭	朝顔日記 大井川の段			義太夫協会			に2
8月27日	伊藤バレーと共演	炎舞(お七)	新宿文化センター	古柳、柳時、柳玉				に2
9月21日	東京神田明神	二人三番叟	平将門塚にて					に2
10月1日	府中グリーンプラザ	二人三番叟、人形教室、雪女	府中グリーンプラザ(府中市役所文化事業化)					に2
10月10日	東京祭	二人三番叟	代々木公園					に2
10月16日	八王子車人形演劇鑑賞会	二人三番叟 日高川入相花王	市民館ホール	人形7名照明、音響 舞台12名	義太夫6名鳴物4名	多摩市教育委員会	天田堤、渡し場、道成寺鐘楼の段、雪女	に2
10月23日	車人形公演(八王子郷土資料館主催)	朝顔日記 大井川の段、人形教室、団子売	公民館にて					に2
11月6日	文化祭第6回民俗芸能	新車人形 清元 お染 久松、団子売、新那楽 雪女	八王子市民会館大ホール					に2
11月10日	大宮市商工会議所主催レディースプラザ	二人三番叟 説経節盛俊注進の段	埼玉県商工会館ホール			主催大宮市商工会議所 後援日本放送		に2

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
11月23日	恩方町文化祭	スライド 車人形の青春、人三番叟、黒髪、人形教室	恩方支所					に2
昭和59(1984)年 2月5日	三多摩芸能祭	三番叟	昭島市民会(マ マ)					に2
3月13日～14日	日本芸団協公演	乱菊の段、信田の森 二度目 の子別	国立劇場	古柳、柳時、柳玉、冠 士、井上、柳幸	義太夫協会	日本芸団協	『読売』(夕刊)昭和59年3 月12日に予告記事あり	に2
3月1日	乱菊の段、信の田の 森 二度目の子別 れ		国立劇場					に1
3月17日～18日	豊橋公民館	団子売	豊橋公民館	柳時				に2
4月8日	甲府市信玄公祭り	二人三番叟 シェリトリンド おかめひよっこ						に2
6月12日～13日	名古屋市民会館	日高川	名古屋市民会館		大夫名古屋連			に2
8月4日	飯田市 人形フセ シバル出演	二人三番叟 雪女		全員参加				に2
9月11日	立川市民会館	二人三番叟、人形教室	立川市民会館					に2
10月7日	東京ふる里祭	二人三番叟	代々木会場			観光課		に2
10月13日	松賀流の芸術祭参 加	「一ツ家」	国立劇場小劇場					に2
10月27日	上野原町民会館	二人三番叟、日高川	上野原町民会館		綾一、錦鈴、土 佐恵、宏紫			に2
11月24日	資料館の公演				綾一、錦輝			に2
昭和60(1985) 年1月20日	飯能市民会館二回 公演	二人三番叟、教室、雪女、葛の 葉、乱菊より子別			義太夫協会 綾一 幸治			に2
2月10日	埼玉県岩槻市	二人三番叟	埼玉県岩槻市 民俗文化セン ター	古柳、柳時				に2
3月3日	多摩郷土芸能祭 車人形上演		八王子市民会館					に2
9月7日	二分方町会祭礼	三番叟、日高川		古柳座	綾一、まゆ子			に2
10月6日	八王子西武デバ ート	三番叟	八王子西武デ パート		野沢まゆ 竹 本公子			に2
10月12日	車人形稽古場柿落 し	一番太鼓 三人三番叟 新 ゆき	稽古場	古柳、柳時、柳玉	竹本駒之助、 土佐恵、公子、 野沢まゆ、駒 治、節子、仙波 宏紫、宏雪、佐 京、望月鏡子、 事和田先生 仙波貴正 池 田外二名			に2
11月9日	入間市民会館二回 公演	二人三番叟 車人形教室、雪 女、葛の葉	入間市民会館	古柳座	綾一、幸治			に2
昭和61(1986)年 3月15日	国立劇場民俗芸能 公演「車人形と説経 節」	一谷嫩軍記盛俊注進の段、雨 月物語吉備津の釜	国立劇場小劇場	西川古柳座			第一部と第三部が車人 形、第二部は二代目若松 若太夫の説経節	し2 (S612.26) し7 (S61.3.11)
3月15日	一谷嫩軍記、吉備津 の釜(国立)	一谷嫩軍記、吉備津の釜	国立劇場					に1
5月2日・4日～5 日		三番叟、人形遣い方、阿波鳴門	吉祥寺東急デ パート		義太夫協会			に2
5月23日	国際交流基金 ネ パール、バングラ ディシュ、アジア文 化派遣公演団八王 子車人形	二人三番叟 車人形の遣い方 一谷嫩軍記、雪女、洋舞	ネパール、バング ラディシュ	西川古柳、柳時、柳 玉、柳一、柳栄	綾一、三味線 幸治			に2
7月8日	ギリシア公演		朝日生命ホール	西川古柳、柳時				に2
10月1日	八王子市七拾周年 記念	白鳥の唄、櫓のお七	市民会館		義太夫協会			に2
10月4日	千葉市親子劇場車 人形公演	二人三番叟、教室、雪女、葛の 葉、洋舞						に2
10月5日	東京ふるさと祭り 車人形							に2
10月11日	車人形後援会総会	葛の葉子別れ	稽古場					に2
11月8日	入間市公演(車人形 を見る会)	三番叟、日高川より道行、嫩軍 記、洋舞						に2
11月16日	資料館公演	日高川道行	郷土資料館		義太夫			に2

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
11月30日	三多摩民謡大会ゲスト出演		昭島市民会館					に2
12月14日	福生親子劇場	二人三番叟、人形教室、雪女、乱菊、葛の葉子別れ	市民会館	古柳座7名	義太夫3名			に2
昭和62(1987)年2月8日	所沢親子劇場	三番叟、教室、雪女、葛の葉						に2
3月12日	多摩川展 (3月25日まで)車人形展示パネル、ビデオ		京王アウラホール					に2
4月2日	東急デパート車人形公演(4月8日まで一日2回公演)	三番叟、教室、鳴門、日高川、櫓のお七 壺坂、雪女	吉祥寺東急デパート		義太夫協会			に2
4月29日	昭島市エスパロ公演							に2
5月5日	東急デパート2回公演	日高川						に2
6月13日	アトリエ新藤 七時より		アトリエ新藤	古柳、柳時				に2
8月6日	飯田市人形フェスティバル	鳴門	西友デパート					に2
9月19日	寒川神社	二人三番叟、日高川	寒川神社	古柳座	義太夫協会、仙波会			に2
9月27日	柏市親子劇場	三番叟、教室、雪女、葛の葉、洋舞	我孫子市民会館					に2
10月4日	埼玉親子劇場		川口市					に2
11月	本牧亭公演							に2
12月7日	仙台親子劇場		市民会館小ホール					に2
12月8日	仙台親子劇場	三番叟、教室、雪女、葛葉 子別れ 洋舞						に2
12月12日	大坂境泉市親子劇場 2回公演	葛の葉					信太神社参拝	に2
12月16日	足立区親子劇場		区立センター					に2
昭和63(1988)年1月22日	民俗芸能 八王子車人形「二人三番叟」	二人三番叟	上野文化会館					に1
8月9日	第54回民俗芸能公演 郷土に生きる人形芝居 車人形'35 敦盛の最期	敦盛の最期	国立劇場					に1
8月8日～9日	日本の民俗劇と人形芝居の系譜・郷土に生きる人形芝居	平家物語敦盛の最期	国立劇場小劇場	西川古柳座			ウニマ世界大会・人形劇フェスティバルに合わせたの公演、のろま人形、尻高人形、淡路人形と共演	し7 (S63.8.3)
8月20日	電話局 3時開演	三番叟、教室、矢取り						に2
9月15日	みやま大橋2時開演	三番叟、鳴門 歌の段						に2
11月24日	バルセロナ公演							に2
11月25日	バルセロナ公演							に2
11月26日	アーンドラ公演							に2
11月27日	アーンドラ公演							に2
平成元(1989)年2月11日	八王子市民会館柿おとし	三人三番叟、団子売		西川柳時、西川柳玉、西川柳栄、西川古柳、西川柳花	竹本越孝、竹本越京、鶴沢悠美、鶴沢津賀寿、囃子仙波宏紫、仙波宏雪、仙波佐京、望月鏡子			に2
3月8日	多摩市公民館	三人三番叟 盛俊注進出陣、人形教室、敦盛の最期						に2
3月11日	飯能市富士見公民館	三番叟、教室、矢取						に2
4月21日	本牧亭	八百屋お七	本牧亭		義太夫協会			に2
4月21日	義太夫協会四月公演		本牧亭	西川古柳一座	義太夫協会		4月20日は竹本土佐広の公演	し7 (H14.10)

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
5月24日	創価大学教育学会 第15回総会 記念 講演「八王子車人形 と私」		創価大学					に2
7月8日	八王子車人形公演	二人三番叟、阿波の鳴門、スベ イン舞踊他	市川市市民会館	西川古柳一座	市川人形劇の 会		国立劇場主任専門員西角 井正大の解説あり	し2 (H1.6.29)、 に2
9月10日	宮尾神社	二人三番叟、団子、鳴門、洋舞						に2
9月19日	寒川神社大祭	団子売、鳴門						に2
10月3日	玉姫殿	三番叟	玉姫殿					に2
10月8日	ふる里東京代々木 サブステージ							に2
10月14日	多摩市公民館 夜 公演							に2
10月21日	子安町センター公 演	二人三番叟、教室、鳴門、団子、 洋舞						に2
11月12日	岩槻民俗文化セン ター	日高川	岩槻民俗文化セ ンター					に2
11月17日	いちよう祭り	敦盛の最期	市民会館					に2
平成2(1990)年 6月2日	落語芝浜(小柳枝)		古柳座		春風亭小柳枝			に1
8月26日	東海道中膝栗毛 新内 車人形	東海道中膝栗毛(弥次喜多)	国立劇場 演芸 場		鶴賀伊勢太夫		新内と車人形	に1
平成3(1991)年 9月7日	市民の広場 No. 154「八王子車人形 公演」夕笛	夕笛	八王子市民会館			制作著作 八王 子テレメディア (株)		に1
12月17日	「三人三番叟」「地唄 舞 ゆき」	三人三番叟、地唄舞ゆき	大阪東急ホテル				個人撮影	に1
平成4(1992)年 9月12日	新内 日高川	新内 日高川	三越劇場		新内 光翁太 夫の会			に1
11月19日	秋の琵琶の会 車 人形とジョイント	須磨の敦盛	東京芸術劇場		琵琶	撮影 錦穂会記 録部	車人形「須磨の敦盛」	に1
12月5日～6日	佐倉の伝記 宗吾 と甚兵衛	宗吾と甚兵衛	車人形稽古場	西川古柳座	天中軒雲月			し2 (H4.11.25)
12月6日	佐倉の伝記『宗吾と 甚兵衛』『洋舞』	宗吾と甚兵衛、洋舞	車人形稽古場				三番叟も同日	に1
平成5(1993)年 2月26日・27日	第67回民俗芸能公 演 車人形と乙女 文案 三人遣いに 学んだ一人遣い	葛の葉 乱菊 信田の森二度 目の子別れ、迷宮譚 新釈お 伽草紙	国立劇場		半田淳子		乙女文案と共演、2月26 日・27日の公演	に1 し2 (H5.2.17)
9月4日	琵琶語り「迷宮譚」 新釈お伽草紙	団子売、迷宮譚	八王子市民会館			制作著作 八王 子テレメディア (株)	1993/10/2放映 市民の広場 No. 256「八 王子車人形」	に1
10月8日	平成5年度文化庁 芸術祭参加公演 八王子車人形	参宝三番叟(宗吾、日高)	国立小劇場					に1
10月9日	平成5年国立文案 劇場第12回邦楽 公演	参宝三番叟、一谷嫩軍記、敦盛 の最期	国立文案劇場		女流義太夫		①参宝三番叟(25分)、② 一谷嫩軍記(盛俊注進・敦 盛出陣)(33分)、敦盛の最 期(33分)	に1
平成6(1994)年 4月2日	新内の会	石川五右衛門	国立劇場		鶴賀伊勢太夫			に1
9月3日	東海道中膝栗毛 古寺の段		八王子市民会館			制作著作 八王 子テレメディア (株)		に1
平成7(1995)年 3月1日	弥次喜多 No.2		国立劇場				日高、葛、弥次も	に1
4月15日～16日	第1回受け継がれて いく伝統人形芝居 (以後毎年開催)	伊達娘恋緋鹿子、火の見櫓の 段	古柳座稽古場	八王子車人形西川 古柳座			西畑人形芝居・譚志遠人 形劇場・庄内出羽人形芝 居共演	そ3
5月27日	小栗判官一代記		国立劇場					に1
7月1日	紙切り・トロンボ ーンコメディ、落語 「初天神」、ファン タジーマジック、コ ミックマイム、曲独 奏、やさしいカキの 木	やさしいカキの木	国立演芸場			夏休み演芸会	林屋二楽、幻楽団、桂平 治、ダーク広和、ヘルシー 松田、三増巳也他、八王子 車人形	に1

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
7月30日	平成7年7月夏休み特選演芸会 紙切り・トロンボーン・コメディ・落語「初天神」・ファンタジーマジック・コミックマイム・曲独楽・童話劇「やさしいかきのき」	やさしいかきのき	国立劇場				林家二楽、幻楽団、桂平治、ダーク広和、ヘルシー松田、三増巳也 八王子車人形古柳座	に1
9月2日	宗吾と甚兵衛		八王子市民会館			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
10月21日	市民の広場 No. 363(8-30)	日高川(渡し場の段)、宗吾と甚兵衛、洋舞(おやゆび姫)	八王子市民会館			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
10月21日～22日	第5回全国をぐりサミット	小栗判官鬼鹿毛の段・二度対面の段	いちょうホール	八王子車人形西川古柳座			(21日)シンポジウム、川野車人形、佐渡広栄座説経人形、のろまん形、若松子若太夫の「車引きの段」、みんわ座の写し絵・説経節、(22日)横瀬祇紗人形、西角井正大国立劇場芸能部長の講演、八王子車人形	し2 (H7.10.14)
10月21日	八王子人形劇フェスティバル総集編 第5回全国をぐりサミット説経節をめぐる芸能「小栗判官」総集編						1995/10/21,22	に1
平成8(1996)年2月3日～6日	乙女文楽・車人形競演	やさしい柿の木、壺坂靈験記、生写朝顔話宿屋の段・大井川の段	青山円形劇場	ひとみ座、西川古柳座	竹本綾一	(制作)鍵野目信雄	壺坂靈験記・生写朝顔話大井川の段は乙女文楽	し2 (H8.1.16, 2.10)
4月13日～14日	第2回受け継がれてゆく伝統人形芝居	野ざらし、義経千本桜/道行初音旅、壺坂観音靈験記/山の段、三番叟、貫鉄和尚傘おどり	古柳座稽古場	八王子車人形西川古柳座、人形劇場ひとみ座、人形劇場たけのこ、吉田千代勝一座		八王子車人形西川古柳座		に3
6月8日	八王子車人形後援会 平成7年度定期総会	生写朝顔日記		八王子車人形西川古柳座				に1
8月	傾城阿波の鳴門巡礼歌の段		古柳座稽古場			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
9月4日	上席公演 三笑亭笑三「さんま芝居」	劇中劇「文弥殺し」		西川古柳座	三笑亭笑三			に1
9月14日	市民の広場 No.411(9-24) 八王子車人形公演1	三宝 三人三番叟、雪女、白鳥				制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
9月21日	市民の広場 No.412(9-25) 八王子車人形公演2	壺坂				制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
9月他	車人形 洋舞他 確認用	三人三番叟、新内さだめ、野ざらし落語、景事団子売、酔月情話(明治一代女)						に1
10月26日	八王子車人形 五代目西川古柳襲名披露公演	寿五人三番叟、小栗判官物語抄、人形舞踊、洋舞	いちょうホール	西川古柳座				し1 (H8.3.2) に1
平成9(1997)年4月11日～4月13日	第3回受け継がれていく伝統人形芝居	源氏烏帽子折、道成寺縁起譚/清姫悲恋、寿式三番叟/八百屋お七/櫓の段、紺屋高尾	いちょうホール(11日)、古柳座稽古場(12～13日)	西川古柳座、大崎座、西畑人形座、喜の会		八王子車人形西川古柳座		に3
4月26日	野ざらし		八王子学園都市センターイベントホール			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
5月31日	市民の広場 No.447(10-9) 八王子車人形・学生ジョイント公演							に1
9月6日	正写朝顔話		八王子市民会館			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
平成10(1998)年 1月1日	98都民芸術フェスティバル参加 第29回東京都民俗芸能大会 特集「東京の式三番、三番叟」	三番叟	東京芸術劇場中ホール					に1
4月10日～12日	第4回受け継がれていく伝統人形芝居	木津の勘助、岩見重太郎大蛇退治の巻、鬼神のお松、回春瞬朱鷺	南大文化会館(10日)、古柳座稽古場(11～12日)	西川古柳座、朝日若輝一座、糸あやつり人形劇団みのむし、金多・豆蔵人形一座		西川古柳座		に3
5月2日	第2回人形浄瑠璃 傾城阿波の鳴門 全国大会	壺坂観音霊験記(車人形)	徳島県立郷土文化会館					に1
5月30日	日本演劇学会春季大会 武相の人形劇		玉川大学演劇スタジオ					に1
10月1日	八王子車人形展						1998/10/1～10/12	に1
12月17日	雑賀淑子 第1回琵琶リサイタル(八王子車人形/西川古柳)		ティアラこうとう小ホール				琵琶/田中錦煌・雑賀淑子 笛/奥瀬慎治 ピアノ/安藤由布樹 八王子車人形/西川古柳 舞/尾上青楓 ダンス/若松美黄・ウタコ	に1
平成11(1999)年 3月16日	新内と車人形芝居	くずの葉	高山市文化会館小ホール					に1
4月9日から11日、17～18日	第5回受け継がれていく伝統人形芝居 金多・西畑・庄内・車人形	生地蔵、辰橋、壺坂観音霊験記、一谷嫩軍記(9～11日)はぐれ鳥角兵衛獅子の場、春日熊之丞たぬき退治、出羽人形ばやし傘おどり、傾城阿波の鳴戸、山の母(17～18日)	いちょうホール(9日)、古柳座稽古場(10～11日、17～18日)	佐渡のろまん形広栄座、ひとみ座乙女文楽、西川古柳座、金多豆蔵人形座、庄内出羽人形芝居、西畑人形座朝日若輝一座			1.清経伝統 金多 豆蔵人形座 2.西畑人形 朝日若輝一座 3.庄内出羽人形芝居 4.八王子車人形(山の母)経説	に3
5月	国立演芸場 車人形出演 あおの別れ 林屋正雀「塩原多助一代記」		国立演芸場					に1
8月	青山円形 サイガパレー&古柳 おやゆび姫	おやゆび姫						に1
9月4日	恋紡哀愁松～松姫物語		八王子市民会館			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
9月5日	紺屋高尾		八王子市民会館			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
10月23日	塩原多助一代記～青馬の別れ		八王子市生涯学習センター			制作著作 八王子テレメディア(株)		に1
平成12(2000)年1月	2000年正月公演 日高川(道行～鐘楼)				説経義太夫			に1
4月	伝統人形フェスティバル							に1
4月7～9日	第6回受け継がれていく伝統人形芝居	鬼神のお松、寿二人三番叟、伊達娘恋緋鹿子ー火の見櫓の段、松山鏡、獅子舞、かっぱれ、黒髪	南大沢文化会館(7日)、古柳座稽古場(8～9日)	西川古柳座、西畑人形座・朝日若輝一座、江戸系あやつり人形、さっぽろ人形浄瑠璃研究会		西川古柳座		に3
6月22日	新内 さだめ H12 市民会館にて							に1
9月23日	第227回国立名人会 ー秋の怪談まつりー	応挙の幽霊	国立演芸場	八王子車人形	林屋正雀		大喜利「応挙の幽霊」林家正雀、八王子車人形	に1
10月14日	怪談累草紙 親不知の場		いちょうホール			制作著作 八王子テレメディア(株)	応挙他	に1

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
11月2日	BUNRAKU AV ANNA GRETA STAHL		DRAMASTIKA INSTITUTES HAFTEN(ス ウェーデン)					に1
12月10日	薩摩派説経節 信 田妻 葛の葉二度 の子別れ		スタジオ宮川		説経節の会 太夫:薩摩小 若太夫、三味 線:京屋波	録音 坂田宏之		に1
平成13(2001)年 3月3日	第32回東京都民 俗芸能公演 東京 の車人形と地芝居					東京都・東京都教 育委員会 東京 都民俗芸能大会 実行委員会	3/3~3/4、2001都民芸術 フェスティバル参加	に1
7月1日	鶴賀 若狭掾 新 内の会	鯀沢 さだめ	牛込筆筈町区民 ホール			映像教育研究会		に1
8月15日	苦小牧市勇払町							に1
8月24日	新内 かさねがふ ち 紫派 藤間文 紫乃 日高川	かさねがふち	牛込筆筈町区民 ホール	かさね:藤間文紫 乃、八王子車人形: 西川古柳、西川柳 花、西川柳久美	朗読:杉田郁 子、鶴賀若狭 掾			に1
10月17日	SAIGA BALLET お やゆびひめ	Thumbelena, The story of Babar	東京都児童会館					に1
11月11日	第16回国民文化 祭・ぐんま2001星 の村の人形芝居 フェスティバル 八王子車人形	東海道中膝栗毛 ~赤坂並木 の段	高山村民体育館					に1
11月16日	まるきた伝統空間					主催:財団法人東 日本鉄道文化財 団 後援:東日本 旅客鉄道株式会 社	2001/11/16~17	に1
平成14(2002) 年3月27日	宝石のありもと 車人形の世界	寿式三番叟、舞踊かっぱれ、洋 舞	ありもと7F ホー ル				2002/3/27~3/29 19:30~のステージ寿式 三番叟、人形解説 舞踊 かっぱれ、洋舞	に1
4月6日~7日	第7回受け継がれて いく伝統人形芝居	驚娘、小栗判官一代記 親子 対面 矢取りの段	西川古柳座稽古 場	西川古柳座		西川古柳座		に3
9月20日	Koryu Nishikawa Kuruma Ningyo		Northwest Puppet Center, Seattle,				1. Set up, rehearsal 2. Northwest Puppet Center, 3. Saturday Performance	に1
11月4日	第64回三越劇場公 演 新内富士松鶴 千代の世界	源氏物語一夕顔よりー	三越劇場				浄瑠璃:富士松鶴千代 富士松鶴千代社中	に1
平成15(2003) 年2月28日	西川古柳座 八王 子車人形 シベリ ア公演		ノボシビルスク オペラバレイ劇 場					に1
3月1日	平成15年3月第94 回民俗芸能公演 現代にいきづく人 形芝居	東海道中膝栗毛、芝浜						に1
4月5日~6日	第8回受け継がれて ゆく伝統人形芝居	寿式三番叟、傾城阿波の鳴門、 葛の葉子別れ、猪八戒美女を 背負う、長袖舞、殺人「西畑」	古柳座稽古場	西川古柳座、志遠人 形劇場、西畑人形座 朝日若輝一座		西川古柳座		に3
6月13日	西川柳峰追善公演							に1
8月13日	牡丹燈記 応挙の 幽霊	牡丹燈記 応挙の幽霊	稽古場					に1
10月5日	2003秋 ニュー ヨーク・ジャパン ソサエティーにて 三番叟・葛の葉・東 海道中							に1
11月28日	姉妹都市提携30周 年記念 八王子車 人形公演		苦小牧市文化会 館					に1
12月6日	宗吾と甚兵衛、お七	宗吾と甚兵衛、お七	いちょうホール					に1
平成16(2004)年 3月3日	雪女 リハーサル 収録	雪女	内幸町ホール					に1

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
3月20日	第1回八王子車人形と民俗芸能の公演	「東海道中膝栗毛」赤坂並木の段	八王子市民会館ホール	西川古柳、西川柳時、西川柳車、西川柳花、西川柳久美、西川柳真、西川柳澄之	雀屋俊次郎、京屋純	八王子車人形と民俗芸能の公演実行委員会	(説経節)薩摩小若太夫、薩摩忠太夫、薩摩誠太夫、(口上)坂田宏之、(舞台監督)西川柳時	そ3
4月9日～11日	第9回受け継がれてゆく伝統人形芝居	岩見重太郎の大蛇退治、日高川入相桜「雨田堤より渡し場の段」、春日熊野丞たぬき退治、雪女	ブーク人形劇場(9日)、古柳座稽古場(10、11日)	西川古柳座、人形劇場たけのこ、庄内出羽人形芝居、八王子高校車人形同好会		西川古柳座		に3
5月30日	花乃実会創立20周年記念花衣胡蝶社中 第3回舞踊の祭典 特別出演八王子車人形 五代目家元 西川古柳	二人三番叟、東海道中、ゆき、花笠音頭、スペイン舞踊、東京音頭	いちょうホール大ホール					に1
8月15日	第11回大石神社奉納人形浄瑠璃	東海道中膝栗毛 卵塔場古寺の段、二人三番叟	大石神社					に1
10月17日	ルナ 新作バレエ		新国立劇場中劇場					に1
12月5日	いちょうホール10周年 車人形公演	五人三番叟、生写朝顔話、釣女	いちょうホール					に1
平成17(2005)年2月5日	The Dans Gathering Vol.9 創立15周年記念新宿芸術家協会特別公演 八雲から八雲へ		新宿文化センター大ホール					に1
2月6日	第2回八王子車人形と民俗芸能の公演 狭間 田守 氷川獅子 信太妻	信太妻						に1
7月2日～4日	第10回受け継がれてゆく伝統人形芝居	三番叟、東海道中膝栗毛	古柳座稽古場(2～3日)、東京芸術劇場小ホール2(4日)	西川古柳座、朝日若輝一座、北原人形芝居奉納会、金多豆蔵人形一座、倉沢人形歌舞伎、ひとみ座乙女文案、庄内出羽人形芝居		西川古柳座	津軽伝統金多・豆蔵人形一座『鬼人』のお松、北原人芝居奉納会『日高川安珍清姫道行の段』、西畑人形 朝日若輝一座『岩見重太郎退治』	に3
10月22日	フェスティバル in 大垣 『てるて姫伝説』 遊行座+西川古柳座 車人形と共演		大垣市サイトピアセンター音楽堂					に1
11月6日	八王子車人形と民俗芸能の公演	矢取り	八王子市民会館		説経節の会			に1
11月18日	第17回長崎県民文化祭 長崎県人形芝居 フェスティバル	三番叟、葛の葉、洋舞	波佐見町総合文化会館				乙女文案 禿、八王子車人形 三番叟、乙女文案 鷺娘、八王子車人形 葛の葉、八王子車人形 洋舞	に1
12月4日	義太夫 東海道中古寺の段 けい古用		いちょうホール					に1
平成18(2006)年1月26日	説経浄瑠璃鑑賞会～説経節と八王子車人形の共演～		成増アクトホール					に1
3月4日～5日	受け継がれてゆく伝統人形芝居 in 三木		三木町文化交流プラザ山ホール	西川古柳座、朝日若輝一座、阿波木偶箱廻し、南淡中学校郷土芸能部		三木町文化振興財団、三木町、三木町教育委員会		に3
7月30日	全国こども民俗芸能大会 東海道中膝栗毛 赤坂並木の段				由井中学三味線部			に1
11月5日	第4回 八王子車人形と民俗芸能の公演							に1

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
11月26日	第4回人形芝居フェスティバル		新上五島鯨賓館 ミュージアムホール	西川古柳座			八王子車人形、乙女文案、 皿山人形浄瑠璃	に3
平成19(2007)年 3月10日	第11回受け継がれてゆく伝統人形芝居		古柳座稽古場	西川古柳座、朝日若輝一座、阿波木偶箱廻しを復活する会、八王子市立由井中学校		西川古柳座		に3
3月11日	伝統人形芝居	葛の葉保名蘇生の段						に1
10月21日	壺坂山の段		厚木市文化会館					に1
平成20(2008)年 2月17日	伝統芸能 体験講座発表会		学園都市イベントホール					に1
6月12日	HACHIOJI KURUMA NINGYO			西川古柳	鶴賀若狭掾			に1
7月5～6日	第12回受け継がれてゆく伝統人形芝居	一条戻り橋、獅子舞、よいどれ、黒髪、ペリクリーズ、壺坂観音霊験記山の段より谷の段、くずの葉	古柳座稽古場	朝日若輝一座、江戸系あやつり人形、西川古柳座、リュブリャナ人形劇場、八王子市立由井中学校三味線部		西川古柳座		に3
8月3日	伝統人形芝居 庄内出羽 西畑人形車人形							に1
11月16日	第三回鼓舞音の会							に1
平成21(2009)年 2月28日他	三人三番叟 日高川入相花王 岩見重太郎大蛇退治	三人三番叟 日高川入相花王 岩見重太郎大蛇退治						に1
5月3日	鶴賀若狭掾 新内演奏会 車人形芝居 芝浜	芝浜	国立劇場 小劇場	西川古柳座	鶴賀若狭掾			に1
6月27日	日韓伝統音楽交流 美しい未来へ						2009/6/27、28	に1
7月18日～19日	第13回受け継がれてゆく伝統人形芝居		古柳座稽古場	西川古柳座、糸あやつり人形劇団みのむし		西川古柳座		に3
9月8日	新内 車人形 白山市	応挙の乱	白山市					に1
11月1日	浄瑠璃と八王子車人形 プラチスラバ公演		プラチスラバ					に1
11月13日	2009 受け継がれてゆく伝統人形芝居 in 酒田 イギリスの伝統手遣い人形と日本の伝統手遣い人形 日本の伝統人形芝居の共演	三番叟?	酒田市広野小学校他				西畑人形芝居、庄内出羽人形芝居、パンチ&ジュディ	に1
平成22(2010)年 2月14日	伝統芸能体験講座発表会 八王子車人形 篠笛 説経節		学園都市センターイベントホール					に1
6月5日	道成寺の芸能	日高川入相花王	石川県立音楽堂 邦楽ホール	西川古柳	鶴賀若狭掾	石川県音楽文化振興事業団	他に、箏曲「新娘道成寺」、能「道成寺」ワキの語り、舞踊清元長唄掛合「豊後道成寺」	に1
11月14日	第8回八王子車人形と民俗芸能の公演		八王子市民会館					に1
11月27日	日本の人形劇展 in スペイン2010		トローサ(スペイン)				2010/11/27～12/8	に1
平成23(2011)年 2月5日	2010年度 伝統芸能体験・発表講座発表会		学園都市センターイベントホール					に1
3月12日	古柳さん 徳島一人遣い伝統人形大芝居						2011/3/12-3/13	に1
3月19日～20日	第14回受け継がれてゆく伝統人形芝居			西川古柳座		西川古柳座		に3

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
6月4日	高尾山チャリティ公演							に1
10月15日	Luna 第2幕		新国立劇場					に1
11月23日	第9回八王子車人形と民俗芸能の公演	七人三番叟、佐倉義民伝～甚兵衛渡し場の段～	オリンパスホール		説経節の会	八王子指定文化財芸能団体協議会		に1
11月26日	伝統芸能フェスティバル”稔の祭と粋と華” 第一部、第二部		牛込筆筒区民ホール				2枚組	に1
12月24日	座・競演 Vol. 2	新内さだめ	札幌市こどもの劇場やまびこ座	西川古柳座			あしり座、木偶童座	に1
平成24(2012)年 2月18日	平成23年度 伝統芸能体験発表講座 発表会 八王子車人形 篠笛 説経節		学園都市センターイベントホール			伝統文化ふれあい事業実行委員会		に1
3月23日	TSURIONNA	釣女	テアトルフォンテホール				古典文学「釣女」を新しい表現で描く。	に1
4月15日	taller internacional de teatro de titeres		Matanzas, Cuba				名札	に1
9月29日	室井三紀 筑前琵琶弾き語り 特別出演 中村ひろみ							に1
平成25(2013)年 2月9日	平成24年度 伝統芸能体験発表講座 発表会		学園都市センターイベントホール					に1
5月31日	西本智実のちょっと、ひと息 第10回「オペラ meets 車人形」		オリンパスホール					に1
7月14日	西本智実プロデュース公演 車人形オペラ 蝶々夫人	蝶々夫人	いちょうホール					に1
10月14日	座 競演 Vol.4 やまびこ座							に1
平成26(2014)年 1月3日	八王子車人形西川古柳座公演 in セレオ							に1
2月16日	平成25年度伝統芸能体験発表講座 発表会		学園都市センターイベントホール			伝統文化ふれあい事業実行委員会		に1
3月7日	文七元結		楽屋収録		入船亭扇治			に1
3月7日	応挙の幽霊		江戸博物館					に1
3月15日	第1回 八王子車人形研究会公演 一日目スチール画像		西川古柳座稽古場					に1
5月17日	第15回 受け継がれていく伝統人形芝居	八王子車人形 三番叟	西川古柳座稽古場			受け継がれていく伝統人形芝居実行委員会	2014/5/17-5/18 2枚組 笹子追分人形三番叟、相模人形芝居 三番叟、西畑人形 朝日若輝一座、笹子人形芝居保存会 西川座、相模人形芝居 長谷座	に1
7月6日	八王子車人形研究会 稽古風景							に1
11月23日	第12回八王子車人形と民俗芸能の公演	信太妻 ～葛の葉二度の子別れの段～	オリンパスホール					に1
12月6日	耳なし芳一 仔熊夜会							に1
12月13日	人形浄瑠璃ユースクラス 二人三番叟		やまびこ座			制作 海老名名保		に1
平成27(2015)年 1月30日	三人弁天	絵本太功記・妙心寺の段、隅田川、杜子春・芥川龍之介作	浅草「大黒家」別館4階					に1

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
2月21日	人形浄瑠璃2015 さっぽろ人形芝居 あしり座20周年記 念公演		札幌市教育文化 会館大ホール				西川古柳演出	に1
3月	「東区の人と町の魅 力的な表情」ビデ オ映像コンテスト 「札幌に根づく人形 浄瑠璃」					制作 海老名名 保	特別賞(佳作)受賞	に1
3月28日～29日	八王子車人形公演	三人三番叟 葛の葉 壺坂観 音霊験記 シェリトリンド	西川古柳座稽古 場					に1
5月30日～31日	第16回受け継がれ ていく伝統人形芝 居	三人三番叟、東海道中膝栗毛、 日高川入相花王、シェリトリ ンド、耳なし芳一	西川古柳座稽古 場					に1
6月13日	十一代目 薩摩津 賀太夫襲名記念 平成27年説経節の 会 研修発表会	日高川入相花王 渡し場の段 襲名披露口上 小栗判官一代 記 高取館矢取りの段	いちょうホール 小ホール			説経節の会		に1
7月5日	八王子車人形公演	五人三番叟、葛の葉、釣女、東 海道中膝栗毛 古寺の段	いちょうホール					に1
9月6日	若狭掾作 お鶴 龍蔵							に1
11月6日	LA MAMA PUPPET SERIES	SHANK'S MARE	New York			HACHIOJI KURUMA NINGYO NISHIKAWA KORYU-ZA, TOM LEE	PROMO VIDEO	に1
11月8日	第13回 八王子車 人形と民俗芸能の 公演		オリンパスホー ル					に1
11月22日	八王子の宝 伝承 イベント いちよ うまつり			車人形	説経節			に1
平成28(2016)年 3月19日	2016 都民芸術フェ スティバル参加公 演 第47回東京都民 俗芸能大会 前半 の部 道の芸 街 角の芸		東京芸術劇場 プレイハウス					に1
8月3日～4日	八王子市市制100 周年プレ記念事業 膝栗毛 Shank's Mare		いちょうホール (小ホール)	西川古柳、西川柳 時、西川古柳座座員	原千恵子	八王子車人形西 川古柳座	(演出・デザイン)トム・ リー、ヤラ・アーツ・グルー プとの共同制作	そ3
11月26日～27 日	伝承のたまはこ 多摩伝統文化フェ スティバル2016 受け継がれてゆく 伝統の八王子車人 形	三番叟、「東海道中膝栗毛」赤 坂並木から卵塔場の段	(26日)八幡八雲 神社神楽殿、(27 日)横川町公園屋 外ステージ	八王子車人形西川 古柳座	説経節の会		両日とも午前・午後2回公 演、27日は「東海道中膝栗 毛」のみ	そ3
12月4日	第14回八王子車人 形と民俗芸能の公 演	「日高川入相桜」道行より渡し 場の段	オリンパスホー ル八王子	車人形研究会メン バー、西川柳久美、 西川柳澄之、西川柳 桂、西川柳車	薩摩津賀太 夫、京屋純	(主催)八王子市 教育委員会、(主 管)八王子市指定 文化財芸能団体 協議会		そ3
平成29(2017)年 5月14日	八王子車人形 西 川古柳座公演集大 成シリーズ(全16 公演) 第1回 義 太夫の音楽で楽し む八王子車人形	三番叟、鶯娘、八百屋のお七、 釣女	いちょうホール (小ホール)	八王子車人形				そ3
8月25日	八王子車人形 西 川古柳座公演集大 成シリーズ(全16 公演) 第2回 未 来に伝える古典の 面白さ 新内浄瑠 璃と八王子車人形	応夢夢絵姿、芝浜	いちょうホール	西川古柳、西川柳 車、西川柳起、西川 柳時、西川柳澄之、 西川柳久美、西川柳 桂	鶴賀若狭掾、 鶴賀伊勢吉、 鶴賀伊勢幸、 鶴賀伊勢一郎			そ3

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
9月9日～10日	伝統のたまてばこ 多摩伝統文化フェ スティバル2017 八王子車人形～流 る時の川～	三番叟 meetTAKUYA's street～人形とひとが繋ぐ「時 のダンス～、「日高川入相花 王」雨田堤より渡し場の段	横川町公園ス テージ	八王子車人形西川 古柳座	説経節の会		車人形公演は10日	そ3
11月5日	第15回八王子車人 形と民俗芸能の公 演	「小栗判官一代記」高倉館判官 矢取りの段	オリンパスホー ル八王子	西川古柳、西川柳 時、西川柳車、西川 柳桂、西川柳起	薩摩津賀太 夫、薩摩花太 夫、薩摩桃太 夫、京屋純	(主催)八王子市 教育委員会、(主 管)八王子市指定 文化財芸能団体 協議会		そ3
12月8日	八王子車人形 西 川古柳座公演集大 成シリーズ(全16 公演) 第3回 初 冬の八王子車人形 ロマンス	「平家物語」敦盛の最期、落語 芝居「紺屋高尾」	いちようホール (大ホール)	西川古柳、西川柳 車、西川柳時、西川 柳桂	めぐみ、あや め、葉月			そ3
平成30(2018)年 3月16日	八王子車人形 西 川古柳座公演集大 成シリーズ(全16 公演) 第4回 古 典を楽しむ春 八 王子車人形	創作曲耳無し芳一、本朝廿四 孝 狐火、身替座禅	いちようホール (小ホール)	八王子車人形西川 古柳座	常磐津八重太 夫、文重太夫、 菊与志郎、満 佐志	八王子車人形西 川古柳座		そ3
4月7日	高尾山若葉まつり	「三番叟」、「団子売」、「日高 川」、「京の四季」、「洋舞」	ケーブルカー清 滝駅前 特設舞 台			八王子観光コン ベンション協会		に3
8月7日～12日	いいだ人形劇フェ スティバル					黒田人形浄瑠璃 館	ワークショップ	に3
8月18日	喜之助人形劇フェ スタ	「スーホの白い馬」	瀬戸内市中央公 民館、瀬戸内市民 図書館、邑久コ ミュニティセン ター			喜之助人形劇 フェスタ市民実 行委員会	共演:馬頭琴 美炎トリ オ	に3
8月20日	人形浄瑠璃×馬頭 琴	「スーホの白い馬」	ギャラリーひが し蔵				共演:馬頭琴 美炎トリ オ	に3
8月25日～26日	八王子車人形 西 川古柳座公演集大 成シリーズ(全16 公演) 第5回 西 川古柳座、次世代の 飛躍	「三番叟」、「さくらさくら」、「洋 舞」、景事「団子売り」、「伊達娘 恋緋鹿子」火の見櫓の段、「東 海道中膝栗毛」赤坂並木～卵 塔場の段	八王子車人形稽 古場	八王子車人形西川 古柳座若手の会(藤 原ありさ、安部晃 大、渡邊紀久代、関 内香水、瀬沼創、菅 原義輝、西川柳澄 之、網野絵理香)	竹本乾太夫、 野澤仁一郎	八王子車人形西 川古柳座		に1 そ3
9月22日～23日	伝統のたまてばこ 多摩伝統文化フェ スティバル2018 八王子車人形～魂 宿る車人形～	(22日)三番叟、「東海道中膝栗 毛」赤坂並木から卵塔場の段、 (23日)「葛の葉」子別れの段	横川町公園ス テージ	八王子車人形西川 古柳座	説経節の会			に1 そ3
10月6日	バレエチャンブル ウエスト第83回定 期公演	「ルナ－月の物語かくや姫－」				(株)B.シャンプ ルウエスト	特別出演	に3
10月21日	第3回 花柳貴比の 会 第35回 ひなの 会	新内「子宝三番叟」	国立小劇場	八王子車人形西川 古柳座		花柳貴比日本舞 踊研究所		に3
10月27日・28日	ロシア オムスク 公演及びワーク ショップ						オムスクの人形劇団員と 共演	に3
11月3日	高尾山もみじまつ り		ケーブルカー清 滝駅前 特設舞 台			八王子観光コン ベンション協会	大善寺お十夜で人形展示	に3
11月11日	第16回八王子車人 形と民俗芸能の公 演	「東海道中膝栗毛」赤坂並木の 段より卵塔場の段	オリンパスホー ル八王子	西川古柳、西川柳 車、西川柳時、西川 柳桂、西川柳起、西 川柳澄之、西川柳久 美	薩摩津賀太 夫、薩摩花太 夫、薩摩久太 夫、京屋純、京 屋裕	(主催)八王子市 教育委員会、(主 管)八王子市指定 文化財芸能団体 協議会		そ3
11月18日	第39回いちよう 祭り	「信田妻 葛の葉二度の子別 れの段」	イーアス高尾コ ミュニティホー ル		説経節の会			に3

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
11月21日	新内浄瑠璃鶴賀若狭掾リサイタル	落語「鯨沢」より脚色	紀尾井ホール		浄瑠璃 鶴賀伊勢隆太夫 鶴賀伊勢哲太夫、鶴賀洋太夫、三味線 鶴賀伊勢吉、上調子 鶴賀伊勢幸			に3
11月23日	多摩文化交流コンサート	「三番叟」	オリンパスホール八王子			一般社団法人多摩楽友協会		に3
12月2日	新内節 人間国宝 鶴賀若狭掾が贈る江戸伝統芸能を楽しむ	「葛の葉」	ハーモニーホールふくい					に3
12月15日	八王子車人形 西川古柳座公演集大成シリーズ(全16公演) 第6回 古典をつなぐ車人形	「傾城恋飛脚 新ノ口村の段」(義太夫)、「佐倉義民伝 甚平渡し場の段」(新内浄瑠璃)、五人三番叟	いちょうホール(大ホール)	西川古柳、西川柳時	西川若狭掾、鶴賀伊勢吉、竹本乾太夫、野澤仁一郎	八王子車人形西川古柳座	八王子車人形新座員お披露目 五人三番叟、五代目西川柳玉襲名及び新座員口上	に3 そ3
平成31(2019)年 1月13日	第五回弓弦葉の会	「東海道中膝栗毛 赤坂並木～卵塔場の段」、「古寺の段」	紀尾井小ホール		「東海道中膝栗毛 赤坂並木～卵塔場の段」(浄瑠璃 鶴賀伊勢吉 三味線 鶴賀伊勢一郎 上調子 鶴賀伊勢幸)「古寺の段」(浄瑠璃 竹本越孝 三味線 鶴沢寛也 ツレ 鶴沢津賀花)			に3
1月14日	シカゴ国際人形劇フェスティバル	シャンクスメイアー	シカゴ美術館				共演: トム・リー	に3
2月1日	AWA 伝統芸能創造発信プロジェクト2019 「講談と端唄、そして車人形による『紺屋高尾』」	「紺屋高尾」	徳島あわぎんホール		講談 田辺銀治、演奏 本條秀太郎ほか	公益財団法人徳島県文化振興財団		に3
2月28日	ジャパソサエティー 公演	「夕顔」「伊達娘恋緋鹿の子」「釣女」	ジャパソサエティー ニューヨーク					に3
3月1日	ジャパソサエティー 公演	「夕顔」「伊達娘恋緋鹿の子」「葛の葉」						に3
3月2日	ジャパソサエティー 車人形ワークショップ及び公演	「夕顔」「伊達娘恋緋鹿の子」「釣女」						に3
3月3日	ジャパソサエティー(ニューヨーク) 車人形ワークショップ							に3
3月5日	ジャパソサエティー(ボストン)							に3
3月8日	江戸の粋を今に伝える人形劇八王子車人形公演	「葛の葉」「釣女」「夕顔」	日系文化会館(トロント)					に3
3月9日	源氏物語展での公演	「夕顔」	メトロポリタン美術館(ニューヨーク)					に3
3月27日	華艶なる調べ PARTIX 長唄 日本のめでたきもの		目黒 雅叙園	五代目西川古柳				に3
令和元(2019)年 5月19日	人形浄瑠璃東西競演	「東海道中膝栗毛」～赤坂並木より古寺の段～	草加市文化会館ホール	西川古柳座			競演 淡路人形浄瑠璃、(出演)淡路人形座、(演目)「生写朝顔日記」摩耶ヶ嶽の段	そ3

公演日	公演会題目	演目	場所	人形遣い	地(伴奏)	主催など	備考	典拠
5月25日～26日	伝承のたまてばこ 多摩伝統文化フェ スティバル2019 八王子車人形・薩摩 派説経節～魂宿る 車人形～	三番叟、「日高川入相花王」渡 し場の段、「日高川入相花王」 天田堤より渡し場の段	横川町公園	八王子車人形西川 古柳座	説経節の会		両日とも午前・午後2回公 演	そ3
8月24日～25日	八王子車人形 西 川古柳座公演集大 成シリーズ(全16 公演) 第7回 西 川古柳座次世代の 飛躍	24日「伊達娘恋緋鹿子 火の 見櫓の段」「壺坂観音霊験記 山の段」 25日「本朝廿四孝 奥庭狐火 の段」「東海道中膝栗毛」「卵塔 場より古寺」	八王子車人形稽 古場	五代目西川柳玉、西 川柳香、西川柳里 美、西川柳翔、若手 の会 ほか		(主催)八王子車 人形西川古柳座 (提携) 公益財団法人八 王子市学園都市 ふれあい財団		そ3
11月10日	第17回八王子車人 形と民俗芸能の公 演	日高川入相花王「道行より渡 し場の段」	オリンパスホー ル八王子	西川古柳、西川柳久 美、西川柳起、西川 柳車、西川柳桂、西 川柳澄之、西川柳 香、西川柳翔	薩摩津賀太 夫、薩摩花太 夫、京屋純、 (口上)坂田宏 之	(主催)八王子市 教育委員会、(主 管)八王子市指定 文化財芸能団体 協議会		そ3
令和2(2020)年 1月17日～18日	八王子車人形 西 川古柳座公演集大 成シリーズ(全16 公演) 第8回 古 典をつなぐ車人形	五人三番叟、景事「団子売り」、 「生写朝顔話」宿屋より大井川 の段	いちようホール (小ホール)	西川古柳座	竹本越孝、鶴 澤三寿々			そ3

(一覧表作成 事務局)

第八節

西川古柳座について

一 位置と組織・座員

(一) 地理的位置

西川古柳座は、東京都八王子市下恩方町一五六番地にある。そこは、四代目西川古柳（瀬沼時雄）の旧宅のある屋敷である。

下恩方町は、東京都八王子市の北西部に位置する。陣馬街道（都道一四〇号線）と地元で呼ぶ鎌倉街道（山の根道で鎌倉街道の脇往還）とが河原宿で交差する要所である。陣馬街道は佐野川往還、案下道とも呼ばれ、東流する北浅川左岸に沿う街道である。その北浅川沿いに位置する河原宿の北側に、古い集落が通り沿いに形成されている。そこが瀬沼家のある上宿で、集落を東から抜けて鍵の手の道を通ると左側に瀬沼家がある。瀬沼家は上宿の西端に位置する。

下恩方町は、江戸時代は下恩方村といい、明治十一（一八七八）年に神奈川県南多摩郡下恩方村、明治二十二（一八八九）年の市制・町村制で下恩方村、上恩方村、西寺方村、小津村の四か村が合併し、神奈川県南多摩郡恩方村が成立した。明治二十六（一八九三）年四月から多摩地域が東京府に移管され、東京府南多摩郡恩方村となる。昭和三十（一九五五）年四月一日に八王子市に合併した。

なお、西川古柳座への公共交通は、JR中央線高尾駅北口始発となっている路線バスのみである。

(二) 歴史的位置

八王子市周辺の人形芝居の足跡は、江戸時代中ごろから確認することができる。大坂の人形芝居が江戸に定着し評判を呼ぶと、江戸近郊の地方都市として発展した八王子宿とその周辺の村では、人形芝居の興行が行われた。八王子宿の郊外には人形芝居などの芸能を専門的に行う集団もあった。また、八王子宿と周辺の村の者たち複数が、組んで人形芝居を行う場合もあった。村の中にある小集団の生産・生活共同体のムラでは、若衆や子供たちが人形芝居を行うところもあった。

江戸時代後期には、人形芝居は芝居ほどの人気は無くなった。寛政年間（一七八九～一八〇二）に再興され、江戸では衰退した説経節が、幕末から明治に群馬、埼玉の秩父、東京の多摩地域などへ伝播し農山村で盛んとなった。その説経節の盛んな地帯で、説経節を語りとする写し絵（影絵）と車人形が創案され、車人形は各地に伝播した。

今日伝承されている東京都西多摩郡奥多摩町川野の車人形は、生産・生活共同体としてのムラの若衆で伝承されたものである。小河内ダム建設で湖底に沈んだ地域を含む川野の、今日のコミュニティ維持にも機能している。埼玉県入間郡三芳町竹間沢の車人形は、幕末に二宮（あきる野市）の古谷家から伝えられたもので、幕末から明治に盛んであった車人形興行の中核であった神楽師の家での伝承で

ある。

西川古柳座は、江戸の人形遣いと交流した八王子の神楽師・小泉家の車人形や、川口（八王子市上川町）の秋山国三郎を中心とした義太夫節での人形芝居の技芸・人形用具を受け継ぐ。小泉家とその仲間の車人形は、大正以降に芸能研究者や地元有力者の支援を受け、それを瀬沼時太郎が中心となって引き継ぎ、同好のものとの公演を持続可能にした。時太郎の子の周助は、戦後の現代人形劇の革新的な文化運動の影響も受けながら、全国公演や新作づくりなどを子の時雄とともに経験した。時雄は、説経節が衰退する中で決断し、文楽の指導を受け、義太夫節の語りを採用し、新車人形の創案などの新境地を実現した。そして、長男の亨に人形の専門的研修を受けさせた。亨は時雄の意思を継いで、芸の質的向上を果たし、多くの新作をものにし、海外公演、他の芸能との共演、他座の指導、学校公演など国内はもとより海外での公演も行っている。

こうしてみると、車人形の三座、川野の車人形・竹間沢車人形・八王子車人形の西川古柳座は、それぞれ車人形の展開の歴史的地域的特色を有している。西川古柳座は、江戸時代からの地域における人形芝居の歴史を凝縮して保持し、現代社会における地域の伝統のあり方の一例を示している。

(三) 座の組織と座員

座長は五代目西川古柳（瀬沼亨）で、古柳は国立劇場文楽研修生の養成科に在籍し、三人遣いの高度な芸を身に着け、伝統人形芝居のプロとして活躍している。副座長は五代目古柳の弟の五代目西川柳時（瀬沼寧）である。柳時は、座の後ろ盾となって活躍し、「八王子車人形と民俗芸能の公演」では市指定文化財の獅子舞、木遣、都指定の説経節の諸団体を舞台監督としてまとめている。

座員は西川柳車（井上哲夫）、西川柳起（石井二）、西川柳桂（野宮美春）、西川柳花（小山めぐみ）、西川柳久美（高垣久仁子）、西川柳澄之（木下澄美）、五代目西川柳玉（瀬沼創）、西川柳香（網野瑛理香）、西川柳里美（菱山里美）、西川柳翔（山際勇翔）の総勢十二名である。

古柳、柳時、柳車、柳起、柳桂、柳花、柳久美の七名は、主に四代目古柳に師事し車人形の芸を磨いた。柳車の義父の家は、二代目古柳（瀬沼時太郎）以来瀬沼家と車人形で付き合いのある家である。

薩摩浜尾（説経節・丹沢彦太郎）、吉田冠次郎（車人形遣い・丹沢秀）、義父の吉田冠士（車人形遣い・西川冠士郎、丹沢士郎）、そして柳車と続く。柳起は地元下恩方町の出身で、柳桂も旧恩方村内である西寺方町の出身で柳時の幼馴染みである。西川柳花は、西川古柳座での最初の女性座員で、五代目古柳が柳時のころから新車人形とともに遣った。柳久美は、現代人形劇団にも属すフリーの人形劇人である。以上の座員は、昭和二十八（一九五三）年から昭和三十六（一九六二）年生まれで、およそ五十代から六十歳代となっている。

柳澄之は舞台に関心をもち、平成十四（二〇〇二）年の八王子市郷土資料館が実施した、後継者育成講座を受講したのをきっかけに座員となった。

五代目柳玉は五代目古柳の長男で、平成三十一（二〇一九）年四月から淡路人形座で修業に入った。柳玉、柳里美、柳翔は、文化庁の親子伝統文化教室の「夏休み車人形子ども教室」から育った。柳香は、八王子市立由井中学校の三味線部に所属し、八王子車人形の講座に参加して五代目古柳の薫陶を得た。この四名の座員は、主に五代目古柳の指導を受け、平成三十（二〇一八）年にそれぞれが芸名を受けて正式の座員となった。

西川古柳座では昭和三十一（一九五六）年に、幕末に車人形を創案したといわれている山岸柳吉を初代西川古柳とし、二代目西川古柳を没後の瀬沼時太郎（一八六六―一九三九）、三代目西川古柳を

瀬沼周助（一八九四―一九六九）とした。四代目西川古柳は、三代目の周助没後の昭和四十五（一九七〇）年に、瀬沼時雄（一九二二―二〇〇〇）が襲名した。そして、現在の座長である瀬沼亨（一九五三―）は、平成八（一九九六）年九月十一日に五代目西川古柳を襲名し、平成八年十月二十六日、いちようホール（八王子市芸術文化会館）で襲名披露公演を行った。その時、四代目西川古柳は宗家として西川柳峰を名乗り、平成十二（二〇〇〇）年十一月一日に没した。

二 保存・伝承活動

（一）公演／平成三十（二〇一八）年度の活動を中心に

西川古柳座が主催する公演は、「受け継がれていく伝統人形芝居」と題して、平成十（一九九八）年から平成二十三（二〇一一）年まで、国内外の人形芝居を招待し、主に西川古柳座の稽古場で開催した。

平成二十九（二〇一七）年から、次世代を担う若い座員とベテランの座員があらためて車人形の舞台を学ぶ機会とし、四年間に十六演目プラス小作品を十演目行うことを計画し、座の「集大成シリーズ」と銘打って実施した。初年度は、五月に義太夫節、八月が新内浄瑠璃、十二月に落語芝居で八王子芸妓衆と、三月は初めて常磐津で行い、三演目すべてが新作であった。実施してみると課題もあり、当初の計画をあらため、年度内二回公演、六年間に十二公演の計画とした。一度は若手が主となり先輩座員が裏方をつとめ、もう一度は逆に先輩座員が主となり若手座員が裏方に回ることとした。

平成三十（二〇一八）年度は、八月二十五日と二十六日に「西川古柳座 次世代への飛躍」と題し、稽古場で公演した。演目は「三番叟」「やくらやくら」「洋舞」「景事 団子売り」「伊達娘恋緋鹿子

火の見櫓の段」「東海道中膝栗毛 赤坂並木／卵塔婆の段」を若手を中心となって行った。二回目の十二月十五日には、「古典をつなぐ車人形」と題して、いちようホールで、「傾城恋飛脚 新ノ口村の段」（義太夫）、「佐倉義民伝 甚平渡し場の段」（新内浄瑠璃）を公演し、新座員三名の披露目を行った。

依頼を受けての公演は、八王子市で開催されたクライミングワールドカップボルダリング世界大会のレセプションでは、「三番叟」を披露した。長野県飯田市のいいだ人形劇フェスタ、岡山県瀬戸内市の喜之助人形劇フェスタなどに参加した。

観光では、五代目西川古柳は、八王子市の観光大使をつとめている。四月の「高尾山若葉まつり」、九月に「多摩伝統文化フェスティバル2018 伝承のたまてばこ」、十一月に「高尾山もみじまつり」、「八王子いちよう祭り」、平成三十一（二〇一九）年二月に高尾山薬王院の「節分会」に参加、また、道の駅八王子滝山などでも公演している。

学校などでの公演は、市内小学校四校、そのうち一校では年間十回の人形指導を行い、市外一校で公演した。中学校は市内外の四校、大学は一校で公演やワークショップなどを行った。保育園や福祉施設での公演も行った。

平成三十年度の海外公演は、カナダのトロントでの人形劇フェスティバルに参加、ロシアのオムスクでは地元の人形劇団と共演しワークショップを行った。アメリカのシカゴ美術館で開催されたシカゴ国際人形劇フェスティバルに参加した。日本文化の紹介を目的に、米国ジャパン・ソサエティー主催で、ニューヨーク、ボストンで公演し、ニューヨークのメトロポリタン美術館の「源氏物語展」に関連して「夕顔」の公演を行った。

また、ドイツから人形を学ぶため、古柳座を訪問する者もあった。他の芸能との共演は、バレエ、日本舞踊、新内、馬頭琴、義太夫

節、講談と端唄、長唄と行った。

他座との交流は、五代目古柳が神奈川県厚木市の相模人形芝居長屋座へ操法や人形の手入れなどの指導を行い、さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座とやまびこ座へは継続的に人形指導をしている。人形劇団ブーク、福島県郡山市の高倉人形、山梨県大月市の笹子追分人形、徳島県の阿波木偶箱まわし保存会で人形指導を行った。

なお、普段の稽古は、原則として毎週月曜日と木曜日の午後七時三十分から九時三十分まで下恩方町の稽古場で行う。若手の稽古は、やはり稽古場で毎週水曜日に行っている。

(二) 普及・後継者育成事業

文化庁の伝統文化親子教室事業で、平成三十(二〇一八)年度は「夏休み子ども車人形教室」を開催し、夏休みに全十一回稽古場で実施した。文化庁の支援と五代目古柳の指導が実を結んで、平成三十年に新たな座員となった三名は、小学生のころから継続してこの事業に参加し、学んだ若者である。

五代目古柳の出身校である八王子学園八王子中学校・高等学校には、高等学校のクラブとして「ボランティア部 車人形同好会」がある。

次に公的な各公演の経過などに触れつつ、現在の事業を説明してみる。

多摩文化研究会主幹の鈴木龍二は、八王子市郷土資料館で開催の郷土の歴史を探究の会の中で、「八王子車人形の実演」を企画し昭和四十四(一九六九)年から実施した。これは昭和四十九年度まで行われ、以降は「八王子車人形の公演」と題して車人形単独の毎年の催しとなった。

平成二(一九九〇)年度から市教育委員会で、平成十二(二〇〇〇)

年度まで毎年「八王子車人形の公演」を、当時の市民会館大ホールで行った。ここでは国立劇場で上演した大作を再演したり、当時の柳時(五代目古柳 瀬沼亨)が毎回約十五分の新作を上演した。この公演は十年以上実施し車人形普及の役割を果たした。よって、新たに市内の民俗芸能全体の保存伝承を目的に団体を組織し、「八王子車人形と民俗芸能の公演」と題し、車人形・説経節・木遣・獅子舞が演じられる場とした。令和元(二〇一九)年度で第十七回目の公演となる。

同様な催しが並行する時期があり、八王子市郷土資料館の車人形公演を、平成十三(二〇〇二)年度から後継者育成講座に変更し、説経節と車人形が共演できる場としての講座を実施した。四代目古柳は説経節の語りとの共演を望んでいなかったため、四代目古柳の没後に、説経節を語りとする車人形の舞台の必要性を痛感しての企画であった。鈴木佳代子が指導する市立由井中学校三味線部が参加し、そこから若い後継者が育ち、座員となるものもあらわれた。

平成三(一九九二)年度から十一年度まで、市内中学校での車人形公演も文化庁の補助〈民俗文化地域伝承活動〉を受けながら八王子市教育委員会で行い、延べ六十五校で実施した。八王子市郷土資料館では、市民から二体の車人形を寄附していただき、平成十四(二〇〇二)年度から常設展示で市民ボランティアの協力で車人形体験のコーナーを設けている。

八王子市では、平成十八(二〇〇六)年三月に「文化振興計画」を策定し、「伝統文化ふれあい事業」を開始した。行政、伝統文化芸能団体、学識経験者、西川古柳座などで構成する伝統文化ふれあい事業実行委員会を設置し、市内の大学や企業の支援、文化庁の〈地域伝統文化総合活性化事業〉の補助を受け実施している。平成三十(二〇一八)年度は、説経節体験発表講座十一回、八王子車人形体験発表講座十九回、篠笛体験発表講座八回、それぞれの体験を一同に

公開する発表会を最後に開催、民俗芸能講座では獅子舞、木遣の解説が行われ、アウトリーチ活動は西川古柳座が市内小学校で公演を行った。

(三) 施設・用具など

西川古柳座のある瀬沼家の屋敷は、代々織物業を営んでいたもので比較的広く、屋敷内に四代目古柳の旧住居の他に稽古場、収蔵庫、物置などが設置されている。

稽古場は、「現在の稽古場が老朽化し、長い間その改築を志していたが、こんど、東京都及び八王子市から助成金を得て、改築に着手し、二月二十八日に上棟式を行った。新稽古場は、建坪五十五坪、客席も百人以上収容できるもので、車人形の定期公演のほかに、いろいろの芸能にも利用させ、地域文化の向上に資したいと、古柳氏は語っている。山に囲まれた小さな地域が、娯楽センターを持つことは、異色のあることで、コミュニティづくりにも、新しい役割を担うであろう」と、近隣に住み西川古柳座を支援してきた松井翠次郎が述べている（松井翠次郎一九八五―一三頁）。

四代目古柳の稽古場建設への思いは、五代目古柳によって達せられている。常設の稽古場があつて、はじめて質の高い技芸を維持することができる。しかし、四代目古柳の考えは稽古場の建設ではなく、真意は西川古柳座の常設劇場の建設であつた。しかし、それは法令等での建築物の制限や、バスなどの大型車輛が瀬沼家の屋敷まで入れない事情があり、現状では稽古場となっている。

収蔵庫は、貴重な首や衣裳、道具類が収められているが、防犯・防災、湿度・温度管理などどれも良い環境にあるとはいえない。

車人形は、幕末に合理化して少人数化されたもので、舞台装置や用具類も芝居や三人遣いの人形芝居に比較すれば、簡易となつてい

る。しかし、西川古柳座は年間数多くの公演を行い、日常的に首・衣裳・道具類などの維持管理は不可欠で、合わせて国内・海外の人形座の指導も行うため、広い倉庫や細工のための作業場所が必要となっている。

三 支援等の状況

(一) 西川古柳座への支援の経過

坪内逍遙、三田村鳶魚、市内の機業家で三田村鳶魚と親交のあつた平音次郎、瀬沼家と同郷の菱山栄一、松井翠次郎ら、神官で八王子市文化財専門委員として活躍し、昭和三十一（一九五六）年には車人形後援会を結成し事務局を自宅に置いた小松茂盛、説経節と車人形の研究・資料収集に尽力し『晩春譜 武蔵車人形』を著した久米井亮江、財界人で地域文化に造詣が深く、多摩文化研究会を主宰した鈴木龍二、八王子市の教育長や市長を歴任した後藤總一、他にも多くの方々が八王子車人形を支援してきた。

昭和五十年代末に、市民の手によつて車人形などの公演が行われ、その公演の関係者の方々が働き、地元の経済界の協力もあつて、八王子車人形後援会（当時の会長 後藤總二）が、昭和六十（一九八五）年に八王子市民を中心に二一七名で発足した。

(二) 八王子車人形後援会

八王子車人形後援会は、「八王子車人形後援会規約」に則り運営され、現在の後援会長は、高尾山薬王院貫首の大山隆玄である。会員数は、平成三十一（二〇一九）年一月現在、一八〇名である。

後援会としての活動は、西川古柳座とともに高尾山薬王院の節分会への参加、市内での公演に際しての事務や会場業務を行っている。年一回程度で、『八王子車人形後援会報』を発行し、現在、三十六号となっている。さらに、後援会予算から家元後援、行事補助、後継者育成の支援を行っている。

(執筆者 佐藤 広)

参考文献等

- 佐藤広二〇〇五「八王子車人形の保存伝承とその環境整備」『歴史的環境の形成と地域づくり』名著出版
- 鈴木龍二一九六八『多摩文化』(第二十号 車人形特集) 多摩文化研究会
- 西川古柳家元襲名披露実行委員会一九九六『八王子車人形く五代目西川古柳襲名披露公演く』同実行委員会
- はちおうじ車人形研究会一九九六『東京に残る江戸・人形芝居の世界 八王子車人形』のんぶる舎
- 八王子車人形後援会編二〇〇二『宗家・西川柳峰追悼誌 うなづき』西川古柳座
- 八王子車人形後援会二〇一八『八王子車人形後援会報』三十五 八王子車人形後援会
- 八王子車人形後援会二〇一九『八王子車人形後援会報』三十六 八王子車人形後援会
- 松井翠次郎一九八五「車人形の新稽古場」『多摩文化ニュース』一六九号 多摩文化研究会
- 宮川孝之氏談話(二〇一九年十月二十一日 筆者聞き書き)